
俺の日常が不思議な事に

凄い腹筋の蛇

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

俺の日常が不思議な事に

【Nコード】

N7314X

【作者名】

凄い腹筋の蛇

【あらすじ】

ファンタジーの世界で存分に勇者気分を味わって世界を救い、色々ウンザリした俺は神様に元の世界へ戻してくれと願った。そして戻ってきた現実世界で普通の生活に戻ろうとしたら…なんでチート能力が消えてないの！？ なんでお姫様が転校してきちゃうわけ！？ かけがえの無い日常がファンタジーな奴らにぶち壊される中、俺は神を探し出してぶん殴ってやると心に誓う。いるんだろ？ 見てるんだろ？ 腹抱えて笑ってたんだろ、コンチクショー！ ここ最近やる気を出して来た主人公が活躍する、ちょっとエロくてトホホな物

序 おうち帰りたい

ファンタジーという奴はやはり漫画やゲームで楽しむ物であって、実際に体験するもんじゃない。俺は世界を滅ぼそうとしていた魔王とやらを倒し、崩れゆく城を眺めながらそう思った。

神とかいうふざけた奴の口車に乗せられてこのファンタジーな世界にやってきて一年。お決まりのチート能力を武器に暴れまわって世界を救いたいだけ救った。英雄扱いしてもらって人気者になっちゃって、可愛い女の子にはモテまくった。けど…

なんか、疲れた。

あれだけ憧れていたファンタジーは、実は滅茶苦茶ハードな世界だった。目の前で何十人も兵士が魔物に食い殺されるのが日常とか、勘弁して欲しかった。だから、魔王を討伐した褒美をやるうとか神に言われた時、俺は迷わずこつ言ったのよ。

「元の世界に帰してくれ」

もうね、これしか無かった。

普通に学校行って、普通に授業受けて、家に帰ったらゲームしてそんな生活に戻りたかった。周りの奴らには猛反対されたけど、俺の心は揺るがなかった。英雄なんて、ただの便利屋でしかないし。これ以上面倒事を押し付けないでくれ、と。

『本当に良いのか？ あんなに熱望しとったのに。可愛い娘にもモテてたのに』

「いーんです。というか、リアルで青とか緑の髪の毛の女ってちょっと怖いし。怒ったら刃物振り回すとかマジ勘弁」

『ふむ。勿体無いのう…』

勿体無いとか言う問題じゃない。何より心の平穩。敵襲のラツパで起こされるより、親に布団ひっくり返されて起きる方が精神衛生的にもいいだろう。というか起きたら巨大なムカデに絡まられてた事もあったし。あれ、トラウマになったよ。

『分かった、そこまで言うなら元の世界に帰そう。お主のおかげでこの世界は救われた。その恩に報いなければならんからのう』

「サンキュー、助かるよ。ちゃっちやと戻してちょうだい」

泣いてすがりつく自称仲間たち。いやいや、あのね。君らあんまり役に立たない上に余計なトラブル運んで来てくれたよね、たくさん。もう嫌なの。お家に帰りたいただけなの。っーか離せコラ。

何とか取り巻きを振りほどいて、神の作ったゲートに飛び込む俺。感謝されて然るべきなのに夜逃げしてるみたいで悲しい。けど、これで帰れる。サヨナラ、ファンタジー。ただいま、日常。俺は光が世界を包んで行くのを、涙目になりながら眺めていた。

最後に。

「もう俺を変な事に巻き込むなよー！」

神にそう叫びながら、俺は意識を手放した。

気がつくくと、俺は自分の部屋のベッドで寝ていた。時刻は夕方、寝汗でベトベトな所を見ると昼寝でもしていたんだろう。枕元の携帯の液晶には、俺がファンタジーな世界へ飛ばされた日の日付。というか、あれは夢？ そうだよな、夢だよ、夢。やけにリアルで酷い夢だったなあ、これだけ寝汗かくのも無理ないわ。

俺はとりあえずシャワーを浴びる事にした。寝汗と一緒に、嫌な思い出も洗い流そう。そう思って、着替えを持って部屋を出る。階段を降りるとすぐ風呂場へと向かった。

家の風呂場は脱衣所と洗面所が一緒になっている。だから、誰かが風呂に入っていると他の人は洗面台が使えなくなる。が、中には遠慮無く入ってくる奴もいて、マズい事にそれが義妹の紗良ウチだったりする。親父の再婚相手の連れ子で、俺の一つ下の高校一年だ。才色兼備を地で行く女で、やたらと俺をバカにしている。

ガラッ

「邪魔です、兄さ…」

いつものように、乱入して兄を兄とも思わない発言をするかと思いきや。紗良は俺を見て固まった。ん？

「あんだよ。俺の身体見て楽しいか？」

「うっ…いや、そんなワケないです！ 自意識過剰は死んだ方がいいんです！」

ボタンと大きな音を立てて出て行く紗良。顔を真っ赤にしてたが、珍しいな。いつもは鼻で笑って罵倒する所なのに。そう思いながら服を全部脱いでカゴに入れると、俺はなんとなく鏡を見た。そして…

俺も固まった。

「嘘だろ…？」

そんな言葉が思わず口を出るのも仕方ないだろう。

何故ならそこには、あのファンタジー世界で鍛え上げた肉体をもった俺がいたからだ。

細マッチョ。

腹筋モコモコ。

少なくとも、あっちに行く前の俺からは考えられない姿だ。

神が与えたチート能力の一つは、身体能力を部分的に強化する力。けどこれじゃ使い勝手が悪かった。腕力を強化しても、足が遅ければ敵に追いつけない。だから、俺は結局全身の筋力を満遍なくつけるように鍛える事となった。この身体は、明らかにそうして鍛えた後の身体だ。

つまり、あれは夢じゃなかったという事か。

俺は、恐る恐る自分の身体を触る。うん、間違いない。ムキムキです。どうしよう。いや、ムキムキなだけなら問題ないか。むしろ、いいじゃないか。そんな事を考えながらも、俺は嫌な妄想を振り払う事が出来なかった。いや、まさか、ねえ…。

チート能力が残ってるなんて事、無いよねえ？

神から与えられた能力は他に、「空を飛ぶ能力」と「自己修復能力」。わざとケガするのは嫌だから、とりあえず飛んでみるか。俺は試しに浮いてみる。すると。

フワッ…

！？

浮いちゃった。

ふわふわと、脱衣所に裸で浮かぶ俺。慌てて能力を解除すると、俺は床に勢い良くケツを打ちつけた。

ガンッ！

「いてえ!?!」

オーケー、ついでに夢じゃないってのも分かった。どうやら俺は、普通に帰って来たわけじゃないようだ。空が飛べて化け物じみた身体強化と再生能力を持った人間。勘弁してくれとボヤキたくなる。

神よ。

いい加減、怒ってもいいかな。

こんなんバレたら捕まってモルモットにされちまうわっ!!

第一話 空気失格

俺の名前は佐藤健司。どこにでもありそうな名前で、実際どこにでもある名前だ。外見的にも中肉中背で、ありがちな顔をしている。性格も面倒臭がりで事なかれ主義だから、今まで目立った事なんて一切なし。高校二年の今まで誰かから告白された事なんてないし、そもそも俺を覚えている人間なんて居ないんじゃないか。そんな、空気のような存在が俺、佐藤健司だ。なんか自分で言ってる悲しくなってきた。

俺はリスクを嫌う。その性格をどうにかしたくて、ファンタジー世界に行った時は無駄にはじめてみたが、やはり柄じゃなかったらしい。元の世界に戻ってきてからは元の性格に戻り、実際この性格が心地いいのだ。つまり。

目立つのは嫌だ。

チート能力は隠して行こう。

知られちゃマズいから、使わない。

学校行くのに空なんて飛ぶ必要ないんだ。見つかって見世物にされるリスクを考えれば当たり前の結論。他にも、自己修復能力なんて最悪だ。瀕死の重傷負っておきながら次の日ケロツとしてたら即モルモットだろう。ただ、これはゲームを模倣した能力で一晩寝ないと効果は現れない。寝なきゃいいのだ。ふざけるな。無理だ。

つまり俺は、ケガが出来ない。チート能力をバラすような事は自殺行為。望んでいた普通の日常を送るには、実はチート能力って邪

魔にしかならないという事に気づいた。

それを痛感したのが昨日の夜だ。紗良の疑惑の視線が、ずっと俺に向けられていた。そして、衝撃的な一言が。

「兄さん、左手の人差し指の逆剥けが無くなって。どうやって治したの」

よく見てるな、義妹よ。

覚えてないんだが、どうも俺って向こうに行く前に人差し指逆剥けしてたらしい。それが、完全に治ってるもんだからかなり怪しまれた。しどろもどろに言い訳してみせたが、ジロジロと俺を怪しむ紗良。義母の紗英さんは「あらあら、仲良くなったわねえ」なんて呑気に喜んでた。勘弁してくれ。

そして、今日。

俺はギャルゲーさながらに義妹の朝の襲撃を受ける。一つ違つとすれば。

「死ね、宇宙人！」

「おわっ、あぶね！」

ブウンッ！ バスッ！

金属バットが振り下ろされたりした事だろうか。いや、無茶だろいくらなんでも。

「避けた！？ やっぱり兄さんじゃなかったんだ！ 宇宙人め、兄さんを返せ！」

「どーしてそういう結論に達するんだ！ 一晩考えて出た答えがこれか！？」

とっさにバットを振り上げる紗良の腕をとって、捻りあげる。紗良は思わぬ反撃になすすべなく、ベッドに押し倒された。

「くっ、離せ宇宙人！ 兄さんの格好で私を誘惑するなっ！」

「誘惑なんてしてねーし宇宙人でも無い！ 何で俺が宇宙人なんだよ！」

バタバタ暴れる紗良を組み伏せたまま、俺は尋ねる。どうでもいいが、この体勢ってかなり妖しいよな。

「だって…だって、兄さんがあんなにムキムキなのっておかしいもん！ 去年、家族で初めて海行った時は少しぶよぶよしてたのにな！」

良く見てるなこんにやろ。

確かに腹筋なんて割れるどころかこぼれ落ちそうだったよ。ピザ味のポテチ食い過ぎてたからな。オマケに毎晩カップ麺の豚骨食ってたし。

「あのな、あの時恥ずかしい思いしたから隠れて筋トレしてたんだよ。一年みっちりやればこれくらいなるって」

口からでまかせだ。

「え…」

動きが止まる。何か気づいたのか、表情が変わった。

「じゃあ、兄さんの部屋で夜中ハアハア聞こえてたのは筋トレだったのね？」

うおおい！

聞かれてたよ、何聞いちゃってんのよこの義妹！？ というか夜中に聞き耳立ててるとか怖えよ！

「そ、そうなんだ。俺もさ、鍛えないとなー、と思つてなあ」

あはははは、と乾いた笑い声をあげる俺。紗良は納得したのか身体力を抜いた。そして、顔を赤くする。どうやら、俺の胸元を凝視しているようだ。ん？

「に、兄さん…遅しい…」

いやいや、なにこれ。何雰囲気出してんの。あれ、この娘ってば俺に対する感情マイナス256って感じじゃなかったっけ？

そんな事を考えられていると。

ガチャ

「紗良、健司さん起きた？」

おう、ママン。

なんてタイミングだコンチクショー…

俺の義母、紗英さんは部屋に入ってくるなり俺たちを見て固まった。そりゃそうだ、明らかに自分の娘が組み伏せられてるんだから。それも目えウルウルさせて。どう見てもマズいだろコレ。

「あの、あの、紗英さんコレは…」

「あ、いえ、邪魔したわね!? 二時間くらいで済むかしら!?’

止めるよ阿呆!

おかしいだろそのリアクション! それも二時間とかやけに長いな! 学校より優先する事が、それは!

結局気が動転した紗英さんを落ち着かせたりしてたら二度寝はおろか飯も食えないくらい遅れちまったよチクシヨ! …

俺の通う学校は市立清涼高校という、何だか飲料水に適してそうな名前の高校だったりする。家から自転車です30分、田んぼの真ん中にある長閑な高校だ。周りに遮る物が何も無い為、サボって学校を抜け出そうとするとすぐに見つかる。昔は清涼プリズンなんて呼ばれるくらい荒れた高校だったらしいが、今では県内で中の上くらいのレベルを誇るそれなりにマトモな高校だ。ちなみに紗良は県下トップのなんとか女学院に通っている。奴は半端じゃなく頭がいい

のだ。

家を出てチャリに跨がりペダルを踏み込む。基礎体力の違いって恐ろしい。今までじゃ考えられない勢いで走り出すチャリに、俺は軽い感動を覚えた。

学校までの道のりが、やけに楽しい。坂道上等。いつもの倍以上のスピードで走り抜ける。それで全然疲れないんだから、身体は鍛えるもんだと思う。これだけは、神に感謝しよう。ちよっとだけ。

学校につくと何時もより早い時間だった。俺は食堂近くの自販機でペットボトルのお茶を買ってから教室へ向かう。何時もはこんな余裕ないから、何だか気分がいい。途中、クラスの奴らを見かけたが声なんてかけなかった。向こうも、こちらを気にとめる事はない。これが普通。正常だ。向こうじゃ行く先々で声をかけられ鬱陶しかったからな。

教室に入って、自分の席につく。懐かしいクラスの空気。というか俺が空気。軽く挨拶する程度の奴はいるけど、それだけ。誰にとっても「その他大勢」で括られる程度の存在感でいいのだ。それが、当たり前障りのない日常を送る秘訣。

しかし。

なんだろうな…嫌な予感がする。

ファンタジー世界で鍛えた俺の第六感が、俺に警告を発してやがる。うーん、これはマズいですよ？ 向こうに居た時からこの手の直感は外してないんだよなあ…。

そんな事を考えていると、クラスの連中の話し声が飛び込んで来た。えーと、何々？ 転校生？ うわ、お決まりのパターンかよ。けどここは現実世界、突拍子もない人間がくるなんて事ないだろう。ん？ 外人さん？ いやそれは珍し過ぎる。けど、少し離れた港町じゃ北欧の国と交流あるから無理な展開ではないかな。え、なに、巨大財閥の娘さん？ 無茶だ。それは無茶だ。なんでそんな人がこんな辺鄙な田舎町に来るんだよ！ けど、大人しくしてりや目を付けられたりしないよね？

クラスの皆が賑やかに話しをしている中、俺は一人窓の外を眺めながらブツブツと呟いていた。席が窓側の一番後ろだから、誰も俺のつぶやきには気づかない。きつと端から見たら不気味なんだろうな。

そして、運命の時が。

ガラツと音を立てて教室に入ってくる、我がクラスの担任ブルババあ。ブルドックに似てるババアだからそう呼ばれているが、そのブルババあをまるで番犬のように従えて金髪の女の子が現れた。呆然と見つめるクラスメートたち。俺も、開いた口が塞がらない。皆とは違う理由で。

だつて…

嘘だろ？

何で、彼女がここに？

困惑する俺の気持ちを知ってか知らずか、女の子はキョロキョロと教室を見渡す。そして、隠れようとして失敗した俺にしつかりと

目を合わせて…顔を輝かせた。やめろ、やめろ、それだけはやめろ！

しかし、現実は無情だ。

女の子は小走りに俺に駆け寄ってくると、開口一番とんでもない事を言いやがった。

「やっと会えました、勇者様っ！！」

イヤアアアアアアアアアッ!?

第二話 クリクリ

ほどよくファンタジックでバイオレンスな異世界で、いわゆる善良な人間の親玉的存在がある。俺が世話になって、それ以上に世話してやった王国、クリスレア。彼女はその国の王女であり、一応回復魔法の使い手だったクリステイアーノ・クリスレア。本当はもっと長いらしいが覚えきれなかった。

愛称はクリクリ。これは、俺がつけた。

金髪ロングヘアに美しいブルーアイズ。溢れんばかりの正義感で数多くの余計な厄介事に俺を巻き込んできた。美しき疫病神クリクリ。そのおかしな神通力はこの世界でも発揮されるらしい。

今、教室は水をうったように静まり返っていた。訝しげに俺を見る皆。俺は嫌な汗を背中いっぱいにかきながら、なんとか上手い言い訳は無いかと頭を働かせる。そして、口について出た言葉は…

「あ、あの、ゲームの話なんだ！ ネットゲでさ、知り合っただよ、うん！」

自爆った。

なんだよそれ。俺、ネットゲなんかやった事ねえよ。

けど、それで何人かの人間は納得したらしい。加えて、その他の人間は「なんだオタクか」と冷たい視線を俺に向けた。くう…、最悪だ。

「ゆ、勇者様？ ネットゲとは何ですか？」

「い、いいから先生の所へ戻れ！ 待たせてんだろ！」

なんとかクリクリの背中を押しして教卓の方へと移動させる。その間、周囲の嫌な視線が俺たちに突き刺さっていた。

そして。

「初めまして。今日から此方でお世話になります、クリスティアーノ・クリスマスレアと申します」

堂々と、王族オーラを出して自己紹介するクリクリ。ああ、現実だ。信じたくないけど、この嘘みたいな神々しさは間違い無くクリクリだ。俺は半分脱力しながらクリクリを眺めていた。

さて。

転校生のデビューには二種類ある。成功するか、失敗するかだ。クリクリのデビューは後者に該当する。

そりゃ、いきなり勇者様発言で俺を巻き込んでオタク認定されちゃそうなるだろう。周囲の人間は、話しかけようにも警戒心が先立って声をかけられないようだ。クリクリも、距離を置かれているの

に気づいて困惑している。席はやはりというか俺の隣で、困ったように俺に尋ねて来た。

「あの、私何かいけない事言いましたか？」

「そうだね。とりあえず俺の事は名前で呼ぶべきだったと思っよ」

「しかしそれでは世界を救った勇者様に失…もごっ!？」

慌てて口を塞ぐ。ああもう、勘弁してくれ！ 見るな見るな、みんな俺を見るな！

「健司だ。ケ・ン・ジ！ オーケー？」

「…ンッ！ンッ！」

首を縦に振るクリクリ。仕方なく手を離れた。しかし…

もう手遅れだな。

俺の空気ライフは終わったよ。一体コイツはなんのつもりでこの世界に来たんだか…。俺は頭を抱えながら、一時間目の授業の用意をした。

クリクリは一日中俺のそばにいた。授業中は勿論、休み時間も話す相手が他に居ないので俺のそばにいるしかないのか、片時もそば

を離れない。まあ俺自身いつも一人だったから相手は出来るんだが、正直言つてウザかった。コイツのせいで、俺の生活が滅茶苦茶になったという思いがあったからだろう。

昼休み、屋上で飯を食ってる時に、俺は意を決してクリクリに尋ねた。

「あのさ、なんでこっちの世界に来たんだよ。やっぱり神の奴に頼んで来たのか？」

「はい。勇…健司様が話していた、魔物の居ない平和な国というのを見てみたかったのです。それに、健司様と健司様の故郷を歩いてみたかったというのもあります」

なんとというか…。

なんでそんな理由で来ちゃうかね。

慕ってくれるのは嬉しいけどさ。それで俺の日常を壊して欲しくは無いワケですよ。

「とりあえずさ。俺はこつちじゃ、なんの能力も無い普通の人間だったんだ。英雄でも勇者でもない、普通の人。そつち行つた時に神から特別な力を貰つて、いい気になって暴れ回つただけだって。立派な人間じゃねーから、今更勇者とか言うのは止めてくれ」

「…健司様……」

しょんぼりしたような顔をする。仕方ねえだろ、それが現実だし。正義感なんて実際これっぽっちも持ち合わせてねえんだよ、俺は。

「でも、私を魔物から助けしてくれましたわ」

「初めてそっちに行つた時か。ありゃたまたま落ちた先にお前を追いかけてた魔物がいただけだ」

「お城が攻め込まれた時、城の裏手で大軍を一人で食い止めてくれました！」

「夜逃げしようとしたら鉢合わせしただけだ。逃げようにも逃げる場所が無かつたから戦つただけだよ」

「魔王を倒して、世界を救ってくれたじゃないですか！」

「魔王倒さなきゃ居場所が無くなるってくらい、全国民でプレッシャーかけ続けてくれたからな！」

「はあ、はあ、流石に怒鳴るのはやり過ぎたか？ クリクリは次第に涙目になってきていた。けど、こればかりは譲れない。」

「お前は俺を買いかぶり過ぎだつて。俺は、そんな偉い人間じゃない」

「……………嘘です、そんなの…。健司様は、嘘つきなんです」

「嘘じゃねえよ。悪いけど、俺は面倒事や厄介事を持ち込んでくるお前が鬱陶しくて苦手だった。正義とかそついうの、こつちじゃ流行んねえから」

そこまで言うと、クリクリはギョツと目をつぶった。涙が一筋、

頬を伝う。そして諦めたかのように微笑むと、俺に謝った。

「…すみません。私、健司様を困らせてたみたいですね。これから
は、そうした事の無いようにしますから」

そう言つて、食べていた弁当箱を片付けると、目元をハンカチで
軽く押さえてからクリクリは立ち上がった。そして、綺麗なお辞儀
を一回して…屋上から去つて行つた。

失望…したんだろうな。

まあ、当たり前か。

けど俺は後悔しない。迷惑だったのは事実なんだから。アイツの
せいで、何度死にかけた事か。第一、ファンタジーの住人ならファ
ンタジーの世界に早く帰れよ。俺が現実に戻つたようにさ。そんな
風に文句を垂れながら、俺は購買で買ったパンを口の中に押し込
んだ。

相変わらずマズいパンだけど、今日は特別マズいような気がした。

その日。

俺はクリクリとは最低限の会話だけをして、さっさと学校から家

に帰った。いたたまれない気持ちになつていたのもあるけど、クリも女子なんだから女子の友達を作ればいいんだ。これ以上一緒にいて、変な誤解をされても困るだろ。そんな事を考えてたら、これ以上声をかける気になれなかつたんだ。

家に帰ってから、俺は胸の中のモヤモヤを消す為に筋トレをした。向こうで習慣づけていた運動だ。変則的なスクワットや腕立てをしながら、俺は向こうでの事を思い出していた。

最初は傭兵として雇われたっけ。国の危機を救ったとかで騎士に選ばれた時に、なんかヤダって言って牢屋にぶち込まれたのはいい思い出だ。クリクリが王様を説得してくれたんだよな、確か。その後、クリクリ専属のボディガードにされて…

死ぬような思いをたくさんした。けど、悪い思い出ばかりじゃなかったハズだ。

「言い過ぎたかな、やっぱり…」

そう言うってから、俺はブンブンと頭を振った。いやいや、あれでいいんだ。これ以上、目立ちたくは無い。平穩無事な人生が、一番幸せなんだ。俺は自分にそう言い聞かせながら、腕立てに集中した。

紗英さんが夕飯が出来た事を知らせてくれるまで、俺は一心不乱に身体を鍛え続けた。

次の日から、俺は極力クリクリと距離を置くようにした。クリクリも、最低限の会話だけをして俺から離れるようになった。これが、普通。男子と女子は、普段はそんなに話をしないもんなんだ。

クリクリは、やはり皆からハブられていた。こっちの世界じゃ財閥の娘らしいから、やっかみもあつたんだろうな。一人でいるのを良く見かけたし、その顔からは以前の明るさは無くなっていった。

嫌なもんだろ、こっちの世界は。悪い事言わないから、早く帰れよ。俺はクリクリを見かける度にそう思った。

そんな毎日を送り始めて二週間くらいたった頃。

事件は起こった。

その日、おれはまたもや第六感の告げるアラームにウンザリしながら家路につこうとしていた。校舎を出て、自転車置き場にチャリを取りに行った時…何故かは分からないけど、俺はチャリを素通りして奥の焼却炉の方へと足を向けた。焼却炉のそのまた奥には、不良たちの溜まり場がある。こんな学校にも未だに不良という連中はいて、カツアゲやら喫煙やらやっているという話だ。

俺は、嫌な予感を感じながらも焼却炉の奥へと足を運ぶ。すると、

クリクリの声が聞こえてきた。

「健司様が怪我をしたと聞いたから来たんです！ あなたたちに用はありません！」

クリクリの周りを、うちの学校でも特に評判の悪い五人の男子が取り囲んでいた。おいおい、嘘だろう。学校でそんな事、本当にするつもりか？

男子たちは、ただニヤニヤと笑ってクリクリの進路を塞ぐ。運動なんて苦手で喧嘩一つした事無いクリクリは、次第に泣きそうな顔になってくる。そして、次の瞬間。

男の一人が、クリクリのスカートに手をかけた。

「やめろおおおおっ！！！」

反射的に飛び出す俺。くそっ、これだから勇者って嫌いなんだよ！ 誰かがピンチだと、身体が勝手に動いてしまう！ 俺は男とクリクリの間に強引に身体を割り込ませると、クリクリを背中に隠した。

「何してんスカ先輩たち。犯罪じゃないですか！」

男子たちは、三年の商業クラスの間人だった。靴に入ったラインで分かる。向こうも俺の事を知っているのか、嘲るような口調で俺に声をかける。

「お、勇者様じゃないですか」

「さすが勇者様、かつこいいー！」

「で、なんかビームとか出すワケ？ 魔法とか使っちゃおう？」

次々に、俺を馬鹿にする言葉を吐いた。その言葉に反応するのは、クリクリだ。

「健司様を馬鹿にしないで下さい！ あなた達なんか、健司様の敵ではありません！」

ああ、やめてくんねえかな。

そういう言葉が、一番喜ぶんだって、こういう連中は。案の定ゲラゲラ笑う先輩たち。その中の一人が、突然俺の腹に蹴りを入れた。

ドムツ！

「ぐっ…！」

苦痛に俺の顔が歪む。一瞬、吐き気がしたがこらえた。

「健司様！？」

クリクリが心配そうに声をかけるが、俺はそれを片手で制した。

俺に蹴りを入れた先輩は：少し驚いているようだ。思いのほか俺の身体が固かったからだろう。

「やめませんか。今なら、先生にも言わないから…やめましょう、

「こんな事」

この言葉も、少しまぶさかっただかもしれない。いきり立った先輩たちは、クリクリを無視して俺を捕まえると、集団で袋叩きを始めた。

バキッ！ ドカッ！ ドムッ！

「やめてっ！ 健司様、逃げてっ！」

クリクリが何か言ってる。いや、この手の奴らに何言っても通じないって。お前こそ逃げろよ。そんな事を考えていると、目の端でクリクリが先輩の一人に突き飛ばされるのが見えた。俺を助けに入ろうとしたらしい。

くそっ……。こうなったら、もう目立ってもかまわねえや。というか、充分目立ってるし。

俺は、殴るのに夢中になっている先輩たちに向かってニヤリと笑って言った。

「なんか、軽いつスね。本当は弱いんじゃないですか？」

ブチッと、何かが切れた音がしたような気がした。そして、一斉に先輩たちが殴りかかってくる。俺にはそれが、スローモーションのように見えた。

(そうそう、一斉に来い。…ここだ！)

俺は、拳が身体を捉えるコンマ数秒前で身体強化能力を発動する。

「皮膚、硬質化」

途端に俺の皮膚がダイヤモンドよりも固くなった。これをやると、発動中皮膚が固まって動けなくなるのがネックとなるが、鉄でできた剣をはじくくらい平気で出来るようになるのだ。つまり…

バキボキベキバキボキ！

「『ぎゃあああああつ！？』『』『』」

おて手グニャグニャの刑。

先輩たちは一様に拳を複雑骨折：いや、もう粉碎骨折？ 絶叫をあげてその場で転げ回った。そして、そんな大声あげるもんだから見回りしていた先生たちもやってくる。

「何やつとるんだ貴様らー！」

俺は尻餅をついて半ベソかいているクリクリのそばまで行くと、その隣にへたり込んで先生たちの到着を待つのだった。

保健室で応急処置をしてもらった俺は、クリクリと共に生徒指導室で事の経緯を説明した。先生たちも、見た目が一番ボロボロな俺

を責めるような言い方はしない。どう見ても被害者は俺。むしろ、どんなに殴られてもやり返さずにいた事を誉めてくれた。

「お前を殴りすぎてアイツら手え壊したらしいからな。どんな石頭してんだお前は」

体育教師の、通称ゴリライオンが俺の頭をわしわし撫でながら言う。

「しかしこれで100%アイツらに否があると確定したからな。どうする？ アイツら、このままなら停学処分だが退学まで追い込むか？」

そんな事すすめんなよ。どんな教師だ。

「いえ。俺はそこまで求めてないです。こんな傷一晩寝たら治るし、この程度で退学とか可哀想ですから」

嘘は言っていない。実際、一晩寝たら治ってしまうのだ。だけど、ゴリライオンはそれを強がりを受け取ったようだ。後ろのクリクリを見てニヤついた所を見ると、俺がクリクリに良い所を見せようとしたとでも思っただろう。

「分かった、じゃあこの件はこれでお終いだ。もう帰って構わないぞ、気をつけてな」

「はい」

「ああ、佐藤」

部屋を出ようとした俺に、声をかける。

「お前、結構やるじゃないか。見直したぞ」

「…ありがとうございます」

俺は少し照れながら、クリクリと一緒に指導室を後にした。

夕暮れ時。

俺はクリクリをチャリの後ろに乗せて、土手の道を走っていた。右手には、夕陽を受けてキラキラ輝く川が。殴られ過ぎた顔には少ししみたが、綺麗だったので良しとする。

しばらく無言で走っていると、クリクリが先に口を開いた。

「ごめんなさい…。また、健司様に迷惑かけましたね」

「ん？ ああ…まあ、いいよ。慣れてるから」

どうしてもぶっきらぼうに答えてしまうのは、俺の悪い所だろう。クリクリは少し落ち込んだようだった。

「私、健司様に会いたくて…神様に頼んだんです。魔王を倒した報酬に、一つだけ願いを叶えてくれると言ってくれたので」

ああ、なるほどね。魔王を倒した時、その場にいたメンバー皆の願いを聞いたわけだ。俺一人じゃなかったのか。

「失望させて悪かったな。俺、最低だったろ」

そう言つと、背中にクリクリの髪の毛が擦れる感触がした。首を横に振つたんだらう。

「健司様は、やっぱり勇者様でした。私がピンチの時には、ちゃんと現れて助けてくれましたから。…悪いのは、健司様の都合も考えずに会いに来た私です。たくさん迷惑かけてしまいましたから」
そう言つてから、一呼吸置く。そして少し悲しい声で言った。

「私、神様にもう一度お願いして向こうに帰ります。もうこれ以上健司様に迷惑かけませんから、安心して下さい」

…あのさ。

毎回、こうなんだよね。

そつだ、思い出したよ。毎回死ぬような目にあつても、結局クリクリの護衛を続けた理由。それは、クリクリがこないじらしい事言うからだ。ダメなんだ俺、こういう言い方されたら。チクシヨウ、これ意図的に言ってるなら大した悪女だぞ？

キツ、とチャリを止める。

「健司…様？」

「クリクリ、ちょっと降りて」

俺が言うと、クリクリは戸惑いながらもチャリから降りた。少し不安そうなのは、俺が怒ったとしても思ったからだろうか。

俺はクリクリの手を引いて、土手を下りる。そして工事用の資材などで物陰になってる所に来ると、手を離れた。ここなら誰も見えないだろう。俺は周囲を確認すると、クリクリと向かいあい…

ザッ…

ひざまづいた。

「け、健司様！？ 何を！？」

「俺、作法とか良く知らねえんだ。結局俺、誰にも忠誠誓った事ねえから…えっと、これで剣を渡すんだっけ？ 剣になるものは…」

ガサガサと鞆をあさる。

「これでいいや」

俺はそう言っつて、折りたたみ傘を取り出した。組み立てて閉じると、剣のように持ってクリクリに捧げる。

「今まで冷たくしてゴメン。これからは、俺が守るから…こっちに居てくんないかな。なんつーか、その、せっかくこっちに来たのにこれでサヨナラとか寂しいし…」

なんつー誓いの言葉だ。馬鹿か俺は。けど、クリクリは俺を馬鹿にするような事は言わなかった。本当に嬉しそうに、ニッコリ笑ってくれたんだ。そして、俺の手から傘を受け取る。その傘をクリクリはゆっくり立てると…

ポソツ!

開いた。え、なんだそりゃ?

不思議そうに見上げる俺。その時、絶妙なタイミングで空からポツポツと雨が降って来た。…嘘だろ? いつの間にか、空は半分くらい雲に覆われていた。クリクリは楽しそうに笑うと、傘の下に俺を入れる。

「守られてばかりじゃ気がひけます。私も、自分に出来る方法で健司様を守りたい。それではいけませんか?」

「クリクリ…」

完全にやられた。

こんな事言われて惚れない男は居ないんじゃないか?

俺は顔を真っ赤にして、「それでいいです」とだけ言った。仕方ないだろ? いざとなったら、気の利いたセリフなんて出てこなかったんだから。

第三話 そう来たか

紗良の様子がおかしい。

それはクリクリを彼女の住む高級マンションへ送り届け、自宅へ戻ったその時から始まった。顔に沢山ガーゼを貼り付けて帰ってきた俺を見て、紗良は今まで見せた事の無いような狼狽ぶりを見せた。

「に、に、兄さん！？ 兄さんが死んじゃう！！」

「死ぬわけねーだろ。この程度で死んでたまるか！」

俺の顔を見た途端にコレだもんな。そんなに酷い顔してんのか、俺は。

とりあえず台所へ向かう。夕飯を作ってる紗英さんに挨拶をした
ら……

ふらっ……

「さ、紗英さん！？ 紗英さん！！」

気絶しやがった。なんなんだ、俺の顔、もしかしてグロい事になってんのか？ 不安になって、急いで洗面所へと向かう。鏡を見ると、そこには傷だらけの俺の顔が。

あー、なるほどね。

紗良たちがビビるのも無理ないか。俺も久々に見る、見事な青タンがあった。加えて目尻を切ってしまったらしく、大きな血の塊が

かさぶたみたいにくっついていて。確かに見た目怖いかもしれない。

クリクリはヒーラーだけあってこの程度の傷を見ても驚かない。ここらへんに、殺伐とした世界を体験したかどうかの差が出るんだろうな。そんな気がする。ちなみにクリクリが魔法を使って俺を回復しなかったのは、この程度の傷で魔法を使うなと向こうの世界で躡っていたからだ。こんなの、寝れば治るんだから。

さーて、どうしたものと倒れた紗英さんを居間のソファーに寝かせていると、ガラツと玄関のドアが開く音が。ああもう、今日は面倒くさいな！ 親父かよ！ 偶に早く帰ってくるのはいいけどよりにもよって今日か！

「ただいまー…」

のんびりした声で言いながら、親父が居間へとやってくる。横になつた紗英さんと、酷い顔した俺を見て固まった。

「ど、ど、どうしたんだ！？ 強盗か、強盗に襲われたのか!?!」

「いや違うから！ 何取り乱してんだよ!」

「じゃあお前が強盗か!?!」

「落ち着け、親父!!!」

うちの親父はびつくりすると訳わからない事を口にする。そこから辺、血は繋がっていないハズなのに紗良とそっくりだ。当の紗良は、俺のそばで傷を指で突っついていて。地味に痛い。

結局、夕飯は出前を取る事になった。紗英さんが夕飯を作れなくなったから、仕方ない。頼んだのがうな重だったのは俺の傷を見て早く元気になるようにと考えたからだろうか。そうであって欲しい。夜中に親父のハッスルする声が聞こえてきたらなんかヤダからな。

紗良は食事中、ずっと俺の傷を見ていた。

…あの、まだ怪しんでるわけね？ はあ…、面倒くさいなあ。

さて、次の日の朝。

俺は自慢の第六感アラーム、『嫌な予感』によって強制的に目を覚まされた。部屋のドアが微かに音を立てて開かれる。

ヒタ、ヒタ…

俺は薄目を開けて入って来た人物を確認する。それは案の定義妹の紗良だった。

紗良は、ゆっくりと俺の寝ているベッドに近づいて来る。そして俺のそばまでやって来ると恐る恐る顔を突っついた。

なんだ、怪我の心配してんのか。大丈夫だって、こんな怪我一日寝れば治っちまうんだから……って、治ったらおかしいんだ！ ヤバい、と思って紗良の手を振り払おうとしたが…

べりっ

遅かった。

紗良は、俺の頬に貼られたガーゼを引き剥がす。そして、信じられないような顔をした。

「う…うそ…」

ああ、終わった。最悪だ。紗良がふるふると震えるのが分かる。そして、持っていた金属バツ…って、またか！

「死ね、宇宙人！」

「だからやめろっちゅうに！」

ブウンツ！ バスツ！

枕にめり込む。

俺はすぐさま紗良の腕を捻り上げ、ベッドに組み伏せた。

「は、離せ宇宙人！ 兄さんを返せ馬鹿！」

「だからどうして俺が宇宙人になるんだ！ それといちいちバツト持ってくんな！」

バタバタ暴れる紗良。キツと俺を睨むと悔しそうに言う。

「人間がそんなに早く傷が治るワケない！ やっぱり兄さんは宇宙

人にさらわれて、ここにいるのは宇宙人が化けた偽物なんだ！」

「無茶苦茶言うな！ どころかどう見ても本人だろうが！ 宇宙人って言う方が無理だろ！」

むむむ、と唸る紗良。でもまあ、怪しむのも無理ないか。

「じゃあ、本物の兄さんなら答えられる質問をするわ。本物だと言いたい張るなら、答えてよ」

「ん？ ああ、いいぜ。それでお前が納得するならな」

紗良は俺を探るように睨みつける。そして意を決したように、口を開いた。

「私と兄さんが初めて会ったのは、いつ？」

え？

紗良と初めて会った時？

そりゃ親父が結婚決めてから初顔合わせん時じゃないか？ そう言おうとして、俺は紗良の顔を見る。その時、俺の脳裏に一つの光景が蘇ってきた。紗良の、この睨みつけるような目。それは以前にも見た事があった。確かあれは小さい頃…俺が、ここよりもっと田舎に居た頃の事だ。

保育園の砂場で一人、城を作る女の子。皆が親に迎えに来てもらってる中、いつまで経っても迎えが来なくて寂しそうにしていた。だから、俺は一旦家に帰った後にもう一度保育園に行つて、一緒に

遊んでやっていた。保育園を卒園してから引越したから、それっきりだったけど、確かにあの目つきの悪い女の子に似ている。というかソツクリだった。

「白崎の保育園で会ったのが最初だ。俺はお前をさっちゃんと呼んで、お前は俺をけんちゃんって呼んでた」

「……っ!？」

紗良の顔が、驚愕に彩られる。大きく見開かれた瞳に、何かが滲んできた。

「砂の城に木の枝立てて、二人の城だって喜んでたよな。まあ、その後俺が砂山崩しを始めたら泣き出したけど」

我ながら容赦ないと思う。しかし、良く思い出せたもんだ。

紗良は、涙をポロポロ流し始めた。

「兄さん…覚えてくれてたんだ…良かった、本物の兄さんだよ…」

そう言うと、わんわん泣き出した。あー、コイツがずっと俺に突っかかってたり、いちいち構って顔色伺ってたりしてたのはこの事があったからだったのか。俺は手を離すと、紗良を抱き寄せて頭を撫でてやった。しゃーない、今日は特別だ。

「馬鹿、覚えてたんなら早く言ってよう！ 思い出すの、ずっと待ってたんだからね!？」

「悪い、中々言い出せなくてなあ…。お前も、だいぶ綺麗になってたから思い出の中のお前と一致しなかつたんだ」

なんでこんな軽口言えるかな。というか、こんな齒の浮くセリフ言えるならクリクリに言っておけば良かった。家族だから、照れずに言えるのだろうか。

しかし…これは余計な言葉だったかもしれない。

顔を真っ赤にしてその気になっちゃったのか、紗良はとんでもない事を言った。

「…じゃあ、将来結婚してくれるって言ったのは覚えてる？」

は？

いやいやいやいや。

いくらなんでもそれは無い。あの当時の俺は絶対そんな発想はしなかったハズだ。

「どさくさに紛れて嘘言うな。そんな約束したら、絶対覚えてるだろ。こちとら女にモテた事の無い鋼の童貞だぞ」

「言った！ 絶対言った！ お城を作った時言ったもん！ 私がお姫様で、兄さんが王子様って言ったよ！」

なんじゃそら。いや、そんな婚約にやらんだろいくら何でも。

「いいか、その王子様とお姫様ってのは兄妹だ。決して夫婦ではない。同じ王族だというだけだろう」

「~~~~つ!!」

ガバツと身を翻した。ヤバい!

「死ね、女の敵!」

「ちょ、またかよ!?!」

ブウンツ! バスツ!

床に転がってたバットを拾い上げると、またもや俺に向かって振り下ろす紗良。宇宙人から女の敵とか、スケールダウンが激しいなというか、俺の治癒力に関してはもう気にならないんだろうか。迫り来るバットを避けながら、俺はため息をつく。結局今日も、早起きした割には家を出るのが遅くなるのだった。

朝からドタバタしたせい、俺は昨日の事を完全に忘れていつも通り学校へ登校した。だから、最初周囲の人間の態度の変化の理由が分からなかった。

なーんか、ジロジロ見られてる。

決して、冷たくは無い。話しかけたくて、出来ないような。そん

な感じだ。

俺は最初、また顔のガーゼがズレて異様な治癒力がバレたのかと思っただがどうも違うようだ。教室に入る前に、トイレの鏡で確認したから間違いない。

何だろうな？

顔がガーゼだらけでキモいとか？

教室に入ってからそんな調子だったので、俺も何だか居心地が悪かった。そんな中、周囲の空気なぞ全く読めない人物が声をかけてくる。

「おはようございます、健司様！」

「お、おはよう、クリクリ」

クリクリだった。昨日、あの恥ずかしい誓いを立ててから…俺は開き直ってクリクリといつも通り接すると決めていた。だから、周りの視線なんてもう気にしない。

「怪我の方はまだ治らないんですか？ なんなら私のヒールで…」

「わーっ!?!? いやいや、ゲームだったらそれも可能だけど、これ現実だからね？」

前言撤回。そう言えばこっちじゃ魔法なぞ存在しないって教えてなかったな。そこは周りの目を気にしよう。うん。

そんな会話をしていると。

一人のクラスメートが声をかけてきた。俺と偶に話をする男子のくっわだ轡田だ。メガネをかけた、小さくて気弱な、女の子みたいな奴。だからこそ、俺も話が出来たんだが…何だろ？

「あの、佐藤君…その怪我って、昨日喧嘩したっていう怪我？」

「え…？ ああ、喧嘩っていうか一方的に殴られただけなんだけどね。そっか、もう噂になってんのか」

俺が答えると、隣のクリクリが付け加える。

「私が襲われた時に、助けに入ってくれたんです。健司様は自分からは全く手を出さなかったんですけど、あの男たちは全員手が碎けて病院送りになりました」

おーい…

いや間違っちゃいないが、そんな事言ったら変な伝説が出来ちゃうでしょ。

いや、もう遅いか。轡田は「凄いな、佐藤君！」とか言って目を輝かせてるし、他の連中も一斉にひそひそ話を始めるし…ああ、もう何だか面倒くさいな。変な事件に発展しないといいんだけど。

クリクリとの関係が改善されてから、俺の学校生活は今までになく楽しいものとなっていった。それまで目立たないように気をつけて生きてきたが、今となっては何故そんな事をしていたのか分からなくなっているくらいだ。

周りの目なんか気にしないで、自分のペースで生活する。それで嫌われても、俺は一人じゃない。クリクリが居るのだ。それはとても大きかった。

昼休み、いつもは一人で食べる食事も、二人で食べるととても楽しい。それが惚れた相手なら尚更だ。屋上で二人して弁当を食べながら、実感する。俺の分の弁当？ 勿論クリクリが持って来てくれたものだ。

「クリクリ、お前一人暮らしだろ？ 弁当って自分で作ってんのか？」

「いえ、メイドのステラも此方にいるんです。毎朝朝食を作りに来てくれて、ついでにお弁当も作ってくれてます」

言っただけから、少し複雑な顔をした。

「神様が無理矢理こちらの世界を作り替えたみたいですね。お父様もお母様も此方に居て、何だか私も最初から此方の人間だったんじゃないかって勘違いしてしまいそうです」

「そりゃあ…強引だな。神ってやつは、何でもアリなんだな」 ウンザリする。クリクリが此方に居るのは今となっては嬉しい事だけど、現実世界に戻って来てまで神の影がチラつくのはちょっと嫌だ

った。

「クリクリ、お前もこっちで暮らすからにはこっちの事勉強しないと。魔法とか、NGだから」

話題を変える。今はここにいない神よりも実生活に関する話をした方がいいだろう。

「はい…。不思議ですね、魔法無しで怪我や病気が治るなんて。健司様がとても強い理由が、分かったような気がします」

いや、それは違うんだが。でも確かに魔法に頼りつきりな世界から此方に来たら戸惑う事も多いだろうな。…今度一緒に、社会勉強もかねて外に遊びに行かないか、とか言って誘ってみようかな。そんな事を考えていると。

ガチャ…

俺たちの背後で、屋上入り口のドアの開く音がした。何だよ、一体。せつかく俺が生まれて初めてデートの誘いをしようつてのに。恨めしい気持ちを抑えながら振り向くと…

やけにガタイのいい男子が、華奢な男子の手を引いて歩いていた。二人は、屋上の俺たちと反対側の端へと歩いて行く。よく見ると、華奢な方は轡田だった。

「あら、あの人は朝話し掛けて来た方ですね。確か、轡田さんでしたか。お昼ご飯でしょうか？」

「いや…昼休みは後10分しかないし、なんか雰囲気変だろ」

何か思いつめた表情の男に、不安げな轡田。どうも様子がおかしい。気になった俺とクリクリは、二人の話を盗み聞きする事にした。俺は身体能力強化で聴覚を強化する。クリクリは風の精霊を召喚して放ち、精霊と聴覚を共有した。はつきり言おう、俺もクリクリも力の使い方としては最悪だ。

徐々に、二人の会話が聞こえてくる。どうやら、ガタイのいい男の方が轡田に何か話し掛けていているようだ。内容は…

「俺、本気なんだよ！ 本気で、お前に惚れてんだよ！」

((! ?))

俺とクリクリが同時に固まる。おい、マジか！

「ぼ、僕は普通に女の子が好きなんだ！ そっちの趣味は無いよ！」

「嘘だ！ お前、佐藤と話してる時は他の奴と話してる時と全然違うじゃないか！ 惚れてんだろ！」

「ち、違うよ！ 彼は話しやすいから…」

((……))

この沈黙は同時だが、内容は違う。クリクリの沈黙はジト目とともに俺に向けられている。俺の沈黙は…分かるだろ？ また面倒事かよ、とうなだれていたんだ。神よ、実はこれもお前の考えたシナリオじゃないか？ こっちに帰って来てからも、向こう以上に面倒事ばかりじゃないか。

しかし、神を呪った所で事態は好転するワケでもなく。それどころかとんでもない転がり方をしやがった。

「分かった、そんなに佐藤が良いなら俺がアイツ以上の男だと証明してやる！ 喧嘩で先輩を病院送りにした強さに惚れてんだろ？ だったら、俺がアイツに勝ったら俺に惚れるよな！？」

「どうしてそうなるんだよ！ やめて、彼は関係ないでしょ！」

ジーザス。

なんてこった。

本格的に厄払いした方がいいかな。俺は聴覚強化を解除すると、ガツクリとうなだれるのだった。

第四話 決闘ですよ

えへ、果たし状もらっちゃった

…ごめん、取り乱した。

昼休み、衝撃的なシーンを目の当たりにした俺たちが教室に戻る
と、俺の机の上に一枚の紙切れが。そこにはへたくソな字でこう書
いてあった。

『界たし上 本日、放界後校社うらにて持つ 異常に勝負されたし
二年A組普通科進学コース110232坂下巖夫』

……。

まあ、伝えたい事は分かる。多分、真面目な奴でもあるんだろう。
でも、見ての通りとつてもお馬鹿だった。これで進学コースとか悪
い冗談としか思えない。

「健司様。これは、日本語ですよ？ 私の言語スキルを持ってし
ても読解不可能なのですが…」

うん。それはそうだろうけど、君の発言も知らない人が聞いたら
オタクっぽく聞こえるから気をつけてね。

それはともかく。

生徒番号とかまで書きちゃっていいのかね。これ、このまま先生
に突き出せばおしまいじゃないか。

「ブルばばあかゴリライオンに渡しちゃおうかな」

「え、勝負されないんですか、健司様？」

クリクリが驚くのは、理由がある。俺は向こうに行つた時にチート能力振りかざして色んなバトルマニア達を叩き伏せて来た。そうやって力を誇示していい気になっていた時期を知っているだけに、今のリアクションに驚いたんだろう。

「あのね。日本じゃ決闘は法律で禁止されてんの。こんな書いて渡した時点でアウトなんだよね」

「そうなんですか…」

そこまで言つて、クリクリが俺に耳打ちをしてくる。

（でも、それであの無茶苦茶な人が納得して引き下がるでしょうか）

（まあ、無理だろうね）

第一。

さつきから周りの奴らの視線が鬱陶しい。皆、決闘を期待しているような顔だ。田舎に娯楽が少ないからつてお前ら…。

「とりあえず、付き合つてやるよ。また殴られて病院送りにでもするわ」

我ながらよく分からない戦い方だ。クリクリは何か言いたげな顔をしたが、言葉を飲み込んだ。多分、殴られる姿を見たくないんだ

ろう。加えて、決して手を出さない俺を理解しかねているのかも
れない。

ごめんな、クリクリ。これがこっちの世界の戦い方なんだ。直接
やり合うより社会的な制裁の方がキツいんだよ…って、言っても理
解されないだろう。

そんな事を考えていると、ふと前の方から視線を感じた。それは
轡田の申し訳なさそうな視線。ああ、言い出せないよな。もし言っ
たらホモに狙われてると公言する事になるし、そうなるとあらぬ噂
が立てられる事になる。轡田は俺と同じで、周囲のパワーバランス
に気をつけながら生活してきた小心者だ。アイツの気持ちは、よく
わかる。

まあ、お前は遠くで見えてくれ。俺はそう心の中でつぶやきな
がら、次の授業の準備を始めた。

でもって放課後。

掃除もホームルームも終わり、後は帰るか部活に行くか。普通の
生徒ならそんな選択肢なんだろうが、俺は一択。ホモと対決だ。な
んてこった。

クリクリは今回、ギャラリーとして俺の決闘を遠くから見守る事になった。俺が決闘するのは学年中に広まっちゃってるから野次馬が多いんだよね。現に今、校舎裏に来ているんだが二、三十人もの野次馬が集まっている。昨日の不良病院送りもあって、関心が高まっているだろうな。

俺が到着してから10分後。

言い出しっぺの馬鹿が、慌ててやってきた。

「に、逃げなかったようだな、佐藤健司！」

「おせーよ。なにしてんだよ」

「うるさい、提出物出すの忘れて先生に怒られてただけだ！」

なんだそりゃ。気の毒すぎるくらい馬鹿だな。俺が呆れていると、その態度にムカついたのか馬鹿は大声で俺に啖呵を切った。

「上級生倒していい気になってんのかも知らねえけど、今日までだからな！ お前より俺の方が強いって、証明してやる！」

「はあ」

どっちが強いとか、どうでもいいだろ。

「お前の方が強いって事でいいよ。帰っていいかな、俺」

「ふざけるな！」

なんだよもう…

「ムカつくんだよ、その態度が！ お前が調子くれてるから、勘違いしてお前に惚れる奴が出てくるんだ！」

そう言うのと、馬鹿は俺に向かって拳を振り上げる。俺は避けもせず、それを顔面に食らった。

バキッ！

「……………」

痛いよ。強化しなかったからな。まあ、これで先に手を出したのはこの馬鹿だって事になった。こういうのはね、ちゃんとしておかないと。まあ、また頬腫れちゃったけど。仕方ない。

さあて、どうやって壊してやろうかな。俺がそんな事を考えていると、意外な人物がそこに飛び込んできた。クリクリ？ いや違う。アイツなら人垣の中で辛そうな顔で俺を見ている。

飛び込んできたのは、轡田だった。

「やめてよ！ 何でこんな事するんだよ！」

「ヒ、ヒロ！ お前、コイツを庇うのかよ！」

ヒロ？ ああ、轡田ってヒロなんかかって名前なのか。まだ一学期でクラス一緒になったばかりだから知らなかった。で、何の茶番が始まるんだ？

「これって、僕が原因なんだろ！ だったら、僕を殴ればいい！」

「なっ…ヒロ、なんでそんな事言っただ！好きな奴を殴れるわけないだろ！」

うわー…

ギャラリーがざわつく。

凄いな、こんだけの人数の中でカミングアウトとか。というか、この展開は俺までそっち系と思われないか？

「嫌だつて言っただでしょ！第一、関係ない人を巻き込むような人なんて、好きになるわけない！」

うん、正論だ。けどまず、ノンケである事を主張して欲しかった。ほら、知らない人は完全に俺までそっち系だと思って変な視線向けてるし！

「関係ない！？お前がソイツにはかりいい顔するから悪いんだろ！やめて欲しかったら俺にも優しくしろよ！」

「だから、僕にその気は無いんだ！ハッキリ言っよ、僕は絶対君を好きになんかならない！」

そこは男を好きにならないって言うてくんねえかな。まあ、もう遅いか。

公衆の面前で思いつきり振られた馬鹿は、俯いてプルプルと震え始めた。…うーん、こりゃヤバいかな？俺は、そろそろ引っ込め

と轡田に声をかけようとして…

馬鹿がズボンのポケットから出した物に気づいた。

「ふざけんな…ふざけんなふざけんなふざけんなあ！」

「どけ轡田あ！」

反射的に轡田を突き飛ばす。クソ、勝手に身体が動きやがる、これだから勇者つてやつは！俺は迫り来る馬鹿の右手に握られた光を紙一重で避けると、すぐさま腕をとって関節技を決めた。クリスレア王国の近衛兵士長に教わった捕縛術だ。まさかこんな場所で使う事になるとは思わなかった。

「ぐあつ！？くそつ！離せ、離せえつ！」

「うるせえ奴だな、これ以上恥の上塗りするつもりか！」

馬鹿は俺に抑えられてるのが信じられないのか、必死にもがいて脱出しようとしていた。そりゃそうか、俺は身長173cm、この馬鹿は180軽く越えている。オマケに横幅もがっしりしてて体重は俺の倍ありそうだ。簡単に吹っ飛ばせると思うだろうな。馬鹿は空いてる方の拳で俺を何度も殴るが、俺はビクともしなかった。

まあ、無理だ。

足をかけてすっ転ばせると、地面にうつ伏せに倒してしっかりホールドする。手に持っていたナイフらしき物が地面に転がった。言ってみりゃ本物の軍人に教え込まれた捕縛術、まず抜けられるワケがない。俺は完全に関節をガッチリキメると、クリクリに目で合図

した。クリクリは頷くと、職員室へと走って行く。

ゴリライオンが到着するまで、俺はもがき続ける馬鹿の動きを封じていた。

「昨日の今日で、また喧嘩騒ぎか。お前は大人しい奴だと思ってたんだがなあ」

ゴリライオンが、半ば呆れながらつぶやいた。ここは昨日と同じ生徒指導室。今回はクリクリの代わりに轡田がいる。

「放課後に呼び出されて、いきなり殴られたんです。で、止めに入った轡田が切られそうになったんで組み伏せたんですけど…まずかったスかね」

「…いや、周りにいた奴らからもある程度事情は聞いているからいいんだが…。その喧嘩理由が、また変な噂になっていてな」

ポリポリ、と頭を搔いて難しい顔をするゴリライオン。まあ、教師としては見過ごせないわな。理由が不純同性交遊とか、男同士の痴情のもつれとか俺も嫌だもん。

「先生。昨日女助けて今日男に走るとか変でしょ。大丈夫、俺にそのケは無いですただ巻き込まれただけです！」

「ああ。それが聞いて安心した」

疑ってたんかい。

俺が無然としていると、轡田がゴリライオンに話しかけた。

「あの…僕、ずっと坂下君に言い寄られて困ってたんですけど、怖くて誰にも相談出来なかつたんです。坂下君は、どうなるんですか？　すぐまた戻って来るんですか？」

恐る恐る尋ねる轡田。ああ、そうか。下手に拒絶して苛められるのが怖かったのか。

「あー…まだアイツの言い分を聞いてないからハツキリ言えんが、危険物持ち込んで人に向けた時点で基本的に退学だ。よほど反省してるなら停学で済むかもしらんが、まあ無いだろう」

ホッと胸を撫で下ろす轡田。ゴリライオンは視線を俺に向けた。

「で、どうする？　今回も殴られた上にナイフで切られかけた。刑事事件にするか？」

だからすすめんなよ。学校の評価も下がるだろ？

「面倒なのは嫌です。全部、先生に任せますよ。俺は坂下とかいう奴がこれ以上俺たちに関わって来なければそれでいいですから」

これが本音だ。もう関わってくるな、と。平穩無事に過ごせたらいいんだから。それが一番。ゴリライオンは「佐藤は優し過ぎるな、

将来馬鹿を見るぞ」と言いながら笑っていた。

指導室を轡田と一緒に後にする。轡田はすぐに、俺に謝罪の言葉を述べた。

「ごめんね、佐藤君。僕のせいで怪我をして、周りからも変な目で見られちゃったみたいだ」

「んー…まあ、仕方ないだろ。悪いのは坂下って奴で、お前じゃない」

「でも…」

納得いかないのか、口の中でもごもご言っている。ああもつ、面倒くせえな。

「いいんだよ、終わった事は！それに、お前は俺の前に飛び出して庇ってくれたろ？ おあいこだ、おあいこ」

俺は轡田に向き合って言った。

「逆らうのが怖い相手の前に飛び出すって、半端なく勇気があるだろ。そんだけしてくれたら、俺としてはそれで充分だ」

「佐藤君…」

俺の言葉に、轡田が瞳を潤ませる。…ん？

「佐藤君、本当にありがとう。僕が勇気を出せたのは、佐藤君が頑張ってるのを見てたからなんだ」

そうですか。いや、なんで頬を赤らめる。

「僕、決めたんだ。これからは佐藤君みたいに強くなるって。佐藤君みたいに、誰かを守るくらい強く」

いやそんな事俺に言われても。というか近いよ。怖いよ。

「佐藤君…僕、君のそばに居ていいかな。佐藤君と一緒になら、頑張れそうな気がするんだ」

う…

うう…

うわあああああつ!?

なんでなんでなんで!?! お前ノーマルなんだろ? 普通に女の子が好きなんだろ? どーしてそう言う言い方するかな!?!

嫌な汗を背中にかきながら、俺は妙に瞳をキラキラさせてる轡田に何て返事をしていいか迷う。くそっ、純粋な好意が怖い! なんなんだ、この小動物は!?!

悩み抜いた末、俺は…

「まあ、別にいいけどよ…」

と、返してしまった。

それと同時に、ピシッと何か音が立てる。それはまるで、凍りついた空気にヒビが入ったかのような…

振り向くと、そこにはクリクリがいた。

「け、健司、様…」

「い、いやいや、これは違うから！　そういうんじゃないから！」

「私、私、健司様がそういう趣味だったなんて…」

最悪だ！　一番誤解して欲しくない人に誤解された！　つーか、轡田も否定しろよ！　なに可愛い顔して戸惑ってんだ！

「信じてたのにー！ーっ！ー！」

「待ってくれクリクリー！ーっ！ー！」

「あ、ちょっと、佐藤君ー！ー！？」

ダダダダ、と走り出すクリクリ、追いかける俺：それを追いかける轡田という、訳の分からない追いかっこが始まる。ああ、勘弁して欲しい！　結局今日もドタバタ続きじゃないか！　そんな事を考えながら、俺は心の中で涙を流すのだった。

だから。

夕焼けに染まる校舎の屋上から、その追いかけてつこを眺めながら
ほくそ笑んでいるかつての仲間がいたただなんて。

その時の俺は気づきもしなかった。

第五話 新しい俺

どうも、現実世界に戻ってきてても生傷の耐えない佐藤健司です。なんか、もう勘弁してほしい、そんな泣き言を寝言で言っちゃうくらい疲れきってます。はい。

昨日はクリクリの誤解を解いて轡田に節度ある行動をとってくれと頼み込んでたら日が暮れていた。家に帰ったら帰ったで紗良や紗英さんが俺の顔見て大騒ぎするし、気の休まる時が無い。あれほど恋しかったテレビゲームなんてやる気が起きず、夕飯食って風呂入ったら、後はすぐ寝てしまった。

紗良はどうしてたかって？

相変わらず俺をジロジロ観察してたよ。今度はどんな難癖つけてくるか分からないけどさ、そろそろいい加減にして欲しい所だ。過去の思い出をぶち壊してしまったのは悪いとは思うけど、いつまでも思い出に浸ってないで前向いて生きて行かないとな。

…そんな事を考えながら寝たからだろうか。

俺は夢の中で子供に戻って、紗良と一緒にあの砂場で遊んでいた。

俺は紗良が大好きだった。

俺は紗良を愛していた。

将来結婚したいと思っていたし、そう約束をした。

一緒にお城で暮らすのが夢………つて、オイ！　なんだ、なんでこんな事考え始めた！？

ハツと目を覚ます。すると、真つ暗な部屋の中、紗良がベッドのすぐそばでしゃがみ込み、メガホンを俺の耳に当てて…

「俺は紗良を愛していた、俺は紗良を愛していた、俺は紗良を愛して…」

「くおらあつ！ー！」

ガバツと跳ね起きる。なんて奴だ、洗脳作戦で来やがった！

「お前、これはやり過ぎだろ！？」

「だって、だって嫌なんだもん！　兄さんは私のものなんだもん！」

「勝手に所有権主張するんじゃない！　潔く諦める！」

ぐぬぬぬぬ、と紗良が涙目で震える。ヤバイ！

「兄さん殺して私も死ぬーっ！」

「そんな潔さはいらねえええ！」

ブウンツ！　バスツ！

また金属バットが枕にめり込む。その内この枕壊れるんじゃないかな。

昨日よりも更に早起きとなった俺は、暴れる紗良が疲れきって眠るまで、ガツチリ動けないように抱きしめていた。最初は思いつきり暴れていたが、すぐに俺の胸に顔をすり寄せて眠りにつく紗良。くそっ、なんだこの安心しきった寝顔は。結局コイツこれが狙いだっただんじやないか？ スヤスヤと俺の腕の中で眠る紗良を忌々しく眺めていると、カーテンの隙間から差し込んで来る朝の光。あーあ、二度寝は無理か…。俺は生欠伸を噛み締めながらベッドを出るのだった。

朝。学校に登校すると、昨日とはまた違った空気が教室に流れていた。まあオタク趣味に加えてホモ疑惑だ。腫れ物扱いしてくるだろうとは予測していたので何とも思わないが…

「佐藤君、おはよう」

「え？…ああ、おはよう」

意外な事に、挨拶された。クリクリでも轡田でもない、今まで挨拶を交わした事のないクラスメートに。それは一人だけじゃなくて二人、三人と続いた。

勿論、全員がいきなり態度を変えたわけじゃない。そんな漫画みたいな変化は普通無いだろう。ただ、間違いなく俺に対して普通に挨拶してくれる人が出てきた。

なんか…嬉しいな。

挨拶って、こんなに気分良くなるものだったんだ。以前はおはようなんて言う相手、家族以外で居なかつたから…なんだか新鮮だった。

今度は、こっちから挨拶してみようかな。そんな事を考えていた。

さて…問題のホモ疑惑だけど。

「佐藤君、おはよう」

教室に入ってくるなり、可憐な花のような笑顔で挨拶をしてくる轡田。ざわめくクラスメート。噂は既に広まっているようだ。どういうわけか、女子を中心にキラキラとした目をして此方を見てくる奴が多い。お前ら変態だな？

「ねえ、昨日の怪我は大丈夫？ いっぱい殴られてたでしょ？」

「え？ ああ、あの程度なんでもねえよ。一晩寝りゃ治るから」

「凄いなあ、佐藤君。あいつ、ボクシングジムに通ってるのに」

なに？

「なんか、プロの人をノックアウトした事あるんだって。そんなやつパンチが効かないんだから、佐藤君で凄く強いんだね！」

なんてこつた…

ああ、また皆ひそひそ話しだした。わけわからん武勇伝が作られて行く…。そのうち噂を聞きつけた県内の不良が、次々と戦いを挑んでくる安っぽい不良漫画みたいな展開にならないだろうな？俺は、今から不安だった。

そんな事を考えながら轡田と話をしていると、いつもより少し遅れてクリクリが登校してきた。珍しいな、クリクリが朝遅いなんて

「おはようクリクリ。寝不足か？なんか疲れてるみたいだけど」

「あ、おはようございます健司様、轡田君。申し訳ありません、お見苦しい顔をお見せして…」

クリクリの顔で見苦しかったら世界中の女の顔はグロ映像じゃないか。流石にクラスの女子がいる中でそれを言う勇氣はなかったが、心の中でつぶやいていた。

「実は、以前健司様に言われた通り此方の社会の事を勉強していたのです。それに夢中になっていたら、夜更かししてしまいました…」

なんてこつた、俺のせいだよ！

「悪い、そこまでしなくていいんだ。分からないことがあったら、俺が教えてやるから」

「そうだよ、僕も教えられる事があつたらお手伝いするよ」

轡田も心配そうに言う。ああ、コイツに下心は無い。100%親切で言っている。それは分かるんだが、何となく邪魔に思っ

まう俺はきつと性格悪いんだろっな。

クリクリは疲れた表情を笑顔で隠して、「ありがとうございます」と返した。

体調の悪いクリクリをフォローしながら、以前と少し変わった俺の学校生活はスタートした。正直言うと最初はクリクリの事ばかり気になって周りの変化に気づいていなかったんだが、後々考えてみると周りの俺に対する接し方は随分変わっていた。

まず、俺に声をかけてくれるようになった。

授業で一番イヤなのは、班やグループを作って作業する時だ。俺は自分から声をかけないから、大体最後の方まで残ってしまう。だから同じような気質の轡田と組む事が多かったんだが、今では轡田、クリクリの二人に加えて他にも数人声をかけてくれるようになった。調理実習や科学の実験の時なんかは5、6人でグループを作る必要があるから、だいぶ助かった。

次に、休み時間。授業で同じグループになった連中が話しかけてくれるようになって、クリクリにも女子の友達が出来た。俺や轡田にも話が出来る奴が増えて、前よりも休み時間が楽しくなっていた。週刊誌の回し読みの輪に入れて貰えたり、そんな何でもない事が嬉

しかった。

そして、最後に。
俺を凄いと行ってくれた。

それは体育の時間だった。現実世界に戻ってきて初めての体育。男子は幅跳び、女子はハードルの授業をしていた。グラウンドに出てクリクリの体操服姿に見とれたりしていると、担当のゴリライオンが俺を呼び出した。

「佐藤、まずお前が見本を見せてみる」

「お、俺ですか!？」

帰宅部の俺が見本？ こういうのって陸上部とかの役目じゃないの？ 疑問に思いつつ位置に着くと、俺は得意の「頑張ってるフリ」をした。

頑張ってるフリ。それは表向き必死な顔をして、だいたい平均的な数字を出すように力を調整する技。波風たてず目立たないようにする必須テクニクだ。しかし…

力の調整を間違えたらしい。

ザツと砂に着地した瞬間、クラスの連中は「おおっ!？」と声を上げた。あちゃ、失敗したか！俺が先生の顔を見ると…

「5メートル30、か。陸上部じゃないのに良く飛んだな」

どうもその数字は、陸上部なら出せるけど帰宅部には難しい数値

らしい。出る杭は打たれる、というのを警戒していた俺だが、皆はそんな俺を凄いと喜んでくれた。

きっかけは確かにファンタジーだが、身体を鍛え上げたのは俺自身の努力。それが皆に誉められて、俺はなんだか涙が出るくらい嬉しかった。

まあ、もつとも。

「帰宅部の佐藤がこれくらい飛べるんだから、お前ら皆5メートルが最低ラインな。これ以下だった奴は腕立て腹筋二十ずつだ」

「『ええええええっ!?!』」

ゴリラライオンによって恨み言に変わるんだけど。

俺は別に皆に好かれようと態度を変えた訳ではなかった。むしろ逆で、皆にどう思われてもいいやと思って周りに気を使わないようになっていた。だいたい、女の子をクリクリとか変なアダ名で呼ぶなんて、こっちではした事が無い。言葉使いも乱暴になつたし、無表情を装う事もなくなった。

でも何故か、今の俺の方が周りの受けが良い。分からないもんだな。

そして、おそらく皆が態度を変えた一番の事件が、この体育の時間に起こった。皆、腕立てやスクワットを文句たれながらこなしていた時。俺は一人幅跳びの砂をならしながら、女子のハードルを眺めていた。

見ているのは勿論クリクリ。ブルマ姿のクリクリ、最高。もう女神だね。

向こうにいた頃は豪華なドレスや魔法のかけられたゴツイロープばかりで太ももなんて見た事なかった。言わば激レアなのだ、クリクリの太ももは。

すぐそばで轡田が官能的な喘ぎ声をあげて腕立てしてようがお構いなしに、俺はクリクリを眺めていた。すると…

フラッ…

パタッ

「クリクリ!?!」

ハードル走行の途中で、クリクリが倒れた。女子たちは悲鳴をあげ戸惑う。最悪だ、アイツ無理しないで見学しときゃ良かったのに。女子の担当の先生は、ちょうど他に体調崩した生徒がいたらしく保健室に行つてて、ここには居ない。

「先生、あの…」俺が必死の形相でゴリライオンに声をかけると、ゴリライオンは頷いて言った。

「この授業ではお前が保険委員だ。行つてこい」

「はいっ！」

俺は全力でダッシュした。女子たちはどうして良いか分からずオロオロするばかり。そんな奴らを押しつけてクリクリに駆け寄ると、すぐさまお姫様抱っこで抱え上げる。そして身体に負担をかけないように気をつけながらも、可能な限り速く保健室まで疾走した。

身体強化は使ってなかったと思う。けど、多分普通の人では出せないスピードだったんじゃないかな。後々ゴリライオンに、「陸上部に入れ」としつこく誘われる事になるくらいだから。

保健室には保健医と女子担当の先生、そして貧血を起こしてたクラスの女子がいた。俺は先生に事情を説明して、クリクリをベッドに寝かせる。保健医の話じゃ寝不足と過労らしい。

「クリクリ。夜更かしって、何時まで起きてたんだ？」

「あの…4時、くらいです……」

なにしてんだよ、クリクリ…

「すみません……。こつちの事、はやく覚えなきゃって。健司様に迷惑かけないように、此方の常識を身に付けなきゃって……」

クリクリ、悪かった。俺が悪かったよ……

「4時くらいまで、テレビを見てたんです」

「お前が悪いわ！」

なんじゃそら。聞いてた先生たちもずっこけた。

「あの、日本って凄いですね。掃除機やジェット噴射のノズルとか、凄い便利な物があんなに安くて……」

「よりもよって通販か！ 夜中の通販見て寝不足とか聞いた事ねえよ！」

思わず大きな声を出してしまっただが、仕方ないだろ？ 俺は思いっきり脱力しながら、保健室を後にする。出て行く時、「今度、俺がちやんと教えるから夜はしっかり寝てくれ」と言っと、クリクリは嬉しそうに「はいっ」と言っって幸せそうな顔をした。

まったく。

あんな顔されちゃ、怒るに怒れないよな。

そんな、よくわからない出来事があった日の夕方。後はもう帰るだけ、今日もクリクリと一緒に帰ろうかなと席を立った次の瞬間、スピーカーから生徒の呼び出しが流れてきた。

『2 - B 佐藤健司君、2 - B 佐藤健司君。至急、生徒会室まで来て下さい。繰り返します、2 - B 佐藤健司君…』

クラスの注目が、俺に注がれる。なんなんだよ、一体。今日はそんなに激しいトラブルも無く1日を終えられると思ったのに！

「悪い、クリクリ。呼び出されたから先に帰ってもらえる？ 多分、昨日の喧嘩の事だと思う」

「あ…、待ってちゃダメですか？」

嬉しいけど、体調悪いのに無理すんなど。

「今日は早く帰ってしっかり寝てくれ。メイドさんに頼んで、車で迎えに来て貰えばいい。俺の事を気にかけてくれるなら、まず早く元気になって安心させてくれ。いいな？」

「あ…はい…」

恥ずかしいセリフだが、今日はちゃんと言えたぞ。周りに人がいても構わん。クラスの生暖かい視線を受けながら、俺はクリクリに手を振ってから教室を後にした。

この時クリクリを帰した俺の判断は、非常に正しかった。何故な
ら...

本日最大のトラブルは、まさに生徒会室で待っていたからだ。

第六話 鉄の塊

生徒会と言えば、ギャルゲーなんかじゃお堅いメガネの女の子や、ククリみたいなお嬢様の存在が仕切っている印象があるけど、実際の所秀才タイプの人間が集まるいけ好かない場所というのが現実だ。中には普通の奴のいる生徒会もあるんだろが、ウチは違う。なんせ、去年の生徒会の選挙なんて凄かった。

『清涼プリズンを思い出せ』

こんなスローガンを掲げて、不良撲滅をうたった候補者が当選したからな。今の三年はギリギリ清涼プリズン時代を覚えているらしく、とにかく校内の不正を正す事に命をかけるような連中だった。頭が良くて、底辺を見下すタイプの秀才の集まり。それが俺の抱いている生徒会の印象だった。

そんな生徒会からの呼び出し。もう昨日の事以外考えられないだろう。その前の先輩たちにボコられた件は単なる被害者だったけど、昨日のは私闘みたいなもんだ。多分呼び出されるとは思っていた。

コンコン…

生徒会室の扉を叩く。中から女性の声で「入りなさい」と言う声がした。最悪だ、一番気の強い風間先輩じゃないか！

失礼します、と言って部屋に入ると、そこには案の定風間先輩。後ろで一つに纏めた長い黒髪と鋭い目つきが印象的な生徒会副会長がそこにいた。他には誰もいない。おかしいな、いつも二、三人で活動しているらしいのに。

「ここに呼び出された理由、分かりますか？」

「あの…昨日の喧嘩の件ですか？ それならゴリライ…いや、原田先生と話をつけたハズなんですけど…」

そう言うと、風間先輩はフフン、と鼻で笑った。なんかムカつく。

「確かに、その件なら原田先生に伺ってるわ。穏便に処理をしようとやってたし、それはもう終わった話よ。今日呼び出した理由は、別の話」

え、別？ 何だろう？

「すみません、そうなるで見当もつかなくて…」

「あら、本当に？ 目を閉じて、胸に手を当てて考えてご覧なさい。きつと、思い当たる事があるハズよ」

なんだよ一体。仕方ないので言われた通りにしてみる。目を閉じて、胸に手を当てた。うーん、俺、生徒会に呼ばれる理由なんてあったかなあ。しばらく考えていると…

ツカツカ、と固い音が。風間先輩の革靴の音だ。それは次第に俺に近づいてくる。そして、前方で止まると何かカチャツという音が。膨らみだす…魔力!？

ブウンッ!!

「おわっ!?!」

俺はとっさに身を沈める。目を見開いて確認すると、先輩の手には巨大な剣が握られていた。そんな、嘘だろ！？

「魔剣ヴェンジェンス！？ 鉄丸の持ってた武器じゃねえか！ なんて先輩が！？」

「ふふふ、分からない？」

分かるわけねえ！ 鉄丸ってのは、向こうで一緒に戦った仲間の人だ。全身を無数の武器防具で固めた重戦車みたいな奴で、あんまり沢山の装備で固めるから話し声さえ聞こえないっていう変な奴だった。ゴロゴロ転がって敵陣突っ込んで行く姿は漢って感じだったが…

「分かんねーよ、なんで先輩がアイツの武器を！？ そもそもなんで先輩がそんなデカイ剣振り回せるんだよ…」

華奢な腕で振り回せる代物じゃない。俺でさえ、持つのがやっとだったんだ。腕力強化したら振り回せるけど…

「鈍い奴ね。じゃあ、これでどうよ！」

今度は、もう片方の手に巨大な手甲が。禍々しいオーラを放つそれは、同じく邪悪な加護を受けた魔装、破滅の籠手。毒を含んだ爪のついた危ない武器だ。それも、鉄丸の装備だった。

「な、なんで！？ 先輩、鉄丸をどうしたんだ！ どうやってアイツから装備を奪ったんだ！？」

「まだ分かんないの!?　じゃあ、これは!」

先輩の身体が、巨大な鎧に包まれる。ああっ、そんな!　それは鉄丸の愛用していた邪神王の甲冑!　もしかしてアイツ、騎士をやめたのか!?　金に困って売ったとか!

「どうしてそうなるの!　じゃあ、これ!」

それは滅亡の盾!?　まさか形見分けしてもらったのか!?

「ああもつつ、じゃあコレ!」

くそ、悪魔の脛当てまで!　身ぐるみはがされたのかよ、可哀想だろ先輩!

「うああああ、もごもごもごーっ!」

ぎゃー、殺戮の鉄仮面までー!ーっ!?

…っつて、おいおい。

目の前の鉄の塊はどこからどう見ても…

「あの…もしかして…、鉄丸?　御本人様?」

「もごっ!」

勢い良く頷いた。まさか、そんな…本当に、本当にあの鉄丸なのか!?

「うおおおお、鉄丸う!　お前も無事だったのかあああああつ

「！」

「もごごー！ー！ー！っ！？」

思わず飛びかかって抱きしめる。だって、最後の戦いの最中行方不明になってたんだ、心配してたんだよ！ 魔族の大軍に単身突っ込んだりムチャばかりしてたから、てつきり死んじゃったかと思ってたのに！

「鉄丸、鉄丸、良かった死んでなかったー！」

「も、もごご、アホか、今死んじゃうでしょーっ！」

鉄丸が風間先輩の姿に戻る。俺は慌てて先輩から離れた。なんだよ先輩、感動の再会シーンだったのに。

「ぜー、ぜー、何処が感動よ…！」

そう言ってから、一つ咳をして息を整えた。

「これで分かったでしょ。私がアナタを呼んだ理由」

「ああ。また会えて嬉しいよ相棒」

ブウンッ！

「おわっ！？」

違ったようだ。

「この馬鹿！ 本当に物分かり悪いわね！ 分かった、じゃあーから説明してあげるからしっかり聞いておきなさい！」

魔剣を避けてへたり込んだ俺を無理矢理起こすと、部屋のパイプ椅子に座らせる。なんだなんだ、これから何が始まるんだ。不安な顔で先輩を見ると、先輩は大きいため息をついてから話し始めた。

先輩は俺と同じく、こつちの世界から向こうへと旅立った存在だった。神から与えられた能力は、どんな武器でも装備出来る能力。およそ武器防具であればどんな物でも使いこなせる。先輩は向こうについてから直ぐに、強力な武器防具に身を固めてヒーロー気分を味わっていたらしい。

しかしそんな生活も一つの武器を手にしてから変わってしまう。それが魔剣ヴェンジェンス。装備した者を不幸にする、呪われた武器だった。一度装備すると外れないこの魔剣は、次から次へと呪われた武器防具を引き寄せる。また口々に考えないで装備しちゃった先輩はみるみるうちに呪われた武器防具で全身を埋め尽くされてしまった。

呪いをかけたのは、魔王。魔王でなければ呪いは解けない。そんな話を聞いた先輩は、当時魔王討伐に乗り出していた俺のパーティに入る事にした。いつか魔王と会って、呪いを解かせてみせる。そんな想いを胸に俺と数多くの戦火をくぐり抜けて来たらしい。ところが…

「最後の戦い。アナタ、覚えてるわよね？」

「そりゃ勿論。えーと、一々相手の城の中に入るの面倒だから、遠くから一斉に魔法の砲弾を放ったんだ。世界中の魔法使いに作って貰って…」

魔王の城に遠くから一斉射撃。そして城は爆発炎上、しまいに蒸発。魔王は跡形も無く消し飛んで…

「交渉出来なかった？」

こくん、と頷く先輩。あちゃー…そりゃ怒るわ。

「それどころか、魔族の大軍に突っ込んだ私ごと魔法の砲弾で吹っ飛ばしたじゃない。呪いの武具のおかげで助かったけどね」

「まさに不幸中の幸いですね」
「ブウンッ！」「うひゃっ!？」

「いい？ 次ふざけたら殺すわよ」

ふあい…

俺は反省した。

先輩は皆が神に願いを聞いて貰っている中、何とか意識を取り戻して自分も願いを叶えて貰った。それは俺と一緒に元の世界に戻る

というもの。元の世界に戻れば呪いも無効になると考えたんだ。しかし、チート能力がそのままだった。

先輩は、呪いの武器防具を装備可能なまま現実世界に戻る。そして、何故か呪いもそのままついてきてしまった。ついでに、何時でも武装可能というオマケ付きだ。

「なんか…あんまりですね」

「そうでしょう！？ そう思うでしょう！？ 言っておくけど、気持ちが高ぶったり怒っても勝手に武装が発動しちゃうのよ！ こんな身体じゃ、お嫁に行けないわよ…もごもご」

さめざめと…いや、もごもごと泣き始める。ああ、それは可哀想な事をした。確かに俺がチャンスをつぶしちまったよ。悪かったと思ってる。だから、頼むから武装解除してくれ。鉄仮面で泣かれるとそら恐ろしいものがある。

「という事は、俺を呼んだ理由はその呪いをどうにかしろと」

「もごごっ！」

なるほどね。

「無理だっ！」

「もっ！？」

即答。

「だって、俺魔王じゃないし。呪いの事なんて分かるワケねえよ」

そう言つと、先輩はプルプル震えだした。ああ、ヤバい。こりや噴火する。初めて鉄丸を『ダンゴムシ』って呼んだ時並の噴火がくる。

「もごもごもごもーっ!!」

「何言つてるか分かんねー!？」

先輩の噴火と同時に俺は生徒会室を飛び出した。先輩も魔剣を手に俺を追う。おいおい、まだ生徒が残つてる校舎をその姿で走り回るつもりか!? しかしどういうワケか、校舎の中には人の気配がなかった。

しまった…。こりや、呪いか。確か煉獄のマントの特殊能力だ。異空間を作り出して閉じ込める奴。最悪だ。こうなつたら先輩説得して落ち着いてもらうしかない!

「先輩、大丈夫だ! 世の中には色々な趣味の人がいる! 甲冑フェチとかと結婚すりゃいいじゃないか!」

「もがーっ!!」

死神の鎌が投げつけられた。なんでだよ、いい事言つただろ!? しかしお気に召さないらしい。どうでもいいけど、鉄丸の格好で追いかけてくると古い冒険映画を思い出すね。洞窟をデカい岩が転がってくる奴。

「先輩、可愛いから! 鎧とかで見えないけど可愛いから自信持て!」

「もがあっ！ もがもがあっ！」

これもダメかよ！ 気難しい女だな！？ 今度は馬鹿でかいマグナムから呪いの弾丸が放たれる。一体どれだけ呪われてんだ。

その後も俺と先輩は誰も居ない校舎の中を叫びながら追い掛けた。俺がどれだけ身体強化してスピードアップしても、先輩は先回りして追いついてくる。下手なホラー映画よりも全然怖かった。

そして…

俺は屋上に追い詰められる。

「せ、先輩。もう、降参！ 分かった、分かったからまず落ち着け！」

「もごごっ、もごごっ！」

駄目だ。もはやバーサーカーと化した先輩に話は通じない。どうしたもんかと迷っていると、先輩は無言を言わず突っ込んで来た！

「もがああああっ！」

「ちっ！ 少しは話を聞きやがれ！」

突進してくる先輩。俺は両手を上げて襲いかかってくる先輩の鎧を掴むと、後方に倒れながら腹部に強烈な蹴りを入れる。それは、柔道で言う所の巴投げだ。先輩の身体は宙を舞い…

ガシヤアアアッ！

「はいっ!？」

屋上のフェンスを突き破った。甲冑の硬さと重さに、耐えられなかったらしい。

先輩が、落ちる。

いくらなんでもこの高さ、無事で済むはずが無い！ しかも異空間化したままじゃ病院にも行けないじゃないか！ それだと先輩が死んで…

「うおおおおあああっ！」

駆け出した。身体強化で脚力を強化し、踏み切った所で飛行能力を解放する。落ちてゆく先輩の身体に何とか追いついて…

キャッチ！

そして、次に強化するのは…クソ、間に合わねえ！ 甲冑の重みに負けて、身体は飛行能力を失う。どんどん近づいてくる地面。せめて先輩だけでも助けないと…っ！

しゃあない…裏技だ。身体強化の、最終奥義。それは…

『生命力強化!』

身体に尋常じゃない生命力が宿る。これで、何があっても生き延びる！ 骨が折れようが肉が裂けようが…嫌だなあ…。

ズガアアアアアアンツ！

凄まじい音と共に、衝撃が俺を襲った。俺は先輩を守る肉のマトとなる。クソ、もはや痛みすら感じないくらいの衝撃だ。でも大丈夫、寝れば治るんだから…。俺は薄れゆく意識の中、先輩の無事を確かめて…意識を手放した。

目を覚ますと、俺は夜空を眺めていた。

さすがに死んじまったのかな。空にはやけに綺麗な星がたくさん出てるつてのに、頬には雨が当たってる。それが先輩の涙だと気づくまでには、かなりの時間がかかった。

「先…輩？ ああ、生きてたんだな。良かった」

「う…うう…、佐藤、君…グスツ…」

俺はどうやら先輩に膝枕してもらってるらしい。身体は…ははは、
凄いな。完全回復してやがる。我ながら怖い。

「ごめん、先輩。悪ふざけが過ぎた。呪いの件なら俺が何とか解除
方法見つけるよ。だから、それで許してくんねえかな」

そう言うと、先輩は首を振った。え、だめ？

「ちが、う！ もういいの！ 私、我慢する…から！ ごめんなさ
い、佐藤君、う、うあああ！」

泣きじゃくる先輩。あー…、良く分かんないけどゴメン。目の前
で死にかけて俺見て怖くなったか。そうだよな、ファンタジー世界
で死にかけるのどこっちで死にかけるのは怖さが違う。それに幾ら
先輩が強かったって、高校三年の女の子だもんな。泣いて当然だ。

俺は起き上がると、先輩を抱きしめ背中を撫でて宥めた。しばらく
くそうしていると、先輩もやっと平常心をとり戻す。少し顔を赤く
しながら、俺から離れた。

「ありがとう、落ち着いたわ」

「うん。良かった」

目元をハンカチで拭きながら、先輩は少し照れて笑った。なんだ、
普通に可愛いじゃないか。

「先輩。真面目な話、呪いの事で困った事あったら相談してくれ。
クリクリもこっちにいるから何か力になれるかもしれない。それに、

あのクソつたれな神もこつちに来てる可能性もあるし。魔王は無理でも、神ならその呪いも解けるかもしれないしな」

「佐藤君…」

先輩が瞳を潤ませた。

「ありがとう。佐藤君も、困った事があつたら言つてね。私とアナタは、向こうじゃ最強のコンビだったんだから」

「ははは。うん、分かつた相棒」

二人で笑いあう。なんか変な感じだな、あの鉄丸が先輩だなんてでも、この雰囲気は確かに鉄丸だった。

先輩が、マントの特殊能力を解除する。世界は元に戻り、通りからは車の走る音が聞こえてきた。時刻は夜7時半、今から急いで帰れば夕飯ギリギリか。そんな事を考えながら、俺と先輩は何とは無しに屋上を見上げた。あそこから落ちたのかあ、なんて見てみると

「「あ…」」

ハモる。

屋上のフェンスが破壊されているのが、しっかり見えたからだ。

「…先輩。生徒会としてはこれは問題ですよね」

「うー…」

複雑な顔をする。大体、このまま夜の学校にいたら宿直の先生に見つかっちゃう。ぶち壊れたフェンスと関連づけられ犯人扱いされるのは目に見えていた。

…次の瞬間、俺と先輩の心は一つになる。

「逃げるぞ、先輩！」

「もがっ！」

あ、ずりいぞ覆面とか！

俺と先輩は、また追い掛けつっこをしながらそこから逃げ出すのだった。

第七話 始まりの本

夜の学校から帰って来たら、やはりというか何というか親父に怒られた。まあ門限の7時を思いつきりオーバーしてたから仕方ない。「遅くなるなら電話しろ、夕飯には間に合わせろ、一家団欒をおろそかにするな、たまには父さんと一緒に夕飯食べよう、でなきゃ寂しくて死んじゃうぞ!？」とか鬱陶しかった。じゃあ死んじゃえと言ったら紗英さんに怒られるし。

「私のダーリンを泣かさないで！ 泣かすなら私を泣かせなさい！」とか意味不明な事をのたまうので意表をついて紗良を泣かせようとしたら鼻息を荒くして迫ってきて俺の方が泣きたくなった。どんな一家団欒だ。

夕飯を済ませて風呂に入り自分の部屋へ。その間、紗良は珍しく俺にちょっかい出して来なかった。反省してたのだろうか。それなら俺ももう少し優しくしてやろうかな、なんて思いながら明日の学校の準備をしていると、鞆に入ればなしにしていた携帯電話が何やら点滅している。着信があった時の点滅だ。

「誰だ、一体…」

見ると、知らない番号。気になってかけてみると、凄く聞き覚えのある声が聞こえてきた。

『健司様！ 私です、クリクリです!』

クリクリだった。というか、自分でそのアダ名言うか。

「クリクリ…? さっき電話くれたのってクリクリだったのか。よ

く番号分かったな」

『はい、ステラに調べてもらいました！ 私、今日携帯電話という物を買ったんです。それで、やはり最初にかけるのは健司様がいいと...』

なるほど。それは嬉しい限りだが…あのメイドさんもとんでもないな。こっちじゃ探偵でもやってるのだろうか。

「凄いな、どんな携帯買ったんだ？」

『えっと、スマートなんでしょうかというものです』

.....。

俺はガラケーだと言っのに。

あれだね、ファンタジーな世界の人にこっちの文化や流行で先を行かれるとそこはかとなくショックだね。

「そ、そうか。使いこなせばかなり便利らしいから、クリクリの社会勉強にはいいかもな」

『はい、使い方は魔法で覚えましたから。ネットで色んな事を調べるのが楽しくて仕方ありません』

魔法！ いいな、魔法つて万能で！ というかマズい、完全に置いて行かれてるじゃないか！ そのうちクリクリが「ググレカス」とか言い出したら泣くぞ、俺は。

『ところで…健司様、今日の生徒会からの呼び出しはどうだったんですか？ 昨日の件で何か処分を受けたりとかしました？』

「ん？ ああ、それは大丈夫だよ。心配ない」

「そうか、それが気になってたか。いい機会だし、今鉄丸の事を話してしまおう。」

俺は鉄丸…風間先輩の事を話した。俺と同じで此方の住人で、あろうことが生徒会副会長の女の子だった事。こっちに帰って来たのはいいけど呪いまでついて来ちゃった事などを。

『女性…の方だったんですか。てっきり私は殿方だとばかり…』

「ああ、俺も驚いた。ダンゴムシとかアルマジロとか言いたい放題言って来たけど、悪い事したよな。少なくとも、女の子に言う言葉じゃなかった」

「あんまり早く動くから鋼鉄のゴキブリって呼んだ時もあったな。」

「本気で殺されかけたけど。」

「それでさ、クリクリって呪いの解除も出来たよな。今度風間先輩に会って呪いを解いてやってくんないかな。魔王の呪いだから無理かもしれないけど、一度見てやって欲しいんだ」

『そうですね。実際に見てみないと解除出来るか分かりませんが、呪いに苦しんでいる方を放ってはおけませんから』

「助かる！ じゃあ、セッティングは俺がやるから頼むよ。明日の放課後にでも見てやってくれ！」

俺がそう言うと、クリクリは『任せて下さい！』と声はずませた。ああ、きつと電話の向こうでは胸をはって得意気な表情をしているんだろっな。俺に頼み事をされると凄く嬉しそうにするんだ、ク

リクリは。それは此方に来てからも全く変わっていない。

頼られてテンションあがったのか、その後他愛の無い話をしていてもリクリは終始ご機嫌だった。そろそろ寝ようかと切り出した時も、もっと話したいというようなオーラが伝わって来るくらいに。そして最後にこんな事を言った。

『今日は私の身体を気遣ってくれてとても嬉しかったです。こうして1日のおしまいに声まで聞けて、とても幸せです。明日も学校で健司様とお会い出来るのを楽しみにしてますね。それでは、おやすみなさい』

「あ、ああ、おやすみ。暖かくして寝るよ」

通話ボタンを切る。

あの、何て言うかその…

すげー嬉しい。何でこんなに幸せなんだろう。学校行くの面倒くさいとか言ってた頃が思い出せない。クリクリが居るならどこにだって行くさ！俺はベッドの上で嬉しくてピョンピョン跳ねた。

これがリア充か！これがリア友か…いや、恋人か！まだ告白してないけど！

「しくしくしくしく…」

ん？

「しくしくしく…」

なんだ？ 誰かのすすり泣く声。声は近くで聞こえるのに、姿は見えない。うわ、幽霊か！ 怖いよ、向こうでもアンデッドは苦手だったっていうのに！

「しくしくしくし…ゲホッ、埃が、ゲホッゲホッ！」

「そこかああああっ！」

ベッドから飛び退いて床に這いつくばる。ベッドの下を覗き込むと、そこには涙と鼻水で訳わからない事になった紗良がいた。

「浮気者！ 兄さんの浮気者お！」

「ベッドの上でもっと飛び跳ねていいか？」

「あ、やめて、今出ます、すぐ出ますから！」

慌てて這い出てくる紗良。コイツこそゴキブリみたいだ。

「…大人しいと思ってたら忍び込んで隠れてたのか。何が狙いだっ
た？ 電話の盗み聴きか？」

俺が睨みをきかすと、途端に紗良はシュンとする。ああ、これは女の子相手にする事じゃないな。モンスターを散々殺してきた俺の睨みは普通のヤツにはキツいだろう。

「違うの、私はただ兄さんが眠ったらこっそりベッドに入って一緒に寝たかっただけなの！…ごめんなさい、兄さん怒らないで…」

む。なんかしおらしい。
仕方ないな、一緒に寝るくらい許してやるか。

「分かった、だったらシャワーでも浴びて身体の埃を落として来い。
そんな面倒な事しなくても素直に言えばいいのに」

「うう…ありがとう、兄さん！」

紗良は瞳を潤ませて喜んだ。そして風呂場へと向かう為部屋を出る時、俺の方へと振り返り…

「あの、覗いてもいいんだからねっ！ なんなら一緒に入っても…」

「アホかー！ーっ！」

慌てて逃げて行った。

しかし俺、大丈夫だろうか。寝てる間に食われたりしないよな？

新しい朝がやってきた。

そこに希望があるかどうかは定かでは無いけどな。
とりあえず俺が着替える為にベッドから出ようとすると…

ガシッ！ 身体に絡みつく何か。いや、紗良なんだが、なんか凄

い絡みついている。これはアレか、プロレスの技か。外れないんだけど。

「お、おい紗良。起きてくれ。俺が出らんないだろ」

「うにゅ…兄さん、おっ起すゆの？ 出してもいいよ…」

「何の話をしてるんだ、離せつてのに」

頭を掴んでブンブン振ってみせる。紗良は目をつぶってそれに必死で耐えていた。コイツ…

「残念だなあ。紗良が言う事聞いて離してくれたら、おはよつのキスクらいはしてあげるのに」

バツと離れた。分かりやすいな。

目をつぶったまま空中に唇を突き出す紗良。俺は急いで布団でぐるぐるに巻くと梱包用のビニール紐で縛ってやった。

「に、兄さん！？ おのれ、計ったな！」

「計るわボケ！ ついでに縛ってやった。着替えて出て行くまで大人しくしてろ！」

「こんな縛り方ヤダーっ！」

縛り方の問題なのか。なんかじっくり着替えを見てやるとか叫ぶから冬用の毛布で顔面も巻いてやった。着替えの最中、「妄想してやる！ 凄い妄想してやるんだから！ ああっ、そんな！？」とか

言っただけで完全無視。一体、どこで育ち方を間違えたんだろうな、コイツは。

着替え終えてから布団を取ってやると、そこには真っ赤な顔で意識を朦朧とさせた紗良の姿。何だか幸せそうだったからそのままベッドで寝かせてやった。

いつもの慌ただししい朝を乗り切って学校につくと、昨日よりもたくさん挨拶される。なんだ、もしかして俺、人気者？ 挨拶だけで調子に乗れる俺は幸せ者だな。

そんな俺に一番の幸せが。

「おはようございます、健司様！」

天使降臨。この瞬間、この世界は天国となる。気分的に。

「おはよう、クリクリ。ちゃんと眠れたか？」

「はい！ 健司様におやすみって言ってもらえたから、グッスリ眠る事が出来ました！」

いやー、笑顔が眩しいわ。それにしても、こういう会話って周りの人間にしたら鬱陶しいもんだろ？ なんてか知らないけど敵意が

感じられない。女子なんかは、楽しそうに此方を見ている。

俺は、そこら辺を近くにいた轡田に聞いてみた。すると、意外な答えが。

「なんかね、佐藤君が必死に紳士ぶるのが楽しいみたいだよ。男子も女子も、二人の事観察しながら勉強してるみたいだし」

…あれか、恋愛の実演レッスンか教材ビデオみたいなもんか。俺とクリクリとか、例として特殊過ぎるだろ。

クリクリは何の事か分からずキョトンとしていた。分からなくていい。これからは、皆の前であんまりカッコ悪い真似出来ないな…。そんな事を思ったりした。

今日は、至って普通に時間が流れた。最近、トラブルが段々時間を遅らせてやって来るから油断はできないが、俺のアラームも鳴ってないし今日はもしかして…と淡い期待を抱かせる。そしてついに、放課後。

勝った。

俺は勝ったんだ。

今日は残す所風間先輩と会う用事のみ。その前にアラームが鳴ら

ないという事は今日は平和だという事だ。よしっ、とガッツポーズをする。俺は昼休みにアポをとっておいた風間先輩の下へ、クリクリを連れて意気揚々と向かって行った。

生徒会室には、風間先輩が一人で佇んでいた。クリクリとは向こうでは長い時間を過ごしたが、素の顔で会うのはこれが初めてだ。

「クリス姫…お久しぶりです」

「鉄丸…さん？ あなたが本当に、あの鉄丸さんなのですか？」

信じられない、という表情をする。無理も無い、外見だけなら華奢で生真面目な秀才タイプの女の子だからな。神経質そうな表情と、あの適当で豪快な戦い方が結びつかない。苦笑いした先輩は、身体を呪いの武具でまとつてみせた。

「……っ！？ ああ、本当に鉄丸さんなのですね！ 良かった、姿が見えなかったので心配していたのです！」

「も、もっ！？ もっ！……っ！？」

抱きついて、クルクル回るクリクリ。クルクルとクリクリって似てるね。

「止めんか佐藤……っ！」

怒られた。あーあ、変身解いちゃったのかよ。鉄丸のフォルムって個人的にツボなのになあ。

「と、とにかく！ 私が鉄丸で間違いないわ。もっとも、風間理沙って名前があるからそっちで呼んで欲しいけどね」

理沙：そんな名前だったのか。可愛いな。そう言う先輩は顔を赤らめて、クリクリの周囲の温度が下がった。なんだ？

「理沙さん、健司様から呪いを解く方法を探していると伺ったのですが」

「ええ、魔王も死んじゃったし、どうしていいか分からなくて…」

俺抜きで話が進んじゃった。なんか怒らせた？ とりあえず口出ししないで見守ろう。

クリクリは早速、先輩の身体を調べる。右手が小さく光り、先輩の身体の表面をなぞった。先輩はくすぐったいのか時折小さく身体を震わせる。なんかちよつといけない雰囲気醸し出してないか？俺はドキドキしながらそれを眺めていた。そして…

クリクリが、額に汗をかきながら首を振った。

「すみません。理沙さんの呪いは恐ろしい力でかけられていて、私のようなレベルのヒーラーには太刀打ち出来ません…」

「そ、そっか。うん、分かった。多分、無理じゃないかなって思ってたから。手間取らせてごめんなさい、クリス姫」

「いえ：私こそお力になれなくて申し訳ありません」

何だか、暗くなっちゃったな。しかしクリクリだってそれなりにレベルの高いヒーラーのハズだ。それ以上のヒーラーなんてこっちの世界にいる訳ないしなあ。

「やっぱり、ここは神に直接頼むしか無いんだろうな。クリクリは神がどこにいるか分かるか？」

「いえ、見当もつきません。ただ、健司様の能力が神様から与えられた物ならば、その能力が消えてない以上此方の世界に居るのではないかと思いますけど…」

なるほど。そう言われてみればそうだな。そんな事を考えていると、先輩が不思議な事を言った。

「私も住所とか調べて行ってみただけど、いつも留守なのよ。出版社の方にも問い合わせしてみたけど、おかしなファンと勘違いされて門前払いされたわ」

住所？ 出版社？

「知らないの？ ほら、私たちが向こうに行くのってゲートの書が必要だったでしょ。その作者が神じゃないかって思って、調べただけど」

そう言って取り出したのは、一冊の文庫本。ああ、思い出した！ そうだよ、俺も初めて向こうへ飛ばされたのは学校帰りに買ったライトノベルがきっかけだった！ どうして今まで忘れていたんだ！

「先輩、その本って向こうの!？」

「ええ。私たちが体験した事が、記録されてるの。あなたも持つてるハズよ。つて、ちよつと!？」

有無を言わず奪いとつた。表紙…ああ本当だ! 向こうの風景そのまんまじゃないか! 中を開けると、丁寧に挿し絵まである! そこには鎧を脱いだ風間先輩が生まれたままの姿で「誰も見てないわよね…」と、恥じらいながら…」

「何読んでんだバカー…!」

パコーンッ!

殴られた、上履きで。

「よりもよってお風呂の記録とか、どんな確率よ!…とにかく、この本の表紙を見て!」

「えーと…『呪い呪われ修羅の道』。先輩、凄い体験してたんだな」

「違つつ! その下、作者の名前見て!」

なんだよもう…。視線をずらして行くと、そこには漢字一文字で作者の名前が記されてあった。そこにある漢字とは…

『
神
』

分かりやすいな、
オイ！

第八話 紗良のお土産

俺がファンタジー世界に行く事になったキツカケは、一冊のライトノベルだった。表紙も、内容も立ち読みした時は有りがちなもので、なんで買ったのかも思い出せないような本。ただ帰って来てからいざ読もうとしたら中身は何も書いていない白紙になっていて、俺が困惑していると本は真っ白な光を放ち始めた。次の瞬間、俺はファンタジー世界へと飛んでいて…というのが、俺の冒険のはじまりだ。

神はそれをゲートの書と呼んでいた。世界移行に必要な適性のある者を見つけ出す道具だと言う。俺は店で購入するという方法で手に入れたが、適性の無い人間には手元に行かないようになっていたらしい。

「先輩はその本をどこで手に入れたんだ？」

「私？ 私のは元々日記帳だったのよ。ほら、中身が白紙の文庫本みたいな日記帳あるでしょ。あれを近所の文房具屋さんで買って、家に帰ってさあ書くぞって時にゲートが発動したわ」

なるほどねえ。で、戻って来たらライトノベルが出来ていたと。

先輩にとっちゃ、向こうでの日記みたいなもんか。

「…佐藤君のゲートの本は？ あなたの所にも必ずあるハズよ。どんなタイトルになってるか気になる所ね」

うーん…。好き勝手やってたからなあ。超絶俺様伝説、とか寒い事になっていそうだけど。そう言うと、クリクリは強く否定する。

「健司様は、好き勝手になんかやっていませんよ。いつも私たちを守って、困った人がいたら助けてあげて…仲間の人たちが行く先々でトラブルを起こしても、健司様が真っ先に頭を下げたりしてましたし…」

「確かに、佐藤君で面倒見がいいんだなって思ったわ。『苦勞人一代記』とかかもしれないわね、タイトル」

やだよ、そんなの。

第一、トラブルを逐一解決してたのだからゲームの世界だと思っただけからなんだよね。RPGにありがちな、お使いイベントとか。物語を盛り上げる為のイベントなんだろうなー、って思ったら大抵の事は我慢出来たんだよ。

そう言い訳してみたけど、クリクリと先輩はニコニコ笑って信じてくれなかった。「照れ隠しだね」とか「どんな理由だろう」と健司様の優しさは変わりません」とか、勝手にいい風に受け取ってしまう。俺は…顔が真っ赤になるのを止められなかった。

「と、とにかく！俺も帰ったらその本探してみるよ。神の居場所に関するヒントが書かれてるかも知れないし」

「そうだね。何か分かったら、連絡して頂戴。あ、私の携帯の番号教えとくわ」

そう言うと、先輩はデコの激しい携帯をカバンから取り出す。全く、女の子って何でゴテゴテいるんな物付け探すんだろうな。なんて思っていたら…

「……………」

なんかクリクリがじーっと見てる。凄い興味津々な感じで。

「理沙さん、それはなんですか？ 私、初めて見ます」

「え？ 何って、デコレーション。お店で売ってるの貼り付けただけよ」

あー、これはクリクリがハマりそうだな。可愛いの好きだからな。
「クリクリ、先に言っておくがお前の携帯はタッチパネル式だし、余計な物貼り探すと何が起こるか分からない。やめとけ」

「ええっ！ そんな、こんなに可愛いのに！ とうにかなりませんか？」

分かんねえよ、ガラケーの俺には。先輩もクリクリがスマホを持つてる事にシヨックを受けていたようだった。そりゃそうだろう。俺も親に頼んで機種変しようかな。

何はともあれ、俺とクリクリは先輩と番号を交換してから、その日は解散する事にした。クリクリは先輩のデコに衝撃を受けたよう。で、とうにかして携帯を改造してやると息巻いていた。あー、クリクリって自分の好きなジャンルに関しては人が変わるからな。今はそっとしておこう。一方俺は、携帯のアドレス帳に女の子の番号が増えて嬉しかった。家族以外ではクリクリに次いで二人目だ。やけに嬉しい。名前は鉄丸で登録した。

さて、その日の帰り道。クリクリをマンションに送り届けてからのんびりチャリを漕いでいると、不意に何かを察知する俺の第六感。嘘だろ、嘘だろ、嘘だと言ってくれ！ 今になってアラームとかやめてくんないかな！？

家に近づくほど、警戒音が高鳴っているような感覚。マズい、家で何か起きてるってのかよ！ だとしたら、理由は一つ。俺のゲートの書しか思い当たらない！

「やめてくれよ、自宅だけは安全で平和な場所であって欲しいのに！」

急いでチャリを漕いで家に向かう。到着してすぐさまチャリを車庫に入れると、俺は帰宅の挨拶もそこそこに猛ダツシュで部屋へと駆け上がった。どこだ、どこだ、俺の本！ 枕元に設置した小さな本棚には…無い。じゃあ机の上…にも無かった。引き出しの中にも、カバンの中にも、秘蔵の工口本の隠し場所にも無い！

嘘だろ、どこにやったんだ！？

心臓をバクバク言わせながら、俺は途方に暮れる。そしてしばらく考えを巡らせて…一つの可能性に行き当たった。

紗良が持ってたか？

そうだ、間違いない。俺は新しく買った文庫本とかはしばらく枕元の本棚に入れるようにしている。ここに無い訳がないんだ。なら、誰かが持っただろう。この場合、犯人は紗良以外に考えられなかった。

「あんにやる、勝手に持って行きやがって」

俺は意を決して紗良の部屋へて向かう。最近の肉食系女並にワイルドな紗良の部屋へ行くのは勇気が要ったが、俺は勇者だ。行かざるを得まい。

「…紗良…入るよ…」

滅茶苦茶弱腰でドアを開けた。いや、だって、どんなセクハラされるか分からんし。居なかったらラッキー、と思いながら忍び込んだんだが…

結論から言おう。紗良は部屋にいた。けど、寝ていた。

これ幸い、と俺は紗良を起こさないように本棚を探る。無いなあ…少女漫画ばかりだ。えーと、何々？ 『兄 兄パラダイス』 『兄さん事件です、私が起こしました』 『血が繋がってないならEじゃない』 『背徳の契りは危険なロマンス』 『プリズナー 閉じられた禁断愛』

……。

うん。なんか、怖い。

俺は嫌な汗をかきながら本棚から離れた。その時、紗良の机の上に見知った風景が描かれた一冊の文庫本を見つける。あ、これだ！

見つけたぞこんにやる！ やっぱりお前が犯人だったのか……。勝手に物を持ち出すのはいけない事なんだぞ？ 起きたら、叱ってやらないとな。

俺はゲートの書を手に取って、表紙を見た。間違いない、俺が初めてファンタジー世界に飛んで行った時に見た風景だ。えーと、気になるタイトルはと言えば……

『勘弁して下さい』

……。

凄く納得出来るのが悲しい。

けどこんなタイトル、先輩には教えらんないよな。『呪い呪われ修羅の道』の方が遥かに格好いいじゃないか。しかしこんなタイトルの本、紗良もよく読む気になったもんだ。そこまで考えて、俺は気づいた。

なんで、紗良がこの本を手に来たんだ？

確か、適性の無い人間の手元には行かないようになってるんじゃないか？

俺は、嫌な想像をしてしまう。まさか、紗良に適性が？ いやそれこそまさかだよ。第一、向こうは平和になったんだし、救世主を望んじやないだろ。神がこれ以上誰かを世界移行させる必要なん

て無いハズだし。

そう思いながら、俺はベッドで眠る紗良を覗き込む。紗良はぐっすりと眠っていた。とても穏やかな寝顔だ。紗良、大丈夫だぞ、お前まで向こうに行つて危険な目に遭うような事にはさせない。お前は俺が守つてやるからな。そうつぶやきながら視線を移して…

俺は愕然とした。

眠っている紗良の手には、しっかりと一冊の文庫本が握られている。その表紙には俺の持つ文庫本と同じ風景が描かれており、冒険者然とした格好の紗良が描かれていた。タイトルは…

『お義兄ちゃんは勇者様！？ 知られざる兄さんの秘密に迫り、ついでに大戦の名所を巡る三泊四日のグルメツアー！ 各地の名産品も特集しています』

なんじゃこら。

これは…ライトノベルなのか？ なんか旅行雑誌みたいなフレーズとかあるし…でも、向こうに行つたのは確かなようだ。俺は頭を抱えた。

紗良が、向こうに。

あいつ、帰つて来れるのか？ 俺の場合は魔王討伐の褒美で帰っ

てこれだが、コイツの場合遊びに行っただら？ 三泊四日とか言ってるが帰れる保証なんて無い。ファンタジー世界を甘く見てはいけない。向こうはペットで飼われてる小動物でさえ炎を吐く世界だ。

神よ、恨むぞ流石に。紗良はな、エキセントリックな言動は大きなマイナスだけど、普通にしてれば可愛い妹なんだ。俺は、空いてる方の紗良の手を握った。無事に帰って来てくれ…頼むから、無事に…

そんな想いで手を握っていると。

「…あれ？ 兄さん？」

紗良が目を覚ました。

「紗良！ 良かった、無事だったんだな！」

「あれ、ガイドさんは？ 迷子はどこに行ったの？」

「は？ 迷子？」

何を言ってるんだろうか。紗良は寝ぼけ眼をゴシゴシ擦ってから、俺の顔を見る。段々と焦点が合って来て…

「兄さー…んっ！」

ガバツと抱きついた。

「兄さん、やっと会えた！ 帰れないかと思ったよう！」

「あ、ああ。俺も気が気じゃなかったよ。お前が向こうで辛い目に遭ってないか心配で仕方なかった。大丈夫か？ 嫌な思いとか、し

なかつたか？」

「うん…」

目を拭う。

「兄さんの妹だって言ったら、毎日ご馳走三昧、我が儘し放題だったよ」

パソコンッ！

文庫本で叩いてやった。

「俺の威光で放蕩三昧とか良い身分だな、コノヤロウ！ 名所巡りつて、かなり広範囲だぞ！？ 世界中に迷惑かけて帰って来たんじゃないだろうな！」

「た、叩く事ないでしょ！ 私だって、盗賊団壊滅させたり良い事して来たんだから！」

本当かよ。

俺は紗良の本を奪い取ると中身をチェックする。挿し絵の量が異様に多いのは、コイツの好みなのだろうか。パラパラとめくって行く…

いかにも盗賊、という男に追いかけられる紗良の絵。次に牢屋で盗賊と紗良が何やら話している絵が続き、その次にテーブルを挟んで商人と盗賊が交渉する絵。テーブルの上には大金が描かれている。そこに兵士がなだれ込んできて…

大金の入った袋を持って走り去って行く紗良の絵でしめられていた。

「お前が盗賊か!？」

「お、囹捜査の正当な報酬よ！ それに他にもちゃんと兄さんの妹として、その名に恥じない活躍はしたもん！」

しかし目に飛び込んでくるのは英雄とはかけ離れた姿ばかり。モンスターサーカス団では希少種のユニコーンを逃がしていたが、その際サーカス会場を花火の火薬で爆破させてたり。国王暗殺を企てた男の手下を金で買収して裏切らせ、その手下もろとも兵士たちと共に捕まえてみせる、など。結果は良い事をしているように見えて手段は滅茶苦茶だった。

「お前はアレか、スパイか工作員にでもなりたかったのか。それとも王国の兵士たちを同行させて世直しの旅か」

「違うよー。私は単に兄さんが旅した場所を巡ってただけだもん。トラブルの方が勝手にやって来ただけですよー」

「ぶー、と膨れ面する紗良。けど、何はともあれ無事で良かった。俺と違って紗良は頭の回転が速いし、どこでも順応出来る逞しさがある。だから生き延びるとは思っていたが、こうして実際に戻ってきてくれると安心するよ。俺は思わず紗良を抱きしめた。」

「良かった…。帰って来てくれてありがとうな、紗良」

「兄さん…」

紗良も俺の背中に腕をまわす。やはり、寂しかったんだろう。震えていたし、帰って来た事を実感するように俺の胸に顔をすり寄せていた。閉じられた目蓋、頬を一筋の涙がたう。ああ、怖かったな。これからは、もう安心だからな。俺は紗良の背中を優しく撫で続けた。

どれくらいそうしていただろうか。俺はベッドの上で紗良を抱きしめていたが、そのベッドの一角に何やら不思議な膨らみを見つける。なにやら、布団の下に何かあるようだ。微かに上下しているようにも見える。

「紗良…。お前、こっちに帰ってくる時、何か連れて来たりしたか？」

「…え？ ううん。えっと、最後に魔王城跡の見学して…迷子がいだから一緒にお母さん探して…いきなり大きな渦が空に現れて、吸い込まれたの。お土産とか買う暇なんて無かったよ」

嫌な予感がする。

アラームは未だに鳴り続けている。まさかね。んなワケ無いって。俺は頭に浮かんだ嫌な想像を振り払った。そして、紗良から一旦離

れて布団に手をかける。

捲れば、ハッキリするんだ。そう、捲れば。しかしなあ…。そんな風に俺が躊躇していると…

「なあに、兄さん。布団入る？」

バツ！

無情にも、紗良が捲ってしまった。そして、布団の下にいた存在を見つけて驚きの声を上げる。

「あ、迷子の子供だ！ 一緒について来ちゃったの！？」

そうか、迷子か、そうですか。紗良には単なる迷子に見えると。俺には違うように見えるなあ…。

そこには、年齢で言えばヨチヨチ歩きをし始める位の子供がいた。その頭には小さな角が生え、背中にはコウモリのような小さな翼が。すやすや寝息を立てる口元には、これまた小さいながらも鋭い犬歯がのぞいていた。

ああ。分かってる。今日のトラブルはコレだね？ 現実って厳しいや。俺は目の前の子供から発せられる尋常じゃない魔力にクラクラとする。こりゃ、俺一人じゃどうしようも無いぞ？ だってこの気配は…

間違いなく、魔王本人の物なんだから。

第九話 子供ってやつは

実は、俺はただの一度も魔王の顔を見た事が無い。いや、勇者の称号を与えられてから魔王の気配や魔力は察知出来るようになっていたし、最後の戦いでは確実に魔王の魔力を消滅させたから倒してはいるんだ。実際、神だって魔王は倒されたって言うてたからな。

でも実際顔を合わせたのって魔王の配下の魔界將軍とかいう奴らだけなんだよね。そのリーダー格のザムザエルとかいう巨人を倒してからは一気に魔界の軍は崩壊したし。実質的にはザムザエルがラスボスっぽかった。

ちなみにトドメを刺したのは鉄丸。腕力強化した俺が鉄丸を投げて、鉄丸が魔剣ヴェンジエンスを突き刺した。…ザムザエルの肛門に。いやあ、まさかコントロールがあんなに狂うとは思わなかったんだよね。でもってそんな時装備していた黒炎邪竜槍まで一緒に突き刺したもんだからケツの中のメタンガスに引火して大爆発。あの勝利の後、鉄丸は「もがーっ！もがーっ！」って泣いてたけど、今思い返せば嬉しくて泣いてたワケじゃなかったんだな。女の子に対して悪い事をしたよ。

閑話休題。

結局俺は魔王に会わずして勝利を収めた。けど、今日の前にいる子供からはあの魔王の気配と魔力が感じられた。魔王は…死んでなかったのか？

「紗良、落ち着いて聞いてくれ。コイツは多分、魔王だ。なんかの理由で子供に戻ってしまっただろ」

「はあ？ 兄さん、冗談はよしてよ。魔王って兄さんが倒したんでしょ」

確かに。倒してはいる。でも死体を確認する前に帰ったからな。殺してはいなかった、と考えるのが自然だろう。

「俺は『勇者』って奴になっちまったから、その対局にある魔王の存在が感知出来るんだよ。コイツは魔王。それは間違いない」

「そんな…」

紗良は絶句した。無理も無い。母親探して回ったって言ってたかな。情が移ってしまったんだろう。気持ちは分かるよ、確かに寝ている分には可愛い子供だ。けどな…

魔王軍の残虐さを目の当たりにして来た俺は複雑だ。

コイツも将来あんな殺戮兵器にならないとは限らない。いや、魔王なんだぞ？ なる確率は高いだろう。

「勇者的には、殺した方がいいんだろうけどな…」

「ダメ！」

紗良が子供の前に身を投げ出す。

「こんな子供を殺すなんて、英雄でもなんでもない！ 私は兄さんに、そんな人間になってもらいたくない！」

紗良…。

「分かってるよ。第一、こっちでそんな事したら捕まるだろ。俺

だって子供に手をあげる奴は最低だと思ってる」

ここは現実世界、しかも日本だ。殺しなんて出来るわけないし、子供相手ならなおさら。少なくとも、俺はそんなゲスにはなりたくない。

俺の言葉に、紗良はホッと胸を撫で下ろした。お前な、俺がそんな酷い事するわけないだろ？ そう言いながら魔王に視線をずらすと…

「ふあ…？」

魔王が目を覚ます！

さすがに緊張が走る。魔力だけなら今この状態でさえ中ボスくらいはあるからな。それに俺、魔王がどんな性格かも知らんし。一体、どんなリアクションしてくるやら…

「う…うう？ あう」

目があった。そして…なんかニコツとしたぞ？ でもって、そのまぶしいばかりの笑顔のまま俺を見てこう言った。

「パパ！」

……。

はい？

「パパ！ パアパツ！」

「に、兄さん！？ いつの間に……」

「いや、おかしいだろ！ 俺がパパって！」

「向こうでモテモテだったみたいだし、不可能ではないわ！ 兄さん、やってくれたわね!？」

「いやいやいやいや！」

体感時間たった一年、それでこんな子供できるわけねー！ 第一童貞のまま一児のパパって悲しすぎる！

「えーと、ボク？ なんで俺がパパなの？」

とりあえず聞いてみると、魔王はヨチヨチ歩いて来て、俺の腕に抱きついた。

「パパ、しゅきっ！」

むう……。

何の答えにもなっていないが……なんか良いな。

「に、兄さん？ さっきは冗談で言ったんだけど、本当に兄さんの子供だったりする？」

「いや、さすがにそれは無い。しかし、これはこれで悪くない気もして来た」

だって、なんか可愛いぞ？ 俺を見上げてエへへとか言ってるし、なんか心がほっこりして来た。今まで子供とか鬱陶しいと思ってきたが、これは認識を改めざるを得ないな。

「兄さん、もしかして…」

「ああ、育てよう！ 殺すとか有り得ないだろ。親父たちにも事情を話して、協力を仰ごう」

「冷静になって兄さん！ 向こうの世界の事、一から説明するつもり！？ いくら母さんや父さんが馬鹿だからって、無理があるですよ！」

紗良の口から冷静になれという言葉が飛び出すとは思わなかった。今更常識人ぶるなよな、まったく。それにサラッと親を馬鹿にしたね？

「安心しろ、紗良。あの二人を信じるんだ。俺たちの親なんだぞ？ きつと助けてくれる」

「兄さん…」

なにやら、ジーンとしてる紗良。

「そっだよな。きつと大丈夫だよな」

「ああ、あの二人の馬鹿は底無しだからな」

「そつちの方向で!？」

勿論ですとも。

俺は甘えん坊な魔王を抱っこすると、台所にいる紗英さんの元へと向かう。今日は親父も早く帰って来てるハズだ。俺は紗良の「無茶よ兄さん!」という声を背中に受けながら、階段を下りて行った。

うちの両親って、本当に馬鹿だと思う。良い意味悪い意味両方あるけど、今回は良い意味で言った。だって、結論から言うと全部信じて受け入れてくれたんだから。

勿論、最初は大騒ぎだった。紗英さんは「紗良、いつの間にも!」身体は大丈夫!？」と訳わからん勘違いするし、親父は「避妊くらいしろ、今から何人作るつもりだ!」と、これまたズレた怒り方をした。けど、魔王が二人の声に驚いて泣き出すと途端に子育てモードに移行してなだめ始める。さすが育児経験者、魔王はすぐに機嫌を直した。

二人が俺と紗良のファンタジックな話を信じたのは、その魔王の外見だった。角や翼が生えてるからな。現実に目の当たりにしたら、そりゃ信じるってもんだ。ついでに、俺の特殊能力も打ち明けた。

これに関しては二人ともおかしいとは思っていたらしい。

「怪我の治りが早いのは気づいてたぞ。この間の喧嘩の件は先生から聞いてたからな。風呂上がりのお前がやたらとピンピンしてるから変だとは思ってたよ」

「洗濯物でズボンが血だらけだったのに健司さんは何とも無いみたいで、ちよつと怖かったの。理由が分かってホツとしたわ」

あー…なるほどね。

ズボンの件は、鉄丸：風間先輩を助けた時のズボンだろう。飛び降りて地面に叩きつけられてグロい事になってからの再生。その時の血がついたままだったんだな。真つ赤になった洗濯機見て絶叫する紗英さんが容易に想像出来る。

「そのファンタジーがどうのこうのは分からんが、現実問題として人間じゃない存在がここにいるのは確かだ。お前も面倒な事になってるようだが、親としては出来る限りサポートはするつもりだ。さしあたってはこの子の面倒だが：母さん、頼まれてくれるか」

「ええ、勿論よアナタ。健司さんも紗良も、ちゃんと私が見ていてあげるから安心して学校に行きなさいね」

理解のある親で助かった。当面の悩みは学校へ行ってる間どうするか、だったからな。本当に頭が下がる思いだ。

「ねえ兄さん。ちよつといい？」

そこに紗良が声をかけてくる。

「その子、名前つけてあげたら？　いつまでも魔王とか呼んでるのもどうかと思うし」

それもそうだな。こっちはクリクリや鉄丸もいるし、魔王って言葉にはアレルギー反応示しそうだ。新しい名前…というか、この子って元々なんて名前なんだ？

「なあ、ボク。君の名前は、なんていうの？」

俺に抱っこされてウトウトしていた魔王に、尋ねてみた。魔王はボンヤリ俺を見つめてから、口をひらく。

「あのね、ぱーちゅなの」

「ぱーちゅ？」

なんだそれ。

「おっきな、おうちの、まんのかなの」

大きなお家の真ん中。謎かけか何かだろうか。ぱーちゅ…まさかパーツか？

「パパがドーンてやって、おそとに出してくえたの」

……。

ヤバイ。どうしようもなく頭に来た。ふざけんなザムザエル、お前この子を核に使いやがったな！？ 魔王だなんて嘘っぱちで、あの城を維持する為の燃料タンクに使いやがってたんだ！ なんてこつた、あの時面倒くさがって外から攻撃なんてしないで、ちゃんとコイツに会いに行つてやってたら…普通に救い出してやれたかもしれなかったんだ。子供に戻ったのは、魔力が足りないせいだろう。

俺の…俺のせいじゃないか！

「パパ…？　パパ、泣いてゆの？」

「ゴメン…ゴメンな。ずっとあの瓦礫の中で、寂しかったろ…」

抱きしめる。コイツは多分、寂しいなんて感情すら知らない。魔族に部品扱いされ、いきなり外に放り出されて何も分からず一人ぼっちであの廃墟で暮らしていたんだ。ちゃんと抱きしめて、人の温もりを教えてあげなきゃ…俺はそんな気持ちになっていた。

「お前は、パーツなんかじゃない。これからは、一人じゃないからな。みんな、一緒だからな」

多分、今の俺の言葉から紗良もこの子がどんな扱いを受けてきたか分かったんだろう。震えて、涙を流していた。紗英さんもだ。親父は拳を握りしめて静かに怒っていた。

「健司。この子を酷い目に合わせた奴はやつつけたのか？」

「…ああ、仲間が塵一つ残さず燃やし尽くしたよ。この子が利用される事はもう無いだろ」

「そうか…。残念だな、俺も一発ぶん殴ってやりたかった」

一つ大きいため息をついた。そして、気を取り直して笑顔になる。「だったら尚更新しい名前が必要だろう。この子が幸せになれるよ。うな、そんな名前が」

そう。これからは幸せにならないと。俺は無い知恵を絞って考えるが…

ダメだ。頭の中身まで強化は出来ないらしい。思いつくのは漫画の中の登場人物の名前みたいな恥ずかしい名前ばかり。まともな人なら失笑しかねない。

「えーと…誰かいいアイデアある人お…」

助けを求めたら、皆が呆れた。仕方ないでしょ、なんも思い浮かばないんだから！

「親なら、責任もって名前をつけてやれ」と、親父。

「私よりも健司さんにつけてもらった方がこの子も喜ぶわ」と、紗英さん。

「私に助けを求めるといふ事は、私を妻として受け入れる事を意味する」と、紗良。アホか。

ああ、もう仕方ねえな！ 後悔すんなよ！？

「よし、今日からお前は『幸太^{こじつた}』だ！ 幸せって意味だからなっ！」

どうだ！ そのまんまだろ！ ざまあみる！

しかし、その名前を聞いた魔王…もとい、幸太はキョトンとした後に嬉しそうに言った。

「うん！ こつた！ うん！」

……。

いや、そうじゃないんだ。

「ボク、うんこ！」

違う！ 違うんだ！ そんなつもりじゃないんだ！

「幸太、だからね？ こ・う・た！ うんこじゃないよ？」

「うん！ こうた！ うんこ！」

「違う…！」

ヤバいと思ったが、もう遅い。気に入ってしまったようだ。幸太は楽しそうにうんこを連呼する。ガツクリとうなだれた俺を、親父たちはすんごいジト目で見つめていた。

…ま、まあ、何はともあれ。

その日、我が家に新しい家族が増えた。佐藤幸太。元魔王で今は子供。うんこうんこ言うのが玉に瑕だが、それさえ無ければ最高に可愛い自慢の息子だ。家族の協力も得る事が出来たし、正体さえバシなければ平穩無事な生活を送らせてあげられるハズだ。

さし当たって問題があるとすれば…

クリクリ達にどう説明するか、なんだよなあ…

第十話 パパは高校生

今でもたまに夢に見る事がある。俺を生んだ母さんがまだ生きていた頃の光景だ。まだ小さかった俺を挟んで、左に親父、右に母さんで川の字で寝ていた。

俺は絵本を読んでもらうのが好きで、寝る前にいつも二人に「絵本を読んで」とせがんでいた。きまって読み始めて五分もしないうちに眠っちゃうんだけどな。まあ、それが俺にとっての家族ってやつ。の原風景なんだ。

いつか家庭を持てたら、今度は俺が子供に絵本を読んでやりたい。そんな事をなんとなく考えていた。だから、こうして幸太と一緒に寝る事になって、俺としては何とも感慨深いものがあつたりするんだよ。もっとも…

「ねー、子供にBしてマズいかなー」

川の片割れが紗良ってのはいただけないけどな！　つーか幸太に何読んで聞かす気だ、教育上好ましくないどころか歪み過ぎじゃねーか！

「ちえー、いけずー」

「いけじゅー」

ああ、幸太が真似するし！　まったく、ウチの子に余計な事吹き込まないでくれませんか。紗良みたいになつたらどうすんだよ、もう。

「兄さん、人が変わりすぎ&失礼すぎ。それにしても、なんで幸太君は私をママって呼んでくれないかなー。ねえ、幸太君。この人は？」

紗良が俺を指差す。

「パパ！」

「じゃあ、私は？」

「しゃらー！」

偉いぞ。本能的に紗良を母親とする事に危機感を抱いたんだろう。将来大物になる…のか。一応魔王だし。

「うー、なんでよう。幸太君のいけずー」

「いけじゅー」

完全に覚えちゃったじゃないか。勘弁してくれ。…でも確かに不思議だな。

「幸太。紗良はママじゃないのか？」

そう言うと、幸太は頷いた。

「しゃら、一緒にママ、探してくえゆの」

その言葉を聞いて、紗良は布団に突っ伏した。なるほどね、最初に会った時にそう言ったのか。なら母親とは認識されないわな。ド

ンマイ、紗良。

「まーいいわ。兄さんの理性破壊して既成事実作る方に専念するか
ら」

やめなさい。

そんな馬鹿な会話をしていたら、幸太がカクンカクンと頭を揺らして：ああ、眠たいんだな。船を漕ぐ、ってやつか。俺は幸太を抱き寄せるとリモコンで明かりを消す。幸太はすぐに寝息を立て始めた。

そして、紗良は静かにベッドを出る。

「一緒に寝ないのか？」

「うん。流石にシングルに三人は狭いもん。それに：」
少し間を置いて続けた。

「何だか今日は疲れたから。自分の部屋で寝るわ」

「分かった。：朝の襲撃は勘弁してくれよ？ 俺も疲れたから」

「あはは、分かってるって」

そう言って紗良は部屋を出て行った。なんか：雰囲気変わったなあ。向こうに行って、アイツはアイツなりに苦労したのかもしれない：そんな事を考えながら、目蓋を閉じる。

幸太の穏やかな寝息を首筋に感じながら、俺は意識を沈めて行った。

朝。此方の世界に帰還してから毎日のように紗良の襲撃を受けてきたが、今日はゆっくり出来る。久しぶりに二度寝かましてやろうかと思っっていると…

「どーん！」

ズムッ！

「はぶあつ！？」

腹部に強烈な衝撃が！俺のアラームを発動させずに攻撃するか、やりよるな！？

「…って、幸太か！朝から元気いいな！」

「パパ、おきた！」

ああ、起きるとも。時計を見ると…朝6時か。悲しい事にこの時

間に目覚めるのにも馴れてきてるからな。目覚めはスッキリさ！

「あのね、おなかすいたの。おみず、のみたい」

水？…って、コイツ水で飢えをしのいで来たのか？ 魔族で生命力が強いとはいえ、ちよつと不憫過ぎるだろ。

「今日はもっと栄養になるものを食べるぞ。紗英さんなら、何でも作ってくれるから」

俺は急いで制服に着替え、幸太の手を引いて台所へと向かった。

紗英さんはいつも朝5時半には起きて朝食を作ってくれている。親父や紗良の弁当を作ったりしているからだ。特に紗良は偏食が凄いうえにアレルギーがあるからな。学食で食べたり出来ないんだ。俺？　なんか気恥ずかしくて断ってる。

「あら、おはよう健司さん。幸太君も、おはよう」

「おあよう…！」

「おはようございます。紗英さん、幸太が腹減ってるって。今までろくに食ってなかったみたいだから、胃に優しい物作ってあげられないかな」

「まあ……」

驚いたような顔をする紗英さん。幸太って見た目角が生えてる以外は普通の子供にしか見えないからな。飢えてるなんて分からないだろう。紗英さんは急いで冷蔵庫の中をチエックする。バナナやら牛乳やら蜂蜜やら……ミキサーにかけて、あつという間にシェイクを作った。

「幸太君、どうぞ」

「……？」

コップを受け取ると、クンクン匂いをかぐ。そして恐る恐る口をつけると……

「……！？ んぐつ、んぐつ、んぐつ……」

豪快に飲み始めた。

「幸太、急がなくていいから！ 逃げないから、落ち着いてのめつて！」

「んぐつ、けほつ、けほつ！」

ああもう、言わんこっちゃない！ 俺が背中をさすってやると、幸太はしばらくむせた後に紗英さんの方を向いた。

「もつと！」

「あらあら」

微笑む紗英さん。なんか紗英さんも嬉しそうだ。紗良の小さい頃を思い出したのだろうか。やけにご機嫌で鼻歌歌いながらシェイクの追加を作り始める。そんな紗英さんに、幸太はとんでもない事を言った。

「じゃえ、ママみたい」

ピシッ

何だろうな、この音は。俺のアラームも鳴りだした。イヤだなあ、
と思いながら後ろを振り返ると案の定紗良と…親父までいた。

「紗英が…紗英がママで健司がパパって、俺は一体どうすればいい
んだ！ 紗良と結婚しろって事か！」

「母さんズルいし父さんキモい！ 第一私が兄さんと夫婦になるん
だからね！」

お前ら自分の発言の異常性に気づけ。紗英さんも「複雑な家庭事
情ねえ」とか言って笑ってんじゃない、崩壊しとるわそんな家庭！

俺たちがギャーギャー騒いでいる中、幸太だけはニコニコしながら
シエイクのおかわりを飲み干していた。

あー、久しぶりに俺の中に渦巻く負の感情。それは誰しも一度は抱く…というかちょっと前まで毎日抱いていた感情だ。つまるところ、何かというところ。

「学校行きたくない…」

もうね、何度シミュレーションしても、幸太の事を打ち明けると嫌な展開しか思い浮かばないんだよ。朝、クリクリに会ったらなんて説明しよう。

魔王が家に来たよ！　じゃあ一緒に倒しましょう！　バッドエンド…となるのは避けたい所だ。しかしね、魔王本人はともかく、魔界將軍たちは本当に酷かったんだ。それをずっと目の当たりにしてきたファンタジー世界の人間が簡単に割り切って許せるとは到底思えない。鉄丸？　呪いの大元と言われてる魔王を許せるかなあ…

そんな事を考えていると、自然と足は重くなる。サボりたい。けどサボったらクリクリが死ぬほど心配しそうだ。ステラさんあたりと一緒に家まで押しかけて来そうだな。ああ、今日は土曜日でさっさと終わるってのにサボりたくて仕方がない！

…なんてブツブツ言ったら教室についてました。

「おはようございます、健司様！」

「お、おはようクリクリ。今日も綺麗だねアハハハハ」
しまった。

凄く不自然だった。クリクリも怪訝な顔で俺を見る。

「健司様、大丈夫ですか？ もしや、昨日何かあったんですか!？」
おおっ、鋭い。

何か言い訳を考えていると、胸ポケットに入れた文庫本の事を思い出した。

「い、いや昨日話してた本がさ。見つかったはいいけど変なタイトルだね」

「あら、どんな…って、『勘弁して下さい』？」

「ああ。俺も先輩を笑えないかなって。だからさ、クリクリも先輩にはこの本の事は秘密な」

ごまかせただろうか。不安になりながらもクリクリを見ると、クリクリはクスツと笑って「それじゃあ、二人だけの秘密です」と言ってくれた。ああ、なんて良い子なんだ。騙してしまったのが、後ろめたすぎる。

結局俺はクリクリに幸太の事を話す事が出来なかった。

昼になり授業が終わると、運がいいのか悪いのかクリクリは「用事で今日は急いで帰ります。健司様、ごめんなさい！」と深々と頭を下げて先に帰って行った。クラスの何人かは「ふられたな」と言っただけで、別に気にならない。というか早く帰りたかった。俺は「さ、寂しくなんてないんだからねっ！」と言って教室を出る。何人かの人間は笑ってくれるようになっていた。まあ、オタクって事になってるからな。役作りだよ、うん。そういう事にしておいてくれ、反省してるんだから。

流石に身体強化までは使わないが、俺は全力で家路を急いだ。チヤリはその能力の限界を超えて風になる。猛スピードで家についた途端にチェーンが外れペダルが取れてタイヤがパンクした。どんだけ必死だったんだ俺は。

玄関を開けて、まず居間へ行く。勿論幸太の姿を見つける為だ。幸太は…いた！カーテンの裏だ！すごい膨らんでる！

俺はゆっくりと近づくと、某パニック映画の音楽を口ずさむ。ズーンズン、ズーンズン、徐々に早口で口ずさみながら歩いて行くと…

「パー！」

「なにっ!?!」

なんと、テーブルの下から幸太があらわれた! そしてそのまま俺の腰にタックルをかます! なんとという頭脳プレー、もうお前に教える事は何も無い!

俺はそのままカーテンの膨らみに倒れてゆく。一体なんなんだこれは。思わず両手を前に突き出すと、不思議な感触が俺の手を包んだ。

むにゅん…

「あんっ! 健司さん、ダメよ…」

さ、ささ、紗英さん!?

紗英さんの…

「おっばい!」

「あたりー!」

カーテンの裏に隠れていたのは紗英さんでした。うぬう、やけに膨らみが大きいと思っただら紗英さんでしたか。というか胸掴まれても抵抗ナシとか凄いな。

「隠れん坊してたのよねー」

「ねー!」

そうですか。仲良しでいいね。俺も混ざりたかったよ。

今日は紗良が部活で居ないので、紗英さんと幸太、そして俺の三人で昼食を取った。幸太は胃が収縮しているのか、まだ沢山は食べられない。紗英さんの作ってくれたお好み焼きを、ゆっくりモシヨモシヨと頬張っていた。

「ねえ健司さん。ちょっとお願いがあるんだけどいいかしら」
俺が自分の分を食べ終えた所で、紗英さんが話しかけてくる。

「幸太くんの服とか、買って来て欲しいの。お金は多めに渡すから、健司さんもついでに服を買って来るといいわ」

「え？…でも、子供の服なら紗英さんの方が…」

そこまで言っつて、気がついた。幸太の素性がバレないようにするのは、紗英さんじゃ難しいかもしれない。何かトラブルがあった時は俺の方が対処出来るだろう。紗英さんだって家事で忙しいから、ここは俺が引き受けた方がいいよな。

「分かった。とりあえず子供用のコーナー行ってみるよ」

「ごめんなさいね、健司さん」

何をおっしゃいますやら。助けてもらってるのはこっちなのに。俺は紗英さんからお金の入った茶封筒を受け取ると、幸太に向かって声をかけた。

「じゃあ、食べ終わったらパパと一緒に外行こうか！」

「うん！」

元気よく返事をする。

ああ、いいなあ……。なんか、幸せだ。そんな幸せに浸りながら、俺は今自分の言った言葉を反芻する。

パパと一緒に外行こうか！

…俺、自分の事をパパって普通に言ってたな。流されやすいにもほどがある。けど可愛いからいいや、と思ってしまっ俺はきつと重症なんだろうな。そんな気がした。

俺の住んでいるのは日本海に面したとある県の田舎町だ。周りは田んぼだらけ、電車か車を使えば二十分くらいで賑やかな街に出られるという中途半端な田舎。そんな田舎の唯一まともに買い物物が出る場所が、駅前通りのデパートだ。俺は幸太を連れて、バスでここまでやってきた。

ちなみに幸太はニットの帽子で角を隠している。羽は服着れば普通に隠せるが角は無理だからな。牙？ 八重歯だと言えはいい。外国と違い日本じゃチャームポイントらしいからな。

さて、そんな風にデパートへとやってきた俺たちだが、ここは田舎町だ。買い物する場所が限られてくる以上、クラスの奴とも遭遇する確率は高くなる。そんな事を失念しているなんて、俺もだいぶ気が緩んでいたようだ。

「あ、佐藤君？」

デパートの入り口で俺は、誰かに声をかけられた。それは男にしてはやけに澄んだ高い声。ちょっとはずんでるのが微妙に怖かったりする…

「やっぱり佐藤君だ！ 君もお買い物？」

我がクラスの男の娘、轡田だった。

この時、俺には微かにアラームが聞こえていたハズだったんだ。でも、それはまだ小さくて俺は気にもとめていなかった。

後々思い返せば、それは大きなミスだったんだろう。この時引き返せば、少なくとも回避する事は可能だったと思う。

何故なら今回のトラブルの被害者は俺ではなく。この気弱なクラスメート、轡田だったのだから。

第十一話 ママは男の娘

轡田と俺は、以前話した通りそれほど仲がよいという訳じゃなかった。単に学校の授業で複数人で作業する時に、声をかけやすい相手の一人というだけだった。だからあの一件以来懐かれてはいるものの、俺は轡田の普段の姿なんて全然知らない。プライベートに関する話なんてあんまりした事は無かった。だから…普段のこいつがまるで女の子みたいな服を着ているなんて、思ってもみなかった。

「お前…なんつー格好してんだ…」

「えっ？ 普通にシャツとジーンズだよ」

男じゃまず履けそうにない凄いスリムなジーンズに、可愛い柄のプリントされてるシャツ。元々の体型からして女の子なこいつには気味が悪いほど似合っていた。この姿は決して普通じゃないと思うそばに居る幸太なんて、男か女か分からないのか混乱しているようだ。固まっている。

「ねえ、ところでこの子は？ 親戚の子供さん？」

「ん？ ああ…なんつーかその」

なんて説明したらいいんだろうな。俺が迷っていると、ふと、幸太が目を輝かせているのに気づく。おや？

「ママ…」

……。

なんだって？

「ねえ佐藤君。僕としてはどうリアクションしたらいいのかな」

「ママ！ ママッ！」

幸太が轡田に飛びつく。俺はそれを呆然と見ていた。いや、轡田が女にしか見えないのは分かるけどさあ……。紗良はともかく、紗英さん見てもママって呼ばなかったのに轡田見てママって……。

幸太は目に涙さえ溜めて轡田にしがみつく。轡田も困惑しながらも幸太を抱っこしていた。何気に力あるんだな、轡田。

「えーと、訳あって家で預かる事になった子だ。親が居なくて、俺の事をパパって呼んだりしてる」

「そ、そうなんだ。なら仕方ないね」

仕方ないのか。お前優しいんだな……。それとも流されやすいだけか？ ママって呼ばれるのは男として終わってるだろ。

「今日はこの子……幸太の服を買いに来たんだよ。お前は？」

「僕は注文してたCDを受け取りに来たんだ。二階のCD屋だよ」

ふーん…。音楽ねえ。

「ねえ佐藤君。幸太くんだけ、この子の買い物付き合おうか？僕も育児をしてる姉さんの買い物に付き合ったりとかして、多少この子供服売り場に詳しいから」

「え、いいのか？」

これは何という幸運！ 正直言えば子供服を買うのなんて初めてだから、少し戸惑ってたんだ。これは助かる。

「今日は予定ないし…第一、この子が離してくれないよ」

ぎゅうう、としっかり抱きついている幸太。そんなに轡田がいいのか。君の好むママ要素ってやつがパパには分からないよ。

結局、俺は轡田に幸太の買い物を手伝ってもらった事にした。買い物に関しては俺よりも頼りになりそうだ。俺は幸太を抱っこしている轡田の荷物を代わりに持って、まずはCD売り場へと向かう。その際、エスカレーターの鏡張りの壁を見て思ったんだが…

まるつきり、若い夫婦だな。

俺はなんだか複雑な思いをしながら、鏡に映った自分たちの姿を見ていた。

二階でCDを受け取り、子供服売り場へ。そこで俺は轡田の事を見直す事となる。普通は子供って服に関心ないから、どんな服が欲しいかなんて言わない。選ぶのに迷っていると、勝手に走り出した。り暴れるのがお決まりのパターンだ。少なくとも、俺はそうだった。

しかし轡田は幸太と上手くコミュニケーションを取りながら、次々と服をリストアップしてゆく。「これ、好き?」「これは、嫌い?」と、単純な好き嫌いを聞きながら幸太の好みを分析する。そして、ある程度イメージが固まったら店員さんを選んでそれを伝えた。どうやら店員さんは轡田の知り合いらしく、やけにスムーズに話が進んで行く。

「ネタばらしすると実はここ、姉さんの職場なんだ。あの人は姉さんの友達で、よく家に遊びにくるんだよね」

ああ、なるほど。でもそれを差し引いても、こいつの買い物上手な所は凄いと思う。子供の扱いも手慣れてるし、いい母親に…って、イカンイカン。変な事考えちまった。

結果として、轡田のお陰で幸太の服は問題無く買い揃える事が出来た。予算内で揃えられる物としてはベストな物を買えただろう。俺が礼を言つと、轡田はニコツと笑って一枚のカードを出した。それは…このデパートのやつか?

「今回の買い物のポイント、もらっちゃったから。僕も得したから、気にしなくてもいいよ」

お前…。

そんなの、微々たる金額じゃないか。本当に優しいんだな、お前は。不覚にも、ジンと来てしまった。

「なら、せめて飲み物くらい奢らせてくれないか。このままってのも、俺としては気持ち悪いんだ」

「佐藤君って、律儀だねー」

少し苦笑いする轡田。

「でも、そうだね。幸太君も疲れて少し眠いみたいだし」

見ると確かに目蓋が重そうだし、さっきから喋らなくなっていた。慣れない環境ってのもあるんだろうな。俺は轡田から幸太を受け取り抱っこすると、最上階にある喫茶店フロアへと向かった。

喫茶店での小休止の間、俺は初めて轡田とまともに話をした。いつも学校でしているような当たり障りの無い会話ではなく、互いの趣味や好きな食べ物、最近見たテレビなど…普通の友達同士でするような会話を、普通にしていた。

それは多分、本当に久しぶりの事だったんだと思う。

中学で少し苛められた事がある俺は、同じ中学出身の奴がいないこの町の高校へと進学した。新しい場所では標的にならないように、常に警戒しながら生活してきた。だからこんなに素で話したのって、

同級生では初めてかもしれない。

「えー、いいじゃない洋楽。このアルバムは聴きやすいから、入門編として今度聞いてみる？」

「いいよ、俺英語聞くとジンマシン出るから」

「ジンマシンって、響きが英語っぽいよね。ズイン・マツスイーン、とか」

「や、やめろ、ブツブツ出てきた！」

こんな馬鹿なやりとりが無性に楽しい。俺って実は寂しかったのかな。轡田と話していて、そんな風に思った。

さて幸太も充分休んでケーキセットも食い、たいそうご機嫌で喫茶店を出た時。フロアの中央、開けたスペースに人ばかりが出来るのに気づいた。なんだなんだ、と見てみると面白い物客だけでなく地元ローカルではあるがテレビカメラまで来てやがる。

「なあ、これなんだ？ こんな田舎にテレビ局の連中が来るって」

「さあ……。あ、看板あるじゃない。えーと、今話題の手品師がやっ

てきた…」

看板には如何にもローカル臭の漂う文句が。どうやら手品ショーをやっているらしい。

「パパ、見えないの」

人垣の向こうが気になるのか、幸太はピョンピョン飛び跳ねる。俺はすぐに肩車をして、見やすい場所へと移動した。比較的人数の少ない場所から中をのぞき込むと、そこには真っ白い仮面をつけた女性が一人。仮面とは対象的な黒いドレスに身を包み、空中にトランプを飛ばして客を盛り上げていた。

「パパ、すごいよ！ 白いの、ぴゅんぴゅん飛んでる！」

そうか、良かったなあ。今のが卑猥に聞こえるパパは腐ってるよ、うん。

幸太はとてもご機嫌だ。しかし…手品って、確かに凄いけどさ。種も仕掛けもあるから手品なんだよな。こっして飛び回るトランプにも、何か仕掛けがあるはずだ。ようし…

俺は身体強化を試みる。強化するのは、目だ。一度でいいから、手品師のトリックを見破ってみたかったんだよね。こっちで能力を使うのは避けてたけど、目の強化ならバレないだろ。

キュイイーン…と、俺の視力が強化されて行く。覚悟しろ、手品師！ 俺の目にはお前のトリックなど通用しない！ そう意気込んで睨みつけたが…

あれ？

本当に、種も仕掛けも無いぞ？ そんなハズは…

『ハイ、空飛ぶトランプでしたー！』

ワアアアアア、と沸く観客。見破る事無く終わっちゃったなあ。
あるえ？

『では次にバラのテレポーションを行います！』

仮面の女は、インカムでそう高らかに宣言をする。手には一本のバラ。うーむ、こうなったら次こそは。俺はクルクルと手元でバラを弄ぶ仮面の女を凝視した。

その時。

俺のアラームが、危険を知らせる！

強化した俺の目が、女の手元からバラの枝が飛び出すのをとらえる。それは尋常でない速さで、ある一点を目掛けて発射された。俺は全力で反応すると、それを空中で受け止める。

『ハイ！ バラは可愛いお子さんをお連れのカップルの手元へと移動しましたーっ！』

ワアアアアア!

フロアがまたもや歓声に包まれる。幸太もいきなりバラがあらわれて驚いたようだ。周囲の目は俺の突き上げた手に握られたバラの花へと集中する。轡田も、声を上げて驚いて…

俺の顔を見て、固まった。

「さ、佐藤君？ どうしたの、怖い顔をして…」

怖い顔？ そんな顔してるか？

そりゃそうだろうな、少なくとも笑う事は無いだろ。俺は確実に怒ってんだから。このバラ、俺が止めなかったらどこに飛んでたと思っ？

幸太の顔面だぜ。

あのクソアマ、よくも俺に喧嘩売ってくれたな。後悔させてやる。

「バラ、お返ししますね」

俺はそう言うと、バラを持っていた手を微かに動かす。その途端、手元にあったバラは一瞬で消えた。そして…

ガチッ!

女のいる方向で、奇妙な音がする。そこには、俺が放ったバラを口にくわえた女が立っていた。よく噛んで止められたもんだ、ノドまで貫くつもりだったんだけどな。

『あ、ありがとうございますー！ 皆さん、お若いカップルに大きな拍手をー！』

観客は恐らく今日一番盛り上がったんだろうな。戸惑う轡田とキヤッキヤと喜ぶ幸太、それを撮影するテレビカメラ。レポーターらしき人が近づいてきて、話しかけてくる。くそ、面倒くせえなあ…そんな気分じゃないのに。

レポーターはローカルタレントで、最後の俺の攻撃も手品と思い、色々話しかけてくる。俺は適当に「手品の練習してるんです」と言っただけだったが、次にレポーターがターゲットにしたのは幸太だった。

「ボク、お名前は？」

チクシヨウ、鬱陶しいな。俺が強引に切り上げようとすると、幸太はとんでも無い事を言った。

「うんこー！」

「…えっ!?!」

「ボク、うんこー！」

凄い放送事故だな、おい！

困惑するレポーター、爆笑する観客。俺は「す、すみません、トイレ行きたいみたいなんでこれで失礼します！」と言って幸太を肩車したまま逃げ出した。勿論、轡田も一緒だ。

ナイス、幸太。今日は帰ったら沢山遊んでやるからな。俺は内心でガッツポーズを取りながらエスカレーターを下りて行くのだった。

デパートの一階まで下りてきた。

俺はこのままデパートを出てさっさと帰るという選択肢を選ぼうと最初は思っていたのだが、目の端に厄介な影をとらえてそれを断念する。轡田に幸太を預けて、俺はトイレへと向かった。

「あれ、トイレに行くのは幸太くんじゃないの？」

「いや、単なる口癖なんだ。本当に行きたいのは俺だったり」

そんな軽口を叩いて、トイレへと入る。誰も居ないトイレの洗面台、大きな鏡に向かって俺はドスのきいた声で話しかけた。

「いるんだろ、ミラージユ。俺の機嫌がこれ以上悪くならないうち

に出てこい」

端から見たら一人で鏡に話しかけてるおかしな人だろう。向こうも無視し続けて誤魔化すつもりなんだろうが、そうは行くか。

俺は右手の指を強化する。強化する場所が狭ければ狭いほど、強化の威力は増して行く。

「今なら、デコピンの風圧だけでそこら中の鏡を粉々に出来るぞ」

「わ、分かった！ 分かったから右手を下ろしてちょうだい！」

ふん、最初から大人しく出てこいクソが。

鏡の中に先ほどの仮面の女が現れる。

気取った風な仕草で仮面を取ると、そこには厚化粧の女の顔があった。

「久しぶりだなミラージュ。相変わらずムカつく演出してくれるじゃないか」

「そんなにカリカリしちゃダメよ、ケンジ様あ。それに私の行動は悪い事じゃないハズだけとお？」

あんだとクソアマ。子供狙つといて悪くないだあ？ 俺が殺気をぶつけると、ミラージュは楽しそうに笑った。

「だって、あれは魔王じゃない。私たちが殺すべき存在よ？ アナタは魔王を殺す為に勇者になったんだし、それを見届けるのが王国魔導士団の特別顧問たる私の使命ですからねえ。仕留め損なつたな

ら、トドメを刺すのは私の仕事かなあ、って』

ギリギリ、と奥歯を噛み締める俺。コイツは変わんねえな。最初から最後まで俺を見下していた。こつちの世界に来た理由は知らねえが、幸太を狙うのなら容赦しねえ。

「幸太は俺の家族だ。魔王だとか、関係ない。こつちの世界にはこつちの世界のルールがある。それを踏み越えて好き勝手やるなら、俺は勇者の称号を捨てて魔王を名乗ってやるよ。お前を含むクソ共を叩き潰してやる」

『あはははは、アナタって単純ねえ……』

何とでも言え。頭のいいお前と比べたら俺は単純な馬鹿だろうさ。だが、やると決めたらとことんやるぞ。

全身全霊、有らん限りの念を込めてミラージユを睨みつける。どれくらい睨みつけていただろうか、しばらくするとミラージユは大きくため息をついた。

『ごめんなさい』

「…は？」

なんだ、いきなり。

『ごめんなさいって言ったのよ！ 本気でアナタに逆らうわけ無いでしょ。あのバラだってあの子の帽子にくつつけるだけだったの。』

アナタは私を嫌ってたみたいだけど、少なくとも私はアナタを仲間だと思ってたのに……』

あれえ？ デレた？

『まったく何よ、勝手に帰るとか言っただけを悲しませて、いざ追いかけたら魔王と幸せそうに暮らしてました、とか。ちよっとは私たちの気持ちとか考えて欲しいわね。嫉妬の一つくらいするわよ、もう』

もう、とか言われても。おかしいなあ…コイツに好かれた記憶は全く無いんだが。

「幸太を狙わないなら嫌わないよ。俺だって、かつての仲間と反発したり嫌ったりなんて嫌だからな」

『本当に？ さっきの事、許してくれる？』

「ああ。俺もキツク言い過ぎた。悪かったよ」

そう言つと、ミラージュはへなへなと鏡の中でへたり込む。よく見ると全身汗まみれだ。もしかしなくても、俺の殺気にあてられてしまったんだらう。ミラージュは鏡の中の洗面台にもたれかかっていた。

「それにしても、一体さっきのパフォーマンスは何だったんだ？

お前、こっちで何してんだよ」

『え？ 何って手品師。私こっちで暮らそうと思ってるのよ。魔法使いの能力も手品って事にすれば誤魔化せるでしょ。…って、ヤバッ！』

なんだ？ 鏡の中で慌てだしたぞ？

『そろそろ次の営業に行かなきゃ！ 時間ないから手短に言うけど、魔王の魔力を甘く見ないでね！ あの子、現時点でとんでもない力を持つてるから！ 何かあったら、鏡を通して話しかけて！ んじやっ！』

「お、おい！ ミラージュ!？」

俺が呼び止めるもミラージュは問答無用で鏡の中から消えて行った。何なんだ一体。相変わらず自分のペースでしか話をしないやつだな。仕方ない、いつまでも幸太たちを待たせるわけにも行かないし、さっさとここを出るか。そうつぶやきながら俺はトイレを後にした。

トイレを出ると、木製のベンチの上で轡田が幸太に襲われていた。

「い、痛ッ！ 佐藤君、助けて！」

「はむはむはむ…」

あんまり長くトイレに入っていたから、待ちくたびれて眠ったんだろう。轡田に抱っこされた幸太は、寝ぼけながら顔を轡田の胸元にうずめていた。これは…

「噛んでる！ シャツの上からおっぱい噛んじゃってるの！」

「男が自分の胸をおっぱいとか言うな、おぞましい！ そこは堂々と乳首と言え。もしくは別名『乳首山』と呼ばれる安達太良山を引用して、俺の安達太良山が口撃にさらされ噴火寸前だぜ、でも可だ」

「どうでもいいよ、そんな豆知識！ いたたたたたっ！」

冷たい事言うなよ。へこむだろ？ 俺は仕方なく幸太のそばへ行くと、脇をくすぐった。

「うははははええのんかここがええのんかーっ！」

「きゃははははははっ！」

口を開けて大笑いする幸太。その隙に轡田から離すと、轡田は急いでベンチから立ち上がった。胸元は…ああ、よだれで凄い事に。

「悪い。クリーニング代だそうか」

「ううん、そこまでしなくていいよ。子供のやった事だから」

轡田はそう言って手を振った。本当にコイツはいいやつだな。これでホモっぱい所が無かったら最高だったんだが。

デパートを出ると、当たりの建物は夕焼けのオレンジに染まり始

めていた。俺は轡田に礼を言って別れる。幸太は名残惜しそうに「ママ！」と言っていたが、轡田が「また今度遊ぼうね」と言うと大人しく頷いた。何だか本当の母子みたいな雰囲気俺としては複雑だったりする。

轡田と別れて家に帰り、買ってきた服と幸太を紗英さんに預けると、俺は居間のソファにぶっ倒れた。疲れた…こんなに疲れたのって久しぶり…でもないか。最近は疲れっぱなしだ。今日はまた変な奴とも再会したし、俺の日常がどんどん不思議な事になっていくてる気がするなあ。そんな事を考えながらまぶたを閉じる。

…おかしいなあ。

未だに、アラームが鳴ってやがる。微かな音だから、多分直接的な被害は無いと思うんだが。気になる…。

その時、俺の携帯に着信が。かけてきた奴は、轡田だった。あれ？　なんか言い忘れてた事でもあったか？　不思議に思っただけでみると、スピーカーの向こうから轡田の切羽詰まった声が聞こえてきた。

『ど、ど、どうしよう佐藤君！おっばい、おっばい！』

「はあ？　なんだ、今どっかのチャンネルでポロリでもあったか？　民放か？」

『違っよ、僕のおっばいが！』

「…お前のじゃ興味ないな」

『そうじゃなくて！ おっぱいが出てきちゃったんだ！』

どういう事だよ。胸を出してストリップとかしてんのか？ そういう趣味は一人で楽しんで欲しいものだ、と俺が言くとスピーカーの向こうでブチっという音が聞こえた気がした。次にすう〜と息を吸う音が聞こえ…

『だから、母乳が出てきちゃったんだって言ってるんだよ！』

…嘘だろ？

俺は余りの衝撃に頭が真っ白になった。

第十二話 クリクリン家に行こう

スピーカーの向こうで混乱している轡田を何とか落ち着かせると、俺は轡田に順を追って説明させた。それは、何というか…色んな意味で寒気を呼んでくれるような内容だった。

帰宅途中から、轡田は体調の変化を感じていたらしい。轡田の家はあのデパートからチャリで10分程度の所らしいが、そこまでの間に妙に胸が疼いたとか。で、脳裏に不思議な光景が現れたと言う。それは、俺が父親で自分が母親、そしてその真ん中で楽しそうに笑っている幸太の姿だった。

『な、なんだか、それを見たら…これが一番の幸せなんじゃないかって思い始めたんだ』

「危険な兆候だな」

その映像に困惑しながら家に帰り自分の部屋に入ると、次に幸太に授乳する自分の姿が頭に浮かんで来た。顔を真っ赤にする轡田。その光景を思い浮かべたまま、何となく胸を触ると…

『いつもよりふわふわしてて、先っぽがジンジンして…』

「分かった。分かったから、生々しい説明はよせ」

何てこった。

ミラージュの去り際の言葉が脳裏をよぎる。現時点でかなりの能力を持っている、という内容だった。そして、魔王…幸太は鉄丸の

武具のように物質に呪いをかける事が出来るらしい。それが本当なら、あの噛みつき口撃が何かしらの影響を与えたと見るのが自然だろう。幸太のせいというより、保護者である俺のせいだろうな、これは。

「オーケー事情は飲み込めた。轡田、お前明日何か予定はあるか？」

『え？ ううん、無いけど…病院に行こうにも日曜日だし、普通の所は開いてないよね。救急病院に行こうか考えてたんだけど』

多分、なんの解決にもならんだろ。それどころか、奇病として扱われて妙な事になりかねない。

「明日、会わせたい奴がいる。もしかしたら何か解決方法が分かるかもしれない」

『本当に！？ 分かった、どこで待ち合わせるの？』

「東亀之山の駅なら近いだろ。そこで朝9時に待ち合わせよう」

スピーカーの向こうで『分かった』と返事が返ってくる。俺はその後適当に言葉をかけて、電話を切った。ふう、とため息をついてから次に、部屋の壁にかけてある鏡を見るが…

「ミラージユ、営業とか言ってたよな。なら相談は無理か。全く、王国じゃ遊んで暮らせるだけ稼いでただろうに、何故こっちに来てまで金稼ぎしてんだか」

そんなに金が好きなのだろうか、と考えながら携帯を見る。

これから…クリクリに電話をする。轡田の事を話したら幸太の事も話す流れになるだろう。避けて通れる道ではない事は百も承知だ。しかし出来る事なら避けてたかったよ。

ブルルルル…ピツ『はい、クリスマスです』

なんてこった、ワンコールで出やがった。

「えっと…俺だ。佐藤健司だけど」

『健司様っ！？ 今私の方からお電話差し上げようと思っていたんです！ 一体あれはどういう事ですか！？』

はい？ あれ？

『マンションに帰ってテレビを付けたら、健司様が…』

ああ、しまった！ そう言えばテレビ中継してやがったな！ テレビ好きのクリクリが見逃すハズがない！…て事は幸太の事も見ていたわけで…

「あ、あの、クリクリ。あれは色々事情があつてだな…」

『知りませんでした。私、健司様があんな…』

そりゃ驚くわな。分かりやすい好意を向けて来てる相手に、実は子供がいただなんて知れたら人間不信になりかねない。これは…早く誤解をとかないと大変な事になる！

『健司様が…健司様が……！』

落ち着けクリクリ！あれは…

『健司様が、手品師を目指していただなんてーっ！！』

「なんの話をしてんだクリクリーっ！！」

盛大にコケた。

「よりもよって適当に答えていた所を覚えてるとは…」

『えっ、あれ嘘だったんですか？ 私も健司様と共通の話題が欲しくて手品の本を買っちゃったんですけど…』

何もそこまでしなくても…。気持ちは凄く嬉しいけど、何か申し訳ないな。

「悪かったよ。まあ手品に興味が無いわけじゃないけどな。その買った本ってのはどんな本なんだ？」

『はい、えーと…』 Mr.トリック 種も仕掛けもありません』という本です』

……。

名前とサブタイトルが矛盾してないかな。

『残念です。早速鉛筆が曲がって見えるトリックを覚えたというのに…』

違うぞ、その本は根本的に何か間違ってるぞ！ というか小学生のネタじゃないか。もしや俺にそれを披露するつもりじゃなかっただろうな。

「と…とにかく、今日電話をかけたのは用があつたんだ。話してもいいか？」

『あ、はい。すみません取り乱して…』

いや、いいんだ。どのみちまた取り乱しちゃうから。

俺は一度深呼吸してから言葉の爆弾を投げかける。魔王が子供になった事、ミラージユに再会した事、轡田が母乳を出しちゃった事…。一気にまくし立ててクリクリにキレさせる間を与えない。

「…というわけでな。明日、轡田を連れて行くから予定をあけて置いてもらいたい。詳しい事情はその時に話そう。とりあえず俺も混乱してるんだ。クリクリ、わかってくれるよな？」

『いえ、ちょっと…何がなんだか…』

「クリクリ！」 『はいつ！？』

鋭く声を発する。

「お前だけが、頼りなんだ。力になってくれないか…？」

『……っ！』

スピーカーの向こうで息を飲む音が。すまん、クリクリ。情に訴えさせてもらった。でも嘘じゃない、実際クリクリくらいしか呪いの類は分からないんだから。

『私が、私が健司様に頼られてる…』

「ああ、クリクリは俺のパートナーだからな。真っ先にお前の顔が浮かんできたから…こうして電話したんだよ」

これは嘘だ。ミラージュが先だったからな。それにしても俺、よくこんなセリフすらすら出てくるもんだ。何気に酷い人間かもしれない…。

電話の向こうで、なにやらドンドン音がする。なんか、「お嬢様何を飛び跳ねてるんですか!？」という声も聞こえて来た。ステラさんだ。飛び跳ねてる？

『健司様!』

「は、はいっ!?!」

びっくりした! いきなりなんだ!?

『分かりました、このクリス・クリステイアーノ・クリスレア、健司様の為に全力を尽くします!』

おお、ノってくれたかクリクリ!

『任せて下さい、轡田さんの呪いを解いて必ずや私がママの権利を奪い取ってみせます!』

分かってないじゃないか!

『これでもCカップはあります、ミルクも沢山出してみせますから安心して下さい!』

いやいやいやいや、待つんだクリクリ!

『いえ待てません! こうしてはいられない、早速母乳の出を良くする方法を調べないと! 健司様、それでは明日お待ちしております』

「お、おいクリクリ!?!」

プツツ…

切られちゃった。

……。

ま、まあ、「魔王殺す!」みたいな展開にならなかつただけマシ…なのかな?

俺は顔をひきつらせながら、携帯の画面に浮かぶ通話終了の文字を眺めていた。

そして次の日の朝。昨日と同様幸太のフライングヒップアタックを腹部に食らって清々しい目覚めを迎えると、俺はなるべく高そうな服を選んで着替える。いや、轡田に会うからじゃないぞ？ クリクリのマンションに行くからだ。下手したらステラさんと鉢合わせするかもしれないからな。こっちのステラさんにはまだ会ってないから分からないが、向こうじゃやたらと服装にうるさかった。

「パパ、おでかけ？」 「ん？ ああ、幸太も行きたいか？」

幸太は意外にも、首を横に振った。少しショックだ。

「しゃらとキツネさんみゆの」

キツネ…ああ、少し前に買ったDVDか。子ギツネが親ギツネを探して世界を旅するやつだ。確かあれ、襟巻きのキツネを親と勘違いして近寄って撃たれるんじゃないかな。違ったかな？

「りょうしさん、やつつけゆの」

どんな話だ。

幸太の教育に良くないだろ、そんなの。

幸太は「りょうしさんのいない世界をつくゆのー！」とか言いながらパタパタと走り去って行った。いやいや、職業差別は良くない

ぞ。それに発言が魔王らしくなって来てないか？ パパは君の将来がとつても不安だよ。

着替えを終えて朝食をとってから、俺は外出する事を紗英さんに伝えると幸太に「いい子にしてるよ」と声をかける。元気に「うん！」と答える幸太の後ろで、紗良はぼんやりした顔をしていた。なんだか…顔が赤いな。

「紗良、体調崩したか？ 顔赤いぞ」

「ふえっ！？ あ、ううん大丈夫！ 何でもないから！」

手をぶんぶん振って慌てる紗良。…なんか怪しいな。そう言えば昨日今日とやけに大人しいし、何か企んでやしないだろうな？

「に、兄さんは何も気にしないで、行ってらっしゃい！ ほら、お友達待たせちゃ悪いでしょ！」

「なんか…隠してないか？」

「いいから出てけーっ！」

パキッ！ 「はぶっ！」

顔面殴られた。なんだよもう…。俺は顔をさすりながら家を出る。そして、しばらく歩いてから気づいた事が。

俺、友達と会うなんて誰にも言ってないんだけどな。なんであいつは知ってたんだ？

盗聴、というのが考えたくないが一番可能性が高いな。いや、それならアラームが発動するハズだ。なら一体何故…

そこまで考えて、俺は頭を振った。よそう。面倒くさい事は後回しだ。今から大変なのに、厄介事はこれ以上増やしたくない。俺は先ほどまでのやりとりを一旦忘れて、何も考えずに駅まで歩いて行った。

…後に、俺はこの時の選択を悔いるようになる。この時点で一旦家に戻っていれば、もしかしたら紗良の悪行を止める事が出来たかもしれないなかったからだ。

東亀之山駅は自宅から歩いて二十分くらいの所にある。先日チャリを壊してしまったので、今日は歩きだ。近くバイパスが通るようになるらしく、そこかしこで工事をしている。

「この上はまだ車も通れない無人の道路なんだよな。こういう場所を身体強化して突っ走ってみたいもんだ」

見つかるとヤバいからそんな事出来ないが、多分相当気持ちがい

いだろうな。一度でいいから車と同じスピードで走ってみたい。

ブツブツつぶやきながら歩いていると、目的の駅が見えて来た。各駅しか止まらないローカル駅。その手前、サビついた自転車置き場の鉄柵にワンピースを着た一人の女の子がもたれかかっていた。

む…もの凄く可愛くないか？

ショートヘアと言うには少し長めの髪が、そよ風にふんわりと靡いている。つぶらな瞳に、ふつくらとした薄いピンクの唇は…

「あ、佐藤君っ！ 待ってたよっ！」

「テメエか轡田！」

思いつきり轡田だった。

「なんつー格好してんだ！ 昨日といい、お前はそっちの趣味でもあんのかよ！？」

「ひ、酷いな佐藤君！ 昨日の服は姉さんのお下がりだけど、別に男が着ても大丈夫でしょ！ 今回は…マズいと思うけど」

複雑な顔をする轡田。なんでも、姉に母乳を出した所を見られてしまったらしい。驚いた姉は何故か嬉しそうに自分の着ていた服を轡田に与え、今日は絶対これを着ていくように、と言ったとか。

「詳しい話は後ですけど。僕、なんか胸が張っちゃってみつともないんだ。サラシを巻いて隠すより、女の子の格好した方が目立たないって姉さんが…」

「いや、完全に遊んでるだろ、それ」
「どんな姉貴だ。」

「まあ周囲の人間はなんとも思ってたなさそうだからいいけどな。じゃあ、早速行くか」

「う…うん。どこ行くのか知らないけど、これをどうにかしてくれるんだよね？」

ツンツンと胸をつつく轡田。やめろ、意識しないようにしてんの！確かに、ふっくらしてんだよな。Bくらいだろうか。少なくとも、コイツを見て男だと思っやつは存在しないだろう。

「あの…佐藤君？」

「えっ！？ ああ、大丈夫。絶対なんとかしてやるからな！」

やべ、見入っちゃまった。仕方ないだろ？ 今までそんなのまじまじと見た事なかったんだから！ とりあえず俺は自分の顔をパンパン叩いて気を取り直した。

「よし、じゃあ出発だ！ ここからはバス使うからな！」

「うん、分かった」

ワザと大声を出して平常心を取り戻そうとする俺。こんな事で動揺するなんて情けないな、なんて思っている俺の後ろで轡田は…

「佐藤君…僕を見てドキドキしてくれたのかな？ だとしたらちょっと嬉しいな…」

なんて言葉を小さくつぶやいていた。いやいや、お前、本当にそ
つち系なのか！？ 俺はクリクリのマンションにたどり着くまで、
怖くて振り返る事が出来なかった。

東亀之山駅からバスに乗り、バス停を三つほど越えたあたりにク
リクリの住むマンションがある。学校からは結構距離があるため、
チャリが無かったらこうしてバスで来るしかない。俺一人なら走っ
てもいいんだけどな。

ここはセキュリティ万全のマンションだけあって、一階玄関か
らしてカードが必要だったりする。俺は携帯でクリクリに電話をか
けて、下まで迎えに来てもらおうとした。しかし…

シュツ！

「……っ!？」

俺はとっさに轡田を背中に隠して、右から飛んで来た何かを持っ
ていたカバンではじいた。カバンは大きく裂け、その何かは勢いを
無くして地面に転がる。カシャン、と音を立てて転がったそれは…

「誰だか知らねえが、舐めた真似してくれるじゃねえか」

「さ、佐藤君！？ これ、ナイフでしょ！ どうなってんの！？」

それはサバイバルナイフ。ゴツくて、かなり切れ味が鋭く研がれている。それを拾おうとした次の瞬間、上空からまた風を切る音が。

シュツ！

「甘い！」

素早く身を反らしてナイフを避ける。次に地面のコンクリートに跳ね返ったナイフを、俺は上空に蹴り返した。どうだ、空中なら避けられねえだろ！ そう思って上を見上げたその時、俺は背後から冷たい声を聞いた。

「チェックメイトです、佐藤健司」

首筋に突きつけられる、サバイバルナイフ。感情を排した無機質で冷たい声は、殺気と共に俺へと向けられていた。それは向こうの世界と全く同じ…クリクリの専属メイドであり、近衛兵だった俺を最後まで認めなかった最強のメイド長…

ステラ・アンダーソンだった。

第十三話 ステラと凄い母乳

ステラ・アンダーソンはクリスレア王国のメイド長であり、同時にクリクリのボディガードのような立ち位置にあった。

ステラは肩までのウェービーヘアにキツイ目つき、眼鏡に巨乳という、そっちの趣味の人なら夢中になる事間違いないのルックスをしている。何故かは知らないけど俺とは犬猿の仲で、クリクリに近づこうものなら烈火の如く怒って刃物を向けてきた。あの頃は俺もクリクリの事を疫病神のようにしか思ってたから、ステラもセツトで敬遠していたように思う。俺が無理矢理近衛兵にされて魔王討伐に行く事になった時、「クリス姫が同行するなら自分も」とついて来たはいいが何の仕事もしなかったからな。印象としてはすごく悪い。

だから、正直言ってここまで戦闘が出来るとは思わなかった。向こうのステラと此方のステラは別人だろうから尚更だ。こっこの世界の人間がこんな動きをするなんて考えられないだろ？ けど…ステラがステラであるならば。奴の個性はこちらのステラも持ち合わせているハズ！

「クリスお嬢様には近づかないでもらいますようか、佐藤健司。でなければこのまま…」

「このまま何も起こらないといいね」

呑気に答える俺。その返事にいきり立った瞬間、ステラの上空から先ほど俺が蹴り上げたナイフが落ちて来て…

ザッ

「きゃー！ー！ー！っ!?!」

俺の背中とステラの身体の間を通り抜け…ステラのはちきれんばかりの胸を包むメイド服を縦に切り裂いた。こぼれるおっぱい。

これぞステラ最大の個性である「エロハプニング体質」だ。本当にコイツ、向こうの世界のステラじゃないだろうな？

俺はすぐさまナイフを拾い上げる。しゃがみ込み、胸元を隠して両手の使えないステラの首筋にナイフを突きつけた。形勢逆転だ。

「悪いな。クリクリン所に案内してもらっていいか？」

「う…うううう…っ!」

顔を真っ赤にするステラ。そりゃ悔しいよなあ。

「卑怯です卑怯です卑怯です！ 私が勝ってたのにー!」

両腕で胸を隠したまま足だけでジタバタするステラ。あーあ、しまいには泣き出したし。なんか俺が悪いみたいな展開じゃないか、これ。

「佐藤君…」

轡田が困ったような顔をする。分かってる、許してやれってんだろ？ お前は優しくすぎるよ。

「ステラ。俺も女性に刃物を向けるなんて事したくないんだ。俺がクリクリと会うのがイヤなら、せめてこの轡田だけでも会わせてやってくれないか。呪いの件だと言えば、分かってくれるから」

なるべく優しくそう言うと、ステラは涙をふきながら俺を睨んだ。
「あなただけ帰したら、クリスお嬢様に怒られるじゃないですか。
…分かりました、ご案内します」

そして、渋々立ち上がって玄関のセキュリティを解除する。ドアを開けて中へ入るように促しながら、ステラは俺に向かって言った。

「でも私は負けてません！ 次戦う時は必ずあなたを倒します！」

「分かった分かった、分かったからそんなに睨むな。眉間にシワが出来てるから」

「ムキーツ！」

ああもう、鬱陶しい。久しぶりのノリで懐かしくもあるけど、やっぱりウザいわ。俺は猿みたいなりアクションをするステラをなだめながら、クリクリの住む最上階へ向かうエレベーターに乗った。

この近所じゃ有名な高級マンションの最上階に、クリクリの住む

部屋はある。開発が進むこの住宅街でも一番高い建物であり、俺も一度でいいからここからの眺めを楽しみたかったからちよつとワクワクしていたりする。

ピンポーン…

『はい、クリスです！ 健司様ですね、今開けますーっ！』

おおっ、早いな。まるで監視カメラか何かで見ていたみたいだ。

ガチャ…

マンションのドアが開く。そこから出てきたのは、まるで向こうの世界を思い出させるようなドレスに身を包んだクリクリの姿だった。

「健司様ーっ！」

「おおっ！？ こらクリクリ、抱きつくな！」

子犬かお前は！ いや、嬉しいけど、いい匂いと感触だけど、見てる人がいるから！

「コホンッ！ お嬢様、はしたない真似はよして下さい。お客様も困ってらっしゃいます」

ナイス、ステラ。確かに轡田も困惑して…ありゃ、なんか怒ってる？

「クリクリ。嬉しいのは俺も一緒だけどさ、今は轡田の件を頼む」

「す、すみません、舞い上がってしまいました。どうぞ皆さん上がってください」

顔を真っ赤にして、クリクリは俺たちを中へ迎え入れる。初めて入るクリクリのマンション…やけに広く奥行きがある。こりゃ金がかつてるわ、さすがお姫様。こつちの世界だとそのスケールの大きさがよくわかる。

「ふえー、凄いねえ。ウチのマンションの三倍くらい広いよ」

轡田も感心していた。確かに、普通のマンションの三倍から四倍の広さだ。幸太がいたら喜んで走りまわってるな。

「では、こちらへどうぞ」

そう言っただけ案内された部屋は、これまた金持ち趣味な部屋だった。東側の壁一面が二重の強化ガラス、そこからは市内の景色が一望出来た。はるか向こうには日本海まで見える。これは…想像以上だ。俺は窓から下界を見下ろして芝居がかった口調で言った。

「ふはははは！ 愚民どもよ、ひざまずくがいい！」

「佐藤君、恥ずかしいからやめて」

「なんだよ轡田、お約束だろ？」

とりあえず俺も恥ずかしくなったので窓から離れて、部屋にあるソファーに腰をかける。ステラは一度白い目で俺を一瞥してからキツチンらしき場所へと入って行った。

「それで…クリクリ。電話で話した通りなんだが、轡田の身体を見

「やってくれないか」

「はい。轡田さん、失礼しますね」

クリクリは俺と同じようにソファアに座った轡田に近づいて、手をかざす。轡田は何が何やら分からず不安な顔をしていた。

「ねえ、佐藤君。クリスさんて気功か何かのお医者さんなの？」

「だいたいそんな感じ。まあまあ、そのまま身を委ねちゃいなYO」

「なんか妖しいよっっ」

そんな会話をしていると、クリクリが困った顔をする。

「何だか胸の部分に不思議な反応がありますね。服の上からでなく、直接見たいのですが。轡田さん、脱いでくれますか？」

「え、ええっ!?!」

びっくりした顔をした後、俺を見る轡田。

「佐藤君は、向こうむいててよ？」

「なんでだよ。男同士だろ？」

「健司様、私からも切にお願いします。私以外の胸はあまり見ないようになして下さい」

「うーん…。仕方ない、興味あつたけど諦めよう。…いやいや、何考えてんだ俺！ 正気に戻れ、俺！」

俺が窓の方を向くと、クリクリの診察が再開する。衣擦れの音に続いて、クリクリの驚きの声。

「まあ、本当に乳房になってますね。こんなに張って…痛くありませんか？」

「うん…変な感じなんだ。最初はジンジンするだけだったんだけど、今は少し固くなってるような…」

「ちょっと、触りますね。痛かったら言ってお下さい」

……………。

いや、何だろう。何か、ドキドキして来ましたよ？ 実はガラスにクリクリと轡田の姿が反射して見えてるんだよね。けど、俺自身の姿の陰に隠れて肝心な場所が見えない！ ここはこっそり場所を移動して…

「何をしていますのです佐藤健司」

「おわっ!?!」

ステラがあらわれた。クソ、お前は どうしていつも良い所で…

しばらく俺とクリクリたち、そして窓を眺める。そして状況を把握したのかステラは俺の背後に回ると両手で俺の頭を固定して身体を密着させた。なんで？

「あの、ステラ？ 何の真似だ？」

「クリスお嬢様と轡田様の姿をあなたに見せないようにするのは、特にお嬢様を情欲の目で汚されないようにする為の措置だと理解していただければ」

「いや、お前の胸が思いつきり後頭部に当たってんだけどな」

「なっ…!？」

気づけよ。俺としてはいきなり凄いサービスされて嬉しい限りだが。

「くっ…お嬢様を守る為なら、仕方ありません！ あなたの情欲は、私の胸にこすりつけるといいでしょう！」

生々しい言い方すんな！

そんなアホみたいな会話をしていると、後ろから轡田の凄く恥ずかしい声が聞こえてきた。なんだ!？

「や、や、出ちゃう！ そんなに揉まないでよおっ！」

「すみません、でも確かめないと！」

「ひゃっ!? クリスさん、吸っちゃらめええっ！」

……………。

この沈黙は俺とステラ二人のものだ。一体どんな展開だよ。そう思っって首を動かすと。

「ダメです！」

グキツ！ 「ぐあああつ！？」

痛い！ 首が、首が変な方向に！ こんな仕打ちあるか！

悶える俺。そこに、クリクリがやってくる。その顔は真剣そのものだった。

「大変です、健司様！ 轡田さんの母乳はただの母乳ではありませんせん！」

「なんだ？ おいしかった？」

「何言ってるんですか！」

そう言ってから、クリクリは俺に耳打ちする。

（轡田さんの母乳は、その殆どがエリクサーと同じ成分で出来てるんです！）

はい？

エリクサー？ ゲームとかでお馴染みの？

（ゲームは分かりませんが、私の世界ではどんな病も怪我も治す霊薬です！ とても貴重で、どうやって精製されるのか分からなかった謎の秘薬なんですよ！）

おいおい…。

（加えて、他はローヤルゼリーに近い成分もあるみたいです。母乳というには凄まじい栄養価と効果ですよ。呪いの力も確認しましたから、魔王の望みが反映されたと見て間違いないですね）

なんてこつた。

轡田、すまん。これで幸太のせいだと確定した。つまり…

（幸太が満足するまで呪いは続くって事か？）

（私には解除出来ないレベルの力ですから、解決方法としては満足してもらっしか無いです。お役に立てなくて申し訳ありません…）

（いや、いいよ。クリクリは充分頑張ってくれたよ）

言いながら、俺は頭を掻いた。これは事情を全て轡田に話すしかないか。不安そうに俺を見る轡田を見て、俺は覚悟を決めた。そうだよな、これ以上轡田を振り回すのは可哀想だ。

俺は轡田に幸太と呪いの事を話す事に決めた。

「幸太君が…原因だったんだ」

轡田は、意外にもすんなり事実を受け入れた。

「なあ、なんで信じちゃうんだ？ 普通、馬鹿げてるって思わないか？」

「ううん。逆に納得したよ。だって僕、ずっと幸太君に授乳したいって思ってたんだもの。実際そういう光景が頭に浮かんだりして、流石に何か関係あるんだろうなって思ってたよ」

「いやー、それは申し訳ない。男としては最悪なビジョンだろ、それは。」

「佐藤君が不思議な体験をしていたのも、なんか納得した。変わりすぎだもん、佐藤君」

「え？ そうか？」

肉体的な事だろうか。

「一年生の頃なんて、何だか必死に目立たないようにしてたよね。話をしても、なんか壁を感じたし。最近は伸び伸びしてる感じだよ。凄く強くて、優しくて…本当の佐藤君が表に出てきてる感じ」

「…なんか、恥ずかしいな」

内面的な方かよ、やめてくれ！ クリクリも、何を得意気にウンウン頷いてんだ！

「しかし…幸太がある程度自分の力を自覚して制御出来るようにならないと呪いは解けないんだよな。こりゃ、幸太に呪いを解かせるより神を見つけ出して呪い解除させた方が早いかもなあ」

俺の言葉にクリクリも頷く。すると、それまで黙っていたステラが俺に向かってとんでもない事を言いやがった。

「その幸太とかいう子供を殺してしまえば早いので…グッ!？」

俺の手がステラの喉を締め上げる。

「け、健司様！ 申し訳ありません、謝りますからどうかご容赦下さい！」

「佐藤君、落ち着いて！」

ふざけるな、幸太を殺すだと？ それ以上に…なんでそんなに簡単に人を殺すだなんて言えるんだ。まともに生きる事すら出来なかった幸太を…

「お願い、落ち着いて！」

パンツ！

一瞬目の前に星が飛んだ。これは、叩かれたのか？ 轡田に？ 思わず力が抜ける。その隙にステラは俺の腕を振り払い、床に転がった。せき込みながら、俺を睨みつける。

「ごめんね、佐藤君。でもあれ以上はやっちゃダメだよ。気持ちに分かるけど」

そう言ってから、轡田は怒りに震える俺の手をとる。

「僕なら平気だよ。胸はなんとか誤魔化すし、幸太君が大きくなるまでのんびり待つから。だから佐藤君は、今まで通り幸太君を守ってあげてね」

轡田…。

「お前が一番辛い立場なのに。どこまで他人優先で優しいんだよ…。」

「健司様。もしかしたら、幸太さんに実際に授乳して満足してもらえば元に戻るかもしれません。いろいろ試してみましよう」

「クリクリ…。そうだな、やってみなくちゃ分かんないよな。」

「轡田、今日は色々あって疲れてるから無理だろうけど、来週にでも家に来て幸太に授乳してみるか？」

「俺がそう言うと、轡田はニツコリ笑って頷いた。ステラは…ただ、黙って俯いたままだ。何か言いたそうだったが、俺は聞く気になれなかった。」

その後、俺たちはクリクリの部屋でステラに出されたお菓子やお茶を楽しみながら談笑して過ごした。ステラはずっと奥に引っ込んでいたな。まあ、無理もない。ちなみにお菓子とかに毒は入ってなかった。

話は主に向こうでの俺の活躍をクリクリが自慢気に話し、その裏話を俺が語るというもの。クリクリは俺を神格化しており、そのまま放っておいたらどこのスーパーヒーローかという事になってるか

らな。その都度慌てて訂正した。なんせ初めの頃、戦うのが怖くて部屋に引きこもった事が『秘められた能力の封印を解いていた』という事になっていたからな。その後実際に仕方なく戦って、腕力強化で地割れを引き起こして魔族の大軍を沈めてるから端から見たら確かにそう見えるから始末が悪い。

「困っていた人たちを助けて、名乗りもせず去って行ったんです。奥ゆかしさというか謙虚さというか…本当にかっこいいんです、健司様は！」

「違う違う、その時はお腹壊してそれどころじゃなかったんだって！」

まるでコントだ。轡田はそれを聞きながら、楽しそうに笑っていた。笑い話にしてもあんまり上等とは言えないと思うんだけどな。

「そして、千の頭を持つ大蛇との戦いでは凄まじい智能戦を…！」

「やめて、あっち向いてホイの話は恥ずかしいからやめてー！」

もうイヤ。

しばらく轡田を前にしてのコントが続く。俺が一方的にダメージを受け続ける地獄の時間は、実に昼食を挟んで夕方まで続くのだった。…こんだけ話し込む元気があるなら、幸太に授乳させてれば良かったな。

その日の帰り。

クリクリとステラに見送られ、マンションを後にする俺と轡田。轡田は幾分スッキリした顔をしていた。少なくとも、原因が判明したからな。不安は多少なりとも軽減したんだろう。

「胸、張ったままじゃ辛いんだろ？ どう誤魔化すんだ？」

「姉さんの子供がまだ小さくて乳離れしてないんだ。しばらくその子に飲んでもらう事になってるよ。学校ではサラシを巻いて誤魔化すつもり」

その子供の身体が心配になってくるな。まあ毒にはならんだろうけど。

それからもしばらく他愛のない会話をしながら歩く。駅について、轡田と別れてから俺は一人家路についた。その途中、何とはなしにズボンのポケットを触ると…

「なんだコレ」

小さな紙切れが。

そこには几帳面な小さな字でこう書かれてあった。

『今夜0時、東亀之山駅前の公園にて待つ ステラ・アンダーソン』

.....。

まあ、あれで引き下がる事は無いとは思ってたけど。いいだろう、俺も舐められたままじゃ気分が悪いからな。

俺は紙切れをクシャクシャと握り潰すと、ポケットにねじ込んだ。

第十四話 月夜の槍娘

クリクリのマンションから帰って来た頃には、日も傾き夕飯時になっていた。居間にはソファで眠る幸太がいて、隣のキツチンからは紗英さんの鼻歌と包丁の音が聞こえて来る。紗良は…いないようだ。

つけっぱなしのテレビを消してから、俺は自分の部屋に戻る。今日も疲れる1日だった。いや、疲れるイベントはまだ待ち構えている。それまで部屋でゆっくり休みたかった。

ガチャ…

部屋のドアを開ける。真っ暗な部屋、明かりをつけようとスイッチに手を伸ばす。パチンと軽い音を立てて明かりをつけるとそこには…

「きゃー……っ！」

「な、なんだ!?!」

ベッドの上で悲鳴が！ 紗良の声じゃないか！ 俺、部屋間違えたか!? 急いで部屋を出て確認すると、俺が入ったのは間違いない俺の部屋だ。

「紗良、ひとの部屋で何やってんだよ。悲鳴上げるとか失礼だろ」

「に、にに兄さんだって帰ってくるの早すぎよ！ ノックくらいしなさいよ!」

なんで自分の部屋に入るのにノックしなきゃならないんだ。俺は紗良の言葉を見殺ししてベッドに近づく。布団に潜って丸くなっている紗良を引きずり出そうと、布団に手をかけた。そして力いっぱいひっぺがえして…

「……………」

「……………」

パサッ

再び紗良に被せた。

「お前、布団の中で何やってんだよ」

「こ、これは私が悪いんじゃないかって兄さんが！」

なんでだよ。俺が何をするとお前が布団の中で半裸になるんだ。

「ちちち違うの！ これには深いワケが…って、兄さん？」

「ん？………… オイ！ 紗良、その格好で布団から出るな！」

なんと、紗良が半裸のまま布団から出て俺に抱きついて来やがった！ これは本格的に貞操の危機か！？

「やめろ！ お前、俺たちは兄妹だろ！」

「ええい、うっさい！ 血の繋がらないから問題無し！ というか今は関係ないの！ とりあえず動かないで！」

凄い形相で俺を睨みながら、しがみついて来る紗良。フンフンと二オイをかいだり、身体にスリスリしてきた。…いや、これヤバい
だろ！ 見える、見えまくってるから！

「兄さん…」

しばらくスリスリ攻撃を続けた紗良が、俺を下から睨みつける。
目には…涙？

「なあ、一体どうしたんだ？ さっきから何を…」

そこまで言おうとして、俺は本日初めてのアラームを聴いた。こ
れは…デカイ！

「兄さんの、おっぱい星人ーっ！」

「いきなり何だーっ!？」

ブウンツ！ バスツ！

どこから出したのか、金属バットが空を切る。そして床にあった
クッションに叩きつけられた。

「お前、何言ってるんだよ!？」

「うっさい馬鹿！ おっぱいまみれのおっぱい祭りだった癖に！
そんなにおっきいのがいいか！ そんな兄さんなんて血祭りだーっ
！」

わけわかんねー！

とりあえず俺は素早くバットを取り上げると紗良の腕をひねり上げてベッドに押し倒した。紗良は悔しそうに暴れまくり、乱れていた服は益々乱れて行く。…なんか見た目俺が襲ってるみたいでイヤだな。

「うう…犯される…兄さんに犯されて妊娠して私がお嫁さんになっちゃうんだ…」

「思いつきりお前の願望じゃないか！…って、ちよつと待て。なんで俺がおっぱい祭り…いや、胸に関するハプニングに巻き込まれたのを知ってるんだ？」

それが疑問だった。今日の外出の件、詳しい事は家族に伝えてないハズなのに。疑問に思いながら俺が紗良を睨みつけると、紗良は誤魔化すようにエへへと笑う。これは一体どういう事だ？

「お前、何を隠している？」

「に、兄さんへの想い、かな？」

隠せてないじゃないか。

…待てよ。そう言えばコイツも向こうの世界に渡ったのなら特殊能力をもらってるハズだよな。で、実際何をやってたかと言うと、俺の足跡を辿っていた。ただ辿るだけで俺の「秘密にせまる」とかゲートの書のタイトルにあっただけど、普通に歩き回って秘密に迫るとか無理だよな。まさか…

「お前、追体験しやがったな？」

「ぎくっ…」

コイツ、自分の口で「ぎくっ」って言いやがった。分かりやすいにも程がある。

「ナルホドねえ。対象物の記憶を覗いたり追体験する能力か。向こうじゃ俺の行動を追体験してたんだな」

「あ、あはははは…兄さんって余計な所で頭が回るよねー…」

うるさい。それこそ余計なお世話だ。

「ステラや轡田の事も俺の身体の記憶を見たから分かったのか。厄介な能力貰いやがって、まるで凶悪なストーカーだな」

「し、失礼な！ 兄さんへの愛がそうさせたんだから私は悪くないんだもん！」

どんな理屈だよ。…しかし、待てよ？ じゃあさっきまでコイツは俺のベッドで何を…

「紗良。ベッドで俺の何を追体験してやがった」

「え？…えーと、その…何だろうね。エへへへ…」

最悪だ…。俺はガツクリと床に突っ伏した。

「兄さん、腹筋してたの嘘だったんだね。でも私は軽蔑しないよ、むしろ率先してお手伝いを…」

「ウガーーーーーッ！」

吠えた。

キヤーキヤーと騒ぐ紗良を追いかけ回しながら、俺は心の中で号泣する。神よ、何してくれてんだ！ お前絶対これ見て楽しんでるだろ！ いつか見つけ出してぶん殴ってやる！

そんな事を心に誓いながら、俺は夕飯が出来上がるまで紗良を追いかけ続けるのだった。

夕飯を済ませて、風呂に入り…俺は夜の呼び出しに備えて身体をほぐす。部屋で柔軟体操をしていると、部屋を弱々しくノックする音が。紗良だ。

「兄さん、入っていいですか…？」

「どうぞー」

夕飯前に散々怒ったから、かなりシユンとしている。まあ、自業自得だろ。流石に今回は酷かったからな。

「兄さん、ごめんね？ もう勝手に記憶とか見ないから、許して下

わい…」

「…ふう、分かったよ。ちゃんと謝ったからな、許してやる」

俺がそう言つと、紗良は途端に顔を明るくした。まあ家族だしな。いつまでも険悪なのは俺もイヤだ。

「あのね、今日兄さん真夜中に外出するんでしょ？ 私が幸太君と一緒に寝ようか？」

あ、そうだ。幸太の事があつたな。

「それは助かる。悪いけど11時半くらいに俺は部屋を出るから、お前が幸太のそばに居てやってくれ」

「うん。兄さんが出て行くまで、また三人で寝ていい？」

「ああ、構わない。また絵本でも幸太に読んでやろうか」

俺の言葉に、笑顔で頷く紗良。まったく、こうして普通にしていればいい子なんだけどなあ。俺は苦笑いしながら、今夜読んであげる絵本を選ぶ。しばらく本棚の前で唸っていると、紗英さんが幸太を連れて部屋へとやってきた。幸太は…既に眠そうだった。

「あら、紗良も一緒に寝るの？」

「うん。絵本読んであげようかと思つたけど、もうオネムっぽいね」

幸太は目をしばしばさせながら、俺の腕に抱きついて来た。身体がやけに暖かい。

「残念だな、色々絵本買って来たのに」

「ふふふ…」

何やら紗英さんが含み笑いをしている。

「幸太君がオネムだからって、隣で激しい運動しちゃダメよ？」

ちよ、何いきなり問題発言しちゃってんの!?

「ダメだよお母さん、そんなの」

そつだ、言っつてやれ紗良!

「寝たら余程の事が無い限り起きない幸太君の隣じゃ、スリルが無いでしょ？ するならもつとアブノーマルなシチュエーションがほしいよ」

ええい、この変態親子が!

俺は紗英さんと紗良に軽く拳骨を入れ、紗英さんを部屋から追い出し紗良を布団に押し込んだ。疲れる…。ステラと一戦交えるかもしれないってのに無駄な体力使わせやがって。なんか涙が出てきた…。

結局俺は、絵本を読む事が出来ないまま布団の中で予定の時間まで過ごす事になった。時折紗良が妖しい表情で見つめてくるのを全力でスルーしながら、11時半を迎える。布団から出て用意してあったスニーカーを履くと、俺は窓を開けて棧に足をかけた。

「じゃあ、行ってくる。幸太の事、頼んだぞ」

「うん、行ってらっしゃい。気をつけてね…」

不安そうな紗良の頭を撫でてから、俺は勢い良く足を踏み切る。大きく跳躍すると、俺は屋根の上を音も立てず走り抜けて行った。

6月、まだ半袖では肌寒い夜の町を、俺は目視出来ないくらいの速さで走る。身体強化で脚力を強化した上、飛行能力も使って屋根や電柱を足場に飛び回る。田舎の町だから出来る芸当だ。

約束の公園についたのは、家を出てから五分くらい。だいぶ早くついたが、ステラは既にそこで待っていた。…何やら、怒った表情で。

「遅いです佐藤健司」

「いやいや、予定の時間よりだいぶ早いだろ！」

「30分前行動を心掛けるのはマナーですよ」

なんつー言い草だ。聞いた事ねーよそんなマナー。

「あなたが遅いせいで沢山蚊に刺されました。知ってますか、O型

「一番刺されやすいのです」

「知らねーし。俺A型だしな」

「フン、そんなの聞いてません」

お前が話を振ってきたんじゃないか！

「佐藤健司。今日呼び出したのは他でもありません、お嬢様の事です」

ああもう、勝手に話を進めやがって！

「予想はつくが…これ以上近づくな、って言うなら無理だぞ。学校じゃ隣の席、クリクリの方から近づいてくるからな」

その返事は向こうも予測していたのだろう。表情は全く変わらなかった。

「なら、実力行使にでるまでです。佐藤健司、あなたを徹底的に痛めつけてお嬢様にこれ以上近づけないようにしてあげましょう。全身複雑骨折にでもすれば化け物じみたアナタでもしばらくは登校出来ないハズ。その間にお嬢様と旦那様を説得して、転校させてみます」

いやあ、なんでここまで嫌われるかな。こっちのステラとは今日が初対面なハズだろ？ いや、ちよつと待てよ。

「化け物じみた、って言ったな。アンタがそう判断する材料はどこにあった？俺と直接会うのは今日が初めてだろ？」

「ふふふ……」

口元を歪める。そして…

『魔術武装モード！』

「はいつ！？」

目の前で青い光に包まれて、身体に魔力で編んだ鎧を装着するステラ。コイツ、向こうのステラなのか！？

「さあ行きますよ、佐藤健司！ 積年の恨みを今晴らしてみせます！」

「おわーーっ！？ 丸腰の相手に槍なんぞ向けんなー！！」

最悪だ、ステラの手には馬鹿デカイ槍が！ ありゃ王宮の宝の『蒼竜槍』じゃないか！

ステラは問答無用で槍を構えて突っ込んで来る。一方俺は完全に丸腰。向こうにいた頃は大層な武具を身につけていたから戦えていたが、今の俺にはこんな槍を受けられる装備は無い。こうなったら選択肢は一つだ。

「逃げる！」

俺は全力で逃げ出した。

脚力強化、公園を走り回る。幸い人影は無く、全力を出しても目

撃されなかった。

「おのれ、卑怯者！ 正々堂々勝負しなさい！」

「丸腰の相手に言う台詞じゃねーだろー！」

走る走る、もう走りまくりだ。ここら辺はよく遊ぶ場所だからな、地理的な情報は完璧に頭の中にある。俺は公園を抜けて林の中に紛れ込むと、近くの民家やアパートの間の細道を音も立てずに走る。我ながら忍者みたいだなと思うが、ステラも負けじと必死に追いかけてくる。しかし…

ガンッ！

ドカッ！

ステーンッ！

ズボッ！

ガッシャーン！ 「こらぁーっ！」

「ごめんなさいーい！」

…まあ、土地勘も無く走り回ったらこうなるワケで。俺はただ走っただけなのだが、ステラは全身に土や葉っぱ、泥まで被って満身創痍の状態になっていた。さすがに可哀想だな、これは。

そろそろマトモに相手をしてやるか、と思って俺が最後にたどり着いた場所は、昼間に俺が見上げていた場所。工事中のバイパスの上だった。強化した足で跳躍すると、一気に無人の道路の上に降り

立つ。ステラも必死に追いかけて来た。

夜風が吹きすさぶ中、俺とステラはバイパスの上で向かい合う。

「はあ、はあ、佐藤健司！ 死に場所はここでいいのかしら!？」

「…その前に聞きたいんだけどさ」

妙なテンションのステラとは対照的に、俺は静かに語りかける。

「俺、アンタにそこまで恨まれる事したか？ なんかクリクリに近づいたってだけじゃねーだろ、その敵視の仕方は」

「…フン、良いでしょう。冥土の土産に教えてあげようではありませんか!…メイドだけに」

「……………」

「……………」

いや、どうなんだろうそれは。

「せめてため息くらいついでくれませんか？」

「俺、アドリブ弱いんだよ。ごめんな」

顔を真っ赤にするステラ。コホン、と一つ咳をして気を取り直すと、構えを解いて語り出した。

「まず、私は元々こちらの人間です。ですから、向こうも此方もありません。私はN大学に通う留学生です」

はい？ 大学？

「アナタより早く向こうに渡ったんです。そして、王宮のメイドに雇われました」

そう言つてステラは胸元から一冊の本を取り出した。ゲートの書だ。それを、俺の方へ投げ渡す。

「見てご覧なさい、表紙を」

「んー？ 何々、『セレブ生活万歳』…なんじゃこら」

表紙にはお馴染みのメイド服に身を包んだステラが、優雅にお茶を飲んでる姿が。

「王宮でお姫様の専属メイドをしながら、高給を貰つて優雅な生活を満喫するのが夢だったんです。わざわざ日本を留学先に選んだのだから、元々日本アニメに出てくるメイドになりたかったのが動機ですからね。実際留学してみても絶望しましたよ、まったく！ メイドなんてどこにも居ないんですから！」

あ…、あれか。いわゆる勘違いしちゃった外国人か。たまにやるよね、こういう人。

「向こうに行つてからは、幸せな毎日を過ごしました。仕事は神様からいただいた『天才スキル』で何でも楽々こなせましたからね。下っ端メイドをかしづかせたり。暇な時間を見つけては王宮の男たちを誘惑して楽しんでました。優雅で刺激的な毎日を過ごしていたのです」

本当かよ。

俺は試しにステラの本をペラペラとめくつてみた。そこに描かれ

た挿し絵を見てみると…

「なんか、すつ転んで脱げたりバルコニーに引っかかって脱げたり、半裸で泣いてる所をメイドさんたちや兵士たちに慰められてる絵ばかりだな」

「え、何でバレ…って、わー！ー！？ 何中身を読んでるんですかああああっ！」

慌てるステラ。いや、嘘をつきたいならこんな本を俺に投げつけるなよ。

「えーと、『今日は王様にたくさん褒められちゃった。お姫様にも喜んでもらえて幸せです。明日も沢山お仕事して、皆に喜んでもらうぞっ！』…なんだ、立派にメイドやってんじゃんステラ」

「やあん、返して！ 返してー！」

泣きそうな顔で俺から本を奪おうとするステラ。何なんだ、コイツは。いきなり子供っぽくなるなあ。とりあえず本を返してやるとステラはそれをまた胸元にしまう。そして先ほどの態度が嘘のよういつものステラに戻った。

「フン、今のは幻です。早急に忘れなさい」

「いやー…。お前、面白いなあ。」

「コホン！…しかし、そんなアダルトでセレブな生活も突然終わりを告げてしまいました。それは、佐藤健司。あなたの出現です！」

いや、そんな生活始まってすらいなかったじゃないか。

「アナタのような下賤な輩が勇者を名乗り、魔王討伐などと粹がつてクリス姫を連れ出して…私の平和な日常が、壊されてしまったのです。これが恨まずにいられますようか。それに加えて、魔王討伐の後に此方の世界に姫を誘導して」

「いや、それはクリクリが勝手に…」

「佐藤健司、アナタのせいなのです！ アナタが姫を惚れさせてしまったから、こんな事になったのです！」

ステラは叫ぶ。

「私はどうにかしてアナタと姫を近づけないようにと動き回りましたが…どうしても、アナタは姫の心を掴んでしまう！ 私は…アナタから姫を取り戻して、向こうに戻る為に此方へ渡って来たのです。これで、私がアナタを憎む理由が分かりましたか？」

…うーん、なんと云ったらいいか。分かるっちゃあ分かるんだけど、俺が悪いのか、それは。

「俺を恨んで解決する事でもないような気がするけどな」

「分かってます、そんなの。これは私の八つ当たりなんです。頭で分かっていても、アナタを見る度に感情が爆発しそうになるんです！」

そうかい。

八つ当たりって分かってんなら話は早いわ。

「いいぜ。その八つ当たり、本気でやる気があるならやってみろよ」
俺は冷たく言い放った。

「俺は抵抗しない。お前の好きなようにやってみな。その槍で、刺し殺せるもんならやってみせろよ」

「…フッフ、私はやると決めたらやり通しますよ？ 覚悟は出来るんでしょね」

ステラは再び槍を構える。俺は何のガードもとらなかった。

「死ね、佐藤健司！！」

ステラが踏み出す。槍は確実に俺の心臓をとらえていた。俺はバれないようにまた生命力を強化して槍の一撃を受ける。いや、これ痛みとかは消せないから最悪なんだけどな。

グサッ！

「グ…」

ほら、痛い。本当に最悪だ。息すら出来ないくらい痛いつて、地獄だな。

ドサッ…と、崩れ落ちる俺。ステラはそんな俺を呆然と眺めた。

「え…あれ、佐藤…健司？」
固まるステラ。

「何故、避けなかったのです。…佐藤…健司…嘘です、何故わざと受けたんです！ あの程度、避けられたでしょう！？」

俺は何も答えない。実際心臓は破壊されて意識すらなくなっていた。しかし、俺は必死で意識をつなぎ止める。ここで眠ったら完全回復してしまうからな。

「ああ、佐藤健司！ 嘘ですごめんなさい！ 本当に殺す気などなかったのです！ ただ、姫がアナタの事ばかり気にするから嫉妬して…やだ、やだ、死なないで！ 佐藤健司、目を覚ましてえええ！」

なんか言ってるけど聞こえなくなってきた。ステラのやつ、少しは反省したかなあ？ 無闇に武器を振り回す事の危険性や、人を傷つける事の重みを、ちゃんと分かってくれたかな。

「あ…そうだ、あれが！ 佐藤健司、待ってて下さい！ 今、アナタの怪我を治してみせます！」

そろそろタイムリミットか。こんな所で寝るのはゾツとしないが、完全回復するなら風邪もひかないんだろうな。目覚めたら工事のオツサンが目の前に、とかいう展開ならショックで死んじゃうんだろうけど。

…そんな事を考えていると、不意に俺の口に何かか押し付けられる。なんだこれ、やけに柔らかいな。暖かい何かか俺の口の中に流し込まれて…ん？ 甘い？ なんだこりゃ。

しかし次の瞬間、俺は余りの身体の変化に驚愕した。全身に異様な力が漲り、破壊された心臓がみるみるうちに再生されて行くのが分かる。身体中を熱い血液が巡り、強制的に意識が回復された。何なんだ、一体！？

「ゲホツ、ゲホツ！ なんだこりゃ！？」

「あ…良かった、間に合ったよう！」
いつの間にか俺を抱きかかえていたステラ。大粒の涙をたたえた瞳で俺を見つめていた。

「おいステラ、お前一体何をしたんだ？ 確か致命傷だったはずだが…」

「ごめんなさい、佐藤健司！ 私、やりすぎたの！ だから何とかして回復させなきゃって思って、お薬飲ませたんです」

お薬？

「口に当たった柔らかい感触って、薬か？」

俺が聞くと、ステラは顔を真っ赤にして首を振った。

「あの…口移しで…」

あー…それは何と言うか、ごめんなさい。ステラって純情そうだから、初めてだったかもなあ。じゃあ、あの甘いのが薬か。俺がそう聞くと、ステラは頷いた。

「あの、エリクサー…です」

ほほう、エリクサーね。さすが完全回復、心臓まで治すとは…
ん？

「厳密に言うとエリクサーと同じ効果が望める薬というか何と言うか…」

おい待てまさか!?

俺が目を大きく見開くと、ステラは申し訳なさそうに頷いた。

「轡田様からいただいた、母乳のサンプルです」

おわあああああっ!?

俺は声ならぬ声で絶叫しながら…今度こそ意識を失うのだった。

第十五話 拉致婚約事件

ビュウビュウと夜風に吹かれながら俺は意識を取り戻す。ああ、俺泣いてたんだね。頬が涙に濡れていたのが、風に乾かされて少しヒリヒリしていた。口に広がる甘さは轡田とステラ、どちらの味なのだろうか。

「……そろそろ降りませんか？ 流石に身体が冷えてきました」

そうだね。

俺はステラと共にバイパスから飛び降りる。工事現場は人っ子一人おらず、静まり返っていた。俺はステラに向き合い、声をかける。

「ステラ。お前には悪いと思うけど、向こうに戻るにしてもクリクリの気持ちを大切にやって欲しい。俺を嫌う理由は分かったし、なるべくお前の気持ちを逆撫でしないように気をつけるから……今は我慢してクリクリのやりたいようにさせてやってくれないかな。それで、出来れば俺がクリクリと会うのも許してもらいたいんだ」

「……………」

ステラは何か言いたそうにこちらを見つめていた。まあ、納得出来ないのも分かるよ。早く向こうに戻りたいんだろうけど、今は我慢していて欲しいな。

「佐藤健司。どうしてあなたはいつもそうなのですか」

ん？

「いつも相手を追い詰めて、打ちのめして、反撃する気も起こさせないくらい叩きのめして…最後の最後で、優しくするんです。あなたは、とても酷い人です」

いや、そう言われても。

「今の私に、反論する事なんて出来るわけないじゃないですか。それに…」

顔を真っ赤にしながら、上目遣いで俺を見た。

「私が初めて唇を重ねた男性なのです。そんなあなたに逆らうなんて出来ません…」

はい？

「いやステラ、あれは救命の為だからノーカンで行こう。大丈夫、君のファーストキスはまだだ！」

「嫌です！ 私の中では大切な初めてなんです！」

その初めての味が轡田の母乳とかおかしいだろ！ 考えなおせ！

「唇を重ねた時、気づいたんです。今まで必死であなたの行動をチエックして、姫に近づけないようにして…私の頭の中には、絶えずあなたの姿がありました。ずっとあなたの事ばかり考えていたんです」

おいおい、何かおかしい事になってきたぞ？

「あなたがいけないんです！ ずっと私の頭の中に居座り続けて、私の心を掴んで離さないから…こんな気持ちになっちゃったんです」

「！」

「おかしい、おかしい！」

「発言内容が多分にパラノイアチックじゃないか、ここで電波受信するのはよしてくれ！」

「佐藤健司…私は、決めました」

「キツと睨みつけるステラ。頬を赤く染めているのがなんだか怖い。

「アナタも説得して、姫と共に向こうの世界に戻ってもらいます！」

「そして…わ、わ、私の、だだだだだ旦那様になって貰いますっ！」

「アホかあああああつ！」

「どうしてそんな結論に辿り着くんだこの不思議ちゃんは！ 破綻しとるわ、何かが！」

「ステラ、ファーストキスくらいで人生捨てるな！ お前、向こうで男遊びするんだろ！？ セレブな生活に俺は合わないって！」

「あれ嘘だもん！ 本当は兵士さんたち、私を子供扱いしてまともに相手してくれなかつたんです！ こっちでも向こうでも、私がモテた事なんて一度も無いんですーっ！」

「悲しいカミングアウトしてんじゃねえ！ リアクションに困るだろ！？」

「何か俺まで悲しくなってきた。確かに、どんだけ力をつけようがモテない奴はどこ行ってもモテない。それは向こうで色気のあるエピソードが全くなかった俺が、身を持って証明していると言えよう。」

…やべ、なんか目から鼻汁が…。

「お願いです、佐藤健司…いえ、旦那様！ 私をアナタのメイドにして下さい！ 奴隷でも構いません！」

「安売りするにも程がある！ もっと自分を大切にしろ、頼むから！」

ダメだ、これは冷静な判断力を失ってるな。ならば仕方ない、うまく行くかは分らんが、何とか言いくるめてみるか。俺はステラの肩を両手でしっかり掴むと、真剣な眼差しでステラに言った。

「いいか、ステラ。もし本当にそうしたいなら先にクリクリと話をつける。ステラはクリクリの専属メイドだから、クリクリを差し置いて俺と一緒になかなれないだろ？」

どうだ、この展開！ クリクリが自分以外の女性を俺に近づけたと思うわけないし、ステラも絶対的な主従関係の前に諦めざるを得ないだろう！ ズルい？ 何を言ってるんだ、素晴らしい解決策じゃないか！ ほら、ステラだって涙を流して喜んで…って、何で喜んでんだよ。

「うう…つまり私は第二王妃になれるんですね…。姫と私、仲良く二人でウェディングドレスを着て…」

しまった、そっぴや向こうは一夫多妻じゃないか！

「早速姫…いえ、こちらではお嬢様ですね。クリスお嬢様と相談します！ それでは旦那様、私はこれで失礼させていただきます！」

「こら、ちょ…」

ブウウンツ…と、また青白い光を身体に纏うステラ。そして次の瞬間、ステラは彗星のように光の帯を夜空に残して飛び去って行った。

一人、取り残される俺。

…えーと、どうしよう？ この展開は俺も予想していなかったぞ？
固まって、たたずんでいると一際強い風が吹いてきた。

ビュウウウウツ！

「ふえつくしよんっ！」

流石に冷えすぎたな。こりゃ風邪ひいちゃうわ、明日には回復しちゃうだろうけど。

俺はとりあえず周囲に人が居ない事を確認してから、足早にその場から立ち去り家へと戻って行った。ステラの件は…ちょっと怖いけど、明日学校でクリクリと会えばどんな展開になったか分かるだろ。今は…とにかく帰って早く休みたかった。

月曜日の朝。

今日から学校。前日どれだけ疲れていようが完全回復する俺に、仮病を使って学校をサボるといふ手は使えない。嫌だなあ、クリクリと会って昨日の事を問い詰められるのも、轡田と会ってあの味を思い出すのも。そんな風にぼんやりと考えていると、俺の腕をしっかりと抱きかかえた紗良が寝言でブツブツ何か言っている。

「兄さん大好き兄さん大好き兄さん大好き兄さん大好き……」

恐ろしいな。愛の言葉ですら紗良の口から出ると呪詛に聞こえる。俺は反対側の腕を抱きかかえる幸太に視線を移した。幸太の寝顔を見て、朝から恐怖で縮みあがった心を癒さねば。

俺が首を動かして幸太を見ると、ちょうど幸太も目を覚ました所だった。むにやむにやと口元を動かしてから、目蓋をこする幸太。俺と目があうと、段々焦点が合ってきて……

「パパ、しゅき！」

ギュッと、抱きついてきた。

「う……ううおおおお！ 可愛いぞ幸太あああ！」

「ちょっと兄さん！？ 散々愛を囁き続けた私の立場は！？」

やかましい、寝たふりして刷り込みしようとする奴が可愛いわけあるか！ お前も幸太を見習って純真無垢だったあの頃に帰るがい！

「くっ…分かったわ！ 今日学校の帰りにオムツ買ってくるから兄さんが履かせてよねっ！」

そうじゃねえっ！

どうも俺の朝は騒がしく迎えるのがデフォらしい。二度寝など出来るわけもなく、俺はベッドから出て紗良を部屋から追い出すと、登校の支度を済ませるのだった。

そして、運命の登校時間。

普段よりも重い足取りで俺は学校へと向かっていた。チャリが壊れて使えないのは今の俺にとってプラスかもな。学校までの道のりを時間たっぷり楽しめるから。ああ、田んぼの緑が美しい…空を行く渡り鳥、僕をここから連れ去っておくれ。というか俺飛べるし一緒に渡っちゃおうかな。

そんな事を考えていると、俺の後方から凄い勢いで黒塗りの高級車が走ってきた。なんだこりゃ、すげえ胴長の車だな。こんなの見ただ事ねえぞ。驚いて見ていると、車は俺のすぐそばで停車する。はて、なんじゃないなと思っっているとドアが開いて、中から見覚えのあ

る巨乳メイドが…って、ステラ！

「おはようございます愛しの旦那様さあさあこちらへどうぞ足払い
」！
」

「のわっ!?!」

身体が縦回転して、ステラにお姫様だっこされる。そしてそのまま車の中へ。

「ジェイコブさん、確保しました！ 出して下さい！」

「H A H A H A！ 了解シテシマッタ！」

何なんだジェイコブって！ よくわからん黒人の大男はステラに声をかけると一気に加速する。いや、これって拉致だろ！ 俺、拉致られてんじゃん！ そんなで今更だけどジェイコブさん、日本語おかしかったね!?!

「お、おはようございます、健司様」

「え？ あ、おはようクリクリ…」

広い車内には、クリクリがいた。おお、今日も綺麗だなクリクリ…
…というかお前こんな車で今まで登校してたのか？

「あの、今日はどうしても健司様と一緒に登校したくて…。お話し
たい事もありましたから」

う…。

なるほど、こりゃ逃げられないわ。というかステラもいい加減離してくんないかな。

「私の事はお気になさらずに。女体化したソファァーか何かだと思っ
て下さい」

無理があるだろ、そこまでアニメ脳なのかお前は！

「…健司様」

「ひゃ、ひゃいつ！」

クリクリが怖い。俺はステラに抱っこされた情けない姿勢のまま
声を裏返らせた。だって、怖いぞコレ！ クリクリ、完全に怒って
るじゃないか！

「昨日の話、お聞きしました」

「う…はい、ごめんなさい」

謝ると、クリクリは目をカッと見開いた。来る！

「健司様……ありがとうございます……！」

……。

はい？

「ついに健司様が私と婚約してくれると聞いて、昨日は興奮で眠れませんでした。ステラに魔法で眠らせてもらえなかったら、今ごろ目の下にクマを作っている所でしたね」

婚約…ええっ、婚約！？

「旦那様、昨日私とお嬢様を貰ってくれるという話をしたではありませんか。これは婚約以外の何物でもありません」

言っていない…よな？ 俺、そんな事一言も…

しかし目の前には瞳をキラキラさせているクリクリが！ う…これを否定して、こんなに可愛い顔を曇らせる事など出来るだろうか。俺には出来ない！ しかし、ほとんど詐欺まがいのやり方で押し切られるのも釈然としない！ どうする、俺。俺、どうすんだよ！

「クリクリ。先ずお前に伝えておきたい事がある」

俺はシリアスな顔をして言った。ちなみに何も考えていない。喋りながら考えていた。

「もう知ってると思うけど…俺はお前が好きだ。誓いを立てたあの日から、どんどんお前の事が好きになって行った」

「健司様あ…」

おおっ、俺はいきなり何を言ってんだ。まあクリクリのリアクションが可愛いからいいけどぞ。

「しかし、結婚となると問題が一つある。こっちの世界では色々あ

って、高校卒業までは結婚出来ないんだ。出来てもハードルが高いし、最悪高校を辞めなきゃならない。それは、避けたいんだ」

確か、法律上は問題ない年齢でも校則で禁止している場合は辞めなきゃならないハズだ。うる覚えだけど。

「向こうに戻るにしても、神を見つけ出さないとまず無理だろ？」

ならとにかく高校卒業まで我慢して、こっちで結婚するにせよ向こうで結婚するにせよ、話はそれからだ。婚約している、という事も学生のうちは隠していた方がいい。色々問題になるから」

「そ、そうですか…。難しいですね、こちらは」

シユンとなるクリクリ。ステラは後ろで小さく舌打ちした。こちら、聞こえてるぞ。

「婚約自体は…嬉しいよ。俺、恋愛経験なくてそういうの憧れてたから。だから拒否は絶対しない。そうだな、口約束で悪いけど今ここで誓おうか？」

「あ…あ、その、その言葉はまだいいです。聞いてしまうと、今日一日中ボーっとしてしまいますから…」

いやもう顔真っ赤でボーっとしてるけど。

「それと、ステラ」

「は、はい！」

いきなり呼ばれて驚いたんだろう、急に姿勢を正したから俺の頭がストンとステラの胸を滑り落ちる。ボタンがはじけ飛んですんごいのが露出した。

「うわぁん、朝から淫靡です！」

淫靡って。

「あの、話を続けるけど。お前もこんな強引な事しなくても、ちゃんと話してくれば俺も考えるからな？」

「おっぱいの事ですか？」

「違う！ 婚約の事だつての。お前昨日モテた事無いとか言ってたから、きつと焦ってこんな強引な事したんだろ？ 安心しろ、お前は充分美人だし俺には勿体無いくらいの女だよ。だから、貰い手がいなかったらちゃんと俺が責任とる」

何言つてんだよ俺……。シヤレなんねえ約束しやがって、格好つけるにしても程があるだろうに。

「だから、これからはちゃんと話し合おう。何でも話し合える仲になろうな」

「旦那、様あ……」

いつから俺はこんなセリフをポンポン言うようになったんだ。感動して呆つとしている二人を後目に、俺は宙を仰ぎため息をついた。その時、バックミラーに映った運転手ジェイコブと目が合う。ジェイコブはニヤリと笑うと親指を立ててこう言った。

「H A H A H A、墜トサレテシマッタ！」

やかましいわっ！

校門について車を降りる。登校していた奴らが、驚きながら俺とクリクリを眺めていた。こんな田舎の学校に高級車で乗り付ける奴なんか居ないからな、しょうがない。俺はクリクリをエスコートするように手をとって車を降りると、ステラから弁当を受け取る。周囲の奇異の目にさらされながらも臆する事なく、俺たちは玄関へと歩いて行った。

そんな、いつもと違った登校風景の中。

俺は小さなアラームの音を耳にした。拉致婚約事件の時にも鳴らなかつたアラームが、今になって鳴るのか…。俺はウンザリしながら、周囲を警戒する。殺気は…小さいが、確かに存在した。それはクリクリに向けられたものではなく、確実に俺に向けられている。

（標的は俺、か。クリクリたちを巻き込まないようにしないとな）

俺は気を引き締めて、玄関の扉を開けるのだった。

第十六話 イリユージョニスト佐藤

突然だが、俺は学校が嫌いだった。

勉強が嫌とかではなく、集団生活に向いていないんだろうな。出る杭は打たれる、というのは社会人の世界だけではなくガキの世界にもある。俺は中学生の頃、不用意に目立ってしまつてイジメにあつた。あの日以来目立たないように必死に振る舞うようになり、ただでさえつまらなかつた学校は益々つまらなくなつた。人畜無害な空気キャラを演じるのは、窮屈で仕方がなかつたんだ。

本当に今の俺からは考えられないけどな。

高級車で登校して朝から周囲の注目を集めて、クリクリを教室までエスコートして嫉妬や羨望の眼差しを一身に受けながらも、俺の心は至つて平然としている。何故か。その理由は非常に簡単だ。

だつて、学校は安全だから。

家で紗良に狙われ、外に出ればかつての仲間遭遇して、夜は命がけの追いかけっこをした。学校でも確かに大変な目にあつたけど、実際死にかけたのは鉄丸の暴走くらいで他は言つちや悪いけど雑魚だ。鉄丸ももう落ち着いてるし、これ以上トラブルが起こるなんて考えられない。そう考えると学校が一番安全と言えるだろう。

朝の殺気？ 勿論気になるけど仕掛けてくるのは放課後だろ。こっただけ一般人がいるなかで仕掛けて来る馬鹿は居ないだろうし、居たとしても取り押さえて通報すれば終わりだ。まあ、他に気になる事があるとすれば、あの殺気の出所くらいかな。一体誰が俺に喧嘩

売りたいのやら。

教室についてからも一応警戒を怠らず周囲を観察するが、殺気なんて微塵も感じられない。それどころか…なんだ？　なんか俺を見てぼんやりしてる奴多くないか？

「健司様、なんでそんな凜々しい顔をしてるんですか？　私以外の人にそんな顔見せて欲しくくないです…」と、クリクリが言う。

え、なにそれ。凜々しい？　俺が？

戸惑っている、既に教室に来ていた轡田が近づいてきた。…なんか、緊張するな。

「おはよう、佐藤君、クリスさん。凜々しい顔っていうか、ちょっと怖い…いや、ワイルドな顔かな？　何かあったの？」

ワイルド。野性的。野生の動物…霊長類？

「つまりゴリラっぽい顔って事か。そんな事言っていると、背後からウホられるぞ男の娘」

「言ってる事、わけわかんないよ…」

通じないか。まあ通じたら通じたでイヤだけど。

「あのね、さつき女子が話をしてたんだけど、佐藤君が執事みたいだって。クリスさんをエスコートする姿が、格好良かったみたいだよ」

執事…。まあ、多少それっぽい動きはしてたかもな。もつとも、近衛兵なら誰もが習わせられる動作で、かなりスパルタで叩き込まれたから反射的にやってたんだろうが。

「手え持って歩いただけだろうに……。もしかしたらあらぬ妄想しながらゲヘヘヘ、クリクリたんの手えスベスベとか言ってる心の中でイヤらしく笑ってるかもしれないだろ」

「佐藤君はそんな事しないよ」

「健司様は生まれながらの紳士ですから」

お前ら持ち上げ過ぎだ。崇拜し始めてすらいないか。生まれながらの紳士って、立派なヒゲの赤ちゃんを想像しちゃったじゃないか。バブバブ言いながらお辞儀してやるうか。

…そう言えば。

「轡田。話変わるけど、あれから身体の調子はどうだ？ ほら、張って来てたらしいけど…」

「え？ ああ、それなら姉さんの子供に飲ませたから大丈夫だよ」
ニコツと笑った。

「なんかね、風邪気味だったのが一気に回復して元気になっちゃったんだ。もう家族みんな大騒ぎだよ。これなら病院行かなくていいね、って喜んでた」

どんな家族だよ。轡田の身体を心配しろ、と。

「轡田、もし身体が辛くなって来たらすぐ言えよ。俺で良かったら協力するから」

これくらいは言ってるやらないとな。原因作つたの俺なんだから。幸太に「ママが辛そうにしてる」って言えば今の子供の状態でも、力を使って何とかしてくれるかもしれないしな。そう思ってた

んだが、轡田の返事は少しズレていた。

「あの、それって…張ってきたら、佐藤君が飲んでくれるの？」

…なんだと？

「は、恥ずかしいけど、佐藤君なら…いいよ」

「アホか、そういう意味じゃない！　というか顔を赤らめるな、誤解を招く！」

しかしもう遅いようだ。周囲の女子たちは興奮気味にひそひそ話を始めていた。ああ、やめろ！　お前らの妄想で俺を汚すな！

「健司様…」

ああ、クリクリ、助けてくれ！…って、お前も何プルプル震えてんだ！

「私も、私も幸太君に会って噛んでもらいますから！　轡田さんには負けませんから！」

や・め・な・さ・い！

前言撤回、学校でも気が休まらねー！

結局担任が来るまで、俺は周囲の好奇と猥褻な視線にさらされ続ける事となった。…ちよつとだけ、あの目立たなかった頃に戻りたかと思ってしまったのは内緒だ。

アホみたいな朝の騒動はともかく、学校では穏やかな時間を過ごす事が出来ていた。やはり学校って平和だよ。今日は国語や数学といった普通の授業だから余計にそう思う。ほら、科学とかで実験なんてやり始めたら何が起こるか分からないだろ？ クリクリって魔法薬の調合までやっちゃうからな。

午前の授業が終わり昼休みに入ると、俺はクリクリと轡田を連れて屋上へと向かう。一緒にメシを食うってのもあるけど、それ以上に話をしなきゃならない人がいる。そう、鉄丸…風間先輩だ。

昨日の夜に電話で話した通り、先輩は屋上で俺たちを待っていた。

「こつちこつち！ 場所とっておいたよー！」

見ると、競争率の高いベンチをしっかりと確保していた。ナイス先輩、けど寝そべって確保する姿は滑稽でしかない！

とりあえず先輩の所へ行ってベンチに座る。それぞれが弁当を広げ終わって食べ始めてから、俺はおもむろに話を始めた。

「えーと、今魔王が俺ん家に居るんだけどね」

「もがつー!？」

先輩のエビフライがカツンと鉄仮面にはじかれ俺の弁当箱の中に落ちた。モグモグ…美味しいや。

「ちよつと佐藤君、どういう事!? それとエビフライ返せ!」

「わ、落ち着け先輩! あとエビフライは返せないから代わりに何か持ってけ!」

先輩は鳥の唐揚げとアスパラのベーコン巻きを持って行きました。レートおかしくないかな。

俺は気を取り直して、順を追って説明をする。紗良が魔法世界に渡って幸太を連れてきた事、幸太が辛い目にあっていた事、轡田がママにされそうな事…。呪いを解こうにも力をコントロール出来ない今、幸太に頼んで呪いを解いてもらう事が出来ないと知ると、先輩はガツクリうなだれた。

「うう…やっぱり私はこのままなのね…。まあ、何年後かには呪いが解けるのなら希望はあるけど…」

「悪いな、先輩。…でも先輩は、幸太の事殺すとか言わないんだな。ステラやミラージュは言ったぞ? 俺が怒ったら言わなくなっただけだ」

ちよつと意外だった。一番エキサイトしそうだったのに。

「言うわけないでしょ、そんなの。子供を手に掛ける程人間堕ちちゃいないし、第一殺して呪いが解けるならあの戦いの後に解呪されるわよ。…というか、あの二人も来てたんだ。気苦労耐えないわね、君も」

鉄丸はやっぱいいやつだ。というか、凄く大人だった。でもってあの二人は仲間うちでも評判悪かったんだな。確かに向こうじゃトラブルメイカーとして大活躍してくれたからなあ…

そんな風に話をしていると。それまで黙っていた轡田が口を開いた。

「風間先輩も、不思議な体験してたんですね。僕も行ってみたいなあ」

「…そう？ 散々な目にあつた私を前によくそんな事を言えるわね。って、君も大変な目に遭つてたっけ」

そうだね。轡田は向こうに行つてないのにとんでもない目にあつてたね。俺のせいだ、すまん。

「済んだ事は仕方ないよ。けどさ、純粹に憧れる。剣と魔法の世界で、僕も戦つてみたいなあ…」

うーん…轡田が戦つ？

よし、シミュレーションしてみようか。異世界へ飛ばされた轡田、王国へたどり着いて兵士に…はなれないな。なれたとしても、あのゴリラだらけの兵舎で寝泊まりするんだぞ？ 近衛兵ならまだいいが、一般兵の独身ばかりの兵舎になったら…

「轡田、お前は戦場に出る前に壊れると思つ」

「ちよつ、壊れるって何さ!？」

いや、色々と。最終的には心かな。

「大丈夫です、轡田さんならメイドとして雇ってもらえますよ」

「というか王国に入る前に魔物に捕らえられそう。捕らえられて、やっぱり母乳出してそう」

「なんでそうなるのさ、展開がおかしすぎるでしょ!？」

クリクリも先輩も正直すぎる。で、凄くよく分かる。轡田が向こうに行ったら確実に狙われるだろうなあ。

とにかく、魔物や荒くれ者の多い向こうは轡田には向かないんだよ。お前はこっちでのんびり暮らしてる方が合ってる。そんな風に俺が言くと、轡田は釈然としない顔をしていた。

その後は普通に食事をした。ステラの作ってくれた弁当はかなりの量があったので、先輩や轡田にも手伝ってもらった。二人とも美味しそうに弁当をつつく。小食なクリクリが残した分は俺が食べた。そんな事をしてると…

殺気が俺に向けられる。アラームが大きく鳴り響いた。

「佐藤君、これ…」

「ああ。朝からなんだけど、まさか今仕掛けてくるとは思わなかった」

先輩はさすがに鉄丸だけあって察知出来た。クリクリと轡田は分かっただけ。

殺気は、俺たちが食事をしているベンチから離れた所から放たれ

ていた。屋上にはそれなりに人が沢山いて、それぞれグループを作って食事をしている。そんな中、ぽつかりと空いたスペースで一人で食事をしている男が。殺気はそいつから放たれていた。

「アイツはどこかで見た事あるような無いような」

「私もなーんか頭のどこかに引っかかっているのよねえ…。目の端でチヨロチヨロ動き回っていたような…」

そうそう、そんな感じ。どこで見たかも覚えてないけど、いつの間にか風景の一部に溶け込んでいた。確かあれは…いつからだろう？ 思い出せないな。

そんな風に頭を捻っていると、男は苛立ちを隠しきれないのかスクツと立ち上がると俺たちの方へと歩いて来る。一応俺も立ち上がると、クリクリたちを背に隠して男と対峙した。

「…好き勝手言ってくれるじゃないか、佐藤健司…」

どうやら聞こえていたらしい。男は額に青筋を立てて俺を睨みつける。一見ひ弱な優男、ただその陰険な目つきや表情はやはりどこかで見覚えがあった。うーん…。あ、俺ってよくアダ名をつけて呼ぶ癖あるから、コイツを見てパツと思いついた名前で呼べば当たるかもしれない。

「久しぶりだな、もやし炒め」

「も、もやしって何だ！？ 炒める必要あんのかよ、アダ名で！」

日頃いためつけられてそうだからな。言えないけど。

「じゃあ、白アスパラか。久しぶりだなあ、もう退院したのか？」

「違うよ、野菜から離れるよ！ お前の交友関係はあまりにも謎だよ！ とうるか退院って何だ！？」

うるさいなあコイツ。次はどんなネタを振るうか、と思案していると、痺れを切らした男が何やらブツブツ言い始めた。これは…呪文？

「佐藤君、危ない！」

飛び出す先輩。手にしたのは…マント？

「くられ、佐藤健司！ スーパーデラックスウルトラハイパーミラク…ぶあっ！？」

マントが男を包み込む。そして先輩がパチンと指を鳴らすと、マントの膨らみがなくなって…

パサツ…

地面に落ちた。男の姿は、どこにも無い。おいおい、まさか…異空間に閉じ込めたのか？ この衆人環視の中で。

(ごめん佐藤君、とつさに動いちゃった)

(いや、いい。俺に任せとけ)

小声でやりとりした後、俺は大袈裟に両手を広げてこう叫んだ。

「人体消失イリユージョン、大成功ーっ！ 清涼のイリユージョニスト佐藤を宜しくお願いしまーす…！」

は、恥ずかしい！ けど仕方ないだろ、誤魔化すとしたらこれしか思いつかなかったんだから！

唾然とする周囲の生徒たち。ああ、やっぱり自爆った。顔が真っ赤になってくるが…

パチッ…

パチパチ…

パチパチパチパチパチパチパチパチパチパチッ！！

え、嘘。

「すげー、なんだアレ！」

「人、マジ消えたし！ どうなってんだ！？」

「アイツ、この間テレビに出てた奴じゃん！ うちの生徒だったのかよ！」

凄い反響。うわ、なんか気持ちいいぞ、これ！ みんなが俺を褒め称える…最高だ！

「佐藤君！。消したの私だよなー？」

「いいじゃない、美人アシスタントって事で一緒にドサ廻りしてるって設定で」

そう言つと先輩は顔を赤らめて黙り込んだ。おや？

その後、もっと見たいとせがむ連中の為に、俺は即興で手品をや

り続けた。勿論、身体強化を使ったインチキ手品だ。いや、本来の手品がインチキなのか？ どうでもいいや。弁当箱の瞬間移動（凄い速さで先輩に投げただけ）、消えるイチゴ（指ではじいてクリクリの口の中に放り込んだ。クリクリはむせた）、人体硬化（先輩とクリクリの太ももに頭と足だけを乗せ横になり、その上に轡田が乗るといふもの。怪しい乗り方をしたから女子が歓喜の悲鳴を上げた）、などなど。

注目を浴びた俺は勿論、手伝った先輩やクリクリ、轡田も実に楽しそうだった。うん、こういうのも悪くない。みんなが喜んでくれると、非常に気持ちがいいしね。昼休みの終わりを告げるチャイムが鳴るまで、俺たちは手品で大いに盛り上げるのだった。

…男の事を思い出したのは、実に放課後になってからの事だった。

第十七話 野菜の慟哭

昼休み、ステラの作ってくれた弁当を食べて腹いっぱいになった俺は、午後の授業を概ね寝て過ごした。五限が英語つてのもいただけなかったな。あれのせいで睡魔がレベルアップしやがったから。何度かクリクリがシャーペンでつついて起こそうとしたから、「むにゃ…クリクリ…」と呟いてみせた。途端に突っつき攻撃はピタリと止まって、代わりに暖かな視線が向けられるのを感じたので、俺は幸せな気分で眠りにつく事が出来た。我ながら悪だな。

そんな夢の中、俺は向こうの出来事を振り返っていた。

クリスレア王国に初めて俺が訪れた時の事だ。偶々魔物に襲われていたクリクリを助けた俺は、命の恩人という事で王宮に招かれた。そこで俺の活躍を何十倍にも膨らませてクリクリが説明するもんだから英雄視されて目をつけられ、あれよあれよという間に俺は王宮の兵士に仕立て上げられてしまったんだよな。魔族との戦いで疲弊していた王国の、期待の新人兵士。余計な注目を浴びてウンザリしながらも、俺はそれなりに楽しい毎日を送っていたような気がする。

そう、兵士としての毎日は今にして思えば中々楽しかった。兵士たちは皆いい奴らばかりだったし、俺を鍛えてくれた兵士長は人間的に尊敬出来る人だったしな。でも…なんか面倒なイベントがあったような。なんだっけ？

確かクリクリが関係していたような。そうだ、クリクリの婚約者とかいう奴が現れて俺に喧嘩をふっかけて来た事があったな。同盟国の王子とかいう奴だ。政治的に面倒な事になるからと、兵士長たちは表だって逆らわないようにしていたような。そんな中喧嘩をふ

っかけられて、最初は俺も頭を下げたんだけど。途中でキレてぶん殴っちまったんだよな。

それからがまあ大変。落とす前つける為にバカ王子の国の兵士たちと一人で模擬戦やる羽目になって、集団リンチを受けたんだ。これ以上事を荒立てたくなかった俺は必死で耐えてたんだが、話を聞いてかけつけた兵士長や仲間の兵士たちがぶちキレて、ちょっとした戦争が繰り広げられたんだよな。見かねた俺がフルパワーで戦って、向こうの兵士たちを全員戦闘不能にして…隠していた実力がバレたんだ。で、その一件が王様の耳に入り魔王討伐メンバーに選ばれる、と。

振り返ってみると、なんともバイオレンスに満ちた生活だった。さすがにもうあんな生活に戻りたいとは思えない。しかし…その騒動のきっかけとなった王子の顔、最近見かけたような。たしか…昼休み！

「思い出したーっ！」

ガタン！…と音を立てて俺は立ち上がる。気づくと、周りには呆然としたクラスメートのいる教室。みんな、啞然として俺を見ていた。あれ？

「…佐藤、何を思い出したんだ」

見ると、そこには生真面目で堅物な性格の社会科教師の松下先生が。やべえ、授業中だったのかよ！ それもいつの間にか六限になつてるし！

「佐藤、勿論この授業に関係のある事なんだろうな？」

「え、いや、あの……」

忘れちまったよ、あまりのショックで！ チクショー、周りの連中もクリクリ以外は笑ってるし……えーと、この授業に関係ある事……。松下先生の事でもいいか。」

「先生に関する事を思い出しました」

「……俺に関する事、だと？」

先生の顔色が変わる。まあいいや、言っちゃえ！

「あれは半年ほど前、千代バスセンター近くの映画館での事です。当時、映画館では『子狐物語』という映画をやっていました」

「なっ……!？」

青ざめる先生。クラスメートは、いきなり何を言い出すのかと不思議な顔で俺を見る。

「物語がクライマックスにさしかかって、子狐が親狐と再会するシーンになると、一際大きな声で泣く男の人がいました。一緒に来ていた奥さんらしき人に背中をさすられて、娘さんらしき女の子にも頭を撫でられながら、その人はただひたすら泣き続けていました」

「お、お前、見ていたのか!？」

自分からバラしちゃった。先生ごめんな。あと、皆も笑うな。キレると怖いんだ、この先生。

「俺はその光景を見ながら、なんて暖かい家族なんだと感動しました。黒板に『少子化問題』と書かれています、先生のような人が沢

山いたら暖かな家庭も増えて、そうした問題も解決されるのでは、
と思いました。以上です」

「無理矢理授業と繋げるんじゃないっ！ もういいから座れ！」

ラッキーお咎め無しだぜー いやあ助かった、課題なんて出さ
れたら大変だからな。しかし先生、顔真つ赤だな。本当にごめんね、
先生。俺はつくづく悪人だよ…そんな風に心の中で謝りながら席に
座ると、隣の席のクリクリが小さな声で尋ねてきた。なんだ？

（健司様、その映画はDVDになってますか？）

お前、DVDとか知ってんのかよ。順応早いな。

（もう発売されてる。Blu-rayなら特典で追加シーンが15
分もあるぞ）

（なる程。要チェックですね）

なんの話をしてるんだ、俺たちは。目が冴えたから、ちゃんと授
業受けないとな。えーと、さっきは何を思い出したんだっけ？ ま
あいいか、忘れるくらいなら大した事なかったんだろっ。

俺は教科書を開いて授業に集中した。

1日の授業を全て終えて掃除も済ませると、俺はクリクリと一緒に玄関へと向かう。そんな俺を呼び止めるのは轡田だった。

「佐藤君、忘れてる事あるでしょ」

ジトツとした目をしている。なんだよ、怖いぞ？ 轡田に金借りたりなんかしてないよな…

「…あ、健司様、あの男の人です。理沙さんが消してしまった…」

「ああ、モロヘイヤみたいな奴！ そうだ忘れてたよ、先輩に言うて出して貰わないと！」

忘れてた忘れてた！ 可哀想に、あれからずっと異空間に取り残されたままか！

「僕は予定あるから早く帰らなきゃならないんだけど…」

「いいよ、轡田は関わらない方がいい事だから」

俺がそう言くと、轡田はホツとしたような表情をして先に帰って行った。うん、アイツは荒事には関わらない方がいい。多分、あの男は俺を今まで以上に恨んで襲いかかって来るだろうからな。

「健司様、それでは理沙さんの所へ行くんですね。先に電話で連絡しましょうか」

「そうだな。もしかしたら生徒会の仕事してるかもしれないし」

クリクリが携帯電話を取り出す。そう言えば俺、クリクリの携帯電話見たことないな。番号は知ってるんだが…ん？　なんだそりゃ。クリクリが取り出したのは、何だか緑色をしたフサフサした物体だった。それを撫で撫ですると、物体は「キュ〜ン」と鳴いて…つて、オイ！

「クリクリ、それは何だ」

「え？　何って携帯電話です」

無理があるだろうそれは。俺にはデツカい毬藻にしか見えない。で、なんか鳴いてるし…怖いって。

「健司様が市販のデコレーションのシール等はやめた方がいいと仰ったので、私とステラで魔法を使って変質させてみました。…可愛いでしょう？」

「あ、ああ…。斬新で良いと思うぞ、うん」

可愛いでしょう、という言葉に反論を許さない力があつた。怖くて足が震えた。

そんな俺をよそに、クリクリは毬藻を撫で撫でする。タッチパネルか。そしてモコモコした毛の中で素早く指を動かし、それを耳にあてる。プルルル、という音のかわりにキュッキュッキュツ、という鳴き声が聞こえた。…これ、誰かに見られたら騒ぎになるんじゃないかな。

「…あ、もしもクリスマスです。今、お時間宜しいでしょうか。はい、お昼の件で…」

離れていてもよく聞こえる、先輩の高い声が響いてきた。どうや

ら先輩も忘れていたようだ。

「は、はい、そうです。じゃあ、これからお伺いしますね」

電話を切る。毬藻は「モキユ」と言っただけでカバンの中へ入って行った。…自分で動けるのかよ。

「健司様、今日は生徒会の活動は無いみたいです。屋上に来てほしい、という事でした」

「分かった。じゃあ、待たせちゃ悪いから行こうか」

とりあえず毬藻の事は忘れよう。俺は今見た事を頭の隅に押しやり、屋上へと向かった。

屋上には先輩以外には誰も居なかった。いつもはイチヤついでる奴やプラスバンド部のやつが練習してたりするんだが運がいいな。

「遅ーい、佐藤君！ 人払いなら私が済ませちゃったわよ、もう」

生徒会権限かよ。仕事が早いっえに強引なのはさすが鉄丸だな、絶対いつか痛い目みるぞ。

先輩は俺たちが到着すると直ぐにマントを取り出した。この煉獄

のマントは、誰かを閉じ込める以外に周囲を異界化するなど、いろんな使い方があつた。今、先輩は周囲を異界化して一般人からこの屋上を隔離した。そしてマントを地面に広げると、そこに人一人分の膨らみを作つた。

「解放」

先輩が呟く。そしてマントをめくると、そこには涙と鼻水で凄惨な事になつてゐる男の姿があつた。…つて、汚いなオイ。

「うゝあゝあゝあゝ！ 人だ、人がいるよおおつ！」

俺たちを見ると、ガラガラ声でそう言つて涙を流す。あゝ…、誰も居ない学校をさまよつてたのか。さすがに可哀想だ。男は泣きながら駆け寄つて来て…つて、おわつ！ すがりつくな気持ち悪い！

「分かつた、分かつたから落ち着け！」

「怖い…つ！ 怖がつだよ おおお！」

俺はお前が怖い！ 轡田みたいな男の娘に抱きつかれて理性が崩壊するのも怖いが、まるつきり男つて奴に抱きつかれても怖いな。しかし…凄く見覚えのある光景だ。泣きべそかいて抱きついてくる奴が、確かに向こうの世界にいた。…思い出したぞ。

「お前：長ネギ王子じゃないか！ 髪の毛が黒かつたから分からなかつたぞ！」

「そ、その名前で呼ぶなあああ！ うわああああんつ！」

俺が長ネギ王子と呼ぶと、クリクリと先輩も「ああつ！」という

声を上げて驚いていた。そう、コイツはクリクリの婚約者だった男。隣国の王子、長ネギだった。白い細長い身体に緑色の髪の毛だったから、とっさに思いついた名前だ。本名は…忘れた。

しばらくして、長ネギが泣き止んで落ち着いてから俺は何故こちらに来たのか尋ねた。答えは案の定、クリクリを追いかけるといふもの。しかし気になる事が一つあった。

「お前、どうやってこっちに来た？ 最後の戦いの時居なかっただろ」

「い、いたよ！ 後ろの方で魔法の弾丸を磨いていたじゃないか！ 磨いていた…。何も仕事を回して貰えなかったのか。」

「だから、神様に言ったのさ。僕にも願いを叶えてもらう権利があるって。それでこっちに来たのさ」

……………。

まあ、コイツらしいと言えばコイツらしいな。

「で、今朝俺に殺気ぶつけて来たのはクリクリと一緒に登校したからか」

そう言つと、長ネギは思い出したかのように俺を睨みつけた。

「ああ、そうさ！ クリス姫に相応しいのは僕だからな！ 君のような身分の低い人間が隣に立つのは許せない！」

そして、得意気に笑つ。

「此方での僕は向こうと同様高貴な血筋の家系、という事になっている。大企業の社長の息子でもあるしね。君のような一般人とは違うんだ！ 向こうと違ってこっちの世界は金の力が物を言うだろ、だから今度こそ君を金の力で倒してクリス姫を僕の物にする！！」

うわぁ…。

そんな最低なセリフを、よりもよってクリクリの前で言うか。やばい、クリクリ本気で怒り始めてる！ なんかプルプル震えてるぞ！？

「おいクリクリ、よせ…」

『ホーリー・アロー！』

「ふんぎゃあああつ！？」

馬鹿、魔法は使うな！ しかしもう遅い、放たれた魔法の矢は凄いい勢いで長ネギの…股間に命中した。えげつないな。

「この魔法は邪な存在にしか効果はありません。直撃を受けたのはアナタの心が醜いからです。精進なさい」

冷たくいい放つクリクリ。いや、心というなら何故股間に…。

その時、長ネギとクリクリのやり取りを見ていた先輩は、不思議そうな顔で長ネギに声をかけた。

「ねえ、アナタ魔法大国サルジアン王子様で、世界最高の魔法使だって自称してたじゃない。なんで今の防げなかったのよ」

「う…それは…」

股間を押さえながらうずくまる長ネギが、言いにくそうに黙り込む。助けてくれ、という視線を俺に投げかけてきた。…しょうがねえなあ。

「先輩、クリクリの魔法だから受けようとしたんだよ。好きな人から受ける痛みなら、喜びに変わるんじゃないか」

「うわ、何それ気持ち悪い。ただの変態じゃないの」

「ごめん長ネギ。変態になっちゃった。

「ち、違うよ！ 僕は本当は魔法なんて…ハッ！？」

そして自爆した。これは俺のせいじゃないぞ？

クリクリと先輩の視線が、長ネギを射抜く。これは…キツいな。長ネギも言い逃れ出来ないと悟ると、観念して魔法を使えない事をバラした。俺にあれだけ頭を下げて秘密にしてくれと頼んできた事を自分からバラすとか、なんだか可哀想過ぎる。俺は何故だか、コイツが憎めなかった。

「僕は本当は魔法なんて使えないんだ。光を放つ初歩の魔法しか適性がなかった。それがバレると国の恥だから、僕は魔法のかけられた武器や防具、アクセサリを小さい頃から与えられてたんだ。それを使って、あたかも魔法を使っていると見せかける為にね」

「では…私の前で使ってみせた魔法はみんな…」

クリクリが少しよろける。確かにコイツの魔法はそれなりに強力ではあったからな。最初は俺たちも驚いていたんだ。もっとも、後

半は強力な魔族相手に全く通用しなくなってたけど。

「『隣街のあの娘に届け愛の稲妻』はサンダーガントレットの能力だし、『情熱の炎に身を焦がせ僕の子猫ちゃん』はフレイムタリスマンの能力さ。僕は、魔法に関しては全くの無能だよ」

あーあ、言っちゃった。もうヤケになってるなコイツ。見てらんない。

「でも…それでも魔法を使えるって事にして、下げたくない頭を下げて魔王討伐に同行したのは純粹にクリス姫が好きだったからだ！

クリス、僕は本当に君の事が好きなんだよ！」

「……………」

クリクリも、必死な長ネギの訴えに少し驚いていた。まあ、今のセリフだけ聞いたら多少は印象良くなるかな？ 実際は俺が救った町の住人に大金つかませて、自分が救った事にくれと言って回ったり、悲しいほどの小物っぷりを発揮していたんだが。ミラージュの口車に乗って余計なトラブルに首突っ込むのもコイツで、俺が後始末をするのがお決まりのパターンになっていたな。…よく我慢していたな、と自分で感心してしまう。

「こつちの世界は、凄くいいよ。魔法が使えないのが普通だからね。金さえあれば、強者になれる。僕は…今度こそ君を手に入れてみる」

メラメラと瞳に黒い炎が。長ネギ、お前そこまで鬱屈していたのか。俺がもう少し優しく接してやっていたら、ここまで追い詰められなかったのかな。なんとなくそう思ってしまった。しかし…次に長ネギが発した言葉を聞いて、そんな気も失せてしまう。

「クリス、君に佐藤健司は相応しくない。コイツの事は調べあげたよ。本当にちつぽけな中流家庭の人間なんだ、やりようによっては親の働く会社を潰して、すぐに路頭に迷わせる事も出来る」

なんだと…？

身体が一気に熱くなる。俺の家族を…

「無駄です」

俺がキレル前に、クリクリが言った。

「私もそれなりに財力のある家の人間です。対抗手段はいくらでも講じられますよ」

そうだった。クリクリは巨大財閥の娘って事になってるよな。なら、長ネギなんか相手にならないだろう。

「それに：私は健司様と既に婚約しています。アナタの求婚は受けられません。もっとも、人間的にも受け入れられませんけど」

容赦なさすぎだろクリクリ。女って怖いな、こんな全否定されたら男は立ち直れないって。少なくとも、俺は死ぬ。

崩れ落ちる長ネギ。クリクリはそれをただ冷たく見下ろすだけ。

先輩は呆れてため息をつくばかり。いくらなんでも、これは可哀想すぎる。

「なあ長ネギ。クリクリの事は諦めて、しばらくこっちでのんびり過ごしたらいいじゃないか。金持ちなら毎日楽しく過ごせるだろうし、友達と一緒に遊んだりしてたら嫌な事も忘れるって」

そう言つと長ネギは涙を流す。あれ、なんで？俺、なんかマズ

い事言ったか？

「友達、作ろうとしたさ…。けど、出来なかった！ 金持ちっぴがまれるんだな、初めて知ったよ！ ちょっと自慢したくらいでアイツら、変な目で俺を見て…」

あー…地雷だったか。

「じゃあ、昼休み屋上で一人だったのは…」

コクン、と頷いた。

「ハブられて、教室に居づらいから逃げ出したのさ！ 笑えよ、さあ僕を笑えよおおっ！」

長ネギが狂気じみた顔で叫ぶ。俺もクリクリも先輩も、もう痛々しくて言葉を無くすしかない。

長ネギの乾いた笑い声だけが、夕暮れの屋上に響き渡っていた。

第十八話 割と本気で星に願いを

一匹狼が格好いいのは、一人ぼっちでも生きていける逞しさを持っている場合に限る。そうでない場合は、あぶれ者の悲哀を背に、似た者同士で肩を寄せ合って生きていくしかない。それは現実だろうがファンタジーだろうが一緒に、向こうに行つてそうした連中を見た時は「なんて夢が無いんだ」と嘆いた覚えがある。

俺にしたつて、未だに中学生の頃に受けた心の傷は癒えていない。あの頃を思い出すと、今でも辛いし言いよつの無い不安や苛立ちが心を支配する。だから…長ネギの辛さは、多分この場にいる誰よりも理解出来た。俺は笑い疲れて俯く長ネギに声をかける。

「なあ長ネギ。良かったらこれから、昼休み一緒に飯食わないか」

「佐藤君!？」「健司様!？」

先輩とクリクリが驚いて声を上げた。長ネギは…不思議そうな表情をして顔をあげる。

「何故…だい？ 僕は君を攻撃しようとしたんだぞ」

「でも今ん所なんもしてねーだろ」

そう、長ネギは睨んで来たくらいで実際には何もしていない。あえて言うなら脅迫だけど、それにしたつてクリクリの言葉に撃沈して精神的ダメージを受けた。報いは受けている。

「ど…同情かよ」

「うーん、それとも違つんだよなあ」

いや、同情だけど。ストレートには言えないだろ。どう言ったら、平和的に済ませられるだろうか…。

「あのな、向こうじゃお前は貴族で俺は勇者だったりして立場とか色々面倒だったけど、こっちじゃそんな面倒くさい物無いんだよ。だからさ、そういうの抜きにして、一緒に飯食ったり遊んだりしないか？」

「それって…」

「ああ。お前さえ良ければ、友達になつてくれないかな」

そう言つと、長ネギは信じられないといった顔をした。いや、それはクリクリと先輩もか。二人はどちらかというマイナス方向に感情が傾いてるっぽいけど。悪いね。

「ば、馬鹿じゃないか！？ 僕は君を嫌ってるんだぞ！ 君を倒そうとしたんだぞ！」

「まあ、そうだろうけどさ。俺も向こうの事を気兼ねなく話せる男友達がいなかったから寂しかったんだよ。…理由なんて、どうでもいいじゃん。俺馬鹿だから考えるの面倒臭いんだよ」

「う…」

長ネギが言葉に詰まる。しばらく考えてから、自信満々な表情を作つて口を開いた。

「わ、分かつたよ。君がそこまで言つたら友達になつてやるうじやないか！ 僕も将来国を背負つて立つ身だったからな、それくらいの度量は…度量…は…」

ん？ なんだ？

「ううああああうっ！　ありがとう、ありがとう佐藤健司
いいっ！　ぼくわ、ぼくざびじがっただゲホッゲホッ！」

「く、くつつくな！　分かった、分かったから離れる、泣くんじゃ
ない！　あと鼻水服につけるな！」

「な、泣いてなんかいない！　これは鼻水だ！　ち、蓄膿症が、目
にあらわれたただだ、うわああああんっ！」

「鼻水でベトベトになるのは変わらないじゃないか！」

もう大騒ぎだ。それを、複雑な顔で見つめる二人。ごめん悪かつ
たつて。けどさ、放っておけないだろ？　コイツがこのまま除け者
にされてたら、いつか壊れてとんでもない事しそうじゃないか。

俺は抱きついてくる長ネギを制しながら、二人をどう説得したら
いいか言葉を探していた。

長ネギが落ち着いたのは、それから30分くらいしてから的事だ
った。先輩がマントを使って屋上を元の空間に戻すと、空は夕焼け
のオレンジから濃い藍色に変わっていた。携帯画面の時間を見ると
6時を過ぎている。随分話し込んでいたんだな。

「さ、佐藤健司」

「うん？ どうした長ネギ」

遠慮がちに声をかけてくる長ネギ。

「僕はこちらでは緑木皇介という名前だ。だから…出来れば長ネギは止めて欲しい」

緑木？ ミドリギ… ああ、ミドリギ製薬か。凄いな、歴史のある製薬会社じゃないか。神の野郎の世界改変って怖いな。

「分かった。これからはクスリって言う」

「響きが危ないだろ！ 普通に名前で呼べよ！」

そんな風に話していると、それまで黙っていた先輩が話しかけてくる。少し怒ってないか？

「あのさ、佐藤君。ちょっといいかしら」

「え？ ああ、ごめん。こっちで勝手に話進めちゃって」

「ううん、いいの。友達たくさん作るのはいい事よ。相手を選びなさい、と言いたくはなるけど…話はそれじゃないわ」

ん？

「あのさ、婚約って何？ クリス姫と、婚約したの？」

あ…

「クリスマス姫と婚約していながら、昼休みに私に思わせぶりな事言ったりしてたんだ。ふうん…」

え、何それ。昼休み？　　というか先輩何怒ってんの、怖いよ？

「それに関しては私も言いたい事があります」

今度はクリクリか！　　なんで二人とも怒ってんのさ！

「お昼休み、理沙さんに美人アシスタントと言って一緒にドサ廻りしようと言っていたのは何なのですか？　私だって、私だって手品は勉強しています！　選ぶなら私を選んで下さい！」

どんなズレ方だ！　　あれは嘘設定でそんな気はサラサラ無いんだけど…って、今度は先輩か！

「嘘…美人が嘘…そんな気サラサラ無い…」

わーーーーーっ！　　違う違う、そこは嘘じゃない、落ち着け先輩！
ヤバい、いち早く身の危険を察知した俺は長ネギ…もとい、クスリ…いやもうなんでもいいや！　バカの腕を取って走り出した。

「え、何で僕まで!？」

「友達だろ!」

「いや、そんな友達嫌だよ、止めるよ！　離してくれええええ!」

問答無用で屋上の扉を開けて階段を下りる。背後に先輩の「もが
あああつ！」という声と魔法の矢が発射される音を聞きながら、
俺は無事に生きて帰れるかな、とつぶやくのだった。

その日の夜。

何とかクリクリ達をなだめて無事に家に帰ると、何だか家の中が
慌ただしい。紗英さんは異様に沢山の料理を作ってるし、紗良は居
間の片付けをしている。幸太は片付けたおもちゃをまた出していた。
鬼だな。

「なあ…誰か来るのか？　なんか凄いバタバタしてるけど」

「あ、兄さん！　どこに居たのよ、電話繋がらなかったんだよ！」

あー…異空間の中にいたからな。電波は繋がらない。

「あのね、父さんのいる会社が、今度大きな会社と業務提携するん
だって！　それで、そのの偉い人が何故かウチに来ちゃうのよ！」

業務提携…まさか、な。クリクリの会社なわけないよな。大丈夫、
今日話に出ただけでいきなりそんな事になるわけない。一体どんな
人が来るのやら。失礼の無いようにしないと…

そんな事を考えていると、家の入り口のチャイムが鳴る。ピンポーン、と鳴って直ぐにインターホンで確認を取ると…

『父さんだ、今帰った』

「きゃ、あなた！？ 直ぐに出ます、少々お待ちください！」

落ち着け紗英さん、親父相手に言葉使い変えてどうすんだ。自分以外に取り乱してる人がいるとかえって落ち着くもので、俺と紗良は冷静に居間を片付け迎え入れる体制を整える。そして、玄関で「ささ、どうぞ此方へ」という言葉を聞いて気を引き締めた。挨拶をしっかりして、親父に恥をかかせないようにしないと。

パタパタ、と足音が近づいてくる。ガチャツ…とドアが開いて親父が入ってくる。その後ろに現れたのは…

はい？

「む、君は…っ！」

目があった。そして、満面の笑みを浮かべる。長かったヒゲが無くなり金髪も短く刈り込んでいるが、間違いない！ このムキムキでダンディな外人さんは…

「会いたかったぞ義息子よーーーーっ！」

「王様ーーーーっ!?!？」

うおおおお、暑苦しい！ 今日のアレか、男に抱きつかれる日なのか、漢祭りか！ 感情が高ぶると肋骨折れそうなくらい抱きしめるのは間違いないクリスレア王だ！ 第一この筋肉、悲しいけど何度も抱きつかれたから思いつきり懐かしいし！

「ぐえ…王様、ギブギブ…」

「ぬ、ギブミーワンスモア？」

「ノー！ ノーサン…きゆう………」

パタッ…

俺は意識を失った。

クリスレア王。

本名は知らない。俺は単に王様と呼んでいたし、心の中ではクリパパと呼んでいた。恐ろしいまでの身体能力と政治力で、圧倒的に劣勢だった人間側勢力を立て直して、魔族勢力と互角にまで持つていった伝説の王。お前が魔王と戦えよ、と言いたい所だが実際に戦っていたらしい。俺は少数精鋭で魔王の城に攻め行ったが、その間

は国に攻めてきた魔族の軍勢を王様率いる王宮騎士団が退けていたという。一度対戦したけど、身体強化した俺と互角なんだから化け物だと言える。

気合い一つで山を吹き飛ばす、なんてアホみたいな噂が流れるくらい豪快で国民から愛されていた王様。俺を気に入ってたなんて思っても手に入れようとしていた頃はウザかったが、いざ兵士になると待遇はいいしフレンドリーに接してくれるし、愛される理由の分かる人柄だった。まあ、暴走すると手がつけられないからそこらへんは気をつけてたけど。

懐かしい向こうでの出来事を振り返っていると、何やら俺の身体を揺する感触が。ん？ これは…

「パパ、おきて！ パパしんじややなの！」

「幸太あああああつ！」

ガバツと起きる！ 涙目の幸太をしっかりと抱きしめ、俺は叫んだ。

「俺は、俺は死なない！ 幸太の為なら地獄からだって這い上がれるさあああつ！」

「パパ、くるし、パパ…」

パコーンッ！

頭にスリッパがヒットした。

「兄さん落ち着け、それじゃ王様と変わらないでしょ。それと抱きつくなら私にしなさい」

ぐ…結構痛かった。健康サンダルで叩きやがったな。ついでに
前の発言も痛い。

どうやら俺はしばらく気絶していたらしい。現在居間のテーブル
には親父と王様が陽気に酒を酌み交わしている。すっかり出来上が
っていた。紗英さんはお酌係。料理はそれほど減っていなかったが、
出されてる量が多すぎてるのでそう見えただけかもしれない。

「おう、健司弱いな！ 今ごろ起きたのか」

「ふはははは、鍛錬を怠っているな義息子よ！ 素振り千本は欠か
すなと言ったであらう！」

言っつてねえよ、どこの世界のホームラン王だよ。こっちに来て野
球にかぶれやがったな。…って、ちよつとまて！

「王様。王様は、向こうから渡ったんですか？ どうやって…」

「ん？ 勿論神の導きによつてだ。娘が義息子と駆け落ちするとミ
ラージュに聞いてな。急いで駆けつけて神の首根っこを掴んで、私
も向こうの世界へ送れと脅した」

神を脅すとか…

「娘には、世界を渡つた事を隠している。こちらの世界の私に対す
る態度を、どう取つていいか分からず混乱しているからな。反応が
面白いからしばらくは義息子も黙っておいてくれ」

「なんて親だ…」

思わず口に出してしまう。王様は気にせず笑っていた。

その後、俺も食卓について一緒に夕飯を食べながら王様のこちらでの活躍を聞いた。頑張りすぎた紗英さんの用意した伊勢エビやら七面鳥やら、普段食べられないような豪華料理を食べながらだから、ちゃんとは聞いてなかったけれど、概ね話は理解した。

王様はこちらの世界でも王様だった。

神が土台として作った設定は確かに既に大きな力を持つ財閥だったが、実際にその総指揮をとって活躍し始めると王様らしい豪快さで経済界を蹂躪したらしい。詳しい事は俺にも分からないが、世界に影響を与えた人の特集する雑誌の上位に選ばれるくらいの活躍をしたとか。滅茶苦茶だ。

「あの…向こうはどうなってるんですか？ 王様がこっち来たら、向こうの政治は…」

俺が七面鳥を切り分けながら聞くと、王様は何でもないように答える。

「ああ、それならグレッグ兵士長に任せている。あれは人心掌握術にかけては私以上だからな。それとエドマンもついてるから安心だ」

エドマン？

「あ、その人知ってる！ 私が向こうに行った時に世話になったの。なんか、ちっちゃくて白髪を後ろで括ってるオジサン」

紗良が言う。そう言えばコイツも向こうに行っただっけ。えーと、白髪でちっちゃいオジサン…

「料理長のエドマンさんじゃないですか！ なに考えてるんですか王様!？」

「わははははは、アイツはギャンブルが強くてな！ グレック兵士長に強運の持ち主がつけば鬼に金棒であろう!」

ダメだ、このオッサン。ノリで何でもかんでも決めちゃうのは変わってない。けど、そのノリが悉く良い結果を出してきたから…どうにかなっちゃうんだろうな、今回も。

「義息子よ、そう心配しなくても良い。向こうはもう魔族も大人しくなっって平和だからな。むしろ、今はこちらの世界を心配せねばなるまい」

「…え?」

こちらの世界?

もしかして魔王の事か、と聞くと首を振る王様。ならば新しい敵か、と聞くとまたも首を振る。じゃあ一体何だと聞くと、王様は一枚の紙を俺の前に渡した。これは…なんだ、ウチの学校の学級便りじゃないか。えっと、書かれているのは明後日からの林間学校だな。

「林間学校が何か?」

「何か、ではなああああああいつ！！」

王様が叫ぶ。やめてくれ、近所迷惑だ！ 幸太もビックリして俺に抱きついてきたじゃないか。というか人んち来てやりたい放題だな！

「よいか、私の可愛いクリスが右も左も分からぬ山の中で男たちと共に一つ屋根の下で寝泊まりするのだぞ！？ メイドも同行させられない中、頼みの綱は義息子よ、お前しかないのだ！ 今日はおつちやけこれを言いたくて来ただけだったりする」

ぶつちやけん。というか多分この王様は林間学校の漢字を間違えて認識している。

「まあ、そんな物騒なもんじゃないから大丈夫ですよ。俺がついてるし、姫を危険な目には合わせません」

「う、うむ！ よく言った義息子よ！ それでこそ勇者ケンジ、娘を宜しく頼むぞ！」

安心したのか、王様はホツとした顔をして酒を飲み干した。ありやウイスキーか。酒強いな王様…。そんな風に見ていると、何やら俺を見つめる視線が。それは親父だったり紗英さんだったり紗良だったり…。なんだ？

「ねえ、兄さん。さっきから『義息子』ってなんの事？ まさかとは思っけど…」

「父さんもお前の口からちゃんと聞いておきたい。何があったか話さない」

二人が詰め寄ってくる。紗英さんはニコニコしながら此方を見ていただけだが、期待に目を輝かせていた。聞く気満々じゃないか。幸太は腕にしがみついてウトウトしていた。すまん、幸太。もう一回うるさくなるわ。

俺は覚悟を決めた。

「俺、結婚の約束したんだ。相手はクリス姫、この王様の娘だよ」

しーん、と静まり返った部屋。次の瞬間、爆発したかのような騒ぎになる。

「でかした健司いいいっ！」

「おめでとう健司さああああん！」

「兄さんの馬鹿ああああああああああつ！」

紗良の音が一番大きかった。王様はウンウンと頷く。幸太はビクッと身体を震わせて目を覚まして…また寝た。強いな。

この日は結局、王様が帰るまでずっとクリクリとの婚約話ばかりする事となった。まあ、仕方ないよな。それくらい結婚って大変な事だし。紗良は泣きながら俺にしがみついて「兄さんの馬鹿」を繰り返して、どさくさに紛れて記憶を読もうとしたので頭をぶっ叩いてやった。親父は親父で王様と酒を酌み交わしながら泣いてるし、紗英さんは俺とクリクリとの馴れ初めをしつこいくらい聞いて来た。喜んで大騒ぎしてくれるのは嬉しいんだが、近所迷惑を考えて欲しい所だ。

夜中の11時過ぎ。あのおかしな運転手ジエイコブの運転する高級車に乗り込んだ王様は、帰り際にこんな事を言った。

「義息子よ、お前は这个世界をどう思う」

「世界…ですか？」

「うむ。私のいた世界をファンタジー…架空の世界だと思うかね？私に言わせれば这个世界こそがファンタジーの世界だよ。魔法抜きで、魔法が遠く及ばない力に辿り着いている。戦争は形を変えて、今も世界中で行われている。魔王は居ないが、決して平和などではない。敵は分かりにくい形でいつも戦いを挑んで来ているからな」

そこまで言って、王様は俺に笑いかけた。その目には、何やら凄惨な炎が燃え盛っているように見える。

「面白いではないか、这个世界！私は私のやり方で、这个世界に戦いを挑むぞ！ 見ているがいい義息子よ、私は这个世界に今一度王国を築いてみせよう！」

わははははは、と近所迷惑かえりみない大声で笑うと、王様はジエイコブに合図を出す。呆気にとられた俺に手を振ると、車は勢い良く夜中の町を走り去って行った。

えーと…

俺、止めた方が良かったのかなあ？

俺は自分の住むこの世界が滅茶苦茶になりませんように…と夜空

の星に割と本気で願ってから、自分の部屋へと戻るのだった。

第十九話 ハイテンション

衝撃の一夜が去り、清々しい朝がやってくる。窓の外では小鳥が鳴き初め、遠くから車の走る音が聞こえた。こんな田舎でも、朝の6時を回るとそれなりに車の交通量が増える。俺は寝ぼけ眼をこすりながらベッドから出て、制服に着替えた。

「うにゅ……」

鏡を見ながらネクタイをしめていると、ベッドで眠っていた幸太が目覚めます。

「パパ……？」

「おう、幸太おはよう。まだ寝てていいんだぞ？」

「ううん、おきゅ。おはよ、パパ……」

言いながら……寝た。仕方ないな、と思いながら俺は布団をかけ直してあげる。昨日の騒ぎで疲れたんだろうな。普通はそうだろう、俺みたいに一晩寝たら完全回復みたいな体質じゃないと耐えられないと思う。つくづくこの能力は素晴らしいと思うよ。

台所に降りてくると、そこには誰も居なかった。テーブルの上にメモ書きがあり、そこには体調不良で食事の用意が出来ない、という内容の文があった。そう言えば酒弱い癖に、紗英さんは親父や王様の酒に付き合ってたっけ。

俺は久しぶりに自分でトーストを焼いて朝食とした。勿論紗良の分も焼いてやったよ。一応兄だからな。偶にはこれくらいしてやらないと。

「おはよう〜…」

「ん？ ああ、おはよう。紗良、お前どうしたんだ顔真っ赤じゃないか」

階段を降りてきた紗良は、何だか顔が赤い。少しよろけていた。

「大丈夫：兄さんオカズにしてただけだから…」

「無理して変なボケしなくていい、ちよつとジツとしている」

フラつく紗良を支えて、おでこに手を当てる。熱い。こりゃ風邪だな：って、目を閉じて唇突き出すんじゃない！ いらんボケはするな！

「学校は休め。こんなんじゃ登校中に倒れちまうだろ」

「うー、今日は体育ないから耐えられると思うけど…」

強情なヤツだ。俺は紗良を問答無用で抱きかかえると、階段を上がって紗良の部屋へと入る。ベッドに紗良を寝かせると、肩までしっかり布団をかけてやった。

「ちゃんと寝てさっさと風邪を治せ。学校には俺が電話しとくから」

「う…ありがとう…」

いつもと違って弱気な紗良。少し可愛いと思ってしまったのは内緒だ。

俺が部屋を出ようとする、紗良は弱々しい声で俺に声をかけた。

「兄さん…」

「ん？」

「兄さんは、どこにも行かないよね…？」

……………。

昨日の事、やっぱり気にしてるのか。俺がクリクリと結婚したら、向こうの世界に行つてそのままサヨナラだと思つたんだろう。

「ああ、行かないよ。少なくともお前を置いて出て行く事は無いと言つておく」

寂しがりやだからな。向こうの世界に適性があるなら遊びに行く事も出来るだろ。家族バラバラそれっきりなんて事にはならない。

「え…？ 兄さん、それって…」

「じゃあ、おやすみ紗良。早く元気になれよ」

これ以上はキリがないので、俺はそこでドアをしめた。階段を下りる時、部屋から「よっしゃああああ！」というおよそ乙女らしくない声が聞こえて来たが、何だったのだろうか。

登校すると、教室は昨日とは違うざわめきに包まれていた。昨日は俺とクリクリの話題だったが、今日は明日からの林間学校の話題だ。以前からチラホラと話題にはのぼっていたが、いよいよ明日だという事から話のネタになっていたのだろう。

席についた俺に、早速話しかけて来るクラスメート。あれ…轡田でもクリクリでもないぞ。

「おはよー佐藤！ お前明日の準備した？」
あまり話した事の無い男子だった。他、女子も何人か一緒になってこちらに来る。いわゆる、クラスに一つはある男女混合のグループだ。

「ああ、準備はしたよ。でも二泊三日だろ？ そんな荷物多くないし楽だったよ」

「いやいや、甘いつて！ 大事ながあるだろ！」

大事？

不思議な顔をしていると一緒に来た女子も口を揃えて言う。

「林間学校って毎年花火とかしてるでしょ。今回もやるみたいだし、ほら肝試しのお化け役とかは被り物買ってたりにしてるよ」

「バスの中で食べるお菓子もさ、三百円どころか三千円近く使っちゃうよね。携帯の充電器も用意したり、大変じゃん？」

お前ら何しに行くんだよ…。

「俺、何の係にもなっていないからなあ。あ、漫画もつてくかも。モンスター・キートンとか」

「え、何それ読みたい！ バス途中で貸してくれ！」

適当に話を合わせると意外に食いつきが良かった。その後は漫画の話で盛り上がり、轡田やクリクリが教室に来て話に加わるといつの間にかクラス中の話題が漫画の話になっていた。林間学校はどこに言ったんだろう。まあ、楽しいからいいけど。

朝のホームルームが始まるまで、俺たちは漫画の話で盛り上がり続けるのだった。

「…とまあ、こんな事がありました」

「う・ら・や・ま・しいやああひやあああつー！」

長ネギの絶叫が屋上に響き渡る。今は昼休み、朝の出来事を話している所だった。

「何だよ自慢かよこのリア充が！ やっぱりお前なんか嫌いだ、皆でキャツキヤウフフしていればいいんだチクショー！！」

「お前も花火参加するか？ 先生の監視はあるけど自由参加で班と関係ないし」

「犬と呼んでくれてもいいぞ！ ワンワンハツハツくうくうんガルルルル！」

「どんな変わり身の速さだ。周りの人が退いてるじゃないか。でもって飼い主に牙むいたろ、最後。」

今日、屋上に来ているのは俺と緑木：長ネギと、クリクリと先輩。轡田は他の友達と食堂で食べている。うん、長ネギと顔を合わせるのは若干危険だから丁度良かった。

「でも残念だなー、ウチら三年は受験だからそんなイベント無いし。二年っていいよね、修学旅行とか林間学校とかイベント目白押しで先輩がエビフライを食べながら残念そうに言う。先輩は去年体験しただろくに。というかエビフライ好きだな。」

「健司様。少しお聞きしたいのですが」
クリクリが声をかけてきた。クリクリはやたらと野菜の多い弁当だ。ウサギみたいだな。

「林間学校自体の意味は分かったのですが、その行き先がどんな所なのかよく分かりません。写真などで見ても今一ピンとこないんです」

ああ、ネットで調べたのか。

「行き先の六頭山つてのはここから南の方にある山だよ。有名な登山コースがあつて、地元の間人なら絶対一度は登る山。俺も遠足で五回くらい行つてるし」

俺は俺で肉とウナギと長芋だらけの弁当を食べながら言った。ちなみに飲み物はママシドリンク。ステラ、この弁当の意味は何だ…。

「はあ…そこでキャンプをするわけですね」

「いや、宿泊施設はちゃんとした所に泊まるから、単に遊びに行くだけだよ」

「…フフフ」

俺がそう言うと、先輩が急に含み笑いを始める。なんだなんだ、どうしたんだ？

「どうした先輩。禁断症状が出たんだつたら、長ネギに言えばクスリを分けてもらえるぞ」

「バカ、人聞きの悪い事言うな！ 私はそこまで人間墮ちてない！」

「その言い方じゃまるで僕が底辺みたいじゃないか！ 巻き込まないでくれ！」

ああもう、突っ込みが二人って面倒くさいな。俺はとりあえず長ネギを無視して先輩に聞いた。

「で、どうしたの。六頭山の説明、どこか間違つてた？」

コホン、と先輩が咳払いする。

「いいえ、概ね合ってるわ。けど、単に遊ぶだけというなら間違いない。あれはあれで結構大変なんだから」

大変？

「集団行動で、ぱつと見遊びみたいな事するじゃない？ けど、そうした中でちゃんと集団行動出来るかどうか先生たちはチェック入ってるのよ。そこでしっかり動けてたら内診評価上がるし、三年のクラス分けでもSクラスに入れる。」

林間学校は一年生も一緒だけど、一年生ならリーダーシップを取れる人間かどうか見極められて、認められたら二年になると同時にクラス委員を任されたりするの。はしゃいで問題行動をとる人間は即座にチェックされて、要注意人物としてマークされる…要は、先生たちが生徒を観察する場所ってワケ」

うわー…。

先輩が言つと凄いエリート主義的な目線で言ってるっぽいな。実際、先生たちから絶大な信頼を得ているからそうなんだろうけど。

「それにね、宿泊施設になっている所がまた色々あってね…」

まだあんのかよ。

先輩は物凄くキラキラした顔で話し始める。ああ、何気に解説好きなんだな、この人。俺は仕方なく弁当をつつきながら先輩の話を聞いた。ハッキリ言って、聞かなければ良かったと思っただけだな。

先輩の話では、その施設には幽霊が出るという。アホみたいな話

だが、去年先輩のクラスが肝試しをする際に実際に出たらしい。

肝試しのグループ、何故か一人多いメンバー。いつの間にか増えている人数にパニックって、必死にゴールを目指す。そしてゴールに辿り着いて周りを見渡すと、最初のメンバーしか居ない…。ホツとして胸を撫で下ろしたその時、風に乗ってすすり泣くような声が。

私も、つれてって…

「キヤアアアアアアアアアアアアアアアアアツ!!」

うわっ、なんだ、って長ネギかよ!

「やかましい、すがりつくなアホ!」

「だって、怖いじゃないか! 幽霊だぞ、死んじゃってんのに現れるんだぞ!」

「お前、散々向こうで戦って来ただろ! 何故そこまで怖がるんだ!」

「あの時はクリスの後ろに隠れてたんだよ! アンデッドはクリスの専門分野だから、花を持たせてやったのさ!」

最低だな。骸骨の群れとか、クリクリを盾にしたのかコイツ…。ほら、クリクリも怒ってるじゃないか。いいぞ、思いつきり殴って

先輩が高校生活の心得について熱弁振るう様を眺めながら、俺は心の中でため息をついていた。

久しぶりに何事も無く帰宅すると、俺を迎えたのは意外な事に紗良だった。風邪はもう治ったのか、紗良は俺が玄関のドアを開け「ただいま」と言い終わらないうちに駆け寄ってきて、玄関手前の床に膝をつき、三つ指ついて…

「おかえりなさい、あなた」

「…なんの真似だ」

しかし俺の問いに答えず、紗良は強引に続ける。強いな。

「今日は先にお風呂にする？　お夕飯にする？　それとも…」

「たわし」

「た・わ・しっ！…って、そんなボーボーじゃないわよ馬鹿あああああっ！…」

「なんの話をしてるんだ、落ち着け阿呆！」

「なんでこんなにテンション高いんだ。風邪じゃなくて別の病気だったのか？ 色違いの救急車にお世話になるような…」。

「だって私も兄さんのお嫁さんだもん！ 新妻に相応しい振る舞い方をネットで調べたら、こつこつ風にしるって…」

「なんじゃそら。お嫁さん？」

「朝、言ったもん。私をつれてくって…向こうでお嫁さんって」

「いや、そりゃ一緒に遊びに行つていいよ、って事だろ。お嫁さんなんて一言も言つてないハズだが」

「ぶるぶる…」

「紗良が震える。ヤバい！」

「死ね、結婚詐欺師！」

「ブウンッ！ バスッ！」

「あぶねっ！ なんで持つてんだよ！」

「金属バットがカバンを直撃する。」

「うるさい、乙女心を弄んだ罰で死んじゃえーっ！」

「乙女はバットなんて振り回さねー！」

「すぐさまバットを奪い取って取り押さえる。バタバタもかく紗良をホールドしながら、俺は今日何度目か分からないため息をついた。」

いい加減…胃に穴が空きそうだ。

…もつとも、一晩寝たら治っちゃうんだろっけどな。目の端に涙を浮かべながら、俺は暴れる紗良を抑え続けるのだった。

第二十話 林間学校へ行こう

良くある話だけど、今日は林間学校だからとジャージ姿＋スポーツバッグ持参で登校する時。実は林間学校が今日じゃなくて明日だったら…なんて思ったりしないだろうか。俺は毎回心配になる。俺一人だけジャージだったら恥ずかしくて死にかねないだろ。だから、登校中と同じ格好のやつを見つけるとホッとするんだよね。まあ、もつとも…

「健司様、どうしたんですか？」

「きつとお嬢様の美しさに見とれているのでしよう。年頃の男子が女子のジャージ姿に萌えるのは普通の事です」

車の中で眺める事になるとは思わなかったけどな！ 家出た途端に拉致られるとか意味不明過ぎるだろ、せつかく幸太の「いつてらっしゃい」に萌え転がりながら家を出た所に拉致とか、奈落の底に転がり落ちた気分になったわ！ まあクリクリのジャージ姿は確かに素晴らしいから一気に天国まで昇天しかかったけどな。それにしてもこれから林間学校つてのに、クリクリは何故荷物が少ないのか。林間学校舐めてると痛い目見るぞ。

「え？ あの、パンフレットに郵送可って書いてあったので、着替え等は先に送りましたけど…」

え？

「少なくとも、私に声をかけて下さった方たちは皆郵送を使ってますよ」

あれ、嘘……

「旦那様のように全てひとまとめにしているの方が珍しいと思いますけど。私が調べた結果、クラスの女子十割、男子九割九分が郵送を利用しています。…つまり、旦那様だけが大きな荷物を持っている事になりますね」

……。

死のう。

「け、健司様、ダメです、ドアを開けないで下さい危ないですから！」

「死なせてくれ！ 生き恥をさらすくらいならいっそ殺してくれ！」

「止めて下さい旦那様、私達の世界を救った英雄が荷物を送り損ねて自殺とかワケがわかりません！」

泣きながら外に出ようとした俺をステラが押し留める。クリクリとステラに挟まれつかの間の幸せに浸った俺は途端に冷静を取り戻した。

「…悪かった、取り乱してしまったな」

「いえ、私も健司様に伝えるのを忘れてましたから。次からは気をつけますね」

こんなアホな俺に真面目に付き合ってくれるクリクリは天使だな。明らかに悪いのは俺だけなのに。

「旦那様、手提げカバンを用意しましたから、其方に今日必要な荷物を移して下さい。後は、私達が宿泊施設に届けておきますから」
ステラ……お前も天使か。ありがとう、本当に助かる！ だから、黙っておこうと思っていた事を教えてあげよう。

「ステラ、お詫びに一つ教えよう」

「はい？」

「またおっぱい出てるよ」

「きゃあああああつ！？」

俺を取り押さえる時にまたボタン飛んじやったんだね。ごめん、そしてありがとうステラ。朝から元気になりました、うん。

「H A H A H A！ 興奮シテシマッタ！」

そんな報告いらん！ というか前見て運転して、危ないから！

そんな風に奇妙なドタバタ騒ぎで始まった林間学校初日。俺は定刻通りに学校につき、手荷物片手にクリクリと校門前に歩いて行く。

注目を浴びるのは仕方ない、これは慣れていかなきゃならないだろう。

校門前の広いスペースには、大きな観光バスが数台駐車していた。その近くにクラスの連中が沢山集まっている。皆、やっぱり荷物は少なかった。本当にステラに感謝しないとな。

「おーい、佐藤ー！ こっちこっちー！」

「クリスさん、おはよー」

クラスメートが俺たちを見つけて声をかけてくる。少し前なら考えられなかった光景に少し感動しながら、俺たちは集合してる場所へと走っていった。

そして、適当に時間を潰していると出発の時刻がやってくる。担任のブルバばあの指示で点呼をとると、皆は我先にとバスに乗り込んで行った。

バスの中、右と左の列に男女で別れる以外は席順など決まっていない為、皆は仲の良いグループ同士で固まり会う。俺は自然と轡田と隣同士になった。

「轡田、お前バスとか平気か？　なんか顔色悪いけど、体調悪かったら言えよ」

「うん……大丈夫だよ、乗り物には強い方だから。ありがとう」

本当だろうか。何だか心配だ。今日は初日で体力の必要なハイキングがあるからな。注意してみてやった方がいいかもしれない。

バスは高校の近くにあるバイパスに乗ると、そこから磐越自動車道に移って南下する。安田インターチェンジで降りてからは国道290線を北上すれば目的の六頭山の宿泊施設が見えてくる。時間にして一時間半くらいだろうか、その間、バスの中は過剰なまでに盛り上がっていた。

これは、まずバスガイドが悪かったんだと思う。

ハッキリ言ってバスの中なんて皆友達同士で話したり携帯音楽プレイヤーで音楽を楽しんだりしたいわけだ。俺なんか漫画本持ってきてたしな。しかし何故かこの少しお年を召したバスガイドは、さも盛り上げるのは自分の仕事だとばかりにマイク片手に観光案内を始める。最初は仕方なく皆も付き合っていたが、段々とテンションが落ちてくるのは仕方ないだろう。けど、空気の変化に鋭敏なバスガイドは恐るべき手段に打って出た。

カラオケ、である。

ウザい。限りなくウザい。誰がこんな場所で歌なんか披露するかと白けようとしたその時、担任のブルバばあの目が光るのを俺は見逃さなかった！

脳裏に蘇る、先輩の言葉。

先輩は言った、林間学校は先生が生徒を観察する場所だと。ここで盛り下がったままなら、皆の評価が下がる事にならないか。俺の中の何か、疼き出した。やめるやめる、これだけはやめる！

「一番、佐藤健司、歌わせていただきます」

ああああああほおおおうつ！

馬鹿馬鹿、何やってんだ俺は！ クラスに一人は居る痛い子じゃないか、これじゃ！ 勇者体質というか今回に限っては自殺志願体質だぞ！

しかし、恰好の獲物を見つけたとばかりにバスガイドは目を輝かせる。何の曲を歌うのかと聞かれて、俺はこう答えた。

『笹団子フェアミリー・旅情編』

最悪だ。これはローカルな子供向けソング…というよりCMソング。ネタで歌う曲であって、俺みたいに根っからの人気者じゃない地味な奴が歌った所で寒くなるだけだ。俺は絶望しながら周囲を見渡したが…

「ぶちかませ、佐藤！」

「清涼魂見せたれ佐藤！」

あれ？ 何かリアクション激しいぞ。

何故かバスの中はヒートアップ。曲のイントロが流れるや否や、手拍子までつきやがる。クリクリや轡田まで……くっ、こっとなったらやるしかない！

身体強化『喉』

こんな使い方した事ねえけど、やってやる！ 俺は気合いを入れてマイクのスイッチを入れた。そして……

『ささだんごお〜〜〜う』

物凄い美声が出た。

うおおおおおつ！？

クラスメートが驚愕する。そりゃそうだ、こんなネタソングに演歌並のこぶし効かせて伸びやかに歌ったらビックリもするだろ。歌ってる本人がまず驚いてんだから。

俺は、歌った。

歌詞は本当に馬鹿みたいなもので、旅先で生地となる餅が色んな餡子（女性）と出会って恋をして笹団子（子供？）を作るというもの。観光協会か何かで作ったんじゃないかな。

「色んなう女と寝たけれどおゝ、笹の味などしやしないいゝ！」

もう完全に商品イメージ破壊している歌詞なうえに子供が聴くよ
うな歌ではない。しかし俺は恥を捨て、歌いきる。この喉に、クラ
スの評価がかかっているのだから！

「笹に包まれ今日もまた 見知らぬ女の餡を抱く だんごだんごさ
さだんご、俺はヨモギ餅いいい！」

ウオオオオオオツ！

パチパチパチパチパチパチパチパチパチパチパチパチ！

…分かった、お前ら馬鹿だろ。

馬鹿で良かった、これで盛り下がったら俺は死ぬ。

因みに笹団子は笹で包んだヨモギ餅だ。決して笹を練り込んだわ
けではないからパンダに食べさせたりしないでくれ。

バスはその後、次々とネタソングを披露する場と化してカオスな
空間が出来上がっていった。意外と女子もアホな歌を知っていて、
男女関係無くマイクの取り合いになっていた。ブルばあの機嫌も
いいし、ひとまず安心かな、と俺は胸を撫で下ろす。そこに、クリ
クリが声をかけて来た。

「健司様。ちょっとお聞きしたいのですが」

「ん？ なんだ？」

「先程の歌はCDになってますか？」

お前、アンテナおかしいだろ。あれに反応するとか…

「観光協会のホームページからダウンロード出来たはずだ。CDなら『郷土愛 N型甚句、その他』に収録されている。税込み価格¥2・500で絶賛発売中だぞ」

「これは要チエックですね…」

一体なんのCMなんだ。

滑稽な一時が過ぎ、バスは目的となる宿泊施設へと到着する。山の麓に建った巨大な建物。バンガローや旅館という風貌ではなく、規模の大きな体育館のような建物だ。なんでも、冬場はスキーの選手が合宿で泊まったりするらしい。他は地元の企業が研修などで使ったり、元々団体向けに作られた施設なのだから。

俺たちはまず郵送で届いた荷物を部屋に運ぶ作業をした。俺の荷物は既にステラが部屋へと運んでいたので楽だった。スポーツバッグには手紙が入れてあり、そこには『お嬢様を宜しく願います』

とある。向こうの世界じゃまともにアイツの事を見てなかったから分らなかったけど、メイドとしては優秀なんだろうな。俺は今回の件で、ステラへの好感度がかなりアップしていた。

荷物を運んだら、次はいよいよハイキング。昼に休憩地点についたらそこで班別になってカレーを作って食べる事になっている。ご飯は勿論飯盒炊飯だ。大抵びしゃびしゃになり、焦げ臭くなるという、アレ。昼飯は期待出来ないかな、と思いながら、俺は集合地点で出発を待っていた。

その時。

偶々、近くに停めてあった車のミラーに目がとまった。一瞬、何かが映り込んだような。よく見るとそこには、黒髪をポニーテールのように後ろで纏めた女性の姿。キツネっぽい顔と、星の形をした涙黒子は俺の良く知る人物だった。俺は慌てて車に近づいてミラーに小声で話しかける。

「ミラージュ、お前何やってんだよ」

「あはは、王様に頼まれて様子見ー。なんか楽しそうねえ、クリス姫があんなに楽しそうにしてるの初めて見たわあ」

「……そうだな。向こうじゃ姫として振る舞うクリスしか見たことなかったからな」

クリクリはこちらの世界に来て良かったのかもしれないな。……なんか、ファンタジーよりこっちの方が幸せなのって俺からすると複雑だけど。

「ケンジ様も楽しそうだったじゃない？ ノリノリで歌ってたしい」

「おま、聴いてたのかよ!？」

「うん、反射物があれば大抵の場所に潜り込めるからねー。やろうと思えばアレよ？ やらしいホテルとか覗き放題」

「犯罪だ！ 一応偉い人なんだから止めなさい！」

ケラケラ笑うミラージュ。参ったな、こんな所でもコイツと会うなんて。そんな風に思っていると、ミラージュは少し声のトーンを落として真面目な口調で話しかけてきた。

「一応、何かあったら助けられるようにしておくから。困った時は、鏡に話しかけて」

「あ、ああ……ありがとう。でも、大丈夫だと思うけどな。今日はハイキングくらいしかしないし」

そう言つと、ミラージュはフンと鼻で笑った。

「歩くトラブルホイホイのアナタの言う言葉じゃないわねえ」

「トラブルの総合デパートが何言ってるやがる」

憎まれ口を言い合う。ここらへんは向こうに居た時と変わらないな。ステラと違ってコイツは変わらず俺の天敵なようだ。

気づくと、集合場所に皆が集まって俺を呼んでいた。俺はミラージュに「じゃあ行くわ。くれぐれも悪戯すんなよ」と言ってる車から離れる。ミラージュは何も言わず、ただ笑っていた。

六頭山のハイキングコースは基本的に易しいコースが多い。勿論難易度の高いコースもあるが、こちらは本当に遭難者が出るので団体向けではない。俺たちが登るのは数あるコースの中でも一番簡単なコース。なだらかな登りが続く爺さん婆さん御用達の道だ。

こういうハイキングでは、最初こそクラス別に行動しているものの、歩くペースの違いによって徐々に班や団体はバラけてくるものだ。俺はペースの遅い轡田と一緒に歩いてきた為、皆からだいぶ遅れ始めていた。

「佐藤君、無理して付き合う事ないよ。先に行っていいから」

「何言つてんだ、ここで置いてく方が気になって精神衛生上悪いだろ。歩けなくなったら背負ってやるから、安心しろ」

「佐藤君……」

瞳を潤ませるんじゃない、ドキツとするだろ。ただでさえ、幸太の願望のせいか体臭まで女の子みたいな匂いになってきている轡田。こいつは男だ、こいつは男だ、と言い聞かせなくちゃならなくなっている自分が悲しい。ちなみにクリクリは女子の友達と一緒に先に

行っている。こんな所見せたくなかったから、助かった。

そんなドギマギタイムを送っていると、不意に後ろの方から何やらヒーハーヒーハー言う男が近づいて来た。汗まみれ、青ざめた顔のその男は俺を見て顔を輝かせる。

「さ、佐藤健司いい！ここに居たのかああ！」

「うわ……何コイツきもい」
長ネギだった。

「酷い事言うなよ、傷つくだろ！まあ、さつきもクラスの女子に言われたけどね！」

それで死んでないだけ偉いよ。俺なら耐えられない。

そんな俺の冷たいリアクションにもめげない長ネギは、目ざとく轡田の姿を見つける。はあ、はあ、と顔を赤らめ息を切らせている轡田を見て……鼻血を出した。

「き、君らは、こんな場所で何をやっているんだ！不純異性交遊反対！僕も参加していいなら賛成だ！」

「残念、コイツは男だ」

ピシッ……

長ネギが固まる。

「もういいか？こっちは真面目に頑張っただけで登らないといけないんだ、馬鹿には構ってられないんだよ」

「ま、待ってくれ悪かった！ 一人ぼっちで寂しかったんだ、置いてかないでくれ！」

まったく……

俺はため息をついて、またゆっくりとコースを登りはじめた。

長ネギはクラスメイトに相変わらずハブられ孤独だったらしい。だから、先に登った俺のクラスに追いついて一緒に登りたかったようだ。しかし長ネギは貴族の坊ちゃん。体力なんて人並み以下だから、当然の如くそんなペースで歩いたら疲れるわけで…。

「なんでお前を背負わなきゃならないんだ」

「う……うめ……ん……ぜー、ぜー……」

轡田を背負うハズが、長ネギを背負う羽目に。お前なんか鴨に背負われて猟師に撃たれたらいいのに。轡田は青い顔をしながら、「僕は大丈夫だよ、段々体調良くなって来たから」と健気に言う。俺はなんだか涙が出そうだった。

休憩地点にたどり着いたのは、やはりクラスでは俺たちが一番遅くなった。既にカレー作りは始まっており、俺は轡田をブルばあ

の所へ連れて行ってから皆の所に謝りに行った。

「ごめん、遅れちまった！ 手伝う事あったら何でもやるから、言ってくれ！」

しかし、皆は優しかった。

「佐藤は片付けに参加してくれればいいよ、気にすんな」

「遅れた奴フォローしてたんだろ？ 分かってるって」

「佐藤君はゆっくり休んでていいからね。ちゃんと君と轡田君の分は持っていくから」

……………。

泣いていいですか。

優しい……皆、優しいよ。

俺は少し鼻をすすりながら、皆に「ありがとう」と言っ言葉に甘えさせて貰った。正直に言えば、鍛錬を怠っていたからか長ネギ背負ったくらいで少し疲れてしまっていた。情けない、グレッグ兵士長が見たら雷落とすだろうなあ、なんて思いながら俺は木製のベンチに腰掛ける。タオルで汗を拭いていると、そこにクリクリがやって来た。

「お疲れ様です、健司様」

そう言って手渡すのはペットボトル。スポーツ飲料が入っていた。

「クリクリか……。うん、疲れた。情けないな、前は鉄丸ぶん投げ

ても疲れなかったのに」
言いながら、それもどうかと思った。

「そんな事無いですよ。皆、健司様を誉めていました。面白くて優しく、頼りになるって」

それは……嬉しいけど恥ずかしいな。

「なんかむず痒くなってくるな。持ち上げすぎだって、今だって、準備しなくてラッキーなんて思ってたんだから」

「ふふふ、そう言う事にしておいてあげます」

クリクリはそう言うてから、俺が一気に飲み干して空になったペットボトルを受け取って炊事場へと戻って行く。俺は顔を赤らめたまま、それを見送った。

クリクリって、奥さんにしたら最高なんじゃないか……思わずそう思ってしまった。

昼食の時間は、何事もなく終わった。よくマズいカレーを作った。昼食がダメになるなんて漫画を目にするが、実際にカレーをマズく作るのは中々難しい。水の分量を間違えなければ、大抵まともな味

になる。問題はご飯で飯盒炊飯はそれなりに難しいが、幸運にもうちの学校には六頭山キャンプを何度も体験した人間が多く、飯盒炊飯も手慣れたものだった。カレーはパーフェクトな出来で皆に振る舞われ、昼食の時間は思いのほか楽しいものとなった。

昼食を終えて片付けを済ませ、施設に戻る。轡田はだいぶ顔色も良くなっていたが、やはり何だかつらそうだった。他にも女子で靴擦れを起こしたりした人が何人か出たので、俺は保健係の連中の所にそうした人たちを運んだり忙しかった。そんな中でもなるべく轡田の事は気にかけていたんだけど……

施設に戻り、夕飯までの休憩時間に入ってから轡田の体調は悪化する。異変に気づいた俺が轡田を保健の先生の所へ連れて行くことしたら、轡田は慌てて首を振った。

「ち、違っんだ、これは病気とかじゃないから！」

「そんだけ顔色悪くしといて病気じゃないとか無理があるだろ。意地張らないで、先生のところ行けって」

「~~~~~っ！」

ありゃ、怒った？

なんだよ、俺何か悪い事言ったか？

戸惑う俺の手を引いて、轡田はどんどん廊下を歩いて行く。おい、こっちは確か今解放してないフロアじゃなかったか？ こんな人気

の無い所で何を……

誰も居ない、ガランとした部屋に入る。轡田は真つ赤な顔で俺を睨みながら、上着のボタンを外して行った。おいおい、まさか！ サラシまで外すと、その膨らみを俺の前にさらけ出す。それは、間違いない女性のシンボル……おっぱい。

「痛いんだ」

「……は？」

「だから、痛いんだって！ 自宅なら姉さんの子供に飲んでもらえるけど、ここじゃ無理でしょ？ どうしよう佐藤君、今日のお風呂って個室じゃないから、このままじゃ僕、皆に胸の事バレちゃうよ！」

そうだった。

確かにヤバイ。バスタオルを胸まで巻いてたら一気に注目されちゃうな。どうするか……

「だから、ね……」

「ん？ 凄く嫌な予感がするぞ」

轡田は、恥ずかしそうに頷いた。

「佐藤君が、協力してくれないかな……」

嗚呼……

俺は真っ白になって天を仰いだ。

第二十一話 マパ

友達に胸を吸ってと言われたら、あなたならどうするだろうか。普通は馬鹿言うなと怒るか無言で去るかどちらかだろう。友達をやめて、一切関わらないようにする。少なくとも、俺はそうする。

しかし、それが美少女にしか見えない外見で。女の子と変わらな
いおっぱいをしていて。尚且つ自分のせいで母乳が出る体質になっ
てしまい。今目の前で苦しんでいるとしたら……

悩んでしまうのも無理は無いだろう？

誰も居ない部屋で二人きり、目の前には胸をはだけた美少女（上半身のみ）、ちなみに前も言った通り女の子みたいな匂いがしている。その強烈なフェロモンに抗う事の出来る奴などいるのだろうか。……いや、ここにいる！俺は佐藤健司、世界を救った男！チチ一つに屈するような人間ではない！！

しかし、身体は理性に反して轡田に近づく。え、なんで！？なんで勝手に！そういえば、身体が勝手に動く時って何かあったよ
うな……

そこまで考えて気づいた。『勇者体質』。目の前で困っている人がいたら助けてしまうアレ。やめろやめろ、そんな勇氣はいら
ない！踏み越えちゃならない一線というものがあるんだから！

俺の手が、轡田を抱き寄せようとのびて行く。瞳を潤ませる轡田。
……その時。

部屋の壁に掛けられた大きな鏡に目がとまった。そこには、見慣れた女性の姿。

(行っちゃえ行っちゃえ！)

煎餅を片手にワクワクしながら此方を見つめるミラージュの姿があった。

「見てないで止めんかあああいつ！」

「うわああっ!?!」

思わず仰け反る轡田。俺は一端轡田を退けといて鏡に直行する。そして鏡に手をつ突っ込み、ミラージュを無理やり引きずり出した。コイツは反射物を利用したゲートを開いて、覗いたり移動したりする事が出来るのだ。

「いたたたた、髪、髪引つ張ってる！ いたたたた！」

「抜いてやる！ ハゲにしてやる、この出歯亀女！ 亀に髪の毛はいらんだろっが！」

恐らく自宅で寛いでいたのだろっ、パジャマにドテラというリラックスし過ぎな格好で鏡から出てきたミラージュ。下着がうっすら透けて見えて少し興奮したのは内緒だ。

最初は驚いて呆然としていた轡田だったが、ミラージュの顔を見てすぐに気づいた。

「あれ、この間デパートに来てた手品師さん!? 佐藤君の知り合いだったの？」

「ひ、久しぶりねボウヤ、いたたたた！ いい加減許して、私マゾだから感じ始めちゃっ！」

ぬ……それはマズい。

俺は仕方なくミラージユを離れた。喜ばれちゃ逆効果だからな。

「ふう……それにしてもケンジ様、あれほど甘くみないでって言ったのにこうなっちゃったのねえ」

「うるさい、これは事情があって……って、ミラージユ？ 甘くみないでって何の事だ」

確かに以前そんな事を言われたような。何の事だったかな。

「魔王よ、魔王！ あの子供の願望に引っ張られてんの、その子もアナタも！ 自覚ない？ 端から見てて、どう見てもアナタたち恋人か夫婦にしか見えなかったけど」

はい？ 幸太の願望……

ああ、俺がパパで轡田がママってやつか！

そこまで考えると、俺の脳裏に一つの光景が浮かび上がる。幸太を抱っこした轡田と俺が幸せそうに笑いあっている光景。それを見ていると、何が何でもその光景を実現したくなってくる。なるほど、こりゃ俺も影響受けるワケだわ。朝から轡田の事が気になって仕方なかったのはこれの影響だろう。この映像の中の轡田が裸エプロンなのもきつとそのせいだ、うん。

「あの、もしかして僕が自分でお乳を絞り出せないのも……」

「そう。授乳という形でしか処理出来ないようにされてるみたいね。もしくは、第三者に絞ってもらおうとか」

ミラージュが言うと、轡田も納得したような表情をした。お前も難儀な事になってたんだな。

しかし、それじゃ轡田はどうすりゃいいんだ。このまま胸を隠して乗り切れてっていうのは無茶だろ。

「ふふふ……そこで、このミラージュ様の登場というワケですよ」

どんなワケだよ。どうでもいいけど腹巻き見えてんぞ。唐草模様とかセンス酷いな。ミラージュは恥ずかしそうにお腹を隠しながら話を続ける。

「だから、ゲートつなげてえ……幸太君だっけ？ あの子を連れて来るわ。あの子の願望を満たせば、母乳の出来るスピードも落ち着くんじゃないかしら」

おお、なるほど！

確かにそれなら解決するかも！ ナイスアイデア、そうしよう是非そうしよう！

「……洗脳されすぎよ。じゃあ、行ってくるから待っててねえ」
そう言っつて、ミラージュはまた鏡の中へと入って行く。鏡に映る景色が変化して、見慣れた光景が……こりゃ、俺んちの脱衣所の鏡か。ミラージュが扉を開けると、夕飯の用意をしている紗英さんがいた。

突然のミラージュの登場に驚く紗英さん。そりゃそうだ、知らない女がパジャマ姿で登場とかビックリしない方がおかしい。ミラージュは平然と説明を始める。時折こちらを指差していた。……ああ、向こうからもこっちが見えるのか。紗英さんがこっちを見て手を振

ってる。順応はやいなオイ。

紗英さんを見事納得させたミラージユは、次に幸太を抱っこして鏡の方へとやって来る。幸太はワケも分からずキョトンとしていたが、鏡に映る俺を見て顔を輝かせた。

「パパ！ ママもいゆ！」

ああ、癒される！ そうさパパだ、さあ俺の胸に飛び込んでおいで！！

「はいよー」

バキィッ！

「カモナマイサンツ！？」

鏡から飛び出してきたミラージユの膝が顔に入った。痛い。

「パパ！ さみしかったの！ おるすばん、いいこしてたの！」

あ、ああ、いい子だ幸太。ミラージユは悪い子だな、後でお仕置きだ……。

「はいはい、すごい濃ゆいの期待してるわ。今はやる事があるでしょお？」

そうだった。

「幸太、ママがボインボインになる前にゴクンゴクンしてやれないかな」

パコーンッ！
ミラージュに叩かれた。

「幼児言葉にしたら余計分からないわよ？ それにボインボインはオッサン言葉。通じる子供はいないでしょ」

お、俺は保育園の頃から使っていたが……

話が進まないと思ったのか、轡田も近づいて来て幸太に話しかけた。

「幸太君、今お腹すいてる？ ミルク沢山あるから、飲んでくれるかな？」

幸太は、その言葉を聞いて満面の笑みを浮かべた。そして、元氣良く頷く。

「うん！」

よっしゃ、ミッション達成。轡田が幸太を抱きかかえて、胸を口元に近づける。幸太はさもそれが当たり前のように乳首を口に含んだ。その瞬間少しだけ轡田の顔が歪んだけど、直ぐに幸せそうな満たされた表情に変わった。

……ああ、これ母親の顔だ。

そして、今俺の胸に湧き上がってる感情もきつと父親の感情なんだ。これが、幸太の欲しかったものだったんだな。

「ねえ、佐藤君……」

気づくと、轡田の頬を涙が伝っていた。

「僕、今凄く幸せなんだ。これって、幸太君の望みなんだよね。この子が欲しかったのって、本当は母乳じゃなくて……」

「ああ。多分、家族なんだ。もつと言えば、親の愛情なんだろうな。幸太、ずっと一人だったから」

やるせない。

そして、今更だけど魔族の將軍どもが憎い。過去に戻ってアイツらをもう一度殺してやりたくなる。そんな風に怒りに身を震わせていると、ミラージュが口を開いた。

「まあまあ、今はこの子が幸せなのを喜びましょ。ほら、幸太君の顔見てよ」

「……そうだな。うん、幸せそうだ」

幸太は轡田に抱かれミルクを飲み続ける。授乳している轡田も幸せそうだ。その光景は一枚の絵にしたら美術館に飾ってあってもおかしくないくらい神々しかった。なんか……さっきまでイヤらしい目で見てたのが馬鹿みたいに思えてくる。

授乳を終えると、幸太は眠ってしまった。満腹になったからか、それとも願いが叶ったからか。もしかしたら両方かもしれないな。魔王に使う言葉としては間違ってるかもしれないけど、天使の微笑みとはこういうのを言うんだろう。

「さあて、君のおっぱいはどうなったかな……って、まだ乳房だね。ギリギリBって感じかあ」

「張りは無くなって楽にはなっただけ……」

確かに、轡田の胸はまだ男と言うには無理がある大きさだった。これじゃ解決にならないな。しかし、変な洗脳状態の解けた俺は本来の判断能力を取り戻していた。

「轡田、ブルばばあに普通に相談しよう。ホルモンバランスがおかしくなってるって言ったなら、他の男子と風呂に入らなくて済むようにしてくれるよ」

「え……大丈夫かな。変な騒ぎにはならないかな」

「馬鹿、ブルばばあは先生だぞ。それも体育教師で保健体育も担当してる。身体的な変化に苦しんでるやつを悪いようにするもんか」

ブルばばあって、女子には凄い慕われてんだよな。男子だって、俺を筆頭に、口では酷いアダ名付けて呼んではいるけど信頼してるやつは多い。そしてその信頼を裏切るような事は俺の知ってる限りただの一度も無い。いわゆる、いい先生なのだ。

「そうだ、クリクリも呼ぼう。女子のいる階にブルばばあ達も部屋とってるから、男子だけで部屋訪ねるのはマズいだろ」

俺は携帯電話でクリクリに連絡を取る。事情を説明して電話を切ると、ミラージユは幸太を轡田から受けとり抱っこした。

「じゃあ、私は幸太君を帰して一端部屋に戻るわ。んじゃ、頑張つてねえ〜」

そう言って、鏡の中へと入って行くミラージユ。その背中に、俺は声をかける。

「ミラージュ！」

「ん〜？」

「その……ありがとうな。今回は、本当に助かった！」

「僕も助かりました、ありがとうございます！」

俺たちが礼を言つと、珍しくミラージュは顔を赤らめて「いいのよ、そんなのお」と言つて鏡の中へと消えて行つた。

「……行つたか。しかし、轡田も良かったな。これでしばらくは胸の痛みは無くなるだろ。変な気持ちにもならなくて済む」

「うん、そうだね。でも……」

轡田は、悪戯っぽく微笑んだ。

「あの幸せ、癖になりそうだったよ。佐藤君が僕を見てドキマギするの面白かったし。僕的には、悪くなかったかな。うん、ちょっと楽しかった」

「ばっ……馬鹿言うな！」

「アハハハハ！ 顔真つ赤だ佐藤君」

クソ、これは違う、怒りに紅潮してるだけだ！ まったく、心配かけて楽しかったとかアホか！ それ以上に、自分に腹が立つ！

……今こうして笑つてる轡田が、一番可愛いとか思つちまつたからな。

俺、壊れちまったのかな。

クリクリがやってくるまで、俺は轡田にからかわれながら、そんな不安に頭を抱えていた。

クリクリが来てから轡田と一緒に女子の泊まる階に行き、ブルばはあのいる部屋に。轡田の事を相談すると、やはり流石担任教師、ちゃんと轡田が一人で入浴出来るようにバスルーム付きの個人部屋をとってくれた。その時、轡田を同情しながらも少し怒っていたのが印象的だった。

「体調おかしいなら直ぐに相談するんだよ、恥ずかしいのは分かるけど大切な身体の事なんだから！ 御両親から連絡無かったって事はまだ親にも相談してないんだね？ 大事になったら遅いんだから、帰ったらちゃんと病院行くんだよ！」

「は、はい、すみません！」

今すぐ病院行けって言わないのが不思議だが、きつと皆と一緒に居させてやりたいんだろ。まあ今すぐ病院に行ってどうこうなるもんじゃないしな。しかし、やっぱり普通に頼って正解だった。これなら残り二日、轡田も心配事をしなくて済むな。

「良かったな、轡田」

「うん、佐藤君の言う通りだった。小林先生が居てくれて本当に良かったよ」

……………。

小林先生っていうのか。完全に忘れていた。酷いな、俺。

そんな風に話していると、なにやらクリクリがジーツとこちらを見つめている。轡田と俺を交互に見て、何やら難しい顔をしている。何だ？

「健司様。轡田さんと何かありました？」

「え？ いや、電話で話した通りだぞ。ミラージュに幸太を連れてきてもらって……………」

むー、と眉をひそめるクリクリ。なんか可愛い。そこに、轡田が爆弾を投下した。

「うん、なんにも無いよ。ちょっと夫婦気分楽しんだだけだから」

「ふっ……………！？」
クリクリが変な音出した。

おいおい……………

「幸太君と一緒に、つかの間の家族愛を楽しんだんだ」

「かつ……!?!」

クリクリ、落ち着け。一文字しか喋れなくなってるぞ。

「幸せの余韻に浸ってるんだ。……僕がママで、佐藤君がパパだからね。素敵だったよ」

「マパ……!?!」

壊れた……!?!

というかマパって何だ、ママとパパの略か! どこぞの原住民の言葉かと思っただぞ!

「け・ん・じ、様……!」

ゆらあ、と黒いオーラが揺らめく。クリクリ、聖属性が反転してる。聖職者がそれはマズいんじゃないか、色々!

「浮気は私の許可を取ってからにしなさい……!」

「まさかの許可制……!?!」

逃げる俺、追いかけるクリクリ。なんだなんだと部屋から出てくるクラス的女子たち。俺たちの追いかけてこを見て、応援を始めた……主にクリクリにだけ。そんなドタバタ騒ぎの中、轡田はニコニコしながら俺たちを眺めていた。

ブルばあの雷が落ちるまで、俺たちの追いかけてこは続くのだった。

第二十二話 夜のトンボ

食べ物に関して、今日ほど好き嫌いが無くて良かったと思った事は無い。施設で出た夕飯は、ハツキリ言っつてしまえば俺たちみたいなガキには食べにくい物が目白押しだった。女子がお菓子たくさん持つて行こうと言っつたのが分かる。こりゃ厳しいよ。

菊のおひたしなんて、お婆ちゃんしか食べないんじゃないか？ サザエだつて、殻ごとボンつて出されても食べた事ない奴には意味不明な置物としか思えないだろ。あ、馬鹿、誰か『固いウ コ』とか言いやがった！ そうとしか見えなくなるだろうが！

他にも、地元で取れたキノコや山菜が目白押し。その味付けが「柚子」とか「レモン」だつたりして全然若い奴向けじゃない。クラスのみんなは、渋い顔をして黙々と食べていた。

「クリクリ、無理すんなよ」

「い、いえ、平気です！ 山の恵みに感謝しなければ……」

食事は大広間で行われている。男子と女子が交互に列を作つて、お膳を挟んで向かい合う形だ。これは教室の並びと同じで、俺はクリクリと向かい合わせになっている。だから……無理して身体を痙攣させてるのが、良く分かるんだ。

「クリクリ、この中で美味しかったのつてどれだ？」

「え……あの、銀杏と里芋とさやえんどうの煮物は美味しかったです。白い粒々が入ってましたが、あれは何だつたんでしょう？」

白い粒々……ああ、イクラな。良かった、まだ手をつけてない奴だ。

「ありや鮭っていう魚の卵だよ。普通は火を通したりしないんだけど、ここらへんじゃ煮物の中に入れてりするんだ。よし、だったら器を交換しようか」

そう言って、クリクリの空になった器と自分の物を交換する。クリクリは驚いたような顔をしたが、涙を浮かべて「ありがとうございます」と頭を下げた。いや……そんなに食べられない物ばかりか？

「食べられないもの、俺の器に移しな。ここは先生たちから死角になってるし、バレないから」

「……感動の嵐です。では、お言葉に甘えさせて頂きますね」

おっ、どんと来い！

……。

どんと来た！ おいつ！？

さっき言った菊やらサザエやらレモン味の白菜の漬け物やら、まあ癖だらけの品のオンパレード。仕方ないから、小鍋に入ってるエビとかをクリクリにあげる。そこまで好き嫌いしてたら自分の食べる分が無くなっちゃうだろ？ まあ、クリクリは向こう出身だから仕方ないとして。

お前ら……

近くにいた女子まで俺の皿に食べにくい物入れはじめた！ 待て待て、菊だらけじゃないか。お膳が葬式みたくなってるぞ、おい！

そして、それを見ていた男子たちは自分もモテたい、とばかりに俺の真似をする。うわぁ、お前ら大丈夫か？ 知らないぞ、痛い目みても。

俺は男子たちが身体を痙攣させながら涙目で食事をしているのを横目で見ながら、もしかもしゃと菊やらワラビやらゼンマイを食べる。いや、慣れたら美味いもんだけどな。

夕食を終えると、次は地元の農協のオッサンの講演を聞く。ウザいだろ？ 延々と稲の品種改良と登山客のマナーの悪さに対する文句が続くんだぞ、誰もそんなの聞きたくねえって。しかし事前にクラスメートに「ブルばあが監視してるから気をつける」と俺が注意していたから、眠るやつは少なかった。クリクリは興味津々で聞いていたけどな。良く分からない所で涙ぐんでいたのは怖かった。

そして、この日のメインイベント……花火大会が始まる。

施設裏手、広い駐車場に希望者だけあつまり行われるイベント。その数は結構沢山で、全部で七十人くらい居る。一学年160人、一年生も来てるから林間学校には300人ちよっと来ている。そう考えると少ない方かもしれないけど……やっぱり多いな。ちなみに

参加しないやつらはゆっくり風呂を楽しんでいる。

駐車場、大体10人弱でグループを作って分散して、花火大会は行われた。俺はクリクリと轡田と一緒にグループ。監視するのはゴリライオンだった。……怖い。

「お前ら、人に向けんなよー」

ゴリライオンが火種とする蠟燭をセットする。先生が配った花火や、各自で買って来た花火を手に皆は蠟燭へ向かう。俺は定番だけど手で持つ普通の花火と線香花火を買った。

「健司様、花火とはこんなに小さいものなのですか？」

「ああ。ほら、今向こうで火を付けてる。見てな」

グループの中の一人が、花火に火をつけた。途端に、棒の先から白い火花が噴き出す。

シューアアアアアアツ！

「まあ……」

「綺麗だろ？ 魔法で全部コントロールする花火も綺麗だったけど、こういうのも結構いいもんだよ」

俺がそう言うと、クリクリは顔を輝かせて頷いた。

「クリスさん、花火は僕も沢山買って来たから、好きなだけ楽しんでよ」

「ありがとうございます、轡田さん！」

クリクリと轡田は、その言葉を交わすと花火を手に蠟燭の方へと向かう。俺はなんだか、そんな二人を見るだけで満足してしまった。花火を手に、ダンスを踊るようにステップを踏むクリクリ。それは信じられないくらい幻想的だった。轡田にしても、ちょっと勢いの強い線香花火みたいな奴を持って楽しそうにしている。その姿はまるで妖精のようだった。まだ洗脳されてるかもしれない、俺。

「……綺麗だな。これが見られただけでも、林間学校に来た甲斐があった」

俺は「健司様、ほら、光が帯をひいてるように見えます！」と言つて花火でハートを描くクリクリを見ながらそう呟いた。

その時。

どこかで誰かが「きゃあ」と言う声をあげた。なんだ？ アライムが発動していないなら大したトラブルじゃないハズだが。そう思つて振り返ると、光を避けて闇に紛れるように人影が移動してくる。なんだなんだ、やけに俊敏だぞ。目を凝らして見ていると、その影は俺目指して真っ直ぐ突き進んでくる。

「さ、佐藤健司！ かくまってくれ！」

「お前かよ。一体どうしたんだ」

長ネギだった。中腰で、まるで暗殺者みたいに駆け寄ってくるから怖かったぞ。

「ぼ、僕は復讐を遂げたんだ。あいつら、僕だとは気づいてない。このままここにかくまってくれ」

「……復讐？」

物騒な響きだ。

一体何の事だと聞くと、長ネギは自信満々に答えた。

「日頃僕を馬鹿にしてる奴らの足元に、ちょっとした罠を仕掛けたのさ。これ。見てごらんよ」

取り出したのはウサギの糞みたいな物だ。長ネギは百円ライターでそれに火をつけた。……って、ライターは持ち込み禁止されてた。見つかつたらヤバいぞ。

火をつけられたウサギの糞……焼け糞が燃え上がる。そして、不思議な変化を始めた。

もこ

もこもこ

もこもこもこもこもこもこ……

「なんだコレは」

「蛇花火さ。こっちの人間なのに知らないのか？ ほら、気持ち悪いだろ。これをあのいけ好かない奴らの足元に300ほど仕掛けてきた」

焼け糞は黒いススの塊を紐状に伸ばして行く。これが300？

実費で買ったのかよ、復讐の為に。

「アイツら、気づいたら黒い蛇に囲まれて発狂するね。ふふふ、僕は勝った!」

なんじゃそら……

長ネギの逃げて来た方向を見ると、慌てふためく男子たちが。緑木コロスとか言ってる。バレてるじゃないか。

「事情は分かった。とりあえず部屋に帰ったらどうだ? このままここに居たら捕まるだろ」

「同じ部屋の奴らなんだ、殺されるよ!」

それなのに行動に移したのか。ある意味男らしいが……お前の無鉄砲さは変わんないな。そのフォローを俺がするとか、これじゃ向こうと同じじゃないか。

「分かった、ならばばらく普通に花火をしよう。コソコソしてたらかえって見つかるから」

そう言っつて、俺は配られた花火を長ネギに渡す。長ネギはその中から奇妙な物を取り出した。

「ははは、これは凄い武器じゃないか」

「武器?」

おかしいな、危ない花火なんてなかったはずだが。そう思っつて長ネギの手元を見ると、小さな花火。短いチョークのような物に、紙のプロペラがついている。

「トンボ花火だよ。お前本当に物を知らないんだな。ほら、これは導火線に火を付けたら真上に飛んで行くのさ」

長ネギはトンボ花火に火をつける。導火線が焼けきると同時に、花火は真上に「ジュワワワワツ」と音を立てて回転しながら飛んで行った。……なるほど、プロペラは竹トンボの羽と同じ役目なのか。

「でも、これが武器になるのか？ 真上に飛ぶんだろ」

「ふっふっふ、甘いな佐藤健司。よし、特別に君に教えてやるうじやないか、トンボ花火の裏技を！」

そう言っって長ネギはトンボ花火の羽を折り曲げる。え、そんな事したら飛ばないんじゃないか……そう思った次の瞬間、俺は脳裏に小さなアラームを聞いた。あ、ヤバい！

「で、火をつけるワケさ」

「いや、長ネギやめ……」

ジュワワワワツ！

遅かった。トンボ花火は長ネギの手を離れ、先程と同様に真上に行き……

「ただ変化がランダムすぎて戦術には組み込めなかった」
「はっ!?!」

突然、真横に進路を変えた。

「うわぁっ!」

「きゃあっ!?!」

トンボ花火は飛んで行く。皆の頭上を、徐々に高度を下げながら。そして、飛んで行く先には……

ゲッ!

ありや英語のブラ紐先生じゃないか! 黒板に英語の長文書いている際、よくブラウスが透けて真っ赤なブラ紐が見えるからつけたアダ名だ。そしてその隣にいるのは……ゴリライオン! 生徒の監視そっちのけでブラ紐先生を口説いている! テメエ何やってんだ!?

ジュワワワワッ!

トンボ花火は突き進む。この世の正義の為に。闇に紛れてやらしい事しようとしている悪い大人をやっつけるのだ。そして二人に着弾する、その刹那。

トンボ花火は最後の变化をする。

ギュウウンッ!

バシユッ!

「ぎゃああああっ!!--」

ゴリライオンの股間に直撃した。

……。

これ、ヤバいだろ流石に。

しばらくうづくまるゴリライオン。物理的痛みより精神的にやられたな。口説いてる最中に股間から火花とか、どれだけエレクトしたいんだって話になるからな。いや、ならないか。

ゴリライオンは吠えた。

それは確かにゴリラとライオンを足して2で割ったような声だった。

「誰だあああああああつ!!」

「ヒイツ！」

とつさに逃げる長ネギ。馬鹿だな、それじゃ自分ですつて言うてるようなもんじゃないか。案の定ゴリライオンは逃げ出した長ネギを見てロツクオン。すぐさま野生動物のようにワイルドに駆け出した。

「まあてえええつ！」

「わ、わ、ごめんなさーい！」

凄いな、長ネギつて逃げ足だけは速いじゃないか。俺は妙な所に感心しながら、逃げて行く長ネギを眺める。その時、ふと、どこから奇妙な視線を感じた。騒動の中、皆が長ネギとゴリライオンの走って行く姿を呆然と見つめる中、確かに俺を見つめている奴がいる。誰だ？

俺は周囲を見渡す。花火の煙が辺りに充滿して視界が悪いな。おまけに花火を見続けてたから残像が目に残って見づらい。しばらく

目を凝らしていると、一人だけ身体をこちらへ向けている女子がいた。

顔は……クソっ、見えない！ 煙に紛れて、半分も見えなかった。一体なんだ、何の用なんだ。必死で目を凝らす俺だったが、結局その顔を見る事は無かった。何故なら……

次の瞬間、その姿は霧のように消えてしまったから。

……。

嘘だろ？

俺は愕然としながら、先輩の怪談話を思い出した。去年、実際に出たという幽霊の話を。まさか……アレなのか？

俺はクリクリたちが声をかけてくれるまで、呆然とその場に立ち尽くしていた。

第二十三話 肝試しにはネギを添えて

林間学校二日目。俺は久しぶりに倦怠感を覚えながら朝を迎えた。少しでも眠れば完全回復する俺が疲れて朝を迎えるという事が意味するものは何か。

そう、俺は徹夜した。

格好悪いけど、昨日のアレのせいで眠れなかったんだ。いや、同部屋の皆が結構遅くまで「お前誰が好きなんだよ」とか恒例の暴露大会してたって言うのもあるけどな。

あと、いびき。酷い奴がいたんだ。もうどこの工事現場だよ、つてくらしいの爆音だった。それで眠れないうえに、先輩の怪談話とあの女の子の映像が頭の中を支配して……気づいたら眠れないまま朝を迎えた。

ちなみに早朝5時半、トイレに行こうと部屋を出たら長ネギが廊下で正坐したまま眠ってたのには笑ったよ。花火騒動の罰なんだろうけど、下手に部屋に戻るより安全だろうし、俺みたいにいびきに悩まされる事も無いからかえって良かったのかもしれない。寝言で「…僕の勝利だ、ひざまずけ…むにゃむにゃ」とか言ってたから、あんまり堪えてないようだ。その精神的タフさは羨ましい。

朝食は昨日の夜みたいな玄人向けなメニューではなく普通の洋食だった。トーストとハムエッグ、サラダとオレンジジュース。みんな空腹だったらしく凄い勢いで食べていた。逆に俺は昨日食べ過ぎたうえに寝てないから食欲不振、クリクリや他の女子たちに代わりに食べてもらった。ちよつと情けなかったな。

林間学校二日目は近くの文化的な資料館や観光スポットを班別で歩いて周った。バス移動なら眠れたんだけどな。歩きながらは無理だ。眠い目をこすりながら、必死で皆について行った。だから何を見たかとか、そこらへんの記憶は殆ど無い。ただ何人かのクラスメートが俺を心配してくれていたのは覚えている。心配させまいとダンスかましてブルバばあに怒られた記憶があるからな。

そしてその日の夜。

「またも微妙な料理をたらふく食った俺は、肝試し大会に参加していた。」

「健司様、大丈夫ですか？ 少しでも眠った方が……」

「大丈夫、大丈夫。肝試しだろ？ 眠いけどお化けにおどろかされたら目は冴えるよ」

欠伸を殺して涙目になりながら言う。何にも説得力ないらしく、クリクリは相変わらず心配そうな顔をしていた。

さて今回の肝試しは参加者がそれなりに多い。同じ時間帯に先生たちが他の企画をしていて、そっちの方にも人が行ってるからまだ

マシだが、一年と二年あわせて五十人近くが参加する。お化け役もあわせると六十を超えるだろう。

組み合わせは基本的に自由。基本的にペアで、相手が居ない場合は居ない人だけ集まってくじ引きをする。俺はクリクリと轡田、長ネギと参加した。そして何故か、クリクリは轡田と組んで俺は長ネギと組む事になった。

「ちよつと、轡田さんとお話したい事があるんです」

「僕も色々聞きたい事があるから、一緒に行こうか」

その言葉を交わす二人に、何故か俺は割って入る事が出来なかった。だって……やたらと空気が張り詰めてたんだよ、ここで突っ込んで行くのは勇者というより自殺志願者だろう。

「なんで僕が佐藤健司と一緒になんだ、クリスが隣に来るべきだろう」

「よし、俺はくじ引きしてくるかあ」

「待つて、行かないで、僕を捨てないでっ!!」

すがりつくな、キモいから。

……結局俺は長ネギと一緒に回る羽目に。ただでさえ未だにホモ疑惑をかけられてんのに勘弁してほしいが、長ネギを一人にするのも気がひけるので諦めた。

肝試しは、この宿舎の近くにあるハイキングコースを使って行われる。出発前に、企画した奴と先生によってコースの説明が行われ、ついでに怖い話もしゃがった。それがまあ怖い怖い、早くも一年生の間では悲鳴があがり、俺の隣でも長ネギが悲鳴をあげた。

「クリクリは平気なのか、こつこつ」

「さすがにいきなり現れたら驚きますけど、退魔のアミュレットを身につけていれば問題ないですからね」

……。

ファンタジーってズルいや。

クリクリを恐がらせて嬉し恥ずかしハプニング、というのは無理なんだろうなあ、と俺はしみじみ思った。

さて、肝試しのルールはハイキングコースの途中に設置された折り返し地点で、待ってる先生にスタンプをカードに押しってもらうという簡単なもの。これでは一番怖いのは多分先生なんじゃないかと思ってしまう。その役目を担う先生はゴリライオン。ある意味長ネギにとっては最悪な肝試しだ。

「ス…スタンプだけじゃなく頭とか踏みつけられそうだよ」

「根性焼きもプラスされそうだな」

俺がそう言つと長ネギは「ヒイツ!？」と言つて首をすくめた。何故こんな単語を知つてるんだろつな。ま、深くは追求しないでおこう。多分悲しくなるから。

そして、ついに出発の時が来る。俺と長ネギはクリクリたちよりかなり後の、最後の方の組みでスタートする事になった。

「フン、佐藤健司、君に花を持たせてやるよ。先に行くんだ」

「駆け足で行きまーす」

「ごめん、嘘です、置いてかないでえええつ!？」

睡眠不足でそのテンションに付き合つたの辛いんだよね。けど長ネギは、黙つたら負けとばかりに話し続ける。きつと、沈黙が怖いんだろつな。恐怖を紛らわせるのに必死なんだ。

「で、僕は言つたんだ。この手はトイレに行つてから全く洗つてないんだつて!」

「調理実習でそれやつたら確実に成績に響くぞ」

「構わない、それが僕の生き方だ!」

馬鹿な話をしながら、コースを歩く。ちなみに今のは、家庭科の授業で長ネギがクラスメートにオニギリを振る舞つた心温まるエピソードだ。その後の展開を思うと胸が熱くなる。そんな素敵な時間

を過ごしていると、前方にうづくまる人影が。

「ヒッ……お、お化けか！ 佐藤健司か！」

「なんで俺がお化けで二人もいるんだ、落ち着け！ うーんと、あれは……一年の女子じゃないか」

暗い山道、懐中電灯も無くうづくまる女の子。挫いたのか、足を押さえている。靴には一年生を表す緑のラインが一本入っていた。

「おい、どうした？ 怪我でもしたか？」

俺が声をかけると、女の子は顔を上げた。黒髪、ショートヘアの小さい女の子だ。小動物、という言葉がピッタリあてはまる。

「あの……足を捻っちゃったんです。みいちゃんにお願いして、誰か呼んでってお願いしたんですが、みいちゃん見ませんでした？」

みいちゃん？ ああ、ペアになったやつか。

「ここに来るまで誰とも会わなかったよ。そのみいちゃんって子、迷子になってないといいけどな。……で、どうする？ 俺たちが皆の所まで運ぼうか」

「え……いいんですか？」

女の子は驚いた表情をした。いや、ここで無視して見捨てる人間なんか居ないだろ普通。当たり前だ、一緒に行こうと言おうとしたら、長ネギがいきなり割って入った。ん？

「僕が君を無事に送り届けてあげるよ。さあ、僕に負ぶさるんだ」

おお、長ネギ！ 格好いいじゃないか！

「あ、ありがとうございます」

少し照れながら長ネギの背中に負ぶさる女の子。この子も凄いな、こんな怪しい男に負ぶさるとか、俺には考えられん。ほら、長ネギすんごいデレてる。背中感触を楽しみたいだけじゃないか。

長ネギは軽々と女の子を背負いあげる。女の子の体重が軽い事にくわえてエロパワーに支えられ、箸より重い物を持った事の無い男に奇跡を起こさせた。

「さあ行こう、僕たちの愛の巣へ！」

「へっ！？ あの、え？」

「長ネギ、全部台無しだ。ほら馬鹿な事言っでないで帰るぞ」

俺が促すと長ネギは「ちえーっ」と言っで渋々俺についてくる。

女の子はクスクスと笑っていた。

女の子は五十嵐結子という名前だった。長ネギが果敢にアプローチして聞き出した情報だ。多分、自分の事をまだよく知らない子で、それも下級生なら友達になってくれると思っただらう。見ていて痛々しいくらいに必死に話す長ネギを、五十嵐さんは嫌な顔一つしないで相手をしていた。いい子だ。

「なあ五十嵐さん、君のペアに連絡しなくていいのかな。入れ違いになったら大変だし、携帯か何かで連絡出来ないか？」

少し気になって俺が尋ねると、五十嵐さんは困った顔をした。

「携帯持って無いんです。お父さんが、危険だからって持たせてくれなくて……」

「分かる分かる、出会い系とか妙な請求とか危ないからね。君みたいな可愛い子をもったお父さんなら、心配するのは当然だよ」

長ネギ、そういう話をしてるんじゃない。そしていきなり可愛いとか言うな。五十嵐さんが困ってるだろ。

「仕方ない、早く戻って先生に伝えよう。もしかしたら、途中で会う可能性もあるし」

ため息まじりに俺がそう言った、その時。

グラ……

「え？」

「きゃっ!？」

「地震だ!」

グラグラグラグラ……

俺たちの立っていた地面が強く揺れる。そして、バランスを崩した長ネギが道の脇へと倒れた。

「う、うわあああつ!？」

「きゃあああああつ!」

「掴まれええつ!」

必死に手を伸ばす。しかし二人は、闇の中へと飲み込まれて行った。クソっ、どうなってやがる! 暗くてよく見えない為、地形が分からない。俺はすぐに能力を解放した。

身体強化『目』

キュウウウウン、と俺の瞳が強化される。僅かな光を増幅させて、闇の中を見渡した。そこは……急な斜面。周辺の風景は昨日歩いたハイキングコースだが、こんな急な斜面があったとは気づかなかった。肝試しのコース考えた奴に抗議しないと。そんな事を思いながら二人を探すと……

いた!

二人とも、斜面に生えた木に引っかかっている! 五十嵐さんは比較的太い木だが、長ネギは今にも折れそうな細い木だ。ヤバい!

「動くなよ、二人とも! 今から助けに行く!」

俺がそう叫ぶと、長ネギがすぐに答える。

「僕よりまず五十嵐さんを! 急いでくれ、彼女、腕でぶら下がっている状態なんだ!」

長ネギは夜目が利くらしい。見ると確かに、長ネギは身体全体で

木に乗ってるのに対して五十嵐さんは腕でぶら下がっているだけだ。危険と言ったらこちらの方が危険かもしれない。

しかし、五十嵐さんは気丈に言った。

「私は大丈夫です！ 佐藤先輩は長ネギさんを！」

「馬鹿、僕はいいんだ！ 佐藤健司、彼女を助けるんだ！ 僕は自分で何とかするよ！」

ああもう、どうすれば！ 派手に能力を使うとバレるし、第一、木がたくさん生えてる中で空なんか飛べない！ せつかく長ネギが男を見せてるんだ、なんとかして二人を……

その時、五十嵐さんの姿を見た俺は違和感に気づいた。あれ、ちよっとおかしくないか？ そして、その五十嵐さんと目が合う。この視線、どこかで……

五十嵐さんと目が合う。そして、五十嵐さんは俺を見て……

「……………（コクン）」

頷いた。

身体強化『四肢硬質化』

ギユウウウウン、と身体が硬化して行く。視界が闇に包まれるが、構いはしない。俺は全力で斜面を駆け抜ける。

ガスッ、ガスッ、ガスッ、ガスッガスッガスッガスッガスッガスッ！

「馬鹿かお前、一般人の前で能力使っなよ！」

斜面に足を突き刺し、前方の木々を両腕でなぎ倒しながら。視界はどうなってるかって？ それなら大丈夫。

ボッ…

ボッ、ボッ…

「ひぎゃああああっ、心霊現象！？」

無数の火の玉が舞う。

その明かりで、視界は確保出来た。

「ジツとしてるよ、今すぐ助ける！」

俺は有らん限りの力を振り絞って斜面を疾走する。何とか二人を抱きかかえると、そのまま斜面を駆け下りて窪地になっている場所に降り立った。

「グッ……ここなら、もう大丈夫だろ……」

二人を下ろす。身体中の筋肉が悲鳴を上げた。身体強化を連続で使うのも久しぶりだし、何より寝てないからな。体力的にも限界らしい。しかし神って奴はよほど俺が嫌いか性格がひねくれてるらしい。

「先輩、上！」

五十嵐さんに言われて咄嗟に見上げると、上から一本の木が落ちてくるのが見えた。あれは……長ネギが引つかかっていた奴だ。やっぱり折れる寸前だったのか。

身体強化をもう一度使う。多分、しっかり強化出来ないだろう。仕方ないよな、これは。死なない事を祈りながら、俺は上空を睨みつけた。その時……

『君に見せてあげたい七色の夢を彩る噴水いいっ！！』

ドオオオオオツ！！

長ネギの手にした指輪から、恐ろしい勢いで水流がほとばしる。それは落下して来た木を軽々と吹き飛ばした。

「お前……」

「へ、へへへ。最後に美味しい所をさらって行くのは、真のヒーローたる僕の仕事だからね」

本当は、バレるのが俺だけなのは不公平だからって事だろ？ 格好つけすぎだぜ、長ネギ。

そんな事を考えた次の瞬間、俺たちの頭上から大量の水が降り注いだ。

ザアアアアアアアツ！

「うおっ、なんだ!？」

「きゃっ!？」

「あぶあらべはしゃばわわわ!？」

……。

まあ。上に水を放てばこうなるわな。

「あ、あはははは！ 佐藤健司、格好いいぞ！ これが水もしたたる……」

「や・か・ま・し・い！」

スパアアアアツ！

「へぶんっ!？」

長ネギの頭をぶっ叩きながら、俺はどうしたものと頭を抱えた。
はあ……勘弁してほしい。

残った力はほぼゼロ。

果たして俺たちは無事に戻れるのだろうか。

第二十四話 ゴーストライダー

ハイキングコースからだいぶ外れた場所で、俺たちはとりあえず着ている服を乾かす事にした。火を起こすのは長ネギの魔法具を使用。まずそこから辺の木の枝を俺が適当に切って集め、長ネギが火をつける。山火事にならないように周囲に水を蒔いたりするのも、長ネギ。こうして見ると魔力を消費しない魔法具ってかなり便利なのだ。

とりあえず衣服を乾かす際、木の枝で簡単な物干し台を作り、そこに服をかけてバリケードを作った。五十嵐さんは女の子だからお互いに身体を見ないようにして、俺たちは暖をとっていた。

「魔法、ですか……凄いですね」

「ふっふっふ、まあねー、まあねー！」

上機嫌で言う長ネギ。俺が物干し台を作ったりしてる間、長ネギは延々とお喋りをしていた。まあ、いちいちそれを怒ったりはしない。コイツのやる事にいちいち腹を立てていたら潰瘍が出来るからな。

…しかし。何だか今日の長ネギは少し違うらしい。いつもならここから自慢話のオンパレードとなる所なのだが、長ネギの声のトーンは落ちていた。

「……けど、さ。これは皆道具のおかげなんだ。僕自身には何にも才能は無いよ」

パチパチ、と音を立てて揺らめく焚き火を見つめながら、長ネギは沈んだような声で言った。濡れた衣服……まあジャージだけど、そのジャージのバリケードがあるからか、長ネギはいつもと違って無理に虚勢を張らずに話をしていた。相手が見えない事で、少し内省的になってるのかもしれない。

「長ネギ、でもお前は一つだけ魔法が使えただろ。こっちの人間は魔法なんて使えないんだ、ちよつと見せてやれよ」

「うえっ！？ な、何言ってるの！ ありやただ光るだけで！」

慌てる長ネギ。しかし五十嵐さんは興味津々らしく、バリケードの向こうから長ネギに声をかけた。

「私、見てみたいです！ 光って、どんなのですか!？」

「い、いや、その……」

言いながら、長ネギはこちらを見て困った顔をする。俺が目で「やれ」と合図すると、仕方なく頷いた。

「あ、あんまり小さくても笑うなよ」

長ネギが両手を前に突き出して呪文を唱える。長ネギの呪文は何故か詩になっただけで毎回笑うのを堪えるのが大変なんだ。光の小以前に笑ってしまったかわらないか心配だな。

「君の笑顔が輝く時、きつと世界は救われる、空飛ぶカラスは白くなり、隣のオッサン毛が生える」

今回はポジティブだな。精神的な成長が感じられる。

「僕がこれから捧げる光で、闇を照らしてマイハニー、ピカピカラブラブサンシャイン、光らなきゃコロス」

なんでいつも最後でキレルんだ。ああ、五十嵐さん笑わないで。これでも意味が繋がってるだけ頑張ってる方なんだから。

長ネギの手が光り出す。そして程なくして、テニスボール大の光の球が空中に飛び出した。……なんか前見たのより大きいな。マジで成長したのかもしれない。

「これが、僕の魔法なんだ。……ガツカリしただろ」

落ち込んだ声で言う長ネギ。しかし五十嵐さんはそれに反比例するように興奮したような声で言った。

「凄いですよ、長ネギさん！ 私、こんなに優しい光、初めて見ました！」

「え……？」

「凄くないですか、こんなに暖かい光が作れるなんて長ネギさんは絶対魔法の才能がありますよ！ 私、この光が大好きです！」

五十嵐さんは本当に感動している。声だけでも、それが本気だと分かった。長ネギは……うわ、涙と鼻水でえらい事に！

「…グスツ、…ぼ、ぼんど？ ぼんどに僕、凄いがなあ？……エグッ」

「本当ですよ。長ネギさんが他の魔法を使えないのは、きっと誰か

を傷つけるのが嫌だからじゃないですか。こんな暖かな光を作れるんです、きつと心が暖かい人なんだと思います」

「う、ううううああんっ、佐藤、誉められたよ、ぼくぼめられだよゲホツゲホツ！」

「分かった、分かったから泣きつくな、キモいから！」

なんとか長ネギを引き剥がしながら、俺は内心で喜んでいた。虐められたりして卑屈になつたり歪んでしまつたりした奴も、ちよつとしたキツカケでガラリと変わるものだ。俺も変わったし、クリクリだつて変わった。轡田も……アイツは変わりすぎか。とにかく、コイツも変わるかもしれないな。きつと、良い方向に。

長ネギの光は、プカプカと浮いて行く。精神状態を反映しやすいらしいから、きつと嬉しかったんだろうな。俺と五十嵐さんは、その光をただ見上げ続けて……上空で、誰かの悲鳴を聞いた。

「きゃー、人魂よー！ー！」

「やあ、置いてかないでー！ー！」

……。

おい。

もしかして、探しに来てくれた人だつたんじゃないのか？

俺と五十嵐さんは微妙な顔をして見つめあつた。そして、そんな風になっていると暗闇の向こうから小さな明かりが。ふわふわ、ふわ

ふわと此方へやってくる。これは……人魂だ。

「ヒイイツ、ひと、ひと、人魂あああっ!？」

それを見た長ネギが悲鳴を上げる。そして……

「ううん……きゅん」

倒れた。

気絶、か。相変わらずお前は怖がりだな。まあ俺だって何も知らなかったら、人魂見て気絶したりするかもしれないけど。

俺は長ネギを地面に寝かせると、バリケードに使っていたジャージを除ける。そして、初めから濡れてなんか居なかった五十嵐さんに向かって声をかけた。

「それで、何を企んでるんだ、ゴーストライダー」

睨みつける。五十嵐さんは目をパチクリした後……先ほどまでと全く違う、男のような口調で話し始めた。

「いつ気づいた？ 愚鈍な貴様にしては中々早かったじゃないか」

「……違和感なら地震の後の一件かな。幾ら細いとはいえ、木にぶら下がってるのに少しも木がしならないのは変だと思った。それに、お前の目。その何を見てもつまらなさそうにしている目は、見るだけで胸糞悪くなる」

俺が言うと、五十嵐さん……ゴーストライダーは笑った。死んだような瞳で。もしこれが死人の瞳だと言われたら、きつと誰でも信じるだろう。それくらい、生気に乏しい目をしていた。

ゴーストライダーは、恐らく俺が唯一向こうの世界で認識していた世界渡航者だ。後になって鉄丸も渡航者だと知ったが、ゴーストライダーだけは自ら渡航者だと名乗った。

俺は彼女を許せなかった。何故なら、彼女は渡航者でありながら魔王側へついていたのだ。魔王軍が世界各地で酷い振る舞いをしてきたのを目の当たりにしていた俺には、彼女の行いは到底許せるものではなかった。

勿論、今なら許せる。彼女は当時魔王軍の兵士となって、魔王軍に潜入して内部から崩壊させようとしていたのだから。結局俺たちのパーティーには入らなかったが、クリクリがさらわれた時などは俺と連絡を取り合って、救出劇に参加してくれていたのだ。

ただ、それでも俺は彼女が苦手だった。それは本当に単純な話。コイツは事ある毎に俺をバカにする……まるでミラージユのように。そしていつもコイツの言う事の方が正しかったのだ。

「貴様の監視、と言いたい所だが違うな。単に林間学校に来たかっただけだ」

「嘘つけ、散々向こうでサバイバルな体験して来ただろ。まあ、話せないなら無理には聞かないけど。人魂出したり、あんまり周りを驚かしてんじゃねえぞ」

「その人魂のおかげであの王子を助けられたんだ、プラスマイナスゼロという事にしよう」

ああもう、ああ言えばこう言う……。

しかしこんな場所でゴーストライダーに会うとは思わなかったな。本当に何が目的なのやら。

「なあ、お前の目的は聞かないけどさ。一つ頼みがある」

「ん？ なんだ、言ってみろ」

「長ネギ、さ。アイツ、マジで友達いなくて寂しいんだよ。お前に会えて、本当に喜んでる。このままアイツと仲良くしてやれないかな」

俺がそう言うと、ゴーストライダーは不思議そうな顔をした。

「お前は本当に変わらないな。愚鈍で馬鹿でお人好し過ぎる」

「……俺の事はどうでもいいだろ」

「ああ、心底どうでもいいな。しかしその頼みは聞けん。……私は本来ここには居ない存在なのだから」

なに？

「私はな。別に神に頼んで戻って来た訳ではないのだ。そもそも私は渡航者ですらない。神から授かった能力は魂の転写、自分のゴーストを飛ばして疑似体験する事が出来るというものだ。私は自分の

ゴーストを向こうに送り、お前たちと出会っていた」

つまり、本人も魂も此方に居て、スペアの自分で向こうの世界を楽しんでいた、と。リスクが少なくて便利だな。

「でも何でこつちの世界でも、その能力を使うんだ？　もしかして本来ここには居ない存在って、まさか……」

死んでいるとか？　元々幽霊、とか？

「さあ、な。好きなように受け取るがいい。私は本来ここには居ない存在、それは本当だ。私は嘘はつかないよ、ついた嘘と言えば貴様に自分は渡航者だと打ち明けた時くらいだ。それも、全部が嘘だと言っわけではない」

くそ、何だか煙にまかれた感が強いな。生きてんのか死んでんのか……しかし、そんなの今はどちらでもいい。

「お前が幽霊でも構わない、長ネギと友達にはなれないか？　こいつ怖がりだけど、お前ならすぐ慣れて仲良くなれると思うんだけど」

「……無理だな、私には残された時間が少ない。なまじ仲良くなつて別れの辛さを味わわせるのは酷だからな。友達にはならないさ」

残された時間。それは成仏しちゃうとかだろうか。全く、コイツって肝心な事はいつも話そうとしないんだよな。全部自分一人で解決しようとする。

「なあ、俺やクリクリは力になれないか？　お前の抱えているもの、いくらか俺たちも背負えないか？　前から思ってたけど、お前もつと周りを頼った方がいいって」

「ふむ……」

ゴーストライダーは少し考えてから言った。

「ならば、これから一芝居うつから邪魔せず黙っていて貰おうか。正体を知ってる貴様が居ては、うまくいかないからな」

一芝居？

一体なんの事だ、と聞いたものの、ゴーストライダーは答えはくれなかった。

長ネギが目を覚まして、ゴーストライダーが五十嵐さんに戻ってから。俺は疲れきった頭で知恵を絞って今後どうしたら良いか考えていた。そして、俺はとんでもないポカをしている事に気づく。

携帯使えばいいじゃない。

全くアホだな、俺は。早速携帯を取り出してみると電波は……あ、無いわ。そりゃ電波通じてたらとくにクリクリとかから連絡来てるか。今日の俺って本当に頭が働いていない。ちょっと眠って回復した方がいいだろうか。そう思っていると……

あれは、なんだ？

暗闇の向こう。人魂とは違う何かの光が。緑色にぼんやり光る何かは、奇妙な動きをしながら此方へとやってくる。

「さ、佐藤健司、また変なの来た！」

「慌てるな、俺もまだ少しは力を使えるし、お前だって道具があるだろ」

言いながら、五十嵐さんを見る。五十嵐さんは目で「私は何もしていない」と伝えてきた。

俺は光を凝視する。

緑色の光はどうやら飛び跳ねているようだ。何やら音まで聞こえて来た。耳をすませると……

キュッ

キュッ キュッ

キュッ キュッ

「健司様〜っ！」「佐藤君〜っ！」

クリクリと轡田の声！ 助けが来たんだ！ じゃああの光は……

「キュ〜ンッ！」

「わぶっ！〜？」

緑色の塊が飛んで来て、俺の顔に張り付いた。これはクリクリの携帯電話じゃないか。お前飛び跳ねるのかよ、凄いな。

「さ、佐藤健司、そいつは何だ！ 君のペットか！？」

「クリクリの携帯電話だよ。ほら、持ち主が来るぞ」

懐中電灯を持ったクリクリと轡田がやって来る。その時、轡田の持っていた懐中電灯が偶々クリクリの顔を下から照らした。それを見た長ネギは絶叫する。

「ぎゃあ、バンパイヤ！」

「誰がバンパイヤですか、失礼なーっ！」

パキッ！

「ぱぎゅっ！？」

クリクリの鉄拳が長ネギの顔面にヒットする。……なあ長ネギ、お前本当にクリクリの事が好きなのか？ 幾らなんでもそれは無いだろ。

「クリクリ、凄いな。良くここが分かったな」

「はい、携帯電話のGPS機能のおかげです。健司様の携帯電話の個体識別番号とICチップの情報は、この子が覚えてますから」

俺の顔から毬藻を剥がすと、クリクリは愛おしそうに撫でる。いや……GPS機能ってそういうもんだっけ？ それ、恋人監視アプリ

りみたいなものじゃないのか？ まあステラの入れ知恵なんだろうが、今回はそのおかげで助かった。なんか複雑だけど……。

「佐藤君、無事で良かったよ。二人が遭難したって聞いて、まさかと思っただけど……」

まあ俺がこんな所で遭難とか、俺の事を知ってる人なら普通は考えられないよな。

「少し事情があつてな。でもこれで帰れる。道案内、頼むな」

俺が言うと、轡田は「うん！」と元気に返事をした。何だかクリクリの子犬モードみたいだな。そんな風に思っていると、不意にクリクリが大声をあげて俺のそばに立った。

「下がって下さい、健司様！」

「は？」

振り向くと、クリクリが五十嵐さんと対峙している。あ、まずい。ゴーストライダーの事知らないんだよな、クリクリって。五十嵐さんはクリクリと向かい合いながら……少し苦しそうな表情をしていた。そう言えばクリクリは退魔のアミュレットをしていた！ まずいだろ！

「おい、クリクリ、その子は……」

「危険です、健司様！ この人はアンデッド、ゴーストです！」

ああ、まずい。とりあえず説明しないと。そう思っただけで口を開こうとした時、五十嵐さんとまた目があつた。俺を睨んで、口出しするなど伝えてくる。何でだよ、お前ヤバいだろ！？

……その時。

「クリス……お前、何言ってくれてんの」

五十嵐さんを庇うように、長ネギが立ちはだかる。

「五十嵐さんに失礼だろ。謝れよ」

「なっ……何を言ってるんですか！？ その人はゴーストです、現に私のアミュレットに反応して……」

「うるさいっ！」

長ネギが怒鳴った。

「彼女は、彼女は僕の友達だ！ 僕の事を誉めてくれた、いい人なんだ！ 彼女に失礼な事を言うなら、いくらクリスでも許さないぞ！」

ハッキリ言おう。

ここまで長ネギが怒るのは俺だっただけで初めて見た。いや、色々突っ込み所はあるよ、いつ友達になったんだ、とか。けどそんな事が吹き飛んでしまっくらい今の長ネギは強烈なオーラを発していた。クリクリも、これには驚いて俺に助けを求めた。

さすがに、もう俺が出るぞ。そう思っただけで口を開こうとしたその時、

五十嵐さんが苦しみながら長ネギに声をかけた。

「本当、なんです。私、幽霊ですから」

「な……嘘だ、そんなの！」
悲しそうな顔をする。

「黙っていてごめんなさい。私、皆と一緒に遊んだり、お友達を作ったりしたかったです。私の事、お友達って言ってくれて嬉しかったです」

「あ、ああ、僕らは友達だ！ だから、これからも一緒に……」

しかし、五十嵐さんは首を横に振った。

「もう行かなきゃ。時間、来ちゃったから……」
身体が、どんどん透けてくる。

「私、凄く楽しかった。長ネギさんと会えて、幸せだったよ」

「や、やだよ、僕は君ともっと一緒にいたいんだ！ だから、行かないで……お願いだよ！」

涙でぐしゃぐしゃになっている長ネギ。クソ、一芝居つてこれの事か！ いくらなんでも可哀想だろ、長ネギが！ けれど、俺は二人の間に割って入れなかった。くそつたれ、なんでこのシチュエーションで勇者体質が発動するんだ、それも動けないとか！ 俺が行動する事で困る奴つて……ゴーストライダーか！ でもこんなのつて無いだろう！？

次第に五十嵐さんの身体は薄れてゆく。そして、光に包まれ形を

無くし始めた。

「あなたの魔法、素敵だった。あなたのお話、面白かった。大丈夫、きつと長ネギさんならたくさん友達出来るから……」

「欲しくない、たくさんなんか欲しくないよ！ 僕は君と友達になりたいんだ！」

五十嵐さんは、ついに形を無くし光の粒となる。その光が天へと登って行く時、五十嵐さんは最後に長ネギに言葉を残した。

「離れていても私たちは友達だよ。ありがとう、優しい魔法使いさん。いつまでも、見守っているからね……」

そして。

光は、天へと昇っていった。

周囲を照らしていた光は消え、辺りは暗闇に包まれる。そんな中、クリクリや轡田は言葉を無くしていた。俺だってそうだ。ただ、その闇の中……

「う…うわあああああつ!」

長ネギの慟哭だけが響き渡っていた。

第二十五話 林間学校終了

悲しみに暮れる長ネギを担ぎ上げて、クリクリたちと一緒に施設へ戻った俺たち。地震のせいでトラブったという事で怒られるような事は無かったが、沢山の人を心配させていたらしく、俺は申し訳ない気持ちでいっぱいだった。ちなみに先生たちに確認を取った所、遭難者は俺たちだけ。五十嵐さんはおるか「みいちゃん」なる人物も存在しなかった。

長ネギは泣き疲れていて、施設に戻った途端に眠ってしまった。まあ無理も無い。心が辛かっただろうからな。俺は長ネギを先生に預けるとクリクリと轡田に礼を言った。

「二人とも今日はありがとう。助かったよ、本当に」

「別にいいよ、友達として当然の事をしたまでだから」

轡田はなんでも無いように言う。その隣でクリクリは暗い顔をしていた。

「健司様……私、いけない事をしてしまったのでしょうか。あの人が消えてしまったのは……」

ああ、ゴーストライダーとの一件か。消えてしまった原因が自分のアミュレットのせいだと思ってるんだろう。長ネギに本気で睨まれたのもショックだったんだろうな。

「あれは仕方ない事だから。長ネギだって、時間が経てば落ち着いてくるし、きっと許してくれるさ」

「そつだと良いんですけど……」

クリクリは気落ちしたまま、俺の言葉に一応納得して部屋へと戻って行った。悪いな、クリクリ。こっちの件が一段落したら、ちゃんと説明するから。

「じゃあ、俺はちょっと寄る所があるから」

「え、佐藤君!？」

慌てる轡田。

「クリスさんから聞いたけど、寝てないんですよ！早く部屋に戻らないと!」

「いや、やらなきゃなんない事があるんだ。悪いけどお前は……」

ガシッ!

腕を組まれた。……はい？

「付き添う。これ以上心配させるなら、こっちだって強引に行くよ」

「ば、馬鹿、お前!」

まるで恋人のように寄り添う轡田。胸が、胸が当たる！畜生、こんな所誰かに見られた日にゃ俺は大変な事に!

「分かった、分かったからお前もこっちに来い!」

「うん、言われなくても行くよ」

こうなったら仕方ないだろ。俺は諦めて轡田と共に、あの使われ

ていない部屋へと歩いて行った。

誰も居ない部屋。その薄暗い部屋の明かりをつけると、俺は真っ直ぐ鏡の前へと行く。そして、デコピンの構えをしてから語りかけた。

「みいちゃん、今晚は」

『……………』

鏡は答えない。俺は残り僅かな力を使い、指先を堅く…

『分かった、分かったからやめて！』

ミラージュが慌てて現れる。その姿は…うちの学校のジャージじゃないか。無理だろ、その格好で潜入とか。そんなムチムチ、色気たっぷりの女子高生とかAVじゃないんだから……。

『今のふざけた妄想も許してあげるから、デコピンやめて！』

むっ……………読まれたか。仕方ない。

「ミラージュ。ゴーストライダーが全部吐いたぞ。お前、何やってんだよ」

『嘘！ あの子、黙ってるって約束したのに……って、ハッ！？』
分かりやすいな。

「やっぱりお前か。ゴーストライダーに頼まれたのは魔力の供給か？ アイツの居場所知ってるんだろ、繋いでくれ」

『うう、汚いわよケンジ様あ！ 私だって守秘義務が……』
半べそをかくミラージュ。守秘義務。ゴーストライダーから何かを頼まれていた。居場所を繋ぐのが守秘義務に違反する？

そう言えば、ゴーストライダーは「私は嘘をつかない」と言っていた。ついた嘘は俺に「渡航者」だと打ち明けた事くらいだ。ならば、あの「林間学校に来たかった」という言葉は本音だということになる。来たくても来れない事情があるという事だろうか。父親が電話を危険だと言って持たさないとも言っていたな。そして繋いだだけで守秘義務違反くらい一目瞭然で居場所や事情がわかるとしたら。

「ミラージュ、どこの病院だ？」

『ぶっ！？』

盛大に噴いた。それまで黙っていた轡田が、不思議そうに言う。

「ねえ、これ何の話？ 誰の事言ってるの？」

『それについては私が話そう』

その時、鏡に映る風景がガラリと変わる。そこは暗い病室、此方に向かって顔を向け、ベッドに横たわる少女の姿があった。その外

見は……明らかに、五十嵐さんだ。あのゴーストと比べると、だいぶ痩せてはいるが。

「あ、あの幽霊さん!？」

『フツ……佐藤健司、よく私の居場所が分かったな。愚鈍な貴様にしては今日はやけに頭が回るじゃないか』

口調は相変わらず男みただった。しかし疲れているのだろう、起き上がるうとしても身体が震えるだけで起き上がれない。慌てて転移して来たミラージユがそばに付き添い、なんとか身体を起こした。

「ゴーストライダー……いや、五十嵐結子さんか。思い出したぞ、確か俺たちの学年だよな」

「五十嵐……あ、去年入院した人でしょ？ 一学期で入院しちゃって、それきり会えなかった」

轡田も気づいたようだ。そう、入学してしばらくしてから、倒れてそれつきりなやつが居たんだ。去年の林間学校で目撃されたのも五十嵐さんなんだろうか。そう聞くと、五十嵐さんは頷いた。

『ああ。神に力をもらったはいいが、コントロールが難しくてな。体力を削って行使されるから、頻繁にも使えない。林間学校のようなイベントに紛れるくらいしか出来なかったんだが……色々迷惑をかけたようだ。すまなかった』

「……なんで黙ってたんだ。寂しかったなら、言ってくればすぐ駆けつけたぞ」

やるせない気持ちで言った。時間が無い、というのは体力の事だったのか、寿命の事だったのか。コイツは向こうの世界でミラージ

ユとだけは多少打ち解けていたから、そこらへんを色々相談していたんだろうが……俺にも相談して欲しかったな。

『今のお前なら……相談していたんだろうな。しかしお前、向こうの世界に行くまではそんな積極的に周りに関わろうとしなかったらう？』

「う……」
確かに。

『まあ、クリス姫と一緒にになってからは劇的に変わったようだがな。その男と三人で校舎を駆け回っていたのを見かけたよ。以前からは考えられないくらい明るい顔をしていた』

ゲツ、見てたのかよ！ 校舎を駆け回ってた？ ああ、決闘騒ぎのあった日か。あん時見られてたのか……

『しかしな、もう遅いんだ。私の患った病気は中々難病らしくてな。医者も口では言わないが、絶望的らしい。残り少ない命だから、後は静かに過ごそうと思う。だから……』

「だから長ネギとはもう会えない？」

コクン、と頷いた。

『別れは悲しいだろう。変に長くそばに居て、余計に辛くなるのは可哀想だ。それに……私も、辛い。あのバカ王子が泣くのは、もう見たくはないんだ』

それを言われると、こちらも言葉に詰まってしまふ。いや、言いたい事はあった。別れだって、悲しいだけじゃない。それまでの期

間が短くても、幸せな時間を過ごせるはずなんだ。だからこそコイツだってゴースト飛ばして林間学校に参加したんだろうし。けど五十嵐さんは本当に満足そうな顔をしていた。もう充分、幸せだったと。

……これが、俺がゴーストライダーを嫌いだった一番の理由だ。勝手に自己完結して、理屈っぽい言葉でガードを固める。頑固で我が儘で、周りの言葉なんて一切聞かない。

本当は、土下座して泣き落としてもしてやるうと思ってたんだけどな。気が変わった。そんなに好き勝手やりたいならやるがいい。こっちも好きにさせてもらう。

「轡田、出番だ！」

「ふえっ!?!」

突然呼ばれて驚く轡田。俺の真剣な眼差しが注がれる場所に気づいて顔を真っ赤にした。

「う、嘘でしょ！ 本気で言ってるの!?!」

至って本気さ。

次に俺はミラージュを見る。目が合うと、ミラージュは……笑った。

「みいちゃん、作戦Oを発動する。頼んだぞ！」

『おっぱいのね。少しは捻ったらどうなのよ』

「おっぱい捻ったら痛いだろ？ ほら、つれてけ」

「わっ、わっ、佐藤君、嘘でしょ！？ 別にここで出してミルクだけ向こうに持って行けば……」

みなまで言わせない。悪戯好きなミラージユの心に灯った火はそう簡単には消えないのだ。つけたのは俺だけだ。ミラージユはこちらに転移すると、暴れる轡田をロープで縛って手際良く鏡の中に押し込んだ。さすが手品師。けど亀甲縛りにする必要はなかっただろ。

鏡の中では、ドタバタの大騒ぎが繰り広げられた。まず妖しい格好で縛られた轡田がミラージユの手によって更に際どい状態にされる。そして次に五十嵐さんの身体をそこに重ね合わせた。

『ほらほら、お薬の時間ですよぉ』

『ア、アホか、男の乳なぞ吸えるか！』

『なら絞って発射しちゃうんだから』

ギョッ！

『ふわぁんっ！』

……。

ごめん、五十嵐さん。思ってた以上に嫌な光景だわコレ。

『これは……』

悪い事したかな、と思って五十嵐さんを見ると、ミラージユが絞り飛ばした母乳を飲んだ五十嵐さんが驚愕の表情を浮かべていた。どうした？

『……………美味い!』

はい?

『まったりとしていて、それでいてしつこく無く……………』

『口に入れた途端パツと広がる感じい?』

『きゅ、究極の乳とはこの事か……………』

『僕のおっぱいどうなっちゃってんのさ!?』

…分かった、お前らアホだろ。

その後、俺は美味しい美味いと自ら轡田に襲いかかる五十嵐さんを眺めていた。コレ、かなり際どい映像だけどいいんだろ?か。俺は何となく、旅館とかの有料チャンネルを見ている気分になっていた。

そして、10分後。

やけにツヤツヤした五十嵐さんと、ボロ雑巾のようにくたびれた轡田の姿がそこにあった。

『礼を言うぞ、轡田。おかげで異様に元気が出てきた。貴様の母乳はアレだな、いつか世界を救うんじゃないか』

『ぼ……………僕は男、なのに……………』

悲しんでる所悪いが轡田、女の子座りで胸元を両腕で抱えて隠す今のお前は、誰よりも女の子してるぞ。

「五十嵐さん。今ので病気が治るか分からんけど、もし学校に戻れ

るなら……長ネギと、また仲良くしてもらえないか。俺たちも、またお前と一緒に話をしたい。友達に、なってくれないか」

俺が言つと、五十嵐さんは困つたような顔をする。もう断る理由なんて無いだろ？ あるなら、また俺が壊してやる。いや、轡田が壊したのか、さっきのは。

『……ふう、お前は相変わらず親切の押し売りが好きなようだ。分かった、復学出来たら考えよう。ただ……直ぐには無理だ』

「そつだな、退院までは時間がかかるだろう。今は前向きになつてくれただけで充分嬉しいよ。ありがとうな」

『う、うむ……』

ん？　なんか歯切れが悪いな。まだ何か問題が？

「なにかマズい事があるのか？　直ぐには会えない理由とか……」

俺が聞くと、隣にいるミラージユがため息をつく。コイツ、なんで分かつてねえの、みたい。ムカつくな。

『佐藤健司、あのバカ王子と会うのは少し待っていて欲しい。その……ガリガリでみつとも無いだろう、今の私は。せめて、あのゴーストくらいの体型に戻るまでは、待っていて欲しい』

ああ……そうか。女の子だもんな、五十嵐さん。今でも充分綺麗だとは思つんだけどな。そう言つと、五十嵐さんは笑いながら言った。

『そう言うセリフは、クリス姫の為にとっておけ。あまりそこらの女に使うもんじゃない』

『そうだよ、佐藤君。佐藤君って女子からの人気凄い高いんだから、気をつけないと』

何故轡田まで。というかお前は早くこっちに戻って来い。

「分かった、以後気をつける。じゃあまた学校で会おう。長ネギの事、宜しくな」

『うむ。了解した』

鏡の風景が変わる。ミラージユが轡田と共にこちらへ戻ってくる
と、完全に鏡の中は元の風景に戻っていた。

ミッション終了。これでやっと眠れる。時間を見ると夜10時、
そろそろ寝る時間だ。

「ミラージユ、ありがとうな。これで安心してゆっくり眠れる」

「私も感謝してるわ。あの子は数少ない私の理解者だったから。それと、あのお馬鹿さんの事も、ね」

お馬鹿さん？ 長ネギか。

「そう言えばお前って長ネギとよくつるんだよな。何でだ？ 魔法使いとしては出来損ないの長ネギを、お前が気に入る理由が分からないんだけど」

「……ふふふ、確かに普通は分からないわよね」

楽しそうに笑うミラージユ。

「ちょっとだけ教えてあげるけどお。彼は関係者の間では『サルジ

アンの秘宝』と呼ばれているの。私がこっちに来た理由の一つが、彼を連れ戻す事なのよねえ。もうそんな気さらさら無いけど」

サルジアンの……秘宝？

「彼は無能なんかじゃないわよ。その力の稀少さに気づかず、ただ無能だと思いつまされてるだけ。けど、そんなのどうでもいいじゃない。こっちで魔法と無縁な生活を送れるなら、それに越した事は無いわあ。じゃあ、これでお終い」

「お、おい、ミラージュ!？」

「みいちゃんは帰るでありんすう。あ、ケンジ様ちゃんと寝なきやダメよう？ 普通の人間ならとくに死んでるくらい消耗してるんだからあ。じゃあ、おやすみい」

そう言つて、ミラージュは鏡の中へと帰って行った。クソつ、本当にマイペースで話すなアイツは！ いつもは余計な事まで話す癖にこっちが聞きたい事には答えない。

そんな風にカリカリ来ていると、ふと左手に柔らかい感触が。轡田だった。……何故握るかな。

「色々あつて疲れたでしょ。今日は早く寝よう」

「わ、分かった。分かったから離せ。自分で歩けるし部屋にも戻る」

「離しません。これは罰です。僕を辱めた罰なんだよ」

「ちよ、ちよつと待て、この場合お前まで噂に……」

「はいはい戻りますよ〜」

うわああああ、やめろやめろ、みんな俺を見るなあああっ！
廊下を歩くクラスの奴らがサツと避けて行く中、俺は轡田に引つ張られてそのまま部屋へと連行される。コイツこんなに力が強かったのか、と思うくらいガツチリ掴まれたまま、俺はなすすべ無く引きずられて行った。

ああ、終わった。

こりゃガチホモ噂が流れるの確定だわ。というかクリクリとの仲は既に知れ渡っているからバイか。どっちもろくでもねえ。

きつと今日は疲れているのに悪夢を見るんだろっな、と俺は心の中で泣いた。

そしてついに、三日目の朝を迎えた。

轡田のゴーストが沢山出て来てエリクサーまみれになるといって、逃げ場の無い悪夢を見ながらも完全回復を遂げた俺は、朝食をしっかりと食べて元気いっぱい、やたらとハイテンションで三日目のスケジュールを終えた。と言ってもハイキングコースのゴミ拾いと施設

の人にお礼を言うくらいだけどな。ある作家が言っていたが「便所の100ワット」という言葉が相応しいくらい場違いで無駄なエネルギーだった。周りから見たらだいたいぶウザかったんじゃないだろうか。

帰りのバスの中では、疲れて眠るクラスメートの邪魔にならないように静かに漫画を読んでいた。クリクリも「勉強になります」と料理物の漫画を読んでいた。昨日の光景が蘇って鼻血が出そうになったのは内緒だ。

そして。

学校に戻って来て、校門前で整列をする。校長の長い話の後で、「解散」という言葉を聞いた。ああ、やっと終わった。皆の顔に、安堵の色が現れる。ガヤガヤと談笑する声が起こり始め、集団がバラけ始めた、その時……

聞き覚えのある声が聞こえて来た。

「うっわ、きたねー！ コイツら漏らしてやんのーっ！」

なんだこりゃ。

しかし次の瞬間、所々で女子のキヤーという悲鳴や男子の怒号が聞こえて来た。なんだなんだ、何が起こってる！ 呆然と立ち止まっていると、人混みの中を疾走する黒い影が！

「さ、佐藤健司、匿ってくれ！」

「長ネギ、またか！ 今度は何しやがった！」

「ははは、良く聞いてくれた！ 見たまえ、このペットボトルの中身を。僕特製の腐りかけコーヒー牛乳片栗粉ミックスさ。これをムカつく奴らの股間目掛けてぶちまけてやった！ 結構リアルに汚物チツクだからさ、帰り道で奴らは最低の羞恥を味わい続ける事となるっ！」

最低なのはお前だ。

よくまあこんな事を思いつくもんだと感心するよ。何にも変わってないじゃないか。五十嵐さんが見たら泣く……いや、笑うか。鼻で。

「長ネギ、こそこそしてたら余計見つきり易いぞ。ここは堂々としていた方が見つからないんじゃないか？」

「そ、そうか。そうだな、だったら堂々としているよ。はっはっは！ 僕らの勝利だ、えいえいおーっ！」

いたぞー、という声が聞こえた。

「な、なんでーっ!？」

「馬鹿、誰が勝ちどきをあげろつつった！ それも『僕ら』とか、俺までロツクされたじゃないか！」

「と、友達だろう!？ 一緒に逃げよう！」

「そんな友達はいらねえっ!！」

俺たちは逃げる。罵りあいながら。風のように校庭を駆け抜けな

がら、これもまた友達……いや、悪友つてやつなのかなと苦笑いした。そういや、鉄丸とクリクリ怒らせた時も一緒に逃げたっけ。そんな事を思いながら。

（ゴーストライダー、見ているか？ お前も早く来いよ、きっと毎日が楽しいハズだ。というか、お前が長ネギのブレーキになつてくれ、頼むから）

疲れたと言つて俺に負ぶさろうとする長ネギを引き剥がしながら、俺はどこかに居る五十嵐さんに語りかけていた。

こうして、長かった林間学校は終わりを告げる。慌ただしく、心の休まる時が中々無かったが、終わってみるとそれなりに楽しかったような気がする。まあ休みを挟んで明後日からの学校での俺の噂が怖いけど、何とかなるだろ。今更何を言われても構わないしな。そんな風に考えて、俺は家路についた。今日は疲れた、さつさと休もう。しばらくは面倒事も無い、平穏な日常に戻る事だろう、なんて思つてもいた。

けど、俺は甘かった。

いやまさかね。

まさか、ここから本格的な日常の崩壊が始まるだなんて、その時の俺には想像も出来なかったよ。

第二十六話 新たなるメッセーじ

旅から帰って来たら、誰しも心に抱く思い。それは、「やっぱり家が一番」という気持ちだろう。特にこんな強制連行みたいなイベントを終えて自宅に戻ってきた時では、その思いは一人だ。俺は万感の思いを胸に、玄関のドアノブを手にする。ガチャリと捻り、ゆつくりと引くと開口一番ただい……

「おかえりなさい、ア・ナ・タ」

……。

パタン……。

閉めた。

ガンガンガンッ！

「ちよつと兄さん、可愛い妹が頑張ってるのにそれは無いんじゃない!?」

「うるせえ、どこの世界に裸エプロンで出迎える妹がいるんだ！
なんか着るバカ！」

「いるじゃない、兄さんのパソコンのハードディスクの中にい！」

きゃあああああああつ!?!?

なんつー奴だ、プライバシーもクソも無いのか家には！俺は慌ててドアを開ける。つんのめった紗良を受け止めて隣に退けると急いで自分の部屋へと駆け抜けた。紗良の格好？ ああ、良く見たら

ちゃんと下着つけてたよ。どっちにしるエロいけど。

部屋に戻ってパソコンを起動する。そして気づいた。ちゃんとパスワード設定してたじゃないか。なんでアイツが……って、まさか

「兄さん、うつそくん。けど、そういう趣味があるって判明したから私的には満足ナリ」

ガツクリとうなだれた。

ちくしょう、引つかかった……俺って本当に分かりやすいのな。

「まあまあ兄さん、私はそういうの軽蔑しないから元氣出しなよ。それより、おかえり兄さん。居間に皆いるから、早く行こ」

「う…：ただいま。お前の冗談が段々ソリッドになって来ていて俺はしんどいよ」

このままでは手玉に取られっ放しだ。いつかギャフンと言わせてやりたいが、何度シミュレーションしても「あふんっ」になるから諦めた。

居間に入ると、そこには早めに帰って来ていた親父と、夕飯の準備をする紗英さん、そして動物番組を見ている幸太がいた。

「ただいまー」

俺が言つと、やはり一番に反応したのは幸太だった。

「おかえりなしゃい！」

トトトトト、と走り寄ってきて、ガバツと俺に抱きついた。

「ただいま幸太、良い子にしてたかー？」

「うん！ しゃらとおままごとしてたの！」

おままごと。

大丈夫だろうか。そんな目で紗良を見ると、紗良は心外だ、という顔をした。

「普通にしてたわよ、勿論」

「ならいいけど。幸太、おままごとして、どんな事したんだ？」

んー、と宙を見つめて思い出す幸太。そして思い出したのか、パツと明るい顔をした。

「おくさん、ちょっとだけなの！ だんなさんには、ないしよなの！」

「「ぶつ!?!」」

噴いたのは俺と親父だ。俺は紗良の襟首を掴むとガンガン揺らした。

「ア・ホ・か、お前はっ！ どこがおままごとだ、昼メロだろ！」

「ああああ、明るい家族計画の一環ででで……」

「すごい暗いから！ ダークというよりインモラル過ぎる！ 幸太の教育に悪いからやめなさい！」

ガクンガクンと揺らしていると妙なスイッチが入ったのか、紗良の

目がトロンとして来たので慌てて手を止めた。クソ、ミラージュと
いい紗良といい、変態って扱いが難しい！ とりあえず紗良をソフ
アーに放ってから、俺は幸太に向き直った。

「よ、よし、良い子にしてたからお土産をあげよう！」

バッグの中から、紙袋を取り出す。そこから、陶器で出来た小さ
な魚を出して幸太に手渡した。

「おしゃかなしゃん！」

「ほう……箸置きか。結構沢山買って来たみたいだが、家族みんな
にか？」

親父が袋を見て言った。

「ああ。これくらいしか、お土産になるもの無くてさ。同じ県内
だから、笹団子とか買ってくるのも変だろ？ 何処の駅にも売って
る便利な某米菓も土産にはならんし」

ローカルネタでゴメン。そういうCMがあっただよ、この地域
では。

「パパ、ありがとう！ おしゃかなしゃん、ありがとう！」

幸太……嬉しいけど、そのセリフも魚肉ソーセージのCMっぽい
からやめてくれ。

他にも、鰯や鯛やいろんな箸置きを買って来た。それを皆に渡
して、とりあえずお土産はお終い。後はちよつとした饅頭のセット
が二箱。シヨボいかもしれないと心配していたが、皆は思いの外喜
んでくれた。

そんな中、はしゃいで箸置きを持って遊ぶ幸太。ああ、こりゃ箸置きじゃなくて玩具になったかなあと見ていると、なんだかおかしな光景が。

ピチ、ピチピチ……

「……………」

親父と二人で幸太の手元を見る。

「動いて…いるな」

「陶器なんだけどなあ……………」

ニコニコと、カーペットの上で箸置きを転がす幸太。ピチピチと跳ねながら、鯛や平目が舞を踊る。ちよつとした竜宮城だ。

「パパ、おしゃかなしゃんのお家は？」

「お、お家、か。ははは、そうだな、お家が必要だな！」

どうしよう、と親父と顔を見合わせる。親父は物置へと走り、昔使っていた水槽を持ってきた。そこに水を入れると、仕方なく箸置きを中に入れる。

買ってきた箸置きは、全て水槽の中に入れられると勝手気ままに泳ぎ始めた。

「兄さん、魔王って凄いな……………」

「ああ。こうして目の当たりにすると実感するなあ」

幸太と一緒に水槽を眺めながら、俺たちは紗英さんが夕飯を作り上げるまで呆然と箸置きを見つめ続けた。

夕食を和やかに済ませ、風呂に入って部屋へと戻る。今日は疲れしているから、と紗英さんが気を効かせて、幸太と一緒に寝ると言ってくれた。紗良も多少のアプローチはあったものの大人しく自分の部屋へて戻る。ああ助かったと自分のベッドに身を投げ出すと、枕元に置いた携帯電話から着信音が鳴り響いてきた。……クリクリか？

ピリリリリ、と初期設定のままの着信音を奏でる携帯を手にとり、ディスプレイを見る。そこには意外にも、鉄丸の文字があった。珍しいな。

「もしもし、先輩？」

「あ、繋がった！ 佐藤君、今大丈夫！？」

なんだなんだ、一体どうした。

「今裸ですけど大丈夫です」

『もがつ！！？』

言って気づいたけど、これセクハラだよ。駄目だ駄目だ、こんな事言っちゃ。紗良じゃないんだから。

「うそうそ、ちゃんと服着てますよ。一体どうしたんですか、先輩」

『あ、あのねえ、恥ずかしいからそういう冗談やめて！ えっと、佐藤君は自分のゲートの書って読んだ？』

ゲートの書。ああ、『勘弁してください』か。タイトルからしてあんまりだから読んでないや。忘れたい過去でもあるしな。

「いや、読み返してない。なんか読むのが億劫でさ」

『読んでみて。きっと、ビックリするから
ビシッと言った。』

『さっき暇つぶしに自分の書を読んだんだけど、変なメッセージが出てきたのよ。きっと、佐藤君の書にも出てると思う。とにかく一回目を通してみて。で、出来れば明日会えないかな。明日学校休みだから……』

「なんだか、まくし立てるな。どうしたって言うんだろう。メッセージ？」

「分かった、とりあえずこれから読んでみるよ。明日は……時間と場所はそっちに任せる。出来れば10時前後にして欲しいけど」

『いいわ。じゃあ、10時に駅前の喫茶店で待ち合わせましょ。その時は、ゲートの書を忘れないでね』

そう言つと、電話を切ろうとする先輩。きっと用件を伝え終えたらいつも直ぐ切ってるんだろつな。けど夜だし、挨拶くらいしてもいいと思うんだ。

「先輩」

『えっ?』

「おやすみ、先輩。明日会えるの楽しみにしてるよ」

『もっ……!?!?』

何故もごる。先輩はスピーカーの向こうでも分かるような狼狽振りだったか、なんとか声を出した。

『も……もっ、もっ……』

ピッ……

電話が切れる。

……うーん、今のはちょっと良くなかっただろうか。でもさ、俺だって休日に女の子と待ち合わせなんてした事なかったし。こういうセリフ、言ってみたかったんだよ。まあ、今の調子じゃ少し退かれちゃったみたいだけどな。

さてさて。

俺は枕元に設置してある小さな本棚を見る。そこには最近買ったライトノベルや漫画があり、不本意ながら俺の『勘弁してください』

もしっかりセツトされていた。

「何が悲しくてあの戦いを反復しなきゃならないんだか……」
手に取ると懐かしい風景と武装した俺の姿が描かれた表紙が目に入ってくる。ああ、この鎧はドワーフに作って貰ったやつだ。散々パシリにされて大金積んで……見るだけで鬱になる。

俺は面倒くさいなあと思いつつページを捲る。すると、不思議な事が起きた。開いたページに書かれた出来事が、一気に鮮明な映像となつて脳裏に蘇つて来たんだ。こんな事、先輩やステラの本を読んだ時には起きなかつたのに！

今、浮かび上がってきた光景は初めて向こうに行つた時の事。クリクリを襲つていた魔物の頭の上に落下した時の光景だった。啞然とするクリクリ、そのクリクリに対して俺は……ああ、馬鹿だ！名乗る程の者ではない、とか言つて走り去ろうとしてクリクリに足を掴まれて地面に顔面から突っ込んで！ 恥ずかしくて見てられない！

ページを捲る。次は……最低だ、アツチ向いてホイだ。沢山首がある蛇相手に必死で隙を作ろうと頑張つてるけど、首が一斉に色々な方向に向くから意味が無かつたんだ！ 仕方なく「貴様は卑怯者だ！」と延々と説教かまして相手がうなだれた所で指を下に向けた。で、蛇が啞然として口をあぐり開けた所に鉄丸放り込んで、内側から八つ裂きにしたんだけど……鉄丸、ごめん。あの頃の俺は本当に酷かつたな。

他にも人間嫌いなエルフ族を味方につける為に漫才やコントを披露したり、大食い選手権でゴブリン達とガチバトル、胃袋強化したら目に付く物皆食べたくなつてゴブリン達を食べようとしたり……

頭を抱えなくなるイベント目白押しで死にたくなつた。水棲族との水泳勝負なんて思い出したくもない。ラストでもの凄い加速をして俺がギリギリ勝つただけで、最後のブーストは『屁』だからな。屁をする為に腸やら括約筋やらを強化したのはあれが最初で最後だ。水の中で対戦相手の人魚の少女が失神したのはアレが原因だったんだろうなあ。助けて人口呼吸してあげたら感謝されて……罪悪感でいっぱいだった。人魚が溺れるくらいの屁ってなんだよ。

次々と蘇る、赤裸々な過去。どんな拷問だと泣きたくなるけど、俺はふと気づく。そう言えば色気なんて何にも無かつた冒険だったけど、唯一それっぽいイベントがあつたじゃないか！ あれは、そう、温泉のイベントだ！

それは火山地域のとある村での出来事。名物の温泉に浸かつていた女性陣を覗こうとモブキャラに誘われ……ああ、あれ長ネギだ。長ネギに誘われて村外れの大きな温泉に行った時、凶悪なモンスターとバトルになったんだ。何とか退治したんだけど、最後にそのモンスターが爆発して……俺、温泉まで吹っ飛ばされたんだよね。あの時は全身傷だらけでお湯が滲みて痛くて覗きどころじゃなかつた。慌てて温泉を離れようとした俺をミラーージュたちが捕まえて、クリクリがその場で治療したんだ。恥ずかしくて泣きそうになる俺を女性陣がこぞってからかって……ううむ、今にして思えばなんというハーレム。少し羨ましい。

しかし今なら、その光景をジックリ見る事が出来る！ よし、いざ行かんエルドラド！ これでもう俺にエロ本は必要ない！

急いでページを捲る。次々と過ぎ去って行く冒険の記録。さあさあ火山が来やがった、モンスターも出た、爆発した、俺吹っ飛ばされた、キタキタキターーッ！

『いやーん…なのじゃ』

……。

なんだ、このランジェリー姿のジジイは。いや、分かってるんだが、頭が理解するのを拒否している。

『ワシワシ、ワシじゃよワシ』

ワシワシ詐欺ですか。高齢化の波はそんな所にまで。世知辛いものだ。

『どうせお主の事じゃろうから現実逃避しとるじゃろうな。因みにこれはビデオレターみたいなものじゃ。勝手に話を進めるから聞き逃すでないぞ』

なんだと、ボケを拾わずに行くつもりか、何てやつだ！ というか今更なんの用なんだ、このクソジジイ！

『まず、もう気づいてると思うがゲートの書を使って世界を渡ったのはお主だけでは無い。他にも沢山おつてのう。皆、中々面白い体験をして物語を完成させとる』

物語。この本の事か。

『そしてワシもこの世界に渡ってワシの物語を作っておつてのう。聞いて驚け、ワシ、こっちじゃ小説家になつとるのよ。ふえっふえっふえ！』

確か先輩が言ってたな。所在不明の謎の小説家って……。

『しかし、のう……。中々面白い作品が書けなくて困っておるんじや。そこで、ワシは考えた』

盛大にアラームが鳴る。ああ、分かっている。俺は今、このクソジジイの仕掛けてくる悪戯を察して激怒している。

『もう分かつとるじやろ。そう、これからワシとお主らとで、あるゲームをしようと思う。もしこのゲームにお主らが負けたら、ゲーットの書の内容そのまんまワシの作品として出版させて貰うぞい。なに、世界の法則ねじ曲げてでも出版するからプライバシー保護法なんぞどうにでもなる』

クソジジイ……。

『逆に、もしお主らが勝つたら。また、どんな願いでも叶えてやるう。現状に満足しておるか？ そうではないじやろ。人間とは欲深い生き物じゃ。こちらの世界をお主らの欲望のままに作り変えても良いじやろ。ワシを殺す、でも良いぞ？ 好きなように、願うと良いわい』

まるで悪魔だな。甘言で惑わす神様って迷惑極まりないだろ。

『ルールは単純。この一年以内に、ワシを見つけて出すのじゃ。ワシの居場所のヒントは、ゲートの書の巻末ページに書かれた文字となつておる。一つのゲートの書につき一文字書かれておるから、全てのゲートの書に書かれた文字を調べ上げ、見事ワシを見つけて出してみせるが良い。期限までに見つけ出せなかつたら、ワシの勝ちじゃ』

これか、先輩が言つてたメッセージは。これは……慌てて電話してくるハズだわ。

『佐藤健司よ、知つての通りワシは退屈が嫌いでのう。お主はそんなワシの期待に応えてくれた数少ない人間じゃ。今回も期待しておるぞい。じゃあ、頑張つてのう、ふえっふえっふえっ！』

そう言つて、クソジジイの映像は消えて行く。最後に、奇妙なメッセージを残して。

『ちなみに、このメッセージは終わり次第自動的に自重するぞい』

……自重？

自爆、じゃなくて？ いやまあ、自爆なんてされたら迷惑極まりないからしないでいいけどさ。ついでに言うなら生きるの自重してくれ。存在する所から遠慮してくれともっと助かる。

しかし、面倒な事になつた。要は、この世界を舞台にした隠れん坊だろ？ 無理がある。しかしゲートの書が一般書店に回つたら俺や鉄丸先輩は注目されてまともな生活を送れなくなるだろう。ゲームに参加しない、という選択肢は無い。……最悪だ。

明日、先輩に会ったら相談しよう。紗良には明日の朝話すか。今はもう寝てるだろうからな、今夜が安心して眠れる最後の日になるかもしれない。話すのは明日でいいだろう。ステラもクリクリの世話で今は忙しいだろうし。

さて。

問題のメッセージは消えた。つまり、残すのは薔薇色の時間だ。波乱万丈は明日からという事で、今日の所は目の保養と行こうか。そう思っただけの書を開くと、湯気の向こうに女性陣の麗しい姿が。生まれたままの姿が……

全て、モザイクで覆われていた。

……。

自重ってこのことかあああああああつ!!!!

第二十七話 鉄丸と休日（前編）

夢を見た。

最近ロクな夢を見ていないが、今回も結構ロクでもない夢だった。生まれて初めてのデート、喫茶店での待ち合わせ。結構頑張った服装でバッチリ決めてそこへ行くと、全身武具だらけの鉄丸がいる。コロコロ転がり散歩して、もがもが言いながら昼食をとり、遊園地ではジェットコースターから転がり落ち、海へ行けばブクブク沈む。親指を立てて消えて行く様は無駄に漢らしかった。

起きてから少し罪悪感を抱いた。ゴメン先輩、向こうでのノリがこっちの世界で適用されると、どうしてもここうなってしまうらしい。今日はそんなノリじゃなく、ちゃんと普通にしないと。別にデートじゃないんだけど、彼女も女の子だから。最低限、鉄丸の時のようなノリにならないように注意しないといけない。

目を覚ました俺は、とりあえずベッドから出て着替えようとした。すると、何かが身体に絡みついているのに気づく。やはりと言うか何と言うか、紗良だった。紗良は幸せそうに俺に抱きついている。

……まあ、最近怒り過ぎてたかもしれないし。今日は優しくしてやるか。俺は紗良の背中を撫でてやる。するとやけにスベスベしている事に気づいた。

スベスベ……

「ハア…ハア…」

なでなで……

「アア…ハア…」

パチーンッ！

「はにやつ!？」

「な・ん・か・着・ろ・や、変態ーっ!」

「も、もみじ！ 背中にもみじがああああっ!？」

思いつき叩いてやった。自業自得だ、朝から卑猥な真似しやがって。俺の理性だって偶に機能しなくなるんだからな？ 俺は何とか紗良から目をそらしてベッドを出る。紗良は悶絶しながらも幸せそうな顔をした。

「に、兄さんに付けられた印……私の身体に刻みつけられた初めて……」

「はいはい、風邪ひくから肌見せんよー」

そう言いながら布団でグルグル巻きにする。梱包用のロープで縛った所に、幸太がやってきた。

「パパ？ ……しやら、寝てゆの？」

「ああおはよう幸太。紗良はお寝坊さんだからなあ、起こしてやってくれないか」

「え、兄さん何言って……」

紗良が焦る。しかし対照的に幸太の顔は輝いていた。凄いな紗良、俺でも中々こんな顔はさせられないぞ。

「しゃら、起きてー！」

ドムツ！

「はぶっ！？」

幸太が勢い良く簀巻き状態の紗良の上に乗る。鈍い音と共に紗良が呻いた。

「しゃら、しゃら、起きてっー！」

ドムツ、ドムツ、ドムツ！

「はぶっ、あぶっ、うぐっ！？」

いいなあ。見ていて微笑ましいよ。暖かな家庭って、こういうのを言うんだと思う。俺は素早く身支度を整えると、未だ楽しく遊んでいる二人に声をかけた。

「じゃあ、今日は用事で外に行ってくるから。ああ、紗良。お前自分のゲートの書に目を通しておいた方がいいぞお。んじゃ行ってきまーす」

「はあ？ 何言って……」

「行ってらっしやいなー！」

ドムツ！

「あぶっ！？」

二人に見送られて、俺は部屋を後にした。

久しぶりに八時まで爆睡したので、体調は勿論何かから何まで絶好調。無駄に爽やかに紗英さんに挨拶してキョトンとさせると、俺は軽くクツキーを摘む程度で朝食をすませて、鏡に向かって身嗜みをチェックする。朝食の倍は時間をかける俺の姿を見た紗英さんは、ニンマリとした笑みを浮かべて俺のそばにやってきた。

「うふふ、健司さん今日デートなんでしょう」

「うえっ！？ いや、単に学校の先輩に会うだけで……」

「あら、浮気？ クリスさんが泣くわよ？」

「いやいや、決してそういう事では……」

しかし紗英さんは信じてくれないようだ。何やらカバンから色々取り出して俺に手渡す。これは……カード？

「私とお父さんの使ってるホテルの会員カードなの。それと、ホテル代ね。初めては大事だから、なるべくちゃんとした所で体験しなさいね」

「ア・ホ・かー！っ！！」

なんだこの親は！ 百歩譲ってそういう行為を勧めるのを良しとしても、自分らの使ってるホテルを勧めるな！ 想像したら萎える所の話じゃないぞ！

「と、とにかく気をつかわないでいいから！ 行ってきます！」

「ああん、避妊はちゃんとしなさいねー！っ！」

だから大声で言うな、近所で噂になっちゃうだろ！ 俺は涙目になりながら家を出た。紗良といい紗英さんといい、どうして朝からぶっ飛んでんだよ……。ついて行けない俺がおかしいのか？ 何だか自分がまともなのか疑問に思えて来て不安だが、とりあえず気を取り直して俺は待ち合わせの喫茶店へと歩き出すのだった。

予定より早く、待ち合わせの場所についてしまった。駅前の喫茶店と言えばここしかない。軽食で、生姜ともやしをふんだんに使った和風スパゲティを出す不思議な喫茶店、『フルムーン』。田舎だからお洒落な喫茶店なんて無いんだよね。これでもまともな方なんだ、他の喫茶店なんかみんな夜はスナックに変わるようなのばかりなんだもの。

その喫茶店のある広場、違法駐車自転車が並ぶ一角で、俺は先輩を待つ。時間は九時二十分、さすがにまだ来てないだろう。俺は待ってる間コーヒーでも飲もうかと自販機へと向かう。硬貨を入れようと財布を取り出すと、突然後ろから声をかけられた。

「コラッ！」

「おわっ!?!」

慌てて百円玉でお手玉をしてしまう。何とか掴んで財布に戻すと、後ろを振り向いた。そして……固まった。

「おはよ、佐藤君。せっかく喫茶店で話をするのに、こんな所で飲み物買わないでよね」

それは、先輩だった。

私服姿の先輩。いつもどこか張り詰めたような雰囲気だったけど、今は全然違う。えーと、なんて言うんだろう……シャツワンピースかな。少し明るめの淡いピンク色で、なんだか普段の先輩からは想像できないくらい可愛い。

「ど、どうしたの佐藤君。そんなマジマジと見て……私、なんか変かなあ?」

「う、ううん、凄く可愛い!」

自爆した。いきなり可愛いとか言うかよ、俺! そういうのは好きな人に言われた時に嬉しいんであって俺なんか言われても……って、あれ。先輩真つ赤だ。ただでさえ色白な先輩の頬が、桜の色みたく……あ、薄く化粧してる。目元も、良く見るとキラキラしてる。

「先輩、凄く綺麗だ。全然変じゃないよ」

「う……ありがとう。けど、そんなに言わないで。嬉し過ぎても、武装しちゃうから」

そうか、そりゃヤバい。改めて先輩の体質って大変なんだって思った。そんな体質なら普段クールを装うのも当然だよ。けど、本当に可愛いなあ……。女の人って、卑怯だと思う。普段とちよっと違う顔を見せるだけでドキドキさせてしまえるんだから。

「コホンツ！ じゃ、じゃあ少し早いけどお店に入りましょ。早速本の話をしたいから」

この話はお終い、とばかりに先輩が言う。少し残念に思いながら、俺は先輩の後に続いて喫茶店へと入って行った。

喫茶店では、窓際の席をとった。俺はエスプレッソを頼んで、先輩はミルクティーを頼んだ。大人びてるね、と言われたので少し照れる。実は単に苦いのが好きただけなんだが、カッコつける為に黙っていた。因みに、焼いたサンマならお腹付近の血合いの苦い部分が好きだ。それで以前、親から味覚変態と呼ばれた。

軽く飲み物を口にしてから、早速先輩と俺はそれぞれゲートの書を取り出してテーブルの上に置く。話を切り出したのは先輩の方が

らだった。

「どうだった？ メッセージ、出た？」

「うん……最悪なゲームを挑まれた」

「私も。まさかあんな滅茶苦茶な事を言ってくるとは思わなかったから、今でも混乱してるわ。今年一年で見つけるとか、酷すぎるわよ」

「先輩は受験だもんね」

そう、風間先輩は我が清涼高校でもトップクラスの成績を誇る。未だ不良高校のイメージを払拭しきれない清涼で、全国模試で一桁に入った希望の星なのだ。先輩の進学は先輩だけでは無く、学校の評判をも左右しかねなかつたりする。

「夏休みは前半に予備校の夏期講習受ける予定だし、まとまった時間が取れないのよ。だから、出来たら佐藤君に協力して欲しいの。私だけじゃ絶対見つけられないから……」

「勿論協力するよ。俺だって一人じゃ無理だ。けど、先輩と協力するんだったら話は違ってくる」

俺が言つと、先輩は笑った。

「最強のコンビ、だもんね」

「ああ。倒せない敵なんかいない」

俺も笑った。いつの間にか倒す事になっちゃってるけど構わない。見つけたしたら確実にぶっ飛ばしてやるつもりだからだ。

「でも巻末の文字がヒントって言われてもね……。私の文字は『お』

だったわ。佐藤君は？」

「俺はヒントになりようが無い文字だった」
本を開く。巻末に載っていた文字は……

『ん』

「……馬鹿にしてるわよね、これ」

「どの道、一文字じゃどうしようも無いけどね。しかし、『お』
ん』か……全部で何文字かも分からないし、まだ何にもならないな」

そう言うつと先輩はハツとした顔をする。

「私たち、それすら知らないのよ。全部で何文字か……何人の渡航
者が居るのかすら掴んでいないの。佐藤君は、分かる？」

「えーと……」

分かっているのは、ステラとゴーストライダーが渡航者だったつ
て事だ。後、紗良が向こうに渡つてゲートの書を手に入れている。
ゴーストライダーは神の手を借りずに渡つてるからゲートの書は持
っていない。だから、確認出来るのは今のところ後二冊。そう言う
つと先輩は啞然とした顔をする。

「ステラさん、渡航者だったんだ……。よくあそこまで、向こうの
常識に馴染めたわね」

「アニメオタクで勘違い外国人だからな。あれで国立大に留学して
るんだから詐欺だ」

微妙な顔をする俺たち。日頃テストの点数を気にする俺たちのよ

うな学生にとって、既に成功者である大学生は雲の上の存在。そんな所にステラがいると思うと何だかやるせないのだ。

「……考えるのやめましょ。とにかく後二文字は分かると。それを確認した後に、他の渡航者を探すという流れでいいのかしら」

「そうだな、現実的に動くとしたらそれしかない。まず分かる所から調べて行こう。闇雲に村人から情報を得るようなノリじゃないかな、こっちは」

向こうなら出来ただけだ。しかし先輩と話をするパパと話が纏まるな。結構時間かかると思ってたらあつという間だ。

「そついや、先輩はこの後予定ある？」

「え？ ううん、こんなに早く次の方針が決まるとは思わなかったから何も入れてない。問題集でも見に本屋さんに寄るくらいかな」

真面目だな、先輩。でも今日くらいは休んでもいいと思うんだ。俺は先輩の目を見つめて言った。

「良かったら、この後俺と遊びに行かないか。休みの日に先輩と一緒に初めてだし、もっと先輩と話がしたいんだ」

「え……それって、もしかして
目を見開いた。」

「うん。デート、したい」

なんで今日の俺はここまでストレートかな。というかクリクリに対する罪悪感がありながら止まらないとか浮気性なのか俺は。しかし、目の前の先輩を見ていると何故か止まらない。きっと今日の俺

はイタリア人なんだ。ほら、この店もイタリアンだから、一応。

先輩はマジマジと俺を見る。真っ赤な顔で……けど何だか嬉しそうな表情をして、武装した。

「もがつ」

「いやいやいやいや！」

「先輩、鉄仮面！ かぶっちゃってる！」

「もっ！？ も、もごもごもっ」

慌てて膝掛けのような物を取り出す。それは……ああ、あのマン
トを折りたたんだ奴か。先輩はテーブル周りだけを異空間に変えて
人目を遮った。ごめんね、先輩。その体質も何とかしないと。

「先輩、今日は俺で練習してよ。誰かと一緒に居ても武装しないよ
うにして。俺で良かったら、いつでも手伝うから」

その声をかける。ちょっと気落ちしそうになっていた先輩は、俺
を見て「もが」と言った。何を言っていたのかは聞き取れなかった
けど、きっと否定の言葉じゃなかったと思う。だって、先輩の手が
……

キュッ

俺の手を、優しく握っていたから。

第二十八話 鉄丸と休日（後編）

一般的なデートってどんな感じなんだろうな。きっと、公園とかでポート乗ったりしてるとな。街で買い物して、映画見たりボウリングしたり……そんな事を夢想してた自分が確かに居ました。しかし、今現在俺たちがしている事は何か。色気もクソもない事態に陥っているのだ！

「佐藤君、これもやった方がいいわよ！ あの先生、きつとこの問題集参考にしてテスト問題作ってるから！」

「せ、先輩、もういい！ 流石に三冊も出来ないから！」

本屋で参考書を漁ってました。

いやね、デートなら街中だろうと思って電車に乗ったんだけど、そこで話題にしたのが夏休みのスケジュール。神を探すにしても計画的に行かないといけない。で、その手前にある期末テストでコケたら補習になるから気をつけないと、と言ったワケだ。

そこに、先輩が食いついた。

「え、佐藤君って成績どれくらいなの？」

いやあ、その時点で気づくべきだった。正直に言ったら怒られるって。でも正直に言っちゃった。理数系は70取れるけど、文系になると60前後。時々赤点ストレスになって、提出物とかでポイント稼いでなんとかなるケースもある、と。

怒られた。うちの親は放任主義で、成績の事で誰かに怒られた事なんてなかったから、結構マジビビリした。「世界を救った勇者が

赤点にビビってるって、どうなの!」そのセリフはかなり重かった。確かに、格好悪いにも程があるよな。今からちゃんと勉強しておかないとロクな就職出来ないし。頭では分かっちゃいるんだが……中々上手くは行かないものだ。

「うーん、ウチの学校ならせめて平均点80は越えないと。もし良かったら塾紹介しようか? あ、夏期講習一緒に受ける? 私の行く予備校ならここから近くだし!」

ヤバい。なんかヒートアップして来た。ここは何とかデートムードに戻さないと、なんだか戻れなくなりそうだ! えーと、何て言えば……そうだ!

「先輩……先輩に教えてもらいたいな。家庭教師みたいにさ、先輩に勉強を教えてもらいたいよ」

ア・ホ・かーっ!!

アホ、アホ、俺のアホーっ! 言ってる事がただのセクハラ親父じゃないか、OKしてもらえたとしても生き地獄まっしぐらだろコレじゃ! ああ、怖い、先輩のリアクションが怖い! ごめん先輩、今取り消すから……

「もがあ……」

武装すんなーっ!?!?

「先輩先輩、被ってる、被ってるから!」

慌てて俺が手提げカバンを先輩に被せた。何も入ってなくて良か

った。スツとカバンを取ると、そこには元の先輩の顔が。何だか手品だな。

「ごめんなさい、また武装しちゃった……ダメだね、私。こんなじゃ男の人のそばになんて居られないよ」

「いや、あの、今のは俺が悪かった！ あのさ、そんなに気にしないでいいから！ 楽しく行こう、楽しく！」

暗い気持ちにさせちゃマズい！ 俺は恥ずかしい気持ちを押し殺して、先輩の手を取った。コミュニケーションに馴れば、そんなに武装する事も無くなるだろ。俺は強引に先輩の手を引いて本屋を出た。先輩は、「きゃっ」と可愛い声をあげてついてくる。顔は……良かった、普通だ。ただし。

グサツ！

うおおおおお、手甲！ トゲつき手甲が手に刺さる！ 因みに毒、毒あるから、コレ！ ふはははははは、綺麗な薔薇にはトゲがあると云うじゃないか、コレくらい耐えるさ！ 普通の薔薇には毒は無いかもしれないけど！

「よし、先輩次は映画館だ！ 映画館行こう！」

「う、うんっ」

とにかく俺的に本屋を離れるのが先決だ。で、何故映画館か。映画館なら武装しちやってもバレにくいし、少しは寝れるだろ？ 毒状態から回復しないと！ 俺は全身から力が抜けて行くのを感じながら、映画館を目指した。

俺たちが向かったのは、県内でも一番デカイ映画館。今日は近年最高の恋愛物と言われる大作をやっている。これなら先輩も見られるし俺も眠れる！ そう思ってチケットを買おうとしたら、先輩はある事か別の映画を見ようと言って来た！

『BAKURETSU〜爆裂〜』

……。

「これ、見たかったのよ。この間テレビでこのシリーズやってね、手に汗握っちゃった！」

そ、そうですか、俺も手に毒握っちゃいそうだなあ！ あは、あは、あはははははは！

問答無用で映画館の中へ。熱気ムンムン、血の気の多い男とバイオレンス好きな女性たちが目を爛々とさせている。俺たちは一番後ろの列の座席。幸い、それほど混んではいなかった。ただ、暗い中で携帯弄る奴が多いのは気になったけどな。マナー違反だよ、それは。向こうの奴なんて、携帯が飛び跳ねてんじゃん。……ん？

「うふふ、ステイプ・ゴンプトのアクションは最高よ。きっと佐藤君も熱狂するんだから」

先輩の言葉に我に返る。そうだ、今はこっちに集中しないと。

「いやあ、楽しみだなあ……」
そう返したはいいけど、その前に発狂しないか不安だよ。

ビーーーーッ

映画上映開始を知らせる音が、俺には審判の時を告げる鐘かトラ
ンペットの音に聞こえた。ジャツジメント・デイ。きっと判決は死
刑。執行人はステイブ・ゴンブトかもしれない。

映画が始まった。

先輩は気づいていないようだが、ずっと俺の手を握っている。本
来なら嬉しいハズなんだけどな。今はただ、怖かった。そしてスク
リーンにチョンマゲオッサンが現れると映画館に軽くどよめきが起
こる。同時に、先輩の手が鉄の塊に変化した。

カシャッ……

クッ、これは戒めの小手！ 身体を重くする呪いの小手だ。俺の
手が、ミシミシと音を立てる。これはマズい！ 何とかして、先輩
の熱血度を下げないと！ しかしどうすれば……

俺は、先輩に少しくつついた。身を寄せて、腕をくつつけてみた。
すると俺を意識したのか先輩の小手が消える。

「あ、あの、佐藤君？」

「俺とこうするの、イヤ？」

暗い映画館でも頬を染めてるのが分かる。良かった、イヤがってない。これなら何とか乗り切れるか。

その時、スクリーンがカツと光りを放った。

なんと、爆発が起きてステイブ・ゴンブトが吹っ飛んだのだ！開始数分で爆発とか節操無いな！？そして……

「ゴンブトっ……!!」

ガシヤッ

「~~~~~っ!?!」

破滅の手甲が俺の手に食い込んだ。

……OK、ゴンブト。これは俺とお前の勝負だな？ どちらが先輩の心を掴めるか勝負だ！ 俺は身体強化で手を強化して、スクリーンを睨みつけるのだった。

俺は戦った。

壮絶な戦いだった。

口にした台詞は、およそ普段の俺からは出ないであろう甘々な台詞ばかり。歯が浮くならば、成層圏まで到達してしまいそうな勢いだ。

「もっと、先輩のそばにいたい」

「ねえ、聞こえる？ 俺、ドキドキしてる」

「スクリーンより、今は先輩の横顔を見ていたい」

死ねよ。俺死ねよ。

しかし、その都度武装を解除してくれた先輩は優しいよ。もしかしたら退いたから解除されたのかもしれないけど。まあ今更気にしても仕方ない。何故なら。

「ゴンブトおおっ！」

ズシンッ

「アグッ!？」

俺の完全敗北だったからだ。

いや、卑怯だってゴンブト。家族を殺され復讐に立ち上がったゴンブト、何故か座禅で強さがハチャメチャ上がり、悟りの極地に達したような顔で次々と敵をなぎ倒し蹴り倒し手首折り首を折り顔碎き顎砕き股をも砕いた。爽快だ。その度に俺の手が散々な目にあつた。限界だ。もう最後は激痛で失神したもんね。そのおかげで起きたら完全回復ですよ。なんじゃそら。

気がついた俺を迎えたのは、エンディングで朗々と語るゴンブトの演説だった。

『世界は危機に瀕している。環境は破壊され、生き物が死に絶えようとしている。それを止めるには、皆が手を取り合う必要がある』

一体どんな映画だよ。

あんた一人で一番破壊してたじゃないか。取り合うべき手をへし折ってただろ。

しかし先輩は瞳をウルウルさせて感動していた。ううむ、分からん。

映画館を出た。

超ご機嫌な先輩、完全回復した俺。何とか危機を脱した俺は先輩を連れて、近くを流れる川のそばを歩いてきた。ここは有名なデイトスポットで、河川敷には恋人たちがたくさんいた。

「先輩、ちょっと休んで行こうか」

「……うん」

もう完全に馴れたのか、武装する事無く先輩は俺について来た。心なしか距離が近い。

なだらかな斜面となつている草原に座ると、俺たちは他愛の無い事を話した。成績の事も少しは出たけど、何故か先輩はあまり突っ込んで来なかった。趣味の話や、最近見たテレビ番組の話……ごく普通の話題で盛り上がっていた。先輩はやけに優しい表情で聞き手

に回ってくれたから、話すのはもっぱら俺の方だったんだけど。

しばらくそんな風に話して、話題がふと途切れた時。先輩が、少し改まった風に姿勢を正して俺に言った。

「今日はありがと。私、男の子と遊んだ事無かったから……凄く楽しかった」

「礼なんていいよ。俺だって休日を女の子と一緒に出歩いた事なんて無いし」

「えっ……？」

先輩がキョトンとする。

「あれ、クリスマスは？」

「いや、休日は王様と一緒にいらしいから会えないんだよ。ステラに当たって大学生で普段は忙しいらしいし。休日は一人で過ごす事の方が多いよ」

そう言うと、先輩は一気に顔が赤くなった。もしかしたら今日一番赤いかもしれない。武装しないのは今日一日の特訓の成果だろうか。

「そ、そっか。佐藤君も初めてだったんだ。そっか……」

「俺、皆が思ってるような人間じゃないよ？ モテたどころか、女子と口きいたのだって向こうで勇者になるまでは、殆ど無かった。今こうしてるのが信じられないくらいだよ」

「……佐藤君は、素敵だよ」

えっ……？

あれ、今なんて？

「君は何にも気づいてないんだね。いつも周りに気をつかって、何かあったら直ぐにフオーローしてたじゃない。私には、考えられなかった。私は向こうに行ったら好き勝手に生きる事しか考えなかった。けど君は、本当の勇者みたいに沢山の人を助けたじゃない。そんな事しなくてもいいのに」

「いや、それは……」

ゲームだと思ってたから。そう言おうとしたけど、先輩は俺の返事を待たずに続けた。

「私、自分の事だけ考えて生きてた。それは向こうに行く前からね。でも君の姿を見てたら違うかなって。本当はね、呪いを解く為に君と一緒にになったんじゃないの。私も、君みたいに色んな人と接してみたいと思ったから。君みたいに、なりたかったんだ」

先輩が、ゆつくりと近づいて来る。俺も、吸い寄せられるように近づく。あれ、おかしいな。なんでこんな……

「私を変えたのは、君なの。こんな風にしちゃったのも、きっと君なんだ。だから、責任とって欲しいな」

「先輩……でも、俺」

そこまで言うと、俺の唇に人差し指を当てる。先輩は潤んだ瞳をして言った。

「いいの、分かってるから。これは意地悪なんだ。君をちょっと、

困らせたいだけなの」

意地悪……。

そうかもしれない。こんな表情をされたら、気になって仕方がないじゃないか。ゆっくりと近づくと唇と唇。俺の事はどうでもいいんだ、ただ、先輩にこんな悲しそうな顔で初めてのキスをさせてしまつて良いのか。もっと、いい思い出に出来ないのか。

俺は先輩の手を取る。こんなんじゃないダメだ、ちゃんと幸せなキスを……と思つて手を取つただけだ。

なんだこりゃ。もさもさ？

「さ、佐藤君？ なにそれ」

みると、俺が手に取つたのはもさもさした何かだった。それはつぶらな黒い瞳で俺を見つめると、「キューン！」と元気良く鳴いて

……

「健司様あ~~~~っ！」

ゲツ！ クリクリ！

河川敷、土手の向こうからクリクリとステラが走ってくる！ という事はこれは毬藻！

「キュツ、キュツ、キューン！」

顔面に張り付く。こら、離せ！ しかし俺の顔が気に入ったのか中々離れようとしない。慌てふためく俺を隣で見ていた先輩は、し

ばらくしてから大笑いを始めた。

「あ、あはははは、佐藤君可愛い！　なんか可愛い！」

なんかって何だ！　不確定要素盛りだくさんの印象評価程参考に
ならない物は無いぞ！

クリクリたちがやってくる。俺の顔から毬藻を剥がしたクリクリ
は、案の定怒っていた。

「健司様、健司様は浮気をしましたね？　全部この子が見ていま
した！」

この子。毬藻か。凄い機能だな……。

「旦那様、今回の旦那様の言動は映画館より全て記録しています。
素晴らしい口説き文句の数々に私も悶絶しそうでした」

キヤーーーーーッ！

聞かれた！　というかあの飛び跳ねてた携帯はやはり毬藻だった
のか！

不穏な空気が流れ始める。ああ、これが所謂修羅場というヤツな
んだろうか。とうとう年貢の納め時が来やがった、なんて思って覺
悟を決めた時。先輩が、俺を庇うように前に立った。

「ゴメン。今日誘ったのは私なんだ。佐藤君の優しさに漬け込んで、
沢山甘えちゃった。だから悪いのは私。ゴメンね、クリスさん」

いやいや、待ってくれ。なんでそんな。それは違うと声を上げよ

うとした時、クリクリがキツと此方を睨みつけた。

「そう言う話ではありません！ 理沙さんが健司様を誘惑するのは構わないんです、理沙さんなら健司様のお嫁さんにも相応しいと思いますし」

「「は？」」

俺と先輩が同時に声を上げる。どういう事だ？

「私が言いたいのは……」

すう…と息を吸う。そして、大きな声でこんな事を言った。

「私を仲間外れにしないで下さー！ーい！！！！！」

はあああああああつ！？

「ちょ、ちょっと待って！ アナタ婚約者なんですよ？ 何故浮気を容認しちゃうワケ！？」

「は？ 浮気は許しませんよ」

話を通じない。俺もクリクリの言う事が分からない。その説明をしたのは、ステラだった。

「クリスレアは一夫多妻の国です。その制度における浮気と言うのは、第一婦人もしくは婚約者の許可を得ずに他の女性と通ずる事を言います。つまりこの場合、クリスお嬢様の許可を得ずに風間さんと旦那様がデートをした事が浮気となります」

「私は理沙さんが好きですから、お嫁さん候補になるのは全然構

わないんです。けど、私の事を放って置いてデートするのはイヤなんです」

そして、少し恨めしそうに……いや、上目使いで拗ねたように言った。

「私だって、まだキスした事ないです。あんな優しい言葉も、かけて貰った事ないです。理沙さんが、羨ましいんです……」

正直に言おう。

可愛い過ぎてクラツとした。そして、俺以上に先輩がやられてた。

「佐藤君。なんか、可愛いね」

「うん……」

そして何だか脱力したように先輩が笑った。

「じゃあ、まだ時間あるしこれから皆でデートしよっか。クリスさんも、佐藤君と休日を過ごすの初めてでしょ？」

「はい、あの…健司様……」

先ほどまでとは違って、恐る恐る此方を伺うクリクリ。ああもう、その仕草も卑怯すぎる！

「今まで誘わなくてゴメンな。クリクリさえ良かったら、皆で一緒に遊ぼう」

「…はい、ありがとっございます！…」

パツと顔を輝かせるクリクリ。先輩も叶わないなあといった顔をする。ごめんな、先輩。何だかうやむやになっちゃったけど、いつ

かちゃんと先輩の気持ちと向かい合うから。そんな風に思ってた先輩を見ると、先輩は全てを察したように微笑んで頷いてくれた。

やっぱり、大人だな。なんか、そんな気がした。

河川敷、俺たちは近くのバス停へと移動する。その時俺は、今日初めてのアラームを聞いた。それはクリクリの発言に対する警告だった。

「じゃあ、今日は私にも甘く嘯いて下さいね！」

「は？」

隣で先輩が吹き出した。ステラは毬藻を取り出して操作する。毬藻はそのもさもさした口元らしき場所から音を発した。

『もっと、先輩のそばにいたい』

！？

『ねえ、聞こえる？ 俺、ドキドキしてる』

『スクリーンより、今は先輩の横顔を見ていたい』

「いいな、いいな、理沙さんいいな！ 健司様、私もこんなセリフを……」

「ウガアアアアアアアッ！！」

「「「きゃっ！？」「」」

吠えた。

いや、吼えた。

「帰る、やっぱりお家帰るううううっ！！」

「ダメです健司様、私にも囁いて下さいー！！」

「大人しく観念しなさいって、佐藤君！ 何気にもう一度聞いてみたいし」

「旦那様、後学の為にもお願いします。趣味で書いてるBL小説で使わせてもらいます」

うわぁん、変なカミングアウトまで来た！

俺は泣きながらクリクリたちに囲まれて逃げる事も出来ない。結局それからしばらく、俺の罰ゲームのような恥ずかしい時間が続く事となった。

そんな光景を、遠くで見つめる人が。

「チツ……あの野郎、こっちに帰って来ても人気者かよ」

赤毛の大女が忌々しげにつぶやく。そのそばで、俯いて暗い表情をしている黒髪の少女が大女を見上げる。

「協力、する？」

「まさか！ プライバシーでも何でも暴かれて人生滅茶苦茶になりやいいのさ！ アタシは戦いを忘れたケンジになんか興味無いね！」

「……私は、分かんない」

少女は困ったような表情をする。しかし次の瞬間、猛禽類のような鋭い瞳で言い放った。

「気づいてくれたら、協力する。でも気づいてくれなかったら……殺すかも」

「オメエも面倒クセエ性格してるな。まあいいさ、好きにきな。けどな、どの道この世界は滅茶苦茶になる。その時にアイツの側にいるのが正解とは限らねえからな。ま、頑張れや」

大女はそう言うと、少女に手を振って去っていった。その背中を見ながら、少女は複雑そうな顔をする。

「どちら側なんて、考えた事も無かったな……世界を壊すのも、アリなのかな」

そんな物騒な言葉がつぶやかれていたなんて、その時の俺には知る由も無かった。

第二十九話 求めるものは

先輩とクリクリ、そしてステラの三人とのデートは、結局俺が終始いじられるだけの罰ゲームタイムと化して終了した。それは、まあ構わない。俺も色々反省すべき事があったし、あのぐらいの罰なら可愛いものだ。

そんなデートの後。別れる前に俺と先輩はステラのゲートの書に書かれた文字を教えて貰う事に成功する。ステラも今朝、ゲートの書に出たメッセージを見たらしく話は早かった。しかし……

その文字は『ま』だった。

……。

えーと、いいのかコレ。

「集まった文字はおま……」

「バコーンッ！！ あぐあっ!?!?」

「佐藤君。その並びで言わないように。いいわね?」

りよ、了解であります、先輩。

結構マジで殴られて悶絶する俺をよそに、ステラが話を進めた。
「文字は『お』『ん』『ま』の三文字ですね。そこに旦那様の妹さんの文字が加われば四文字。全部で何文字かは分かりませんが、だいたい形は出来て来ました」

どうだろう。俺には卑猥な言葉以外浮かんで来ないな。

「帰ったら妹さんの分を聞いておいてよ。で、分かったら電話で伝えて」

先輩が言う。今は確かにそれ以外やる事無いからな。しかしその後、ステラが意外な事を聞いて来た。

「旦那様。旦那様は、神を見つけたしたら何を望むのですか？」

え？

あ、そうか。願いを叶えるとか言ってたな。

「出版を止めろ、てのは見つけ出したらそれで済むから……そうだな、特殊能力を無くしてもらうかもしれない。先輩も呪いを解いて貰いたいんだろ？」

「え、うん、そうだけど……。佐藤君は別にあっても不便じゃないでしょ。なんで無くしてもらおうの」

普通はそう思うだろうな。確かに自分の世界に戻って来てから、結構世話になったし。けどこんな能力があると世間に知られたらどうなる事が。普通に生活出来ないだろ。

「俺は普通に生きたいから。これ以上この力に頼っていると、いつか痛い目見そうだな」

そこまで言うと、ステラがキツイ口調で俺に言う。

「ダメです！　旦那様はこちらで何度も危険な目にあって、その力

に助けられているでしょう！ 私にすら勝てないようになっては、クリスお嬢様の……クリスレア国王には成れません！ それに、それに……」

少し涙ぐんで、俺を睨みつけた。

「目の前で旦那様が死んでしまいそうになった時を思い出さずです。あんな姿を見てしまったら、旦那様に弱くなつて欲しいとは思えません」

ああ、あの時の事か。参ったな、俺のせいでトラウマになってしまったのか。確かに目の前で瀕死の重傷負った姿を見たら、能力を手放して欲しくなくなくなる。俺がそうさせちまったんだよな、悪い事をした。

「健司様、私も反対です」

今度はクリクリだ。

「普通に暮らしたいという気持ちも理解出来ませんが、力を失って死んでしまつては意味がありません。健司様が私と結婚されるのであればクリスレアに戻る事になりますし、そうなればその能力は失つてもらいたくありません。こちら以上に、私たちの世界は危険ですから」

クリクリとステラの意見は分かりやすい。向こうに俺を連れ帰る事を前提にしているからな。それに対して先輩はどう言うんだろう。そう思つて先輩を見ると、何かアイデアを思いついたのかニンマリと笑っていた。

「先輩？」

「いい事思いついたわ。これならさしたる害はでない！」

なんだ？ やけに自信满满じゃないか。そう思って見ていると、先輩は力一杯言い放った。

「能力があっても、不思議と思わないようにしてもらおうよ。魔法や特殊能力を持った人がいても、皆がおかしいと思わないような世界に、変更してもらおうの。それなら君が能力バレしても問題なんて起きないでしょ？ それくらいあの神なら、簡単なんじゃないかな」

「うわー、強引だな。この世界を変えちゃうってか。先輩らしい豪快な意見だが、これにも俺は躊躇してしまう。だって、それをやってしまつては俺が戻りたかった日常が無くなってしまう事にならないだろうか。いや、今更もう遅いとは思うんだが。」

しかし、この『願いを叶える』という甘言は危険極まりないな。クリクリ、ステラ、先輩。それぞれ願いがあつて、必ずしも同じ方向に向いているワケじゃない。例えば「能力を無くす」という俺の願いに関してはクリクリとステラは反対。先輩は明言してないけど多分わかつてくれると思う。こんな風にバラバラになつてしまつのは多分、神の狙いなんだろうな。

それにあの神の事だ、意地悪な仕掛けをしているに違いない。

「みんな一旦落ち着こう。まだ神を捕まえてもいないんだ、今ここで話をしてても仕方ないさ。とりあえず今日は家に帰って落ち着いて、続きは明日また学校で話そう」

そう言つと、クリクリとステラは渋々承諾した。悪いな、今はまだ「能力を消さない」と約束は出来ない。向こうに戻るのには婚約した時から決めていたけど、どうも俺はこちらに未練がありすぎるみたいだ。普通に生きて、普通に暮らしたいと思つてしまう。

結局その日は、これで話を切り上げてそれぞれ自宅へと戻って行った。

せつかくのデートを微妙な雰囲気で終わらせてしまつて、後悔しながら家に戻ると、そこにはやはり紗良がいた。しかしいつもの暴走気味の紗良ではなく、学校に行く時のような余所行きの顔だ。紗良ってこうしていると真面目な優等生って感じで、いつもこうならと思つてしまつた。

「ただいま。どうした、紗良。ゲートの書は読んだか？」

コクン、と頷く。

「兄さんかと思つて抱きついたら顔だけ神様だったから、持つてたナイフで首を切り落としてやったわ。そしたら首だけで滅茶苦茶言つて来たから蹴飛ばしてやった」

バイオレンスだな……。しかし神も冗談を間違えたな。俺をネタにするると紗良は危険過ぎるつてのに。

俺はとりあえず紗良を連れて部屋へと戻る。ベッドには幸太がスヤスヤと眠っていた。

「幸太がいるけど、寝てるから大丈夫か」

「兄さん……子供が寝てるそばでしちゃうの？ 私の初めてをそういう奪い方しちゃうんだ……」

「アホか、ゲートの書の話だ」

絶対下ネタ絡めてくるのはさすがだな。幸太が寝てなかったらぶつ叩いていた所だ。

「神を見つけ出して、俺達のプライバシーを守る。そのために紗良の本に書かれた文字が知りたいんだ。教えてくれないか」

「条件があります」

来やがった。

そう簡単に教えてくれるとは思わなかったさ。さあどんな無茶を言うてくるつもりだ。そう思って身構えると、紗良は真剣な顔で口を開いた。

「……兄さんの事を、昔みたいに『けんちゃん』て呼んでいい？」

「え？」

ポカンとする。それだけ？

「けんちゃんって呼ばせてくれたら、教えてあげる」

「……まあ、構わないぞ。それで気が済むんなら幾らでも」

そう言つと、紗良は目を涙に滲ませた。「良かった」と言つて、俺に抱きついてくる。おや？ そんなに特別な事なのか、これ。

「けんちゃん、けんちゃん……大好きだよ……」

「紗良、お前……」

ちよつとヤバいかもしれない。兄さんって呼ばれるより、なんか強烈だ。ああ、そうか。兄妹の関係じゃなくて他人だった頃のノリだから、紗良を女として意識しちゃってんだ。俺は妙にドギマギしてしまっていた。正直に言えば……俺を小馬鹿にしていた頃の紗良をまだ覚えているから、最近の、こうして甘えてくる紗良はギャツプがあり過ぎて、名前の件なんて無くても充分意識しちゃってただけだな。そこに「けんちゃん」だから、ちよつとノックアウトされかけた。しかし……

「ふんふんふん」

「……紗良、お前何やってんだ？」

俺の胸元にすりすりしながら、何やら鼻をふんふんさせる。まさか。そう思った瞬間、紗良が俺を見上げてニコッと笑った。

「良かった、まだけんちゃんは童貞だね！」

「あ・ほ・ん・だ・らーっ！っ！！」

吼えた。

「お前、勝手に読むなって言っただろ！ 悪いか、童貞で悪いかコソチクショー！」

「やあん、けんちゃん落ち着いて！ そんなに激しくしちゃ、あの子が起きちゃう！」

「妖しい言い方すんな、とりあえずゲートの書をよこせえええっ！」

紗良の履いてるジーンズの後ろのポケットにゲートの書を見つけた俺は、暴れる紗良を拘束してそれを奪おうとする。わざと身をくねらせて別の場所を触らせる逆セクハラを受けながら、俺は懸命に紗良の尻をまさぐった。……本音を言つとちよつと楽しかった。

その時、背後でもぞもぞと動く気配が。

「……パパ？」

「ん？ 悪い、幸太。起きちゃったか」

「パパっ！」

飛び起きる幸太。可愛いなあ、お前は世界で一番可愛いよ。そうやって元気よく飛びついて来て……って今はマズい！

ドンッ！

幸太のフライングボディアタックが俺の背中にヒットする。意外と強烈な衝撃につんのめった俺は、そのまま紗良を押し倒す形で床に倒れ込んだ。その時……

唇が、重なった。

「……っ！」「」

嘘だろ？ 思わず固まる俺。しかし次の瞬間、紗良は俺の口の中に舌をねじ込んで来た！

「んんーっ！？ むぐっ、ぷはあっ！」「」

慌てて口を離す俺。仰向けで俺を見上げながら、紗良は恍惚とした表情をしていた。

「……や、やった…けんちゃんから、キスしてもらっちゃった……」

いや、違う。今のは事故だ。そう言おうとした俺をはねのけると、紗良は勢い良く部屋を飛び出て階段を駆け下りて行った。大きな声で、こんな事を言いながら。

「お母さん、私やったよーっ！」「」

うおおい、報告すんな！？

がつくりとうなだれる俺。ちょうど四つん這いになってる状態なので、俺の背中で幸太が「おうまさん」と言っってはしゃいでいる。ああ、そうだな。今はワケも無く走り回りたい気持ちだ。ついでに人である事も捨ててしまいたい。

と、その時、床に何かが落ちているのを見つけた。ああ、ゲートの書か。紗良のやつ落としていきやがった。約束だし、今ここで文字を確認させてもらおう。俺は幸太を背に乗せたまま、本を開いた。幸太も興味津々で後ろから覗き込んでくる。

さて、どんな文字だ。アイツのキャラクターからすると、やは

り下ネタ的な文字が来るだろう。そう思いながら巻末ページを開くと、そこには意外な文字があった。なんだ、こりゃ。幸太が大きな声で、その文字を読む。

「『ま』！ 『ま』だよ！」

ああちゃんと読めたな、偉いぞ幸太。確かに『ま』だ。ステラと一緒にだ。つまり並べると……『おまんま』？ 飯？

その時、俺の腹がグウウ、と鳴った。

「そついやそろそろ夕飯だな。幸太、下行こうか」

「うん！」

幸太を背負ったまま、俺は立ち上がる。まあとりあえず文字は四つ揃えたし。今は腹ごしらえを優先しよう。ここで色々考えても何かわかるワケじゃないからな。

翌日。

朝から際どい所か全て晒け出したかのような下着姿の紗良に襲わ

れ、いつものように簀巻きを作って家を出る。今日から学校再開、気持ちを一新しく頑張るぞ、と気合いを入れて走り出す。いい加減自転車買わないとな、と思っていると、後方からクリクリの車が走って来た。

田舎の田んぼだらけの景色の中に黒塗りの高級車って怖いよな。素早く俺の隣に幅寄せすると、やはり後部ドアが開いて中からステラが飛び出してきた。

「旦那様おはようございます今日もご機嫌麗しゅう御座います足払い！」

「おわっ!？」

またか!

ステラの天才スキルって本当なのかもしれない。一応、クリスレアの近衛兵だった俺を難なく足払いかけられるんだからな。そして空中に浮いた俺をガシツと抱くと車の中に乗り込んだ。いい加減拉致とか勘弁して欲しい所だ。

「おはようございます、健司様」

車内にはクリクリ。

今日も変わらずに美しい。

「おはようクリクリ、ステラ。とりあえず普通に座りたいからステラは離してくれないか」

「お断りします。私はこの後着替えて大学へ行かなければならないので、会える時間が少ない以上ここで愛情値を稼がせていただきますま

す

また変なゲームやっただろ。愛情値？ まあ、ふわふわしたのが気持ちいいから上がりまくってるけどな。

「健司様、昨日お伝えいただいたキーワードを調べたんですが、『おまんま』とはご飯の事をさすそうです。これではまだ漠然としていて、ヒントにもなりません」

クリクリが真面目な顔して話し始めた。お前凄いな、顔弛ませた俺を目の前にして動じないとは。俺もステラの感触を一旦頭から退けて、クリクリの話に耳を傾ける。

「試しにネットで検索をかけたら数万という数のヒットがあつて、その、中にはいやらしいサイトが……」

そうだろうなあ……。

「ネット検索はやめところ。おまんま、なら食事処が基本的にヒットするだろうけど、この周辺だけでもかなりあるからな」

多分、探せない範囲には隠れていないハズなんだ。多分県内。あの神の事だから、結構近くにおいてほくそ笑んでると思う。ヒントはこれからも出して来るだろうから、まだそんなに焦らなくていい。そう言うと、クリクリは「さすが健司様」と感心した。判断保留しただけなんだけどな。

それにしてもさつきからステラは何をしてるんだらうな。俺の頭を撫でてるけど、やけに鋭い視線を感じる。

「旦那様……」

ステラが、少し震えながら口を開く。

「旦那様、つむじが二つありますよ。これは元々ですか？」

つむじ？

「ああ、ガキの頃から。というかつむじなんて増えるもんじゃないだろ？」

いきなり何を言うかと思えば、つむじつて。なんか自分で見れない所を見られるのって恥ずかしいな。しかしそんな事を考えていると、目の前のクリクリも震えだした。なんだ？

「つむじが二つ……クリスレアでは、幸運を運ぶとされているんです！ わざわざ魔法で増やそうとする人もいるくらいですから。私にも見せて下さい！」

どんなラッキーポイントだよ。マニアックだろ、つむじとか。くだらない事に魔法を使うんだな、と思ってたらクリクリが俺の頭を覗こうと身を乗り出して来た。目の前には……おっぱい！

「どれですか？ 一つしか見えませんよ」

「お嬢様、ここです。少し離れたここに……」

「わ、本当！ 健司様凄いです！ 天然物ですね！」

す、凄いか、こっちも凄いで、天然物だ！

その時、いきなりけたたましい音が響く。

キキイイーーーーッ！

「「きゃあつ!?」」
「わぷっ!」

急ブレーキがかかり、俺達は車内で重なり合う。つまりは俺の頭は二人の胸に挟まれる形となった。これは……パラダイスじゃないか。

「だ、旦那様お嬢様、大丈夫ですか!」

ああ、今慌てて起きるな、発動するぞ! そう言おうとしたが遅い。ステラは無理やり起き上がるうとして……

ボタンがはじけ飛んだ。

「ふええええん、また服こわしちゃったよう!」

「ステラ、ホックも! フロントのホックも取れてますよ!」

嗚呼……

世界は思いの他美しい……

極上の幸せを感じながら車内のミラーをふと見ると、運転席のジエイコブと目があつた。

「H A H A H A! 欲望二身ヲマカセテシマッタ!」

ああ、俺も流石に理性の人にはなりきれないみたいだ。とりあえずありがとう、ジエイコブ。あんた最高だよ。

その日は朝から騒がしかったが、学校につくといつも通りの生活に戻った。いや、やはり林間学校の後だから、みんな親しみを込めて挨拶をしてくれるようになっていた。女子からも挨拶をされるようになるなんて、以前の自分からは考えられなかった事だ。これが、明るい学校生活という物なのだろうか。俺は心の中で歓喜の涙を流していた。

午前中の授業を終えて昼休み。食事は勿論クリクリと一緒に屋上だ。轡田は今日は他のグループと食事をとるらしい。アイツはアイツでちゃんと友人付き合いをしているようだ。同じように人付き合いが苦手だったアイツが皆と仲良くしているのを見ると安心する。それが明らかに女子だけのグループでも。……なんで見た目違和感ないんだろっな？

屋上に集まったのは俺、クリクリ、先輩の三人だった。

「僕は？」

三人と、そこに野菜が添えられていた。

「待つてよ、酷いだろ！ 僕は君の友人なんだからそんな扱いは無い！」

「今更だけどあの日の自分の判断は間違いだっただと思いはじめた」

「佐藤健司いいいいっ！」

嫌なんだよ、コイツのこのノリ。本当にクスリキメてないよな？
端から見たら通報ものだぞ。

「しかしさあ、佐藤も変な事で悩んでるんだな。特別な力なんて格好いいじゃないか、それのおかげで世界も救えたんだから消す事無いだろ？」

昼飯を食べながら、長ネギが言った。今日は購買のパンらしい。
好き嫌いを言い過ぎたら、弁当を作って貰えなくなったらしい。なんと長ネギらしいエピソードだ。

「バカ王子と意見が合うのも面白くないけど、佐藤君の能力は一部だけでも残して貰ったら？ 仕事とかしてたら役に立つかもしれないわよ？」

仕事、かあ。力仕事なら役に立ちそうだなあ。

「健司様、昨日ジェイコブがお父様と格闘技のテレビ番組を見て盛り上がったのですが、あれなら健司様も大活躍間違い無しですよ！」

いやね、思いつきり死んじゃうでしょ、相手が。大活躍したら間違いなく目立つし怪我の回復が異常だって事もバレてしまう。

「そう言えば、向こうに行って帰って来た奴には俺や先輩と同じ悩

みを抱えてる奴もいるよな。能力によつては仕事とかに差し支える奴も出てくるんじゃないか？」

そう言つと、先輩が何かを思い出すかのように「うーん」と唸つた。弁当箱がガラ開きだ。

「最後の戦いで、他に誰が居たつけ？ ステラさん、クリス姫、ミラージュさんに……王国剣士のダンさんは向こうの人間でしょ？ ミゼルやカミラもサルジアンの魔法使いだし、クラヴィッツさんなんか次期皇帝だから明らかに向こうの人よね。後誰が居たつけ？」

「もぐもぐ、拳闘士のジユリアは？」

「ああ、あの人も居たつけ。……て、私のエビフライ返せ！」

んぐつ！？ 気づかれた、凄いな先輩！

「例によつて返せないから、好きなの取つてつて」

「もう、勝手なんだから……じゃあ、遠慮なく」

ひよい、ひよい、ひよい、ひよい……

沢山持つていかれた。

まあいいかと気を取り直して話を続けようとすると、俺はおかしな事に気づいた。さつき先輩が名前を挙げていたけど、いつもの長ネギなら「僕もいただろ！」と口を挟んでいる所だ。何故入つて来なかつたんだろう。

長ネギは、こちらの会話に参加せず、屋上の隅の方を見つめていた。それに気づいたクリクリも、そちらを見つめる。そして口元に手を当てた。

「健司様、あれは良くないんじゃないでしょうか」

なんだろう。

見ると、屋上の端、ギリギリ死角にならない場所で女子が集まって何かをやっていた。どうやら誰かを囲んでいるようだ。まさか……イジメか？

「見過ごせないわね。私のいる所で舐めた真似してくれるじゃない」
そう言って立ち上がるようにする先輩を、なんと長ネギが止める。

「僕に任せてくれ」

おいおい、どうした。格好いいぞ長ネギ！

「ここは恩を着せて、新しい友達をゲットするチャンスなんだ」

バキッ！

「ふぎゃあっ!?!」

長ネギは股間を押さえて悶絶する。先輩、容赦なさすぎ。

「佐藤君、このバカ王子が余計な事をしないように見張っててね」

「わかった。先輩もあんまり厳しい事しないでくれよ」

「ふふふ、それは向こう次第よ。抵抗するようならまずは心を折ってあげるわ」

頼りになるけど恐ろしい。

背中から鬨気を揺らめかせて歩いて行く先輩。いや、あれは鉄丸だ。モンスターの成群に単身突っ込んで行く鉄丸そのものじゃないか。

俺はその背中に『漢』を見ていた。

第三十話 決断する時

俺はイジメが嫌いだ。

そんなの当たり前だ、好きな奴なんて居ない、と思うだろ？でも信じたくないけど、イジメが好きで好きな奴ってそこら中にいるもんだ。それも、そういう奴は徒党を組んでイジメをするから始末が悪い。嬉々としてクラスで孤立してる奴を狙って玩具にしようとする。

中学生の頃、俺はたまたまクラスメートがイジメを受けているのを見かけて、助けた事がある。それは美術部の女子で、イジメていた奴は同じ美術部に所属していた他のクラスの女子と、その彼氏っぽい男子だった。当時はまるで喧嘩の出来ないひ弱なもやしっ子だった俺。一方的に殴られて、情けない事に大泣きした。泣いて、泣きまくって、その声を聞いて駆けつけた先生に助けられた。

女の子を助けた事は後悔していない。けれど、その時醜態を晒したのは今でも後悔している。それ以来学校では泣き虫とからかわれ、あらぬ噂を立てられハブられる事となった。今でも思い出すとその理不尽さに腹が立つし、あの時の辛さがフラッシュバックして吐きそうになる。

そんな経験をしたから、今こうしてイジメの現場を目撃して、堂々と止めに入れる先輩を見ていると感動する。その強さに憧れもする。ただ一つ問題があると言えば……。

「あなた達の顔、覚えてたわ。今直ぐイジメを止めてもう二度とこんな事しないと誓わないと、どんな手を使ってでも退学に追い込むわよ」

暴君そのものの発言が一番問題だった。いや、あのね先輩、もうそれ脅迫だよな？ 教師たちからの信頼とかを最大限に利用して、やりたい放題。そこまで高圧的な物言いしたら、収まるもんも収まらないんじゃないか……。

「うつせーな、誰だよテメー！」

女の子を囲んでいた女子グループの一人が言った。最悪だ。この清涼高校は元不良高校だけあって、近くで活動する暴走族やレディースがやたらと多い。おあつらえ向きに暴走し易いバイパスもあるしな。という事で、表面上真面目な高校になつたとしても、裏ではそうした集会に参加している奴は結構いる。そしてこの女子は露骨にそうした雰囲気を出していた。

で、何より。

風間理沙と言えばそうした連中を攻撃するのが大好きな人間として知られていた。真面目イコール正義、不良イコール悪という図式が大好きなんだ、本当に。案の定、先輩はいい獲物を見つけたとばかりに目を輝かせる。

「生徒会副会長をしている風間よ。まああなた達みたいな馬鹿丸出しの顔した子は頭が足りないから直ぐ忘れるでしょう。覚えなくてもいいわ」

ひでえ。

「ああ？ 生徒会がなんだってのさ。調子くれてつと殺すよ？」

こつちもひでえ。特に顔が。

「殺す、ねえ。イジメの現行犯の上に今の発言、やりようによっては今週中にも停学処分には出来るわね」

クッククック、と先輩が笑う。

「ねえ、あなた達。自分たちと、私。どちらの証言を先生たちは信じると思う？ 日頃真面目にやってきた人間と、こんな所で集団でイジメをするようなゲス。答えは火を見るより明らかよね？」

悪だ。呪いの武具に好かれるだけある。本質的に悪なんだろう、この人。今回に限って言えば痛快ではあるけど。

「ほ、本気で殺すよ！ あたしらスネイクロードのメンバーなんだ、殺すつつつたら本当に殺すんだからな！」

スネイクロード？ 蛇、道？ じゃのみちは……いや、ああ、『邪道』か！ あはははは、なんじゃそら。

「そんな名前を有り難がつてるようじゃ人生曲がりくねっちゃうわよね。ご愁傷様。ちなみに今の発言、みんな録音しといたわ」

先輩の手元には、何やら細長い鉄製の物体が。あれは確かボイスレコーダーだ。そんな物まで用意してたのか。

「所属するところの名前とかキツチリ録音してあるし、勿論あなた達の罵詈雑言もね。そして私の発言はちゃんと入らないように録音してあるし……これ、先生たちに提出するけどいいわよね？」

黒い。黒いよ先輩。ほら、女の子たちが皆青ざめちゃってるじゃないか。

「殺すって言うてたわよね。それ、今やってみる？ 目撃者たくさんいるけど。ここで私を傷つけただけでも退学になるし、警察沙汰にもなる。殺しなんてやったらこの先の人生真っ暗だけど。それ考えた上で言うてるのよね？ さあ、やってみなさいよ。ほら、何してんの？」

完全に先輩の一人舞台だ。実際に襲いかかってこられてもマントに閉じ込めてしまえるからな。そりゃ怖くも何も無いだろう。不良少女たちも完全に気圧されて、白旗降参状態だ。さっきまで突っかって来ていた不細工な子も、どうしたらよいか分からず黙り込んでしまった。

先輩、ちょっとやり過ぎ。

これは流石に止めに入った方がいいだろうな。そう思って俺が歩み寄ろうとした時、不良少女たちは囲んでいた女の子に口々に声をかけはじめた。

「あたしら、単にお昼食べてただけだよな！」

「イジメとかそんなんやってねーよな！」

「仲良くしてるよな、いつも！」

イジメを無かった事にしたい、と。なるほどね。ターゲットとなってる本人がイジメじゃないと言えば、幾ら先輩でも旗色は悪いわ。先生たちも、ゴリライオンやブルバはあ以外は事なかれ主義。大事にはならないだろう。

返事を強要された女の子は、俯きながらコクンと頷く。小さな声で、「イジメられてないです」と言った。勝ち誇ったような少女たち。流石に先輩も顔色を変えた。

「そ。本人がそう言うならイジメじゃないんでしょ。なら仕方ない、今回はチームに出入りしてる件で停学処分狙うしかないかあ。佐藤君、私職員室行ってくるね」

「ちよつと、嘘でしょ！？ あたしらの勝ちじゃ……………」

勝ち負けの問題じゃないんだけどな。強いて言うなら先輩を敵に回した時点で負けだよ。

意気揚々と去ってゆく先輩の背中を、慌てて追いかける不良少女たち。イジメられていた女の子も、両腕を拘束され無理やりその場から連れ去られる。その際、立ち尽くす俺と目があった。あつたんだが……………あれ？

暗い、落ち込んだような表情。そりやイジメられていたらそんなだろうけど、別に助けを求めて怯えてるような感じじゃなかった。あれは……………単純にイジメられている奴のする目だろうか。

何だか奇妙な違和感を抱きながら、俺は女の子を見送った。

その日の放課後。

俺と先輩と何故か長ネギも一緒に、クリクリのマンションへとやって来ていた。いわゆる緊急会議である。広い客間のソファアに腰をかける俺たち。長ネギは「クリスの香りがする」と鼻をふんふんさせてステラに拘束された。今はロープで縛られカーペットの上に転がっている。

「第一回、スネイクロード撲滅委員会を開始します」

パチパチパチパチ、とクリクリとステラが手を叩く。俺もとりあえず付き合っ叩いたけど、何だかまた面倒な事になってきたぞ。

「今回、先生たちに聞いたんだけど、スネイクロードって意外と影響力があるみたいで、ウチの学校から結構な人数の参加者が出てるみたいなのよ。単なるローカルなレディースかと思ったらそうじゃないみたい」

「はい、理沙さん質問です！」

クリクリが手をあげた。なんか授業みたいなノリだな。

「どうぞ、クリスさん」

先輩もどこから取り出したのか、メガネをかけてクイツと指で位置を整えた。あ、ステラに借りたのか。目が良いのに度の入ったメガネかけたからフラついてる。

「レディースってなんですか！」

なるほど。分かんないよね、普通。それを聞いた先輩の目が光った。

「ググれ、クリ！」

「了解！」

なんじゃそら。カス、と言わないのは正解だ、ステラに殺されるから。しかしクリクリもノリがいいな。早速ノートパソコンを取り出してネットに繋いで検索して……顔を真っ赤にした。

「エッチな人たちでした！」

「レディコミじゃない！」

俺、先輩、ステラがハモった。長ネギは床に転がりながらステラのスカートの中を覗こうと必死だった。あ、今踏まれた。

「簡単に言うと、向こうで言う野盗よ。野盗が、私たちの学校の生徒を引き込みようとしているの。先生たちも問題視してるみたいだけど、関わるのに二の足踏んじやあって頼りになんない。今日の件だって報告したけどどこまで動いてくれるか分かんないわ」

野盗か。その言い方は良くない。だってほら、クリクリが。

「健司様、これは放っておけません！ 壊滅させて、生徒たちを真っ当な道に戻さねば！」

ああもう、やっぱりこうなるのか。正義の使者、クリクリ。その姿は向こうもこちらにも変わらない。

「クリスならそう言ってくれると思ってたわ！ ステラさんも、スネイクロードの撲滅に協力してくれるかしら？」

尋ねられたステラは即座に頷く。

「旦那様やお嬢様の身の回りに毒虫がいるならば、それを排除するのがメイドたる私の仕事ですから」

毒虫か。凄い言い方するな。

「僕も賛成だな。そんな腐った奴らはやっつけるべきだと僕は思うね！」

俺は長ネギを踏んだ。

「何が狙いだ？」

「いたたたた！ だって戦ったら君らが勝つに決まってるだろ？ なら、負けてボロボロになった女の子たちに手を差し伸べれば簡単に友達できそうじゃないか！ 倒れてる子のスカートを少し捲るくらいは許されそうなお気もする！」

許されるか、アホ。根っこから腐ってんなあ。

「佐藤君は、どうなの？」

先輩が聞いて来た。

「なんだか、乗り気じゃないみたいに見えるんだけど」

ちゃんと見てるんだな、先輩。確かに俺は乗り気じゃない。いきなり撲滅って、性急すぎる気もするんだよな。

「確かに迷惑な奴らだけどさ。だからってその存在まで否定して壊滅に追い込むってのは俺たちのやる事じゃないんじゃないか？ 警察とかに任せるべき事だと思うんだけど。それに、そいつら潰した

所であるイジメられていた女の子が救われるワケでもないし」

「え？ 別にあの子を救うつもりは無いわよ」

あれ？

「ちゃんと手は差し伸べた。あの時助けてって言えば、私は命を懸けてでも助けたわ。でも言わなかったし。助かるチャンスを自分から潰す人に構ってられないでしょ？」

「先輩、気弱で言い出せない子っているだろ。もしかしたら面倒な事情があるのかもしれない。もう見捨てるのは早い気がするんだ」

「佐藤君、人が良いのも程ほどにしておいた方がいいわよ。絶対いつか痛い目みるんだから」

俺と先輩の会話に、少しずつ不穏な気配が。このままでは口喧嘩になる、とクリクリはオロオロしはじめる。ステラは無言で俺を見つめ、長ネギは……

「なあ、佐藤健司」

「なんだよ」

転がってる長ネギに答える。

「お前、どうしたいんだよ。向こうじゃ即断即決だったお前が、こっちじゃやけに消極的だよな」

う……。

長ネギに指摘されるとショックだな。確かに優柔不断だ。それは

やはり、保身なんだろう。集団でイジメられた経験が、不用意な真似はするなと警告を発していたのかもしれない。

けど、それじゃダメだ。そんなんじや誰も救えない。無様な姿を見せたけど、あの頃の俺は後先かえりみず飛び出して行つたじゃないか。俺は先輩を見据えて言つた。

「俺はあの子を助ける。痛い目を見るのは馴れてるから構わない。それと、族潰しをするなら先輩とクリクリは不参加で頼む」

「「なんで!？」」

不参加、と言われて声をあげる二人。しかし、ちゃんと分かつて言つてるのかな。

「クリクリは肉弾戦が出来ない。先輩も武具を装着しないと戦えないだろ、身体能力自体は並なんだから。そして、これは俺の我が儘だけど、二人には……好きな人には危険な真似をしてほしくない」

二人の顔が真っ赤になった。しかし同時に、俺の背後で殺気が膨らんだ。

「旦那様、私は傷ついていいと？ 好きではないと？」

んなワケねーだろ、ナイフ首に当てんな。

「ステラには未だに肉弾戦で勝てないからな。相棒として一緒に戦つてもらつよ。好きなやつに背中を預けられて、幸せだと思つ」

ギョッ……

背中から抱きつかれた。

「旦那様……どこまでもお供します」

ふおおおおお、現在進行形で幸せが、幸せが！ 背中に大いなる愛を感じていると、何やら下の方から弱々しい声が聞こえて来た。一体なんだ、邪魔するな。

「あの、もしかして僕も数に入ってなんか……無いよね？」

長ネギが涙目になっている。馬鹿だなあ、そんなに心配するなよ。

「ちゃんと出番を作ってやるから安心しろって」

「いや、違つよ！ いやだよ、戦いなんて！ 出番は要らない、脇役でいい！ 二人も欠けたら僕の身にも危険が及ぶだろ！」

「女の子たちが群がってくるんだぞ？」

「正義の為に共に戦おう」

ここまで分かりやすいと好感すら抱くよ。

妄想に浸りエへへへと気味の悪い笑みを浮かべる長ネギ。それを部屋の端へと蹴飛ばすと、先輩が俺の前へとやってきて一枚の書類を渡した。なんだこれ？ スネイクロード集会参加者リスト？

「佐藤君なら結局助けるって言うと思ってたから、前もってあの女の子の事を調べたのよ。一番下の名前が、その女の子」

え？

「だから、あの女の子はね。理由は知らないけれど、スネイクロードのメンバーにされているの。そして、こっちが警察から先生たちに渡された資料のコピー」

次に渡されたのは地図と日付。何々、七夕の暴走行為を防ぐための検問と……って、集会場の予想場所か。こんなによくコピーさせてもらえたな。

「七夕に毎年決起集会みたいなのをやるらしいのよね。だから、潰すならこの日が一番やりやすいわ。それまでの間に、その子と接触を図って説得するなりしてみたら？」

先輩……結局、助ける気満々じゃないか。ちゃんと計画まで練ってあったなんて。少し冷たいかな、と思っていた先ほどまでの自分が恥ずかしいよ。

資料を手に、俺はこれからどう動くのか考えていた。説得と言っても、俺の勘ではあの子は一筋縄ではいきそうにない。あの時イジメていた連中とも会ってみるか、などと考えていると部屋の隅から何やらブツブツ聞こえて来た。

「うふふふふ、怪我してるじゃないか、今僕が助けてあげるから友達にならないか？……いやいや、男ならもつと強引でもいいか。おい、助けて欲しかったら友達になれ！ うん、これだ、これで行くー！」

行くな。

それはもはや強盗に近い。

やっぱり長ネギはいらなかったかな、と俺は今更ながらに後悔をしていた。

第三十一話 運が良いのか悪いのか

6月も下旬となると、梅雨も明け陽のさす日も多くなる。俺の住んでいる地域は降水量だけなら日本でも上位に入るだけに、日頃から雨が多く梅雨明けの基準も曖昧だ。今日はやたらとカラッと晴れて、気分はかなりハイな感じだ。ただ、それに反して頭の中のモヤモヤは一向に晴れない。学校についていざ授業を受けていても、気になって先生の言葉も頭に入って来なかった。

二井坂初美って名前、聞き覚えあるんだけどどこで聞いたんだっ
たかな。

昨日クリクリン所で先輩から渡された資料に書かれた、件の女の子の名前だ。絶対知っている名前なのに、思い出せない。それがなんだか気持ち悪かった。まあ、直接会って話せば思い出すんだろうけど。

午前中の授業が終わって昼休みに入る。俺はクリクリに言って単
独行動をとる事にした。

「悪い、クリクリ。早速リストアップされた連中と接触してみるか
ら、クリクリは先輩と食べててくれ」

「あの、私が一緒じゃダメですか？」

「荒っぽい奴らだからな。クリクリが危ない目にあう可能性もある
から、俺一人で行かせてくれ」

そう言うと、クリクリは不安そうな顔で俯く。心配性なんだな。

俺は苦笑いしてクリクリの頭を撫でた。

「心配しなくていいよ。今までどんな事があっても、最後は無事に帰って来てただろ？ 安心しろ、絶対にお前の所に戻ってくるから」
なでなで。

ん？ なんかやけに静かだな。クリクリも顔を真っ赤にして……
って、うわっ！ ここ教室じゃねえか！ 皆すごい顔してこっち
見てる！ 男子は妬ましいような表情、女子はニヤニヤといやらしい
表情だ！

「佐藤君、かつこいいね。外国映画のセリフみたいだよ」

そうかいありがとよ中間地点。キラキラした瞳のお前は少女漫画
みたいだ。

惚けて応答の無いクリクリと、乙女チックルネットサンズな巒田から
逃げるように、俺は教室を抜け出す。教室からは女子の歓声と男子
の咆哮が聞こえてきた。下手したらあの場に居る方が危なかった
かもな、と俺は額の汗を拭った。

二井坂初美さん、そして彼女をイジメていた連中は皆俺と同じ二
年だった。クラスはE組で少し離れている。その教室まで行って中
を覗いてみたが、それらしき姿は無かった。俺は適当にクラスの女
子の一人に声をかけた。

「あの、二井坂さんってこのクラスですよ。今どこにいるか知りませんか」

声をかけられた女子は、少し戸惑った表情をする。知らない男子に声をかけられたから、というよりも関わりたくなさそうな雰囲気だった。

「えっと……あの人は友達とお昼ご飯を食べに行ってるんじゃないかな。いつも中庭とか外で食べてるから分かんない」

「そうなんだ。分かった、ありがとう」

早々に切り上げる。多分、詳しくは知らないだろう。昨日屋上で注意を受けたからまた屋上にいるとは考えにくい。なら、中庭あたりから行ってみるか。そう思っで一階に降りると、中庭そばの渡り廊下、自動販売機のそばで、ビニール袋に沢山のパンを入れた二井坂さんと遭遇した。

明らかに一人で食べる量じゃない。いわゆるパシリってやつか。

「二井坂さん」

俺が声をかけると、彼女はビクッと身体を震わせた。恐る恐るこちらを見上げると、大きく目を見開く。

「それ、あいつらに命令されたのか？」

「い、いえ、たまたま今日は私の番なんです。イジメとか、そんなんじゃないですから」

昨日の事で用があると踏んだらしく、予防線を張ってきた。まったく、どうしてそこまであいつらに気をつかうんだ。

「それが本当ならいいんだけどさ。もし本当はそうじゃなくて、辛い目にあってるなら言っただけいい。俺で良かったら、いつでも相談にのるから」

「……………」

二井坂さんは、ジッと俺を見る。長い前髪で目元がよく見えないけれど、怯えているような雰囲気ではない。しばらく俺を見つめてから、その小さな口を開いた。

「あなたは、わたし……………」

「オラ、おせえぞ二井坂……っ！　なにやってんだああっ！」

中庭から聞こえてくる声にビクツとする二井坂さん。何か言いかけていたんだが、その言葉を飲み込んでから俺に背を向けた。

「貴方には、関係のない事ですから。もう、関わらないで下さい。では、急ぐので……………」

そう言って、パタパタと小走りで行ってゆく。

これは、どうなんだろうな。　なんか分からなくなってきた。確かに俺みたいな知らない奴がいきなりあらわれて「相談にのる」って言ったって、信用出来ないとは思っている。けど、彼女の態度で前に感じた違和感は更に強くなった。本当に助かりたい、という気持ちがあるのだろうか、と。もしそんな気が全くなくて、彼女が今の扱い

に満足しているなら……俺の一人相撲じゃないか。滑稽にも程がある。

でも、彼女は俺に何かを言おうとした。それが何か知りたい。関わらないでと言われたけど、まだ俺は引き下がる気になれなかった。こりゃ一歩間違えたらストーカー扱いされそうだな、そんな事を思いながら、彼女の去っていった廊下を見つめていた。

それから数日、俺は退かれない程度に彼女と接触をした。偶然を装いながら話し掛けるのはハッキリ言って自分でも嫌になったが、出来る事なら彼女の本音を聞き出したい。しかし彼女はこちらが本題に入る前に会話を切り上げてしまう。彼女を取り巻く環境は一向に変わらず、俺は自らの不甲斐なさに情けなくなりながら、7月の6日を迎える事となった。

警察が警戒していたのは7日の夜だが、恐らく6日の深夜、日付が変わる頃に集会を開くだろうと言うのが先輩の予想だった。今日の放課後がタイムリミット、そう思って俺は最後の手段に出る。二井坂さんを手紙で屋上に呼び出したのだ。まあ無視されたらお終いなんだけど、二井坂さんはそんな事をしないで屋上に来てくれた。

「あの、話ってなんですか？ 人を待たせているので、早く帰らなくちゃならないんです」

恐らく、帰りもマークされているんだろう。集会に参加させる為に。俺はすぐに本題に入る。これが最後のチャンス、グダグダやっ

てらんないのだ。

「君が参加してるスネイクロードの集会。今夜、襲撃を受けるって聞いた」

「……っ!？」

表情が強張る。

「あの手の連中に関わってたら、いつか危険な目に遭う。今だって、イジメにしか見えないような扱いを受けてるだろ。君が助かりたいのなら俺は何でもするから、抜きたいなら抜きたいと言ってくれな
いか」

二井坂さんの瞳が潤んだような気がした。すぐに俯いて前髪で隠したけれど、そこには確かに拒絶とは違う感情があった。勇気を出してくれ、と俺は心の中で叫ぶ。しかし……彼女は期待していた言葉とは全く違う言葉を選んだ。

「知りません、そんな集会なんか。私、もう行かなくちゃ。サヨナラ、健司君」

そう言つて、彼女はまた俺に背を向ける。俺はまるで奈落の底に突き落とされたような気持ちになった。なんでなんだ。そんなに彼女たちが怖いのか？ それとも俺が信用出来ないのか？ この数日間の努力が水の泡と消えた。それはまあ仕方ない。けれど、彼女が自分から助かるうとしなかったのが、何故だか無性に悲しかった。俺は……単なるお節介野郎だったんだな。

でも……あれ？

俺、二井坂さんに下の名前教えたってっけ？

夜が来る。

親にはクリクリの家に呼ばれたと言つて家を出た。さすがに族狩りしますなんて言えないからな。それにクリクリの所に集合するから嘘ではない。紗良にはまた色々文句を言われたりセクハラされたが、俺の真剣な表情を見て大人しくなった。怖かったのかもしれない。仕方なく額にキスをしてやったら喜んで紗英さんに報告しに行ったから、その隙に家を出た。

クリクリの部屋に集まったのはあの時のメンバーだ。スネイクロード撲滅委員会。実行委員は俺、ステラ、そして俺たちの期待の星、長ネギだ。

「待つて、待つてくれ！　なんか主力にされてるのは気のせいかな！」

気のせいだ。気持ちが高ぶりすぎて幻聴が聞こえてきたんだろう。

「武者震いなら聞いた事あるけど武者幻聴とか聞いた事無いよ！　ぼ、僕は後方から指揮するからな！　異論は認めるけど聞こえてないフリをする！」

その返し方も聞いた事ないな。それはともかく、真面目に話を進めよう。

「目標はスネイクロードの壊滅だけど、今夜の目標は、彼女たちに暴走行為をさせずに解散させる事だ。警察沙汰になったら二井坂さんまで巻き込まれるからな」

その言葉に先輩はため息をつく。

「まだ諦めてないの。佐藤君からの報告聞いてるうちにその子の事本気で嫌いになりそうだったから、正直言っと放っておけばいいのになって思う」

「そう言うなよ。俺も迷ってたんだけど、警察沙汰になったら可哀想だし、うちの生徒が関わってるって知られたらまた学校の評判下がるだろ。それは先輩にとっても不本意じゃないか？」

「うっ……」

言葉に詰まった。最近先輩の事が分かりかけてきた俺であります。

「で、集会現場としてリストアップされた場所はカムリン新井原っていう道の駅の駐車場だ。凄い辺鄙な所だけど、ここから近くのバイパスに乗って暴走行為を行うのが最有力視されてる」

これはステラが調べた情報だ。相変わらず手段は不明。俺の携帯の番号を調べ上げたのといい、この世界で一番ヤバいのはステラなんじゃないかと思いはじめていた。

「夜11時に現場付近に行って、待機。集会が始まったら俺とステ

ラとリーダーで乗り込む事になる」

「う、うふふふ、リーダー。リーダーって言ったよね、佐藤健司……」

青ざめた長ネギが震えながら言う。武者幻覚、武者震い。次に来るのは何なんだろうな。

「先輩とクリクリはここで待機していてくれ。大丈夫、絶対無事に戻ってくるから」

二人はしつかりと頷いた。足元で長ネギが「ぶ、無事に帰してくれよ、本当に頼むよ!」と言っていたが無視した。

時計の針が10時半を指した。

俺たちはクリクリと先輩に見送られながら、マキシオンを後にする。移動手段は車ではなく徒歩。身体強化した俺が長ネギを背負い、ステラも魔法で俺たちの気配を遮断した上で身体強化をする。そうして、二人で夜の田舎道を疾走していた。

「ステラは万能だよな。俺なんかより余程勇者向きだよ」

「そんな事ありません。私には旦那様のように人を惹きつける才能

はありませんから」

何言ってるんだ、お城の皆から可愛いがられてた癖に。そう言う
と恥ずかしそうに照れ笑いをした。うん、可愛い。疾走しながら照
れ笑いつて、ちよつと変だけどな。

「こ・わ・いいいいいつ！ お・ろ・し・てええへへへひゃあ
あああつ！？」

それは一体どんな感情表現なんだ。背中では不思議な叫びを上げ
る長ネギに戸惑う俺。いつそ言つとおりにしてやりたいが、それは
可哀想だと思わないでもない。俺たちは長ネギの奇妙な叫び声を我
慢しながら、スピードを上げた。

時間にして丁度30分。俺たちは予定通りに現場付近に到着する。
このカムリン新井原という所は周囲に数軒の民家と田んぼしかない
という所だ。この道の駅は近くを通る長距離トラックの休憩場所と
して使われる事が多い。よつて本来なら集会には向かないんだけど、
七夕暴走の際、付近に走りやすい道路が多い為この時期は不良学
生がよく集まっていた。

俺たちは少し離れた田んぼの、小さな小屋の裏に身を潜めて周囲
の様子を窺った。幸い長ネギはぐつたりしていて静かだ。

「そう言えばステラは具体的にどんな能力が使えるんだ？ 天才つ
てのは聞いたけど」

思い出したように聞く俺。単なる格闘能力だけでも充分戦力にな

るけど、もっと便利な力があるなら使って欲しいかな、と思ったんだけど……。

「天才というのは全ての行動に才能を発揮するのですが、単純な能力でしたら限界値は人並みです。具体的に言くと、どんなに鍛えても身体能力では男性に劣りますが、動きならすぐに達人級になります。また、努力すればある程度なんでも出来るようになりますから、向こうにいたときに初步的な魔法は大体使えるようになりました」

それだけで充分凄いな。

「そこに、健司様同様身体能力強化を加えてもらいました。ただ、完全回復能力は無いので数回使うとかなり疲労しますが」

なるほど。凄いけど、俺より使いにくいワケか。

「最後に、運を左右する能力です」

運？

「簡単に言うと、意図的に今、幸運を呼ぶ事が出来ます。しかしその後で帳尻合わせが来るようになりますけど。ただ、使えば使うほどやってくる不幸の割合は低くなります」

それは……ちょっと、要らないかも。しばらくは帳尻合わせが続くだろうからな。

しかし、具体的に聞いておいて良かった。いざとなれば幸運能力を使って、ステラだけでも戦闘から離脱出来るんだから。

そんな会話をしていると、遠くからけたたましい音が鳴り響いて来た。これは、明らかに暴走族。ビンゴだ。

「ステラ、やるなあ。よくこんな広い県内で集会場を特定できたよな」

「はい、とつても『幸運』でした」

ん？

ちよつと待て。

続々と集まってくるバイクの群れ。アホみたいな刺繍の入った特攻服に身を包んだ女の子たちを見ながら、俺は冷や汗が噴き出すのを止められない。

「こんな広い県内から、集会場に相応しい場所を調べ上げ、特定したんです、運を味方につけなきゃやってられませんよね。ですから……」

その時、俺たちの後ろで長ネギがバカでかいくしゃみをした。

「ふえええつくしょんっ！ ……あー、身体が冷えちゃったよ」

「」「誰だあ、こらあああつー！」「」「」

駐車場から、女の子たちの怒鳴り声が響いて来た。

「……こんな事だって起こり得るワケです」

なるほどねー。

第三十二話 全員集合

けたたましいバイクの音と、こちらを照らすライト。完全に補足されてしまったらしく、俺たちの周囲はまるでサーチライトを向けられたように明るくなっていった。これは大人しく出て行くしかないな、と俺たちは小屋の後ろから姿をあらわす。案の定、俺たちの姿を見た女たちは嘲け笑った。

「なにコイツら」

「うわ、メイドだ！ コスプレしてる、キモッ！」

「男が何しに来たんだよ、シメンぞコラア」

かん高い声。子供っぽいから、もしかしたら中学生も混じっているのかもしれない。俺は集まっている奴らの中に二井坂さんが混じってないか探した。しかし、そこにはそれらしき人物はいない。これなら……遠慮はいらないな。

「お前ら近所迷惑なんだよ。解散してくれないかな」

俺が少し大きめの声で言うと、女たちは少し静かになってから、一斉にエンジンを吹かし始めた。明らかに挑発。まあ先に挑発したのは俺だけだな。

「旦那様、なるべく傷つけないようにしましょう。バイク類を使えなくして武器を取り上げるだけで何も出来なくなるでしょうし。当然で身で気絶させるのが手っ取り早いかもしれません」

「そうだな。ただ、逆を言えばバイクと武器を使えるうちは油断するなよ。四十人くらい居るから、一度に来られたら手加減は難しい」

ゆつくりと駐車場に歩いて行きながら言葉を交わす。女たちはニヤニヤ笑いながら移動を始めた。きつと、逃げ道を無くす為に俺たちを囲む気なんだろう。

その時。

意外な人物が思わぬ行動に出た。

「ほきやあああああつ！！」

長ネギだ。長ネギが奇声を上げた。武者幻聴、武者震いの次は武者発狂か。流石にその展開は読めなかった。長ネギは鬼気迫る顔で俺たちの前に飛び出して何やら小さな箱を取り出す。あれは……

なんだ、収納君じゃないか。

小さいながらも沢山の道具を収納出来る魔法アイテム、収納君。しかし開けると収納したものが一気に外に飛び出してしまっから使い勝手が悪くてあまり利用されてなかったアイテムだ。それを女たちに向かって開ける長ネギ。一体何を仕掛けたんだろう。

箱から飛び出したのは、なにやら長細いものやら小さいもの、暗くてよくわからなかった。しかしバラバラと女たちの頭上に降り注ぐと所々で悲鳴が上がる。

「きやああああ、へびいいいつ!?!」

「ご、ゴキブリ! いやあ、取つてよおおおつ!」

「やだ、ムカデ、ムカデえええつ!」

……。

おい……。

「ははははは、やっぱり所詮女だな、こんな玩具でビビってやがる！ さあ佐藤健司、僕の仕事はここまでだ！ 今のうちに皆殺しにしまえ！」

お前、当初の友達作るって目的忘れてるだろ。しかしこれはチャンスかもしれない。

「ステラ、仕掛けるぞ」

「はい、旦那様！」

泣き叫ぶ女たちに向かって、俺たちは走り出した。

いくら相手は女の子だからと言って、総勢四十人あまりの人間、それも武器を持つてるとなるとそれなりに厄介だった。しかし長ネギのおかげで取り乱しているため、思いのほか簡単に無力化している。女たちは俺とステラの当て身によって半数近く気絶していた。

「ほいつ、ほいつ、よっつと」

バシッ、ビシッ、ドスッ。

また三人眠ってもらった。なんだ、こりゃ簡単だな。そんな風に思った次の瞬間、悲鳴とバイク音でうるさい駐車場に、小さいがやけに通る声が聞こえて来た。

『馬鹿みたい。こんなの玩具じゃない。全然怖くないよ』

その途端、悲鳴が一斉に止んだ。……いや、いくら何でも不自然だろ！ さっきまで泣いてた奴らや、走り回ってた奴らまでピタッと動きを止めてるし！

「ちっ、舐めた真似してくれてんじゃねーか！」

「おい、困め困め！ コイツら逃がすな、殺しちまえ！」

「ちくしょー、恥ずかしい目にあわせやがって……」

目をギラつかせる。一体どうなってやがる、たったあれだけの言葉でそんなに変わるもんなのか！？

しかし、次の瞬間さらなる衝撃が俺たちを襲った。

『あなた達は動けない』

その言葉を聞いた瞬間、俺と長ネギの身体がいきなり動かなくな

った。

「ぐっ……なんだこりゃあ、動けねえ!?」

「ひ、ひいいいっ! なんでさ、なんで動かないのさ!」

「旦那様、これは言霊です! 耐魔法防御を……」

出来ませんって、そんな事!

ちくしょー、俺にも魔法の才能があれば良かったんだが……とい
うか長ネギがすんなり引つかかるのおかしくないか。一応魔法大国
の王子な上にアミュレットやら何やら身につけてるだろ。

「あ、本当だ! お前が大袈裟に動けないとか言うから僕まで止ま
っちゃったよ。ははは、馬鹿だなあ佐藤健司! こんなんで動けな
いとか笑っちゃうよ」

戦力が減ってお前の危険が増してるけど笑えるのか。

「あ、本当だ! 笑い事じゃない、動け動け動け動け、動いてYO
!」

ゆるするな! あとそのセリフはよせ!

しかしこれはマズい事になった。ステラの能力なら全員を相手に
するのは容易い。けど俺が足手まといになってしまってるし、俺た
ちを守りながらでは戦い方も限られてくる。それになにより、さっ
き聞いた限りではステラの身体能力強化はリスクが大きい。既にこ
こに来るのに一回使ってるから、それなりに疲労してそうだ。

「ステラ、おれは強化で皮膚を硬質化させて身を守る。お前は長ネギを守りながら戦ってくれるか」

「……分かりました。その野菜王子は下手に魔法道具で攻撃しないように。魔法バレは避けたいですかな」

「わ、わわわ分かってるよ！」

そんな風に言葉を交わしているうちに、女たちはこちらを取り囲んでいた。これはヤバいな。まさかこんな展開になるとは思ってた。言霊を使う奴は確かに仲間で居たけど、分厚いローブを着込んで顔を見せなかったから、この中の誰かは分からない。けどなんで暴走族なんか……。

『そいつ等は何も出来ない。殺しちゃって』

とんでもない事を言った。

女たちが一斉に、全方向から襲いかかってきた。

「ステラ、俺の足を掴んで振り回せ！ 少しでも筋力を強化するんだ！」

「はい、旦那様！」

ステラが言われた通りに俺を掴んだ。そして、両足を脇に挟んで

グルグルと振り回す。俺の頭は襲いかかる女たちに次々とあたり…。

むにゅん、むにゅん、ぼいん、ぺたん、むにゅん、むにゅん、むにゅん、ぺたん

「「「「「きゃあああああつ!?」「」「」

おっぱい祭りとなった。

「ステラ、どういう事だ」

「高さに致し方ないのです」

まあいいけど。気持ち良かったし。

いや良くない！ 女たちの怒りがマックスに達したぞ!? 特に俺に対してすんごい殺意を向けている！

「殺す……マジ殺す！」

「生きて帰さねー、全裸にして電柱にくくりつけてやる！」

「触られた……二度も触られた！ 親父にも触られた事無いのに！」

いや、最後の君、その発言は色んな意味で問題だ。

しかしこれで相手は本気になった。ステラも手加減なんてする余裕も無くなっただろう。さて、どうするか……そんな風に考えた時、何故か上の方から声が聞こえた。なんだ？

「おやめなさい、あなた達！ これ以上の悪行は許しませんよ！」

みんなが一斉に上を見る。

営業時間外で真っ暗になっている土産物屋、その屋根の上に、ライトアップされた二人の人影があった。一人は長い金髪をなびかせたお姫様、ちよつと魔法少女的なデザインのゴスロリドレスに身を包んでいる。もう一人は人間かどうかすら怪しい球体で、伸びやすい生地ของ ジャージを着込んでいた。

「この世に正義がある限り、悪が栄えた試し無し！」

「もがもがもが、もがもがーっ！」

「はびこる悪があるならば、正義の鉄槌下しましょう！」

「もがっ！」

「美少女戦士……」

「モガモガー……！！！」

……。

美少女戦士モガモガー？

「行きますよ、鉄丸さん！」

「もがっ！」

いきなりバラしてるし。

鉄丸がクリクリを背負って跳躍する。そして俺の前に凄い音を立てて着地した。

ガシャンッ！！

ジャージで隠していれば大丈夫だと思ったんだろうけど、この音からして異常だからな。ほら、コイツら思いっきりビビってるじゃないか。

「心配になって来てしまいました！ 健司様、今解呪します！」

「あ、ありがとう。助かったよ、クリクリ」

今回はなんとも情けないな、俺。助けてもらってばかりだ。しかしこれで戦える、さっさとこんな奴ら気絶させてやる。そう思っ
て見ると、そこには女たちに向かって走り出す鉄丸の姿があった。

ヤバイ。

先輩、こういう奴ら大嫌いだから手加減なんてしないんじゃないか？

「な、なんだコイツ、キモい！」

「わ、来るな来るな、いやあああつ!？」

怯える女たち。そりゃそうだ、ジャージに身を包み、覆面で顔を隠した巨体が迫って来てるんだから。俺だって怖いよ。鉄丸はその巨体に似合わないスピードで女たちに突っ込む。そして、女たちが跨がっていたバイクを掴んだ。

「もがもがもおおおつ!!」

「きゃああああつ!」

女を振り落とす。そして、バイクを力一杯放り投げた。……田んぼの方に。

ヒュウウウウン……

ズボツ

「わ、私のセローガー……っ！」

膝から崩れ落ちる。鉄丸はそんな女を無視して、次から次へとバイクを放り投げていった。

ポイツ、ポイツ、ポイツ、ポイツ

「私のビラーゴが！ まだ買って2ヶ月しかたってないのに！」

「インパルスが！ お兄ちゃんの借りて来た奴なのがいい！」

「ぎゃあああ、パパのゼファーがっ！ どうしよう、すっごい怒られるよおおっ！」

「あ、あはははは、出前で使ってたカブが……」

なんて物乗って来るんだ。そば屋か、そば屋なのか。

鉄丸によってバイクを下ろされてゆく女たち。もう先ほどまでの氣勢は無い。しかしどこかに身を潜めている言霊使いは次の一手を打った。

『そのひ弱な男は金持ちのボンボンだから、締め上げればバイク代くらい簡単に手に入るよ』

女たちは目の色を変える。バイク潰しに熱中する鉄丸はそれに気づいていない。クリクリは俺の解呪、ステラはその護衛。長ネギだけが、少し離れた所にポツンとたっていた。

そこに、女たちが群がる！

「……弁償しろ、オラアアアア！！」「……」

「ひいひいっ！ 僕モテモテー！？」

マズい、長ネギが狙われた！ 長ネギは格闘の才能ないから流石にアイテム使わないと切り抜けられないぞ！ けどアイツ、人に向けて殺傷能力あるアイテム使うの躊躇うから、これは本当に防ぎきれない！

女たちは木刀やチェーンを手に長ネギに襲いかかる。ステラが察知して動き出したが、間に合わない。女の振るった木刀が長ネギの身体に到達しようとした、まさにその瞬間……。

ザクッ！

木刀が切り飛ばされた。

長ネギの前に、何やら白い着物を着た人影が。手に小太刀を握って立ちふさがった。そして、この広い駐車場の至る所に奇妙な明か

りが灯る。

ボツ

ボツ　ボツ

ボツ　ボツ　ボツ……

それは無数の青白い火の玉だった。

「ぎゃ、ぎゃあああ！　幽霊だあああつ！」

「きゃあああ、お母さあああんっ！」

「やだ、もうやだよう！　助けてえええっ！」

阿鼻叫喚。

そんな大騒ぎの中、幽霊と呼ばれた少女は此方を見てニヤリと笑った。

『存外に苦戦しているみたいじゃないか、佐藤健司。無様な貴様を見るのも、中々趣があつていいものだな』

ちくしょー、言ってくれやがる。今回は特に言い返せないから余計悔しい。しかしその姿を見て安心したよ。

「ゴーストライダー。元気でやってるみたいだな」

『ああ、おかげで昨日退院出来た』

以前と比べると、遥かに生気が感じられる。生き生きとしたゴーストって変だけど。ゴーストライダーは小太刀を構えなおすと俺に笑いかける。その表情は、ちょっと邪悪だった。

『私にも遊ばせてくれ。久しぶりに暴れ回りたい気分なんだ』

いや、それはマズいだろ。コイツら戦意喪失してるし……。俺がそう言くと、ゴーストライダーは顎をクイツと駐車場の端へと向ける。つられて見ると、そこにはいつの間にか小柄な人物が立っていた。

恐らくずっと隠れていたんだろう。火の玉に照らされて、隠れられなくなったのだ。その人物は、フルフェイスのヘルメットにバイクスーツに身を包んでいた。身体のラインから女性だと分かったが、顔は全く分からない。

『幽霊なんて恐くない。お前たちはただ相手を殺す事だけを考える』

泣き叫んでいた女たちがピタリと動きを止める。怖くて逃げたいのだろうが、そうした感情が無理矢理封じられたらしい。震えながら、此方を睨みつけて来た。

間違いない。

コイツが、言霊使いだ。

俺は無言で殺気をぶつけてくるヘルメットの女を睨み返す。コイツを倒せば、下らないチームも潰れる。言霊で縛り付けた集団なんて、効果が切れたら烏合の集でしかないからな。

そして何より、かつての仲間がこんな事をしているのが許せなかった。困った人たちを助ける為に戦っていた奴が、真逆の行為に手を染めている。それは許せないし、悲しかった。

ぶっ倒して、反省させてやる。解呪で動きを取り戻して来た身体をほぐしながら、俺は言霊使いを睨み続けていた。

第三十三話 言霊使い

駐車場には無数の火の玉が浮かんでいる。その真ん中で、ヘルメットの女はこちらを見つめていた。何も持たず、ただそこに佇んでいる。得物も無いのに戦う気満々らしく、こちらに向かって強烈な殺気を放っていた。

「言霊使い……お前、なんでこんな事してんだよ。俺たちは向こうで平和の為に戦って来ただろ？」

駄目元で声をかけると、意外な事に言霊使いは答えてくれた。

『この場所が私にとっての居場所、平穏なんだ。私の平和を壊そうとする奴は殺す』

これが、平和？

俺が言いかえそうとしたその時、鉄丸……いや、武装を解除した先輩が叫んだ。

「貴女その身勝手な理屈のおかげで、苦しんでる子がいるのよ！ ひねくれて徒党を組むなら同類だけにしなさい、一般人を巻き込むな！！」

その言葉を聞いた言霊使いは、クスクスと笑う。次第に肩を揺らし、大きな声で笑い始めた。

「な、何よ！」

『ふ、ふふふ、ははははは！　そう、まだ気づかないんだ。あははははは！』

そして、ひとしきり笑うとヘルメットに手をかけた。ゆっくりとそれを脱ぎ取ると、アスファルトに放り投げる。その顔を見た俺たちは、目を見開いて固まった。

なぜ？

なぜ、二井坂さんがそこに居るんだ？

しかしその驚きは俺たちだけでなく、周りにいた女たちも同様だったらしい。特に動揺を隠せなかったのは、ウチの学校で二井坂さんを虐めていた女たちだった。

「な、なんでアンタがリーダーなんだ……」

「初美、初美が、なんで！」

「嘘だろ、こんなの……」

虐めていた人間に、いいように使われていた。それが信じられないのだから。俺だって、助けたかった人が敵の親玉だったなんて信じたくない。

しかし二井坂さんは容赦ない現実を叩きつけて来た。

『立ちなさい。まだ戦えるでしょ。早くコイツらを殺して』

ヨロヨロと立ち上がる女たち。俺やステラが気絶させた奴まで立ち上がる。これじゃまるでゾンビだ。

「やめる、二井坂さん！ 彼女たちはもう戦いたくなんてないんだ！」

『知らないわ、そんなの』

女たちは俺たちを囲む。意識のある奴らは、涙を流して嫌がっていた。今までリーダーだと思っていた人が、自分たちが散々虐めてきた奴だった。そして今、絶対勝てない相手と無理やり戦わせようとしている。これは明らかに自分たちに対する復讐だ。

「ごめん、初美ごめん、許してよおお……」

「ぐすつ、お母さん、怖い、怖い」

「助けて、誰か助けてーっ！！」

これは酷い。

こんな状態の子を攻撃なんて出来るわけないだろう。先輩もステラも、ゴーストライダーですら躊躇する。しかしそんな中、クリクリだけは違った。

「ステラ、みんなに抗魔法バリアを」

「は、はい、お嬢様！」

ステラが慌てて俺たちに魔法をかける。クリクリはそれを確認すると一気に魔法を発動させた。

「睡眠魔法『スリプ』！」

両手を真上に掲げる。ピンク色の光が周囲を照らすと、その光を浴びた女たちは次々と眠り、倒れて行った。なるほどな、言霊以上の魔力で眠らせれば操られなくなるワケか。やるな、クリクリ。

しかし、二井坂さんは次の手を打つ。

『宿れ、仮初めの命。私の敵を食らいつくせ。ネクロマ！』

それは言霊ではなく魔法だ。同じ魔法を、魔族が使っていたのを知っていた事がある。確か、死者や人形を操る使役魔法だったハズだが何を……。

うねうねうねうね……

『きゃあつ、蛇！？ 玩具の蛇が動いてる！！』

叫んだのは意外な事にゴーストライダーだった。ありや、実はこういうの苦手だったのか？しかしそのリアクションを見た二井坂さんはターゲットをゴーストライダーに絞ったようだ。

『行け！』

鋭い声と共に、玩具の蛇たちがゴーストライダーへと向かって飛びかかる。まるで本物の蛇のように牙を剥き、一斉に襲いかかった。そこに……。

「僕を忘れてもらっちゃ困るな！」

長ネギがゴーストライダーの前に飛び出した！ 手にしているのは、収納君だ。箱の蓋を開けると、飛びかかって来た蛇たちに向かって突き出した。

ピカッ！

光を放つ収納君。その中に、次々と蛇たちが入って行く。なるほど、自分で持ってきた物だからな。元に戻したのか。

「ゴースト…いや、五十嵐さんだろ。姿形は変わっても、僕はすぐ分かったよ」

『緑木君……』

ゴーストライダーが感動している。確かに本人の面影があると言っても、今のゴーストライダーは五十嵐さん本体よりも大人の女性って感じた。もしかしたらバレないようにしたかったのかもしれないけど、長ネギは一発で見抜いた。これは凄い。ついでに長ネギの本名を知ってるゴーストライダーも凄い。俺は忘れていた。

「五十嵐さん、今度は僕が君を守るよ」

『緑木君……ヒッ!?!』

その時、長ネギが手にした箱がカタカタ動いた。中で暴れてるんだろうか。気づいた長ネギが箱を胸高の位置にもってくると、そばにいたゴーストライダーがビビる。

いんだ」

しかし、そんな俺の思いは届かなかった。二井坂さんは後方に跳躍して俺たちから距離を取ると、何やら小さく呟き始める。一体何を言ってるんだと耳をすませると……。

『私は強い、私は強い………』

ん？

『私は強い、私は強い、私は強い、私は強い、私は強い！』

なんだ、こりゃ。

『私は強い、私は強い、私は強い、私は強い私は強い私は強い私は強い私は強い私は強い私は強い………』

二井坂さんの目が狂気を増す。先輩やクリクリ、ステラは、その異様な光景に飲まれていた。一体何を……そんな風に警戒していると、ゴーストライダーが叫んだ。

『佐藤健司、自己暗示だ！ 自己暗示で力を引き出そうとしている』

「何だと!?!」

俺が二井坂さんの方へと向き直すと同時に、二井坂さんがその場からこちらへ向かってダッシュを始めた。その距離は150Mはあったはずなのに、一瞬で間合いを詰められた。速い！

『はあぁっ!』

ブウンッ!

「おわっ、二井坂さん、やめるんだ!」

蹴り上げた足が俺の耳を掠める。二井坂さんは続けて連続で拳を放って来た。

『はっ、はっ、たあぁっ!』

「二井坂さん、頼む、やめてくれ!」

これが言霊の力なのか。二井坂さんは普通の人間では考えられない速さで攻撃を仕掛けてくる。俺は身体強化で目を強化して、身体の細かな動きをとらえて行動予測をたてながら攻撃をかわしていた。かわしながら、二井坂さんの弱点に気づく。

これ、本当に自己暗示だけだ。身体を強化しないで、リミッターを外しただけ。人間ってのはフルパワーを出すと筋肉とかを痛めるから、普段リミッターがついている。それを取っ払って、無茶な動きを可能にしてしまっているのだ。だからもし俺が身体を固くして受けてしまったら……二井坂さんの身体は壊れてしまう。

何故、こうまでして反発するんだ。それに俺に向けられた殺気は本物だ。俺が一体君に何をしたって言うんだよ……。けれど今はそんな事を言っではいられない、とにかく二井坂さんを怪我させないよに止めないと!

「悪い、二井坂さん。少し我慢してくれよ」

『……っ！？』

二井坂さんの攻撃をかわす。隙だらけの身体に抱きつくと、すぐさましつかり密着した状態で皮膚を硬化化した。いわゆる肉の拘束服。焦った二井坂さんは必死で暴れようとするが、完全に密着した状態では攻撃出来ない。

『離せ！ 直ぐに離せ！』

脳に直接言葉が響く感じだ。しかしすぐさまクリクリが俺に魔法をかけた。

「解呪、『ディスプレイ』！！」

頭にかかり始めたモヤが一気に晴れる。危なかった、また言霊にやられる所だったからな。しかし……ん？ あれ？

「二井坂、さん？ あれ、二井坂さんだ」

『……っ！？ まさか、思い出したの！？』

「何で今まで忘れていたんだろう。二井坂さん、久しぶりだな」

俺がそう言うと、さっきまでの暴れようが嘘のように静かになる。全身の力を抜いて、俺の身体にもたれかかって……身体の力を抜いた。戦意を喪失したようだった。

「みんな、もう大丈夫だ。……二井坂さん。もう良いだろ、全部話してくれ。こうなった経緯を、全部」

「……分かったわ」
声からも力が抜け、学校で聞きたいいつもの二井坂さんの声に戻っていた。

二井坂初美さんは、生まれつき不思議な能力を持っていた。それは言葉で人の心を動かすという物。いわゆる言霊の力を生まれながらに備えていた。

能力の使い方をコントロール出来なかった頃は、大抵その力は悪い方向に発揮されて、イジメなどの原因となった。しかしそれも小学生までで、中学生の頃になると、少しではあるが、ある程度コントロールが可能となった。普通に振る舞う分には何の問題もなかったハズだったが、残念ながらそこにもう一つ問題が生じる事となった。

それは、何となく発した言葉が発端となった。当時所属していた美術部の活動の帰り。同じ部活の仲間たちと話をしていた時に、ポロツと言った一言から騒動は起きた。

「私も、彼氏とか欲しいなあ」

それは一瞬に帰っていたメンバー（仮にAさんとしておこう）が、

彼氏を同伴していた事から出た言葉だった。そこに、偶々力が込められてしまったのだ。気づいた時にはもう遅い。Aさんの彼氏は、二井坂さんに恋をしてしまった。

それからは大変だった。

彼氏は病的にまで二井坂さんに夢中になり、美術部内には亀裂が生じた。日毎に悪化してゆく関係、彼氏も二井坂さんが振り向かなくてイライラを募らせて行く。一度ついた火は二井坂さん自身の力をもつてしても消す事は出来なかったらしい。そしてそんな状況もある日彼氏の暴走という形で幕を閉じる。

放課後の美術部。一人ぼっちで絵を描く二井坂さんに迫る彼氏。その状況を目撃したAさん。修羅場となり、何故か二井坂さんだけが責められる展開となった。そこに飛び込んで来たのが、俺だ。

「健司君は、クラスでも運動が苦手で静かな子って感じだったから、助けに来たのは凄く意外だった。ただでさえ私は皆からいい風に見られてなかったから、助けるなんて発想する人は周りには居なかった。他の学区から来た子だからかな、って思っただけけど……」

確かに俺は親父の仕事や母親が死んだりした関係で引越しが多かった。小学生の頃は親戚の家に居候してたし、親父の仕事が安定して、やっと一緒に暮らせるとなったのがちょうど中学生の頃だった。だから二井坂さんの噂なんて聞いてるワケがない。

「佐藤君は、私がありつたけの力を込めて『逃げて』って言っても効かなくて、ずっと私の盾になって殴られ続けたわ。泣いて、その声を聞いた先生が駆けつけるまで。私の力が効かなかった人は、あなたが初めてだった」

あの時はただ必死だったからな。二井坂さんを助けたいって事で頭がいつぱいだったから、単に聞いてなかったんだろう。その後は以前話した通り。俺は情けない姿を晒した事で周囲のイジメの対象となった。しかし……今まで何故その時の女子が二井坂さんだと気づかなかったのか。それは、実はその後の展開に関係していた。

二井坂さんを助けた事で、クラスでイジメに遭う事になった俺。その余りに酷い仕打ちに、二井坂さんは逆に俺を助けたいと思っただらしい。彼女は俺へのイジメがエスカレートしていた中学三年の頃に、自ら力を使って俺をイジメていた奴を洗脳した。最初は単にイジメをやめさせるだけ。次に、学校の帰り道を俺と違う道に変えさせたり、俺と一緒に志望校を受けさせないようにしたりした。つまり、俺から隔離しようとしたのだ。

その過程で、彼女は力の使い方を少しずつ覚えた。また、その味をしめてしまった。これを使えば、思いのままに人を操れる。もうイジメなんか怖くない、と。彼女によってクラスの連中はイジメをやめて、俺はストレスから解放された。それでも一度傷ついた心の傷は中々癒えるものではない。俺が何時までも暗い顔をしているので、見かねた二井坂さんは俺に言霊を使った。あんな事は忘れて、もう暗い顔はするな、と。

しかし彼女はミスを犯してしまっただけらしい。

トラウマはそのままに、俺の記憶を一部封印してしまったのだ。それは、二井坂さんの記憶。暗示をかけた後に俺が「君は誰？」と問いかけた瞬間、彼女は絶望したという。

「何度暗示を解こうとしても、無理だった。私はそれ以来力を使うのが怖くなって、また力を使わない生活に戻ったの。でもこの高校

に入ってたまたイジメにあつて……我慢出来ずに力を使い出したの。イジメてきた人たちを洗脳して、表向きいつも通りで裏では私の言いなりになるように暗示をかけて。その人たちの所属するチームを乗っ取つて、私の居場所を作る。それが今のスネイクロード。ゲーットの書を手に入れたのは、ちょうどスネイクロードを乗っ取つた頃だったわ」

神は言った。

その力を完全にコントロール出来るようにしてやるう、と。そして思う存分力を使つて、お前の想い人をサポートしろ、と。

神は俺が異世界へ渡つた事を告げた。

「ずっと気にしていた人が向こうに渡つたと聞いて、心配になったの。結局は心配なんてする必要なかったけど、私はどうしても気になって渡る事を決意した」

二井坂さんは世界を渡り、素性を隠して俺をサポートしていた。今思えば確かに、言霊使いが正式にパーティーに参加してから、交渉事がスムーズに行くようになったような気がする。俺が魔王城を破壊するまで、彼女はずっと俺のサポートをしてくれていた。

その後、俺がこちらに戻ると同時に彼女もこちらに戻つた。力を完全にコントロール出来るようになった彼女は、こちらでも平穏な生活を送る事になった。なつたのだが……。

これまでずっと俺を支えたり見守つていたりしていた彼女。そんな彼女も最近の俺を見て思う所があったらしい。異世界のクリクリやこつちのステラ、先輩らに囲まれる俺を見ていた二井坂さんは、いつまで経つても自分の事を思い出さない俺にイライラを募らせて

いた。つまり今回の屋上イジメ事件は……。

「私の自作自演。どうにかして思い出してもらいたくて……最低だって分かってるけど、止められなかった」

なんてこった。

こんな真相だったなんて……。

「身勝手にも程があるわね」

先輩が睨みつけながら言う。

「あなたの事を本気で心配した佐藤君の気持ちを、信じてあげられなかったの？ あなたの事を忘れていても、彼は昔と同じようにあなたを助けようとしていたのに」

いや、先輩。そんなにキツク言わなくても……。思い出せない俺も悪いし。

「いいえ、健司様は私の解呪魔法で思い出されましたから、忘れていた原因は健司様本人にはありません」

正論だ。正論なんだけど。

「旦那様。今回この人は色々な人を巻き込みすぎました。報いを受けるべきです」

うーん……。

でもなあ……。

俺は馬鹿だから納得できねえよ。

俺は身体を元に戻して二井坂さんを離す。そして、背後のクリクリ達の方を向いた。

「健司、君……?」

「あかさ。今回の件、俺が悪いって事で、二井坂さんの代わりに俺が罰を受けるって事にしてくんないかな」

全員が固まった。

「今回、実害と言っても俺たちには何にも被害出てないし。むしろ先輩が放り投げたバイクの方が被害は凄いだろ」

「う……」

先輩が気まずそうにする。

「いや、先輩は悪くないよ。動きを封じられた俺を助ける為だったんだから。けど、やっぱり勇者の癖に簡単にピンチを招いた俺の責任だよ。最初にステラと俺と長ネギだけで充分って判断したのも甘かった。ほら、俺のせいだろ」

俺が言うと、いやそうじゃないという意見がステラやクリクリから飛び出す。ゴーストライダーなどは、またお人好しが始まったとニヤニヤしながらこちらを眺めていた。

そんなやりとりが続く中。気づくと、俺の後ろで二井坂さんが泣いていた。俯いて、声を押し殺して。

「な、なあ、どうした？　どっか苦しいのか？」

首を横に振る。

「ちが、う……。こんな私、に優しくしてくれる、から……。ごめんなさい、健司君。迷惑かけて、ごめんなさい……。皆にも、謝らないと……。」

そのつぶやきを聞いたクリクリ達も、言い合っのをやめて二井坂さんの方を見た。

「二井坂さん。今の言葉は本当ですか？」

クリクリの言葉に頷く二井坂さん。それを確認してからクリクリは続けた。

「ならば、今謝ってもらいましょう。これから睡眠の魔法を解きます。彼女たちを目覚めさせますから、巻き込んだ事を謝罪して下さい」

お、おい、クリクリ！　それはいきなり過ぎないか！？

「いいえ、佐藤君。謝るなら今がいい。先延ばしにしたって解決にはならないわ」

先輩……。

困惑する俺。落ち着いてからでもいいような、とも思ったが、二井坂さんは頷いて言った。

「分かりました。お願いします、クリスさん」

クリクリが魔法を解く。周囲に横たわっていた女の子たちは目を覚まし、ゆっくりと起き出した。

「あれ、ここは？」

「集会？　なんで眠ってんの」

「暗いじゃん、まだ寝る……」

寝ぼけてる奴もいるが、大体全員起きたようだ。だんだん頭もハッキリしてきたのか、俺たちの姿を見て一様に怯えだした。中には、やたらと衣服を気にしてる奴も。ふざけんな、誰がイタズラするか！……長ネギか。

そんな彼女たちの注目を一番集めていたのは、やはり二井坂さんだった。とにかく一番は恐怖。言霊の力を恐れていた。二井坂さんが一歩前に踏み出すと、皆が一歩下がる。二井坂さんは俺の方を向いて目で合図をした。これは……手を出さないでくれって事なんだろうな。分かってる。分かってるけど、辛いな。

二井坂さんが一人で歩いて行くのを、俺は黙って見送る事しか出来なかった。

第三十四話 優しい夜

きつと俺は情に流されやすい性格をしているんだろう。二井坂さんが一人で女たちの所へ歩いて行くのを見ると、どうしても引き止めたくなってしまう。代わりに俺が、とってしまったのは性分なんだろうな。けどそれは、二井坂さん自身の為にはならない。先輩やクリクリはそう思って今謝らせようとしてるんだろうけど、俺は辛かった。

「先輩、暴力行為があったら止めるからな」

「それはそうよ。私だって止めるわ。誤解しないで欲しいけど、私達はあの子にちゃんと説明して謝りなさいって言うてるだけだからね」

うん。そうなんだろうな。分かってる、俺が馬鹿でガキなだけなんだ。俺は先輩の隣で、大人しく事の成り行きを見守る事にした。

二井坂さんの説明を聞いていた女たちのリアクションは、意外な事に激しいものではなかった。いつまた操られるか、という恐怖よりも罪悪感の方が先行しているような表情だ。確かに、自分たちがイジメたりしなければ二井坂さんはこんな事をしなかっただろう。言ってみればこれは彼女の復讐。そうさせたのは自分たちなのだから

無言で俯く女たち。二井坂さんは涙を流しながら謝る。ごめんなさい、ごめんなさいと最後は言葉にならないくらい嗚咽しながら。そして、土下座までしようとした時。

「もういいって。あんただけが悪いワケじゃないし」

一人の女が、二井坂さんに近づいて肩に手を乗せた。よく見ると、あの時先輩と口喧嘩した子だ。

「松原さん……」

「正直言えば、いいように操られたのは悔しいけどさ。もしアタシがあんたみたいな力もってたらもっと酷い事してたと思うし。何だかんだ言っつて、今までリーダーとしてウチらをまとめてくれたから、そこは感謝してる。ちゃんと謝ってくれたし、少なくともアタシは許すよ。ただ……」

松原と呼ばれた子は後ろの女たちを見渡す。

「バイク、どうにかして欲しいな。アタシら自分のバイク持つてるの一部だけでさ。親とかの借りて来てるのばっかだから」

そうなるだろうなあ。

二井坂さんは「弁償する」とか言ってるけどそれは無理だ。隣の先輩はばつの悪そうな顔をしていた。

そこに、歩み出るクリクリ。

「それは、私が何とかしましょう。少し時間はかかると思いますが、私の方で壊れたバイクは修理に出させていただきます。直るまでの

間、代わりのバイクも手配しますよ」

クリクリが言うと、それまで複雑な顔をしていた女たちの顔が明るくなる。そりゃそうなんだ。いくら二井坂さんの謝罪が誠実でも、現実問題として金銭的な物が絡むと「ごめんなさい」では済まされない。この場でそれを解決出来るのはクリクリしかいなかった。長ネギ？ アイツはそれを盾に脅すから却下だ。

「皆さん。これで二井坂さんを許してあげられますか？ ちゃんとこれからは真つ当に生きて行けますか？」

クリクリが言うと、女たちは頷いた。弁償してくれると聞いたから素直だ。というか「真つ当」って言い方からして、クリクリは未だに野盗ネタを引きずってるっぽい。女たちが二井坂さんに優しく接しているのを見ながら、クリクリはえっへんと胸をはった。

「一件落着です、健司様！ 見事、野盗を説得するのに成功しました！」

「あ、ああ。よくやった、クリクリ。素直に凄いと思ったよ」

本当に。優しいだけじゃなんにもならないって、痛いくらい分かったよ。いざという時は厳しさも必要だし、金だっただけであつたほうが良いんだよな。これが甲斐性って奴なんだろうが。

そう思って内心ちょっと凹んでいた時。

なにやら、どこからともなく豪快な笑い声が響いて来た。はつきり言っ、近所迷惑だ。近所迷惑と言えば……。

「見事なり、我が愛娘クリスマスよおおお〜!!!」

「お父様!?!」

駐車場から道路一本挟んだ向こう側の空き地が、突然ライトアップされる。そこにはいつの間にか一台の大型トラックがとまっており、その上にはむさ苦しいオッサンが仁王立ちしていた。王様……何やってんだよ。

王様が「とうっ!」と言ってトラックから飛び降りる。するとトラックの荷物を収納する所が開いた。凄いな、あれって横から開くのか。どうでもいい所に感動していると、今度は荷台の中がライトアップされた。そこには数台のバイクが。ありゃ、先輩が投げたバイクじゃないか。そしてそこにいるのは……。

「H A H A H A、修理シテシマッタ!」

なんだと!?!

そこにはツナギ姿が微妙に似合っているジエイコブがいた。啞然としていたのは俺だけじゃなく、先輩やステラもだ。女たちや二井坂さんも目を点にしている。

俺は皆を代表して王様に尋ねた。

「王……いや、クリスマスレアさん。いつの間にそこにいたんですか? いくら何でも、そんだけ大きなトラックで来たら普通俺らが気づ

きそつなもんですけど」

「ふはははは、小さい事は気にするな！ ちょっと魔法を使っただけだ！」

うおおおい！ 思いつきり魔法とか言いやがった！

「それにな、義息子よ。これだけの騒ぎ、いくら田舎とは言え普通はとつくに通報されとるだろう。それなりに前もって根回ししておかなければいかんぞ？」

そう言つて王様が指をさす。道路の向こうには……うわっ、警察！？

「地元警察はある程度掌握しているから安心しろ。今回は新井原警察の人間に交通整理を頼んでいる。この近辺には私の許可した者以外は入れないようになってるのだよ」

そして次に荷台の上のバイクを指さす。

「実際に田んぼに落ちたのは最初の一台だけだ。それ以降はみんな私が受け止めてやったわ。よって修繕と言つても最初の一台を田んぼから引き上げてバラして洗って組み立てただけだがな」

なんと……豪快すぎるな、王様。

「さあ、暴走少女たちよ、自分のバイクを取りに来るがよい！ 今回は特別に警察も見逃してくれる。自分のバイクに乗ったら、大人しく家に帰るのだぞ！」

王様の声に、顔を輝かせる女たち。我先にと駆け出して行く。それを見送る二井坂さんに、さっきの松原が声をかけた。

「私も帰る。スネイクロードは解散だろうけど、またやるなら声かけてよ」

「松原、さん？」

「……悪かったね、色々。アタシも反省してるよ。今度学校で会ったらさ、これからは普通に友達になろうよ」

少し照れながら言うと、二井坂さんは本当に嬉しそうに微笑んだ。

「うん！」

スネイクロードが解散して行く。女たちは次々とバイクに乗って、夜の道を走り去って行った。駐車場へは王様用なのか知らないが、朝見る高級車とはまた違った黒塗りの車。多分センチュリーだろう、テレビで見た事がある。そこに、クリクリとステラ、先輩と長ネギが乗り込んだ。

「健司様？ 健司様はどうされるんですか？」

「俺は二井坂さんと話があるから。ゴーストライダーは……」

『私は本体に戻ればいいだけだ。必要ない』

そう言ってから、車の中の長ネギに声をかけた。

『またな、緑木。蛇さえ持ち出さなければ、仲良くしてやる』

「ほ、本当に!? あ、ありがとう五十嵐さん！」

良かったな、長ネギ。お前にも春が来そうじゃないか。そんな風に思っていたら長ネギの懐から何かがこぼれ落ちるのが見えた。その箱は……

ピカッ！

「~~~~シギヤ~~~~っ!~~~~」

『きゃあああああっ!?!』

これは酷い。

箱から飛び出した蛇の玩具は、車の窓のそばにいたゴーストライダーに飛びかかる。すぐさまゴーストライダーは青白い炎を身にまとい、その場から消え去った。

『ネクロマ、解除』

二井坂さんが唱えると蛇たちは単なる玩具に戻った。

「ち、違うんだ、五十嵐さんこれは……」

「~~~~バカ王子~~~~!~~~~」

車の中にいて、多少被害を被ったクリクリたちが長ネギをボコボコにした。良かったな、一応お前の目標である「女の子まみれ」は

達成出来たじゃないか。ひとしきりボコってから、クリクリは俺の方に向いた。

「では、明日また学校で会いましょう。今日はゆっくり身体を休めて下さいね」

「ああ。今日は助かった、ありがとうな、クリクリ。おやすみ」

手をふる俺。車はゆっくりと走りだす。車の中で手を振り返す三人とピクピクと痙攣する長ネギを見送りながら、俺は隣に立つ二井坂さんに話しかけた。

「二井坂さん。ずっと言いたかったんだ」

「……うん」

畏縮している。怒られると思ったんだろうか。

「力を使って言いなりにするのは良くない。良くないけど、その力である頃の俺を助けてくれた事はすごく感謝している。俺、辛くてもう少しで壊れそうだから」

そして、二井坂さんの目を見つめて言った。

「ありがとう、俺を助けてくれて。向こうでも、俺を見守ってくれて。それと、思い出せなくてごめんね」

「健司、君……」

また、ポロポロと涙をこぼす。泣き続ける二井坂さんを、俺はしばらく宥めていた。

そして、二井坂さんが落ち着きを取り戻してから。俺はアスファ

ルトに転がっていたヘルメットを拾い上げて二井坂さんに渡した。

「ここまでバイクで来たんだろ。じゃあ、ここでお別れだな」

「健司君は？ 後ろに乗る？」

二井坂さんは原付にまたがりながら言う。コラコラ、原付二人乗りは違反だ。

「俺はあっち」

指さす先にはまた一台の高級車。王様が俺を待っていた。さつきのはジェイコブが運転していたが、今度は誰が運転してんだろうな。

二井坂さんは別れる際、一冊の本を取り出す。ゲートの書だ。

「健司君に教えておくれ、私の文字」

「あ、ありがとう。完全に忘れてたよ」

クスリと笑う二井坂さん。取り出した本の裏表紙をめくると、そこには大きく平仮名が書かれていた。

「『つ』？ おまんまつ？」

なんの事だ。益々分からなくなってきたぞ。

「私もよく分からない。別に私の場合、叶えたい望みとかはなかったからゲームには参加するつもりは無いの。今回の件で、望みは叶ったし。でも、何か困った事があつたら言っただろ。私で良ければ力になるから」

「ありがとう。凄く嬉しいよ」

何より、二井坂さん自身が笑顔なのが嬉しい。きっと彼女はこれから、力に頼らずとも前向きに生きていける。俺をイジメから救ってくれた人だからな。やっぱり、立ち直ってくれたら嬉しいよ。

「それと、これ」

二井坂さんは三枚のチケットを俺に手渡した。

「なにこれ。高田アイランド？」

「うん。私、この遊園地でアルバイトしてるの。で、ここで今ヒーローショーやってるんだけどね。このショーに、ジュリアがいる」

「……っ!？」

ジュリア。拳闘士ジュリア。アイツも渡航者だったのか！

「今度の土日にもたまたまショーをするから、見に行ってみて。文字集めに協力してくれるか分からないけど……」

「ありがとう、凄く助かる！」

順調に文字集めが進んで行く。最初は途方に暮れていたが、意外と集まるもんだな。残り何人いるかは分からないが、残りはそんなに多くないはずだ。ジュリアを含めて二人か三人だろう。これならあと一文字も集めたらヒントが分かりそうだな。

「頑張つてね。私、応援してるから」

「ああ、心強いよ。ありがとう」

俺に手を振ってから、二井坂さんはスクーターに乗って駐車を去って行った。

さあて。

俺も帰るかグアツ!?

「逃げるな義息子よ。親子水入らずで話をしようではないか」

「わ、分かりました！ 分かりましたから肩を掴まないで、ミシミシ言ってるから！」

やっぱりマークされていた。王様は無言をいわさず俺を車へと引っ張って行くと、車内に押し込んだ。ステラといい、城の連中って拉致が好きなのかね。

車に乗ると運転席からは聞き慣れた声がしてきた。

「はあい、ケンジ様あ。お久しぶりい」

ミラージュだ。似合わないスーツ姿で運転席にいる。

「転職か？ 手品師は売れないか」

「やあねえ、これは臨時のアルバイトよう。ちゃあんと免許だっってもってるから安心してねえ」

安心できるか。お前魔法の筈で何度も事故ってるじゃないか。

「ミラージユは私の手足となって働いてもらっている。ミラージユ、出してくれ。スピードは出さなくていい」

「りょーかいでーす」

車がゆっくりと走り出す。車道脇にいる警察が此方に向かって敬礼をしていた。王様はそれに軽く手を上げる。なんとというか、向こうと変わらない光景にちよつと驚いた。やっぱり王様は王様だわ。

夜の田舎道を、車は走る。真つ暗闇の中、なんだか居心地の悪さを感じながらソワソワしていると、王様が口を開いた。

「それで、義息子よ。今回の件でお前は何を思った。随分煮え切らない顔をしていたようだが」

「え……まあ、そうですね。モヤモヤはしてました
良く見てるんだな。」

「俺、今回は特に気持ちばかり先走った感じで。助けたいって気持ちで突っ走ってピンチになったり、クリクリや先輩は先の事を冷静に考えたりしてたのに、俺は目先の事ばかりに捕らわれてたんです。バイクの件とかも金の無い俺じゃ解決出来なかったし、なんか俺って格好悪いなって」

正直に言ってしまうと、クリクリや先輩に嫉妬していた。羨ましかったんだよな、あの冷静さとかが。金持ちつてのも羨ましいよ、ああいう解決が出来るんだから。しかし王様は俺の言葉を聞いて、ため息をついた。

「分かつたらんな、義息子よ。確かに金や判断力はあるに越した事は無い。が、そんな物はオマケみたいなものだ」

王様はそう言うってから、俺を見る。その目は猛獣のようでもあり、何かを諭す教師のようでもあった。

「よいか、事の発端はお前の親切心から始まった。それを支えたのが、鉄丸でありクリスやステラであったのだ。どうでも良い人間を支えようとは誰も思わん、お前だから皆は協力しようと思ったのだぞ。この関係は金で買える物ではないし、ただ能力があるだけでは作り上げる事のできないものだ。これは立派なお前の財産であり能力、カリスマだ」

カリスマ？　なんか俺には無縁な物にしか思えないんだが……。

「上に立つ者は別に万能である必要は無い。ただ、導いてやるだけでいい。今日またお前は新しく仲間を見つけたであろう。その関係を大切にし、その信頼を大きな力にせよ。そして勇気を持って前へと踏み出し、道を切り開いて仲間を導くのだ。勇者とはそういうものだぞ、勇者ケンジよ」

王様……。

確かに王様だって、滅茶苦茶強いし人柄もいいけど内政に関しては人任せだったからな。それどころか、自分の分からない事は基本全部人任せ。けどその任せる人の選択が的確で、常に良い方向に転がしていた。

「よいか、私がお前を勇者と呼んだのはノリでは無い。お前のそのカリスマを評価し、人々を導くに値すると信じたからだ。世界の平

和を託すに足る人物と信じ、またその期待に応えた。それを誇りに思うのだぞ、義息子よ」

「……ありがとうございます、王様」

なんだか、胸が熱くなつた。王様つてやっぱり凄いよ。俺、さっきまでへこんでたのにもう元気になって来たんだもの。部下や国民に好かれるワケだよ、本当に。

みんなが俺を信じて支えてくれる。ならば、俺はそんな信じてくれる皆の期待に応えないとな。今まで通り、お人好しのバカを貫いてやるう。まあ、多少は賢くならないといけないんだらうけど。

その後、家につくまで俺と王様は色んな話をした。学校の事、クリクリの事、今回の神の悪ふざけの事。今まで悩んでいた事も話したが、王様は馬鹿にせずその一つ一つに豪快な持論を展開して、俺の悩みをぶっ飛ばしてくれた。一緒にいて元気になれる人って貴重だとつくづく感じたよ。そして、カリスマに関してはやっぱり王様には適わないと実感した。

家の前に車が到着する。時刻は夜中の一時近く。さすがに寝ているのか家の明かりは消えていた。

「ケンジ様、部屋の窓の鍵は開けてあるから、そこから入ってねえ」

ミラージュが開けといてくれたらしい。玄関開けるのはさすがに物騒だからな。感謝しよう。

「有意義な時間であった。ではな、義息子よ。これからも娘の事、よろしく頼むぞ」

「お任せ下さい。今日は俺の話を聞いてくれてありがとうございます。ごうございました！」

クリスレア式の敬礼をすると、王様は大きく頷く。ミラージユに合図を出すと、車はそのまま夜の町へと走り去って行った。

さて。

俺は周囲を確認してから、二階にある自分の部屋の窓まで跳躍した。窓は確かに開いている。音を立てないように窓を開けて、靴を脱いで中へと入った。そして、先ずはベッドを見る。紗良が忍び込んでないかチェックしないとな。

すると。

やはり誰かがいる。

大きさからすると、やはり紗良だろう。まったく、何やってんだと布団をめくろうとした、その時だった。

「ん……あ、佐藤君？ お帰りなさい。遅かったね」

おい。

なんでお前がここにいるんだ。

「うん、ちょっと前にミラージュさんに鏡を使ってこっちに移動させてもらったんだ。ほら、最近また張つて来ちゃったから……」

パジャマ姿の轡田が布団をめくる。そこには、轡田に抱きついて眠る幸太がいた。なるほど、授乳した後そのまま眠ったのか。

「帰ろうにもミラージュさんどこか行っちゃったから帰れなくて。ごめんね、佐藤君。ベッド使っちゃった」

「いや、いいよ。ミラージュが悪いんだから。それじゃあ、俺は下で寝るわ」

そう言つて部屋を出ようとすると、轡田は布団をめくつたままポンポンと開いたスペースを叩く。いや、まさか。

「一緒に寝よ。幸太君も喜ぶよ」

「いや、あの、それは……」

「寝ようよ。ね？」

「……はい」

うおおおお、何故だ！ 何故逆らえない！ これも幸太の洗脳だと言つのか！ いや、白状しよう。轡田のパジャマ姿にやられた。おかしいだろ、なんでこんなに可愛いんだよ。多分着させたのは轡田姉なんだろうが、薄暗闇でも分かるピンクのパジャマは反則なまでに似合っている。というかなんか胸大きくなってないか？

「うん……ここになりそうなんだ。姉さんとブラのサイズ同じとか複雑だよ」

鼻血が出そうだ。

その姉さんつて人には会った事ないから想像してみたんだが、ちよつと大人っぽくなつた轡田だった。いかんいかん、俺はもう轡田を女と認識し始めている！

俺はちよつとドキドキしながら着替えると、布団の中に入った。幸太を挟んでお互い向き合うような形。幸太が来てからベッドは大きめの物に変えてもらったけど、それでも三人で寝るには少し狭い。だから、どうしても気になるんだよな、その……轡田の匂いが。

轡田はもう完全に女の子の匂いをしている。それが布団の中に充滿しているうえに、顔も結構近いから吐息さえ感じてしまひそうだ。俺はなんとか意識しないように固く目を閉じて眠ろうとした。

しかし眠れないよな、うん。

甘い匂いにドキドキしながら目を閉じてると、轡田が小さな声で俺に話しかけてきた。

(佐藤君、起きてる?)

いや、起きてないぞ。これ以上意識すると幸太の事を忘れて獣になりかねない。俺は寝たふりをする事に決めた。

(寝てるんだ……じゃあ、これは僕の一人ごとだよ)

おい、続ける気か！ というか気づいてんのかな。轡田はそのまま語り始めた。

(林間学校の時にクリスさんに聞かれたんだ、僕が佐藤君の事をどう思ってるか。僕は男だからって言ったけど、クリスさんはそういうのを抜きにした、素直な気持ちを聞きたいって言って来た)

林間学校。ああ、肝試しの時だ。確か二人で話したとかいうアレか。

(幸太君のせいでこうなってるのかは分からない。けどね、その時の気持ちは間違いなく……『好き』だったんだ)

……。

(気持ち悪いよね。ごめんね。僕も変だと思っただけど、どうしようも無いんだ。今だって、幸太君と佐藤君と一緒にいて……怖いくらい幸せなんだよ)

……。

(好きで、ごめんね。気持ち悪くて、ごめんね。でも今だけは、ここに居させてね。明日からは、我慢するから……)

……。

……。

ギョッ

(…佐藤君?)

俺は無言で轡田の手を握った。仕方ないだろ？　すぐそばで、涙

まじりでそんな事を言われたらどうにかなっちまうって。

俺は轡田の手を優しく握る。不安が少しでも和らいでくれる事を願って。目を閉じてるから轡田の顔は分からないけれど、きつと泣き止んでくれたと思う。

（ありがとう）

小さな声が聞こえた。柔らかく握り返してくる手。それまでのドキドキとは違った、優しく満たされた気持ちになってくる。

俺は轡田のぬくもりを感じながら、やっとやってきた睡魔に身を委ね、意識を手放していった。

第三十五話 ちっちゃ

完全回復体質の便利な所は、短い睡眠時間でも体調万全になる所だろう。カーテンの隙間から差し込む光はまだ6時前といった薄暗さだが、俺の目覚めはスツキリ爽やかだ。以前なら布団の温もりが恋しいとばかりに二度寝に入ってる所だけど、今の俺は……ん？

目の前に、美少女がいる。

いや、轡田だよな。それは分かってるんだが、何なんだこの愛らしい寝顔は。艶っぽい唇は。この時間帯の俺は特に踏み外し易いんだからあんまり無防備になっちゃダメだぞ？

とりあえず、片手は繋いだままなので、空いてる方の手で唇を触ってみました。

ふにふに

おお、柔らかい。本当に女の子だな。何気にキス経験のある俺だけど、ステラや紗良と比べても遜色ない柔らかかさや瑞々しさだ。これは凄い。

ふにふにふに

「……………」

ふにふにふにふに

「…ふふ、何してんの？」

ありや、起きてた。枕に顔をうずめながら、恥ずかしそうに笑う轡田。もうアレだな、何の罪か分からないけどとりあえず逮捕したい。強制萌えさせ罪とかで。いや落ち着け、俺！

「おはよ、佐藤君。早いんだね」

「ああ、癖になってさ」

言いながら、はて、なんで癖になってたんだっけ、と思う。理由があつたハズなんだ。忘れてはいけない理由が……

その時、布団の下の方から何かもぞもぞと這い上がって来た。なんだなんだ、一体何が。混乱しながら固まっていると、何か俺の胸元までやってきた！

「に・い・さ・ん、朝からBL禁止」

「またお前か、紗良！　いくらなんでも裸はよせ！」

一糸纏わぬ姿の紗良がそこにいた。

「おはよう兄さん、今日もいつもみたいに全身におはようのキスしてあげる」

「してもらってない、してもらってないから！」

啞然とする轡田に言い訳をする俺。なんか変な構図だな。パツと見妹に迫られ友人に言い訳する図なのに、心理的には修羅場っぽい。

「さ、佐藤君って進んでるんだね。僕も何かした方がいい？」

何かって何だ！？　しなくていいから！　寝ぼけてんのか轡田ま
でおかしくなってる！

「やっぱり轡田さんと一緒だと間違いが起きる所だったね。でもま
あいいか、昨日その事でちゃんと話をつけたし」

「ねえ、それ本気なの？　僕、法律ってよくわからないけど、そう
いうのって良く無いんじゃないか……」

ん？　なんの事だ。昨日、俺の居ない間になんの話をしていたん
だ？　とりあえずその事を聞くと、紗良はニンマリと笑う。頼むか
ら何か着てくれ。

「兄さん、幾ら轡田さんが可愛くて胸もあるからって男同士は不健
全だよ。だからね、私は考えたの。私と轡田さんが結婚すればいい
って」

は？　なんでそうなるんだよ。

「私と轡田さんとで結婚すれば、戸籍上は夫婦だから世間体もいい
でしょ？　でも実は二人共、兄さんのド・レ・イ……」

……。

……。

「ア・ホ・か、この変態……っ！」

酷いだろ、これは。幾らなんでも酷いって。

「いいじゃない、これなら私が妊娠しても誤魔化せるでしょー！」

「いい加減自分勝手な理屈で人を巻き込むな、馬鹿たれ！ ドレイ
つて考え自体が不健全過ぎるわ！」

布団の中でドタバタが始まる。轡田は幸太を抱きかかえて布団の
端に寄った。ごめんな、朝からこんな目にあわせて。忘れてたと思
ったら紗良の襲撃かよ、最悪だ。

その時、やはり騒々しかったから幸太が目覚めてしまった。ああ、
悪いな、幸太。まだ眠いだろうに。幸太は「むにゃむにゃ」といい
ながら寝ぼけ眼をこする。目の前には仰向けで紗良の腕を掴む俺と、
マウントポジションをとって襲いかかっている裸の紗良。幸太はぼ
んやりと紗良を見上げ、胸を見て言った。

「……………しゃら、ちっちゃ」

！！

幸太……………容赦ないな。

崩れ落ちる紗良。いや、紗良だつてそれなりにあるとは思ってた
が、轡田が大きいんだよな。比べちゃっただけなんだろう、多分。
しかし余程シヨクだったらしく紗良は俺にしがみついて泣いてい
た。

「悪いな、轡田。これ、いつもの光景なんだ」

「あ、あはははは、賑やかなんだね、毎朝……………」

もう一度眠り始めた幸太の頭を撫でながら、轡田は引きつった笑みを浮かべていた。

恒例の朝のドタバタを終えると、鏡の中からミラージユが轡田を迎えに来た。帰りしな、俺に「大切にしてくれるなら、ドレイになってもいいよ」というとんでもない爆弾発言をしてくれたおかげでまた紗良と一騒動起きたが、まあそのへんは省略する。ミラージユが腹を抱えて笑っていたとだけ言っておこう。

「轡田さんかあ、本当に可愛いよね。兄さん抜きでも嫁に欲しいかも」

「色々間違ってる発言だけど、お前はまず相手の気持ちを大切にする所から始めてくれ」

「兄さんが私の気持ちを大切にしてくれたら考えるわ」

なんとも難儀な義妹だ。

そんなよくわからない会話を終えてから、俺達は登校の支度に取りかかった。

いつものようにクリクリの車に拾われて学校へと向かう。車の中では昨日の事が話題に上っていた。勿論その後二井坂さんと何があったのかクリクリは気にしていたが、王様と一緒に帰ったと聞いて少し安心したようだ。

「お父様と一緒になら、安心ですね。二井坂さんという方までお嫁さん候補になると、流石に私と一緒に時間が少なくなって寂しいですから」

気にする所が間違っている。

「クリクリ、大丈夫だから。不安にさせてごめんな。寂しかったらいつでも呼んでくれ、直ぐに飛んで行くからな」

「健司様……」

瞳をウルウルさせるクリクリ。ウルウルクリクリ。略してウルクリだ。意味わからん。

「旦那様なら本当に飛べますけど、それは控えて下さいね」

相変わらず俺に胸枕をしながらステラが言った。なんだか昨日今日と俺の頭はおっぱい祭りだよ。というかおっぱいカーニバルだよ。カーニバルって謝肉祭って意味だけこの場合意味が違ってくるよ。一体俺はさつきから何を考えてんだらうな？

そう言えば。

「なあステラ。お前、幸運スキル使った反動はどうなんだ？ あれから酷い事あったか？」

「……いいえ、大した事は。だから少し不安なんですよね。一番起

こり得るとしたら大学の単位を落とす事でしょうか。試験期間に入ってますから」

あ、ちよつと青ざめてる。これは悪い事をした。そして俺も同時に青ざめる。

期末テスト全然勉強してねえ。

「俺は運とか関係無くヤバいかも……。最近、スネイクロードの事はっかり考えてまともに授業聞いてなかったから」

「旦那様、一緒に試験に落ちて主従愛を確認しあいませんか」

どちらかと言うと傷の舐めあいじゃないかな。そんな事を考えているとクリクリが得意気に言う。

「大丈夫です、健司様。私がちゃんとノートを取ってますし、分かんなければお教えします。テスト範囲内で予想問題も作ってありますから、心配しなくてもいいですよ！」

えっへん、と胸を張るクリクリ。ありがたいなあ。朝からいいもん見れて。いや、ノートもありがたいんだけれど。

その時、また急ブレーキがかかった。

「きゃっ!?!」 「むにゅん

またも二人の胸に挟まれる俺。世界が俄かに輝き出す。ステラがジェイコブに抗議しようとして立ち上がり、胸のボタンがはじけ飛ぶ。お決まりの展開、学習能力がないのかもしれないが、俺的には

オツケーだ。しかし今日はそれだけでは止まらなかった。

サンドイツチ状態で慌てる俺たち。何故かシートベルトが外れる。そしてそこに急発進する車。

ブウンッ！

「「きゃああっ！？」」

クリクリはともかく、ステラが派手にひっくり返る。そして何故か倒れた俺の顔を股で挟む形となった。これは……凄いで！？

「うわああああん、こんな恥ずかしすぎるよう！」

気が動転して幼児っぽい言葉使いになるステラ。ごめん、幸運スキルの帳尻あわせ、これかも。俺は顔面にステラの体重を感じながら意識を手放して行った。そんな時、遠くから。

「H A H A H A！ 期待二応エテシマッタ！」

というジェイコブの笑い声を聞いたような気がした。

学校は、当たり前だがいつも通りだった。昨日の騒動なんて誰も知らない。轡田がにこやかに俺に挨拶をして、女子連中がひそひそ話をするのももう慣れた。最近、男子からも轡田といると嫉妬の視線を感じるようになったけど、お前らそれでいいのかと聞きたくなる。

そんな中、心配事の無くなった俺は久しぶりに真剣に授業を受けていた。そして、思った。身体強化「脳」、使いたい！ 人格変わるから使うなと言われてたけど、その誘惑に負けそうになるくらい授業が分からなかった。ヤバいなあ、本格的に勉強しないと期末アウトだよコレ。赤点の恐怖が現実味を帯びてきてる。

そんな鬱な気持ちにさいなまされながら昼休みを迎える俺。クリクリと轡田と一緒に屋上へ向かうと、何故か満面の笑みを浮かべた長ネギがそこにいた。……キモい。

「やあ佐藤健司！ 今日も君の周りには人が集まっているね、素晴らしい！ 友達と一緒に昼を食べるって最高だよな！ うん、最高だよ！」

「あの、宗教は間に合ってるんで他行って下さい」

「最悪だよ！ そんな警戒心バリバリの目で僕を見るなよ！ 悪かった、悪かったから構ってよ佐藤健司いいっ！」

勘弁してほしい。誰かコイツを止めてくれ。そう思った時、長ネギの胸元から何やら声が。女の子の声だ。

『うるさいぞ、緑木。昼休みは短い、さっさと食事しましょう』

「わ、分かったよ。そうだね、早く食べよう」

ポカンとする俺たち。今日は先輩が生徒会の方に行ってるからここには居ないけど、居たら同じようにポカンとしていただろう。

「長ネギ。友達ができないからって腹話術とか辛いな」

「ち、違うよ！　ねえほら、君も何とか言ってくれよ！」

『声が・遅れて・聞こえるよ』

「全然口の動きと合っていないじゃないか！」

プロの技だな。見直したぞ長ネギ。……なんて冗談もそろそろやめようか。可哀想になってきた。

「とりあえず皆が座れるベンチを確保しよう。五十嵐さんはそのサイズのままでいいんだな？」

『ああ、構わない』

「え、え、どゆこと？　ねえ、どうなってんの？」

どうなってんだろっとな。

長ネギの混乱をよそに、俺たちは空いているベンチの所まで歩いて行った。

五十嵐さんは小さなゴースト姿で長ネギの胸ポケットに入っていた。可愛い物好きなクリクリと轡田はその姿を見て瞳を輝かせる。いや、何かハートマークが入っている。轡田なんかは直接吸われた被害者なんだが平気なんだろうか。

『久しぶりだ。貴様の乳、最高だったぞ』

「恥ずかしいから言わないでよ！」

慌てて胸元を隠す仕草をする轡田。完全乙女なりアクションは学校では控えて欲しい所だ。

「しかし五十嵐さんも器用な事するよな。なんで長ネギの所に行っただんだ？」

弁当を広げながら、俺たちは五十嵐さんの話を聞く。五十嵐さんは長ネギのポケットから飛び降りると、爪楊枝片手に俺たちの弁当箱を行ったり来たりしながら話始めた。

ゴーストライダーは長ネギを見守っていた。あの林間学校の夜の思い出は、やっぱり五十嵐さんにとって大切なものだったのだ。出来る事なら友達になってあげたい。ずっとそう思っていたらしい。

昨日の夜、やっぱり長ネギは長ネギだと思いながらも五十嵐さんは小さなゴーストを飛ばして長ネギに会いに行った。まだ医者指

示で自宅で静養していなきゃいけない身だが、それでもいいなら友達になってやってもいいと。長ネギが泣いて喜んだのは言うまでもない。

長ネギは家政婦に土下座してまた弁当を作ってもらおうようになったらしい。それはゴーストの身であつても食事が出来る以上、五十嵐さんにもちゃんとした物を食べてもらいたいという気持ちがあつたから。普段変にプライドがあつたり面倒臭がりな所のある長ネギだが、自分の大切な人の為なら土下座だつて苦にならないらしい。……なら何故向こうでクリクリを盾にしてたんだと言いたいけど。

『モグモグ……そういう事で、私はしばらく緑木の所にいる。コイツがこれ以上ひねくれないように私が見ているから、お前たちは安心してくれ』

なんと心強い。普段からコイツのテンションについて行けて無かつた俺にはこれ以上の朗報は無いな。だから俺の唐揚げを食べても許そう。……クスン。

「ま、まあ僕らの馴れ初めはいいじゃないか。僕は真実の愛を見つけたよ。という事でクリスマス、悪いが僕は君の愛には応えられないよ。本当にごめん」

うわあ、言いやがったコイツ。クリクリ、ムカつくの分かるけど魔法はよせ。思いつきりバレルから。

そんな会話をしていると、ふと屋上にやってきた団体に目が止まつた。あれは……二井坂さんたちじゃないか。二井坂さんたちは仲良そうに談笑していた。俺たちを見つけると、みんなこちらに向かつてお辞儀をした。俺たちも手を上げて応える。二井坂さんたちは

それから屋上の隅へと移動して、食事を始めた。

「良かったですね、健司様。イジメも無くなつて、みんな楽しそうです」

「ああ。あれならもう大丈夫だろ。……あ、そう言えば！」
話すのを忘れていた。

「二井坂さんからチケット貰ってたんだよ。これ」

取り出したのは高田アイランドのチケット。無料招待券だ。

「高田……ああ、あの安っぽい遊園地だろ？　なんでそんなの持ってるんだよ」

「うるせーな、二井坂さんがバイトしてんだよ。でさ、ここにジュリアがいるんだってさ。覚えてるか？　ほら、拳闘士のジュリア」

その言葉にクリクリと五十嵐さんが「ああ」と言う。長ネギに至っては「ゲッ」だ。いじめられてたもんな、お前。

「ゲートの書の文字を聞きに、今度行ってみようかと思ってんだけどさ。明日の土曜か明後日の日曜に行くつもりんだけど予定空いてる人いないか？　先輩は塾があるからパスって言った」

出来ればクリクリが空いてるといいんだけど……ああ、無理っばいな。残念そうな顔をしている。

「申し訳ありません、私はお父様と一緒に海外に行かないといけません。ロシアですから、多分無理だと思います」

多分じゃない、確実に無理だ。ロシアか……何してんだろうな、王様。なんか怖いのは気のせいかな。

「ぼ、僕も無理だな！ あんなゴリラ女のいる所になんか行くもんか！ アイツに蹴られたお尻、まだ痛むんだよ」

随分前の話だろ。多分それは痔だと思う。五十嵐さんは……いかないよな。

『本体で行こうとすると家族に止められるし、ゴーストは緑木にっいてるからな。悪いが他を当たってくれ』

うーん、一人で遊園地とか寂しいんだよな。誰か居ないか……。

つんつん

二の腕をつつく人が一人。

「ねえ佐藤君。僕、空いてるよ」

なんだと？

「いや、渡航者からみだから轡田は無理に付き合わなくていいぞ？」

「ううん、無理じゃないよ。暇だから、遊ぼうよ。幸太君連れてつたらきつと喜んでくれるよ」

あー、そうだな。幸太に初めての遊園地を体験させてあげるのもいいかもしれない。……って、あれ？ なんか長ネギが変な目で見てるぞ。

「お、お前らなんか雰囲気変だぞ！ まさか……」

ん？

『佐藤健司。よもやそつち方面に勇気を出すとはな。実に私好みだ、見直した』

は？

「轡田さん……気持ちの整理はついたんですか？ なら、私は応援します。私も、轡田さんと一緒にお話するのは楽しいですから」

「ありがとうクリスさん。僕、自分に正直に生きる事にしたんだ。これからもよろしくね」

お前ら一体なんの話をしているんだ？

訳も分からず混乱する俺を、四人はそれぞれ違った視線で見つめ続けた。なんだよ、もう。居心地悪いからとりあえず長ネギだけ目潰ししておいて、俺は弁当の続きを食べ始める。気づいたら最後までとっておいたイチゴはどこかに消え去っていた。

第三十六話 高田アイランド

拳闘士ジュリアについて覚えている事と言えば、とにかくバトルマニアだった事。そして、強烈な負けず嫌いだと言う事だった。俺が初めて彼女に会った時は、彼女はある集落のボスをしていた。

俺が魔王討伐に乗り出す前、まだクリスレアの近衛兵だった時の話だ。クリスレア王国とサルジアン王国の国境付近に、突然独立を唱える集落が現れたという事で問題になった事があった。なんでも恐ろしく強い女が現れ、野党山賊盗人らを配下に入れて「国づくり」を始めたという。それも全員女。ただでさえ魔王軍との戦いで頭を悩ませていた王様は、俺を始めとした数人の精鋭に「調査」という名の討伐を命じた。そこで出会ったのが、ジュリアだった。

ジュリアはがっしりとした体格の女性で、長い赤毛を後ろで括ってポニーテールにしていた。パツと見は健康的な美人という感じだったが、とにかくかなりの男嫌いで男を叩き潰すのが生き甲斐みたいな偏った考えを持っていた。女のための王国を作るのが夢だったらしい。元々盗賊に支配されていた集落を乗っ取る形で、その集落のボスになっていたようだ。

だから、俺たちが行った所で最初から話合いになんかなるはずも無く。俺とジュリアは会って早々にバトルへと発展した。ジュリアの配下は話にならないくらい弱く、俺の同僚たちによって速攻で捕縛された。その場は実質俺とジュリアの単騎決戦となっていた。

俺とジュリアの戦いは、20日続いた。

ジュリアは人間とは思えないスタミナを持っていたし、俺も寝る

か意識を失うかすれば完全回復する。一日中戦って決着がつかずまた明日、という事が続いて20日目。戦ってる最中に突然ジュリアの発した謎の言葉によって、戦いは終わりを告げた。

「お前、クソツ、卑怯だぞ！ 無自覚でそれやってんのかよ！」

「な、なんの事だ？」

「ちっ、やってらんねえ！ 勝てるワケねえだろそんなの！ やめだ、やめ！ アタシの負けでいいよ！」

ポカンとする俺と同僚たち。顔を真っ赤にして地べたに座り込むジュリア。何が何だか分からないまま、俺はジュリアに勝利した。あの時勝てた理由は、未だに分かっていない。

ジュリアの敗北によって集落は元の小さな農村に戻り、ジュリア本人は反逆罪で縛り首に。しかし俺が王様に頭を下げて何とか死刑は回避させた。王様本人もジュリアをいたく気に入ってしまったかな。ジュリアは王国の兵士となり、魔王討伐の際には俺と同行する事となった。その戦いぶりはまさに鬼神で、俺もよく勝てたもんだと思っていたものだ。

そのジュリアが、渡航者だった。

そして高田アイランドのヒーローショーで働いている。

まったく持つて予想してなかったし、そうなる経緯も想像つかない。そして、再会するのも少し気が引けた。あのバトルマニアが俺と顔を合わせて、すんなり帰すわけが無い。きつとバトルの一つや二つぶっかけてくるだろう。俺に負けたのを結構引きずってたし、

もしかしたら今度こそ俺を倒す、なんて息巻いてくるかもしれない。

学校で轡田が同行すると言って来た時、正直に言えば断りたかった。俺とジュリアの間でトラブルが起きたら、アイツまで巻き添えを食らうかもしれないからだ。アイツが危険な目にあうのは、避けなかった。

学校から帰って来てからずっと、俺は部屋のベッドの上で悩み続けた。幸太と轡田と俺、三人で遊園地へ行くのは凄く楽しそうだけど……危険があるなら、取りやめた方がいいのかな。そんな事を考えながら、俺は身体にまとわり付いている物体を引き剥がした。

「紗良、いい加減にしろ暑苦しい！ 黙って忍び込んで当然のように俺に抱きつくんじゃない！」

「む、むっっ！ 兄さんの脇の匂い、もう少しだけプリーズ！」

「凄い嫌な趣味増えたな！ 匂いフェチとか高度過ぎる！」

「も、もうひと嗅ぎ！ 私には兄さんの脇の匂いを嗅ぐ権利があります！」

ねえよ。一体なんの影響受けたんだか。……いやちよつと待て、嗅ぐって言えば他にあったな。危うく誤魔化される所だった。

「お前、今度は何を読んだ？ 返答によっちゃ、こっちにも考えがあるぞ」

「っ……」

やはり。また許可無く俺の記憶を読みやがった。

「ごめんなさい。だって兄さんってば、帰って来てからずっと上の空で気になって。何度話しかけても気づいてくれないし……」

ああ、それは……俺が悪いな。無視され続けたら気分悪いよな。すまなかった。

「悪かったよ、ごめんな。無視してたんじゃないで、本当に考え事しててな。……で、読んだんだろ？ 高田アイランドの事」

「うん。兄さんが悩んでた事が、丸々私の頭の中に入って来たから。……あのさ、兄さん。お願いがあるんだけど」

「ん？」

まさかとは思うが。

「私も行っていいかな。その、高田アイランドに」

やはりか……。普段なら断るんだけどな。でも今日の紗良は何だか真面目な顔をしている。紗良は紗良なりに俺を心配してくれてるんだろうし、あまり無碍には出来ないよな。

「分かっているとと思うけど、ジュリアは好戦的だし何が起きるか分からないぞ。最悪、会うのを諦めて遊園地はキャンセルしようかと思っただくらいなんだから」

「ダメよ、それは！ 遊園地には絶対幸太君を連れてってあげなきゃ。お母さんに聞いたんだけどね、幸太君、家で毎日寂しそうにしてるんだって。でも、『パパもじゃらも忙しくて大変だから、我慢

するの』って言ってるの。そんな幸太君の為にも、高田アイランドには絶対行かなきゃ！」

幸太……そうか、俺たちが学校行ってる間は、家には紗英さんだけだもんな。普段良い子でお留守番しているんだから、ちゃんと遊んでやらないと。

「分かった。じゃあ、紗良は一緒に来て幸太と轡田を守ってやってくれ。俺がジュリアと会ってる間、二人の事は任せる」

「うん、任された。……でも変だよな。轡田さんって男なのに私が守るって」

言うな。というか、戦闘に関する特殊能力持たずに向こうの世界から無事に戻って来たお前なら、きっと轡田よりも戦闘能力は高い。

「じゃあ兄さん、その二人のボディガードの報酬は前払いでいいわ。気を取り直して……くんかくんかくんかくんか！」

「お、おわああっ！？ 紗良、やめろ、本格的に変態になって来たぞ！」

「ああん、なんだか新しい世界が開けるうーっ！？」

開くなそんなもん！

俺は目の色を変えて襲いかかってくる紗良をかわしながら、本当にこいつに任せて大丈夫なんだろうかと不安になっていた。

そして当日。

家の前に一台の高級車が到着する。

田舎の田んぼの真ん中にある遊園地に行くには無意味に気合いの入っている車。運転するのは勿論ジェイムズ。お前、王様についてロシアに行ってたんじゃないかったのか？ そう聞くと、ジェイムズは変わらぬハイテンションでこう答えた。

「H A H A H A ! 置いてイカレテシマッタ！」

なんと……一体、何をしたらそんな事に。そんな事を考えた時、後部座席に座っていた人が声をかけてきた。

「大丈夫だよ、ちゃんと王様の命令で僕たちの護衛を任されてるだけなんだって」

ああ、なんだ。そう言う事なら……そう言おうとして、俺は固まった。声の主は間違い無く轡田。しかし、この愛らしさはどうだ。轡田は胸元に大きなリボンをあしらった淡い水色のブラウスと、ふんわりとした感じのクリーム色のスカートを履いている。後部座席にちょこんと座るその姿を見た瞬間、俺は勿論、後ろにいた紗良まで「うっ」と声を漏らす。

「可愛い……私ももうちょっと頑張れば良かったかも」

そう言う紗良は黒いワンピースに白のデニムというシンプルな格好だ。何気に肌の露出が少ないが、その理由は俺以外の人間には極力肌を見せたくないのだとか。……愛が痛い。

「あ、ママ！ ママも一緒なの！？」

「おはよ、幸太君。そうだよ、今日は僕も一緒だよ」

飛びつく幸太を抱えながら答える轡田。その母性愛に満ちた表情にまたも紗良はよろける。いい加減諦める。張り合う相手が悪すぎる。俺はとりあえず紗良を支えながら一緒に車に乗り込んだ。

俺と紗良、幸太を乗せて車はゆっくりと走り出す。幸太は轡田の隣で、座席でポンポンと跳ねながら外を見ていた。俺は轡田、紗良に挟まれた形。遊園地につくまで、二人にぴったりとくっつかれていた。これ、絵的に両手に花なんだろうけど、男と義妹だからな。倫理的に歪み過ぎてる気もするけど、今更か。

……そんなこんなで、目的地である高田アイランドへとついた。だっ広い田んぼの真ん中にある長閑な遊園地。経営難だって聞いていたが意外と人は多い。休みだからかもしれないけどな。平日は閑散としているんだろう。入場門のペンキが剥げかけているのが、何とも物悲しい。

「しかし、このヒーローショーって午後一時からなんだよな。それまで三時間はあるけど、時間保つかない。途中で飽きて幸太が『帰るとか言い出さないか心配だ』」

「大丈夫だよ。お昼ご飯とか食べる時間考えたらあつという間だと思っ」

まあ轡田の言う通りになるといいけど。俺は一抹の不安を抱きながら入場口へと歩いて行った。

結論から言うと、心配は杞憂に終わった。俺はともかく、他のみんなは充分楽しんでいたよ。第一コイツら元気が良すぎる&俺、乗り物に弱すぎる。なんかコーヒーカップで酔った。紗良が調子に乗って速度速めて幸太が喜んで、もう大変。轡田は偶々乗って無かったけど正解だ。幸太の魔力で高速回転させたコーヒーカップ、その中から見る景色は次第に走馬灯へと変わって行く。紗良は何故か平気だった。何気に三半規管が強い。

メリーゴーランドでは馬がヒーンと鳴いた。係員は気絶した。全て夢だと言いつ聞かせた。ゴーカートは「ゴー」どころじゃ済まないくらいの速度を出し、ジェットコースターは設計上有り得ない動きをしてみせた。客の九割は失神して俺は失禁しかけた。膀胱&括約筋強化をして何とか凌いだけどな。

幸太のテンションが上がる度に、遊園地は意味不明なアトラクションだらけの魔境に変わって行く。ヒヤヒヤしている俺の気も知らずに、紗良と幸太は無邪気に楽しんでいた。轡田はあまり遊園地に来た事が無いらしく、こういう物だと思っっているようだ。轡田もち

よつとズレている。ジェイコブに至っては目の前で起きている現象に混乱して「H A H A H A！ ファンタステイック！」と叫びながら銃を……って、やめる！ アンタが一番取り乱してどうすんだ！ 半泣きになりながらジェイコブから銃を奪い取り、何とか落ち着かせるまでに俺はかなりの体力を消耗する羽目となった。

「……大丈夫？　なんか顔色青いけど冷たい飲み物買って来ようか？」

ジェイコブを宥めた後。三度目のジェットコースターを乗り終えて死にかけてる俺に、轡田が声をかけてきた。俺はフラつきながら「頼む」と言った。紗良と幸太は……信じられん、またジェットコースターだ。今度はレールの上を飛び跳ねてるけど、誰も悲鳴を上げてないのが不思議だ。これも幸太の魔力なんだろうか。

ベンチで横になっていると、轡田が缶ジュースを買って来てくれた。レモン味の炭酸飲料だ。助かる、これで少しは気力が戻るか……なんて思っただけを受け取った時。俺は頭の奥で小さな音を聞いた。

久しぶりのアラーム。

勘弁して欲しいな、こんな体調悪い時に。そんな風に思いながら身体を起こした。何処からか、此方に向けられている挑発的な視線。ああ、これは知っている。嫌でも思い出す、あの焼け付くような殺気。

ジュリア。お前なんだろ？

俺は心の中でつぶやきながら、周囲を見渡す。遊園地の外れ、仮設のステージのような物が出来ており、そこに従業員らしき人間の人だかりが出来ている。そんな中、一際大きな女が此方を見て……ニヤリと邪悪な笑みを浮かべていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7314x/>

俺の日常が不思議な事に

2012年1月14日01時13分発行